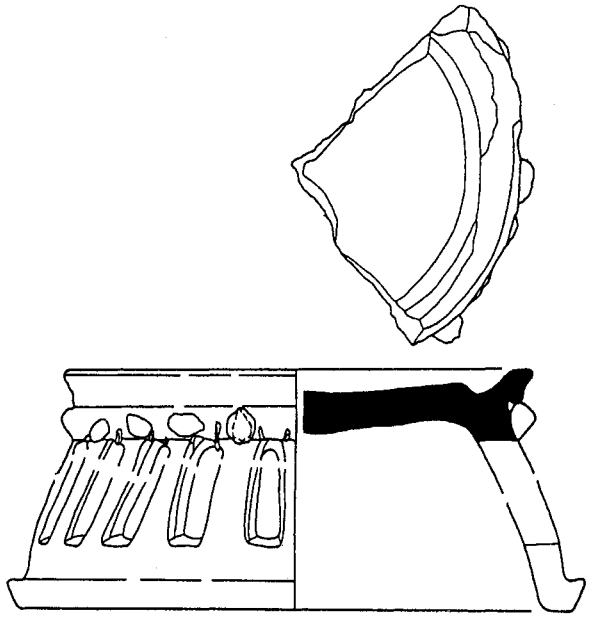
大屋敷遺跡Ⅳ

1996

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

大屋敷遺跡Ⅳ



B区西側より出土した円面硯

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

1．大屋敷遺跡全景

2．大屋敷遺跡出土土器

3．大屋敷遺跡出土円面硯

4．大屋敷遺跡出土臼玉・石製模造品

序

前橋市は、関東平野の北西端に位置する群馬県の県庁所在地です。朝な夕なに雄大な赤城山、榛名山を仰ぎ、市内を流れる利根川や広瀬川の瀬音を聞く風光明媚な「水と緑と詩のまち」として発展している町です。

本市の歴史をひもとくと、遠く28,000年前より人々の暮らしの足跡が悠久の時の流れを刻んでいます。とりわけ本遺跡のある総社・元総社地区は、古代にあっても上毛野の中心としての歩みがあります。それは、この地区に上野国府が置かれたと考えられるばかりでなく、総社二子山古墳、宝塔山古墳、蛇穴山古墳、さらに古代寺院跡である山王廃寺、国分寺等、豊富な歴史遺産が残されていることからもわかり、当時の繁栄ぶりが目に浮かぶようです。まさに生活するのに「好所」であり、古代の人々も仰ぎ見る山々や自然に時々の心を感じ取ったことでしょう。

本報告書は、土地区画整理に伴う発掘調査をまとめたものです。現状での保存は難しいということで、平成4年度より道水路部分を中心に継続調査を実施していますが、今年度は円面硯など古代の繁栄を物語る成果を収めることができました。この成果を地区の方々に現地見学会としてご覧いただきましたが、大きな驚きと感銘を受けたことが特筆されます。

最後になりましたが、前橋市大屋敷地区土地区画整理組合の方々、前橋市都市計画課の担当者及び隣接住民の方々、更に記録的な連日の猛暑の中で発掘調査・整理作業に従事していただいた作業員の方々の深いご理解とご協力に厚くお礼申し上げます。

本報告書が古代の歴史を解明していく上で、少しでも参考になれば幸に存じます。

平成8年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団　長　　大　谷　輝　治

例　　言

1．本書は、前橋市大屋敷地区土地区画整理事業に伴う大屋敷遺跡Ⅳ発掘調査報告書である。

2．遺跡は、群馬県前橋市総社町大字総社1904－１番地ほかに所在する。

3．調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 大谷輝治が、前橋市大屋敷地区土地区画整理組合 代表者 大山栄一と委託契約を締結し実施した。

調査担当および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者　　齊藤仁志・坂口好孝（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係）

発掘調査期間　　平成７年５月10日～平成７年11月30日

整理・報告書作成期間　　平成７年12月１日～平成８年３月25日

4．本書の原稿執筆・編集は齊藤・坂口が行った。整理作業をはじめ図版作成には、石原義夫・岩木　操・岸フクエ・住谷文彦・渡木秋子・湯浅たま江・湯浅道子・中林美智子・赤城美代子・栗岡エミ子・岩田敏子・生形かほる・大澤まさ江・大塚美智子・鬼塚成子・佐野貴恵子・柴崎まさ子・神保千代子・戸丸澄江・船津明美・松田富美子の協力があった。

5．下記の専門的分野については、次の方々のお世話になった。（敬称略）

瓦　　：木津博明（財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団）

硯　　：綿貫邦男（財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団）

6．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1．挿図中に使用した北は座標北である。

2．挿図に建設省国土地理院発行の1/20万地形図（長野・宇都宮）と1/2.5万地形図（前橋）を使用した。

3．本遺跡の略称は７Ａ60である。

4．各遺構及び遺構施設の略称は次のとおりである。

Ｊ…縄文時代の住居　Ｈ…古墳･奈良･平安時代の住居址　Ｄ…土坑　Ｗ…溝址　Ｐ…柱穴

5．遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構　住居址・土坑…1/60　竈断面図…1/30　溝址…1/60

全体図…1/250・1/500

遺物　土器…1/3・1/4・1/6　鉄器…1/3　石製模造品…1/2　臼玉…2/3

石器・石製品…1/3・2/3　瓦…1/4

6．スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構平面図　粘土…斑

遺構断面図　火山灰…濃点、構築面…斜線

遺物実測図　施釉範囲…あられ、黒色処理…網、炭化物（スス付着など）…斑

須恵器断面…黒塗り、灰釉陶器断面…濃点、擦痕…淡点

── 目　　次 ──

序 …… i

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の立地 …… 1

2　歴史的環境 …… 1

Ⅲ　調査の経過

1　調査方針 …… 5

2　調査経過 …… 6

Ⅳ　層　　序 …… 7

Ⅴ　遺構と遺物

1　住居址 …… 8

2　溝　　址 …… 18

3　土　　坑 …… 19

4　埋設土器 …… 20

5　縄文時代の遺物 …… 20

6　石製模造品 …… 21

Ⅵ　まとめ …… 24

Ⅶ　付　　編 …… 30

図　　版

口絵　1　大屋敷遺跡全景
　　2　大屋敷遺跡出土土器
　　3　大屋敷遺跡出土円面硯
　　4　大屋敷遺跡出土臼玉・石製模造品

PL. 1　A区全景　B区・C区交差点
　　2　縄文遺構（U－1，J－1）
　　3　住居址（H－190,192,195,198,200,201,203,207）
　　4　B区全景、住居址（H－213,214,218,221）
　　5　住居址（H－224,225,226,234,235,236,237,238）
　　6　C区全景、住居址（H－237,238,239,）
　　7　住居址（H－243,245,246,247）W－13
　　8　住居址（H－250,253,254,255,263,264）
　　9　住居址（H－259,260,268,271）記念写真
　　10　H－189～214号住居址出土の土器
　　11　H－213～238号住居址出土の土器
　　12　H－238～255号住居址出土の土器
　　13　H－255～275号住居址出土の土器
　　14　石器、鉄器
　　15　瓦、硯、石棒、縄文土器
　　16　縄文土器、石製品

挿　　図

頁

Fig. 1　大屋敷遺跡の位置 …… vi
　　2　位置図と周辺遺跡図 …… 2
　　3　大屋敷遺跡周辺図 …… 4
　　4　グリッド設定図 …… 5
　　5　調査経過図 …… 6
　　6　大屋敷遺跡標準土層図 …… 7
　　7　国府推定地域周辺の陶硯出土遺跡 …… 25
　　8　大屋敷遺跡出土の円面硯 …… 26
　　9　大屋敷遺跡周辺の遺跡から出土した円面硯 … 27
　　10　遺跡・遺構全体図（A・E区）…… 42
　　11　遺跡・遺構全体図（B～D区）…… 43
　　12　J－1・U－1・H－189号住居址 …… 44
　　13　H－190、191・197号住居址 …… 45
　　14　H－192、193号住居址 …… 46
　　15　H－194、195号住居址 …… 47
　　16　H－196、200・201号住居址 …… 48
　　17　H－198、199号住居址 …… 49
　　18　H－203、204、205号住居址 …… 50
　　19　H－206、207号住居址 …… 51
　　20　H－208、210・216号住居址 …… 52
　　21　H－212、213・214、219号住居址 …… 53
　　22　H－218号住居址 …… 54
　　23　H－220、221号住居址 …… 55
　　24　H－222、223、225号住居址 …… 56
　　25　H－224、226号住居址 …… 57
　　26　H－227、229号住居址 …… 58
　　27　H－228、230、231号住居址 …… 59
　　28　H－232、233号住居址 …… 60
　　29　H－234、235号住居址 …… 61
　　30　H－236、238号住居址 …… 62
　　31　H－237、240号住居址 …… 63
　　32　H－239、242号住居址 …… 64
　　33　H－241、248号住居址、O－1 …… 65
　　34　H－217・275、276号住居址 …… 66
　　35　H－243・244、249号住居址 …… 67
　　36　H－245、251号住居址 …… 68
　　37　H－246、247号住居址 …… 69
　　38　H－250、252号住居址 …… 70
　　39　H－253、254、255号住居址 …… 71
　　40　H－257、258、259号住居址 …… 72
　　41　H－260・261、262・265号住居址 …… 73
　　42　H－263・264、266・267号住居址 …… 74
　　43　H－268、270、272号住居址 …… 75
　　44　H－269、271号住居址 …… 76
　　45　H－273・274号住居址、
　　D－138，W－13 …… 77
　　46　H－189・190・192～195・203号
　　住居址出土の土器 …… 78

頁

Fig.47 H－203・206・207・210～214号
住居址出土の土器 …… 79
48 H－214・215・218・219・220・221号
住居址出土の土器 …… 80
49 H－222～224・226号
住居址出土の土器 …… 81
50 H－226～229・231～235号
住居址出土の土器 …… 82
51 H－236～239号住居址出土の土器 …… 83
52 H－241～243・245・246号
住居址出土の土器 …… 84
53 H－246・248・250・252・255号
住居址出土の土器 …… 85
54 H－255、257～260号
住居址出土の土器 …… 86
55 H－264・268・269・275・276号
住居址出土の土器 …… 87
56 B区覆土・表採・D－156・159 …… 88
57 瓦（1）…… 89
58 瓦（2）縄文土器（1）…… 90
59 縄文土器（2）…… 91
60 石器・石製品 …… 92
61 石製品・臼玉 …… 93
62 石製模造品・鉄製品 …… 94

表

頁

Tab.1 縄文土器一覧表 …… 20
2 大屋敷遺跡Ⅳ遺構一覧表 …… 21
3 土器観察表（古墳時代～中世）… 36～38
4 臼玉観察表 …… 39
5 石製模造品観察表 …… 39
6 鉄器観察表 …… 39
7 石器・石製品観察表 …… 40
8 縄文土器観察表 …… 40
9 瓦観察表 …… 41

【調査参加者】 赤石忠彦　赤城美代子　阿部シゲ子　石田洋子　石原義夫　岩木　操
岩木賢一　岩田敏子　生形かほる　岸　フクエ　江原悠一　佐野貴恵子
大賀良助　大島美恵　大塚美智子　大塚みつえ　鬼塚成子　桜井れい
志塚　昭　志塚道子　柴崎まさ子　神保千代子　杉村有高　住谷文彦
須藤キク　渡木秋子　戸丸澄江　平安武文　中林美智子　長井武之
富沢清八　堀込とよ江　山口道安　湯浅たま江　湯浅道子　力石正子

【調査協力】 群馬県教育委員会文化財保護課　財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県立歴史博物館　前橋市大屋敷地区土地区画整理組合
前橋市都市計画部都市計画課　埼玉県埋蔵文化財事業団
赤熊浩一　木津博明　綿貫邦男

（敬称略）

大屋敷遺跡の位置（丸印）

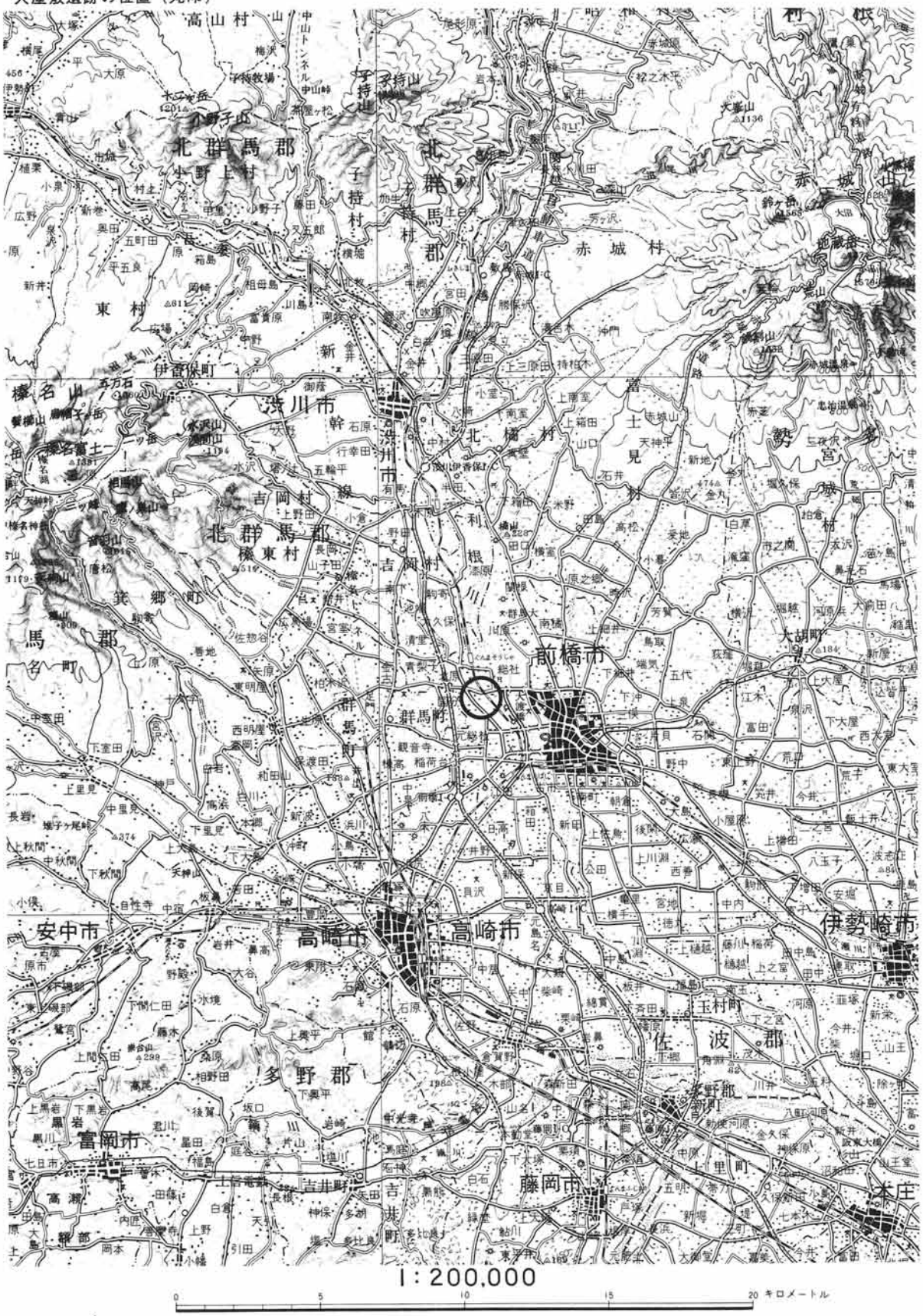


Fig. 1　大屋敷遺跡の位置

Ⅰ　調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市総社町大屋敷地区を対象とした土地区画整理事業実施に伴い、大屋敷地区の土地区画整理を目的とした前橋市大屋敷地区土地区画整理組合（代表者　大山栄一）と前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団との間で、平成４年７月27日に締結された、５年間にわたる発掘調査に関する覚書に基づいて実施されている。調査開始から４年目となる本年度は、４月25日に組合と調査団との間で発掘調査に関する委託契約が締結され、５月10日より現地での発掘調査を開始した。本年度の発掘調査面積は2,425㎡であり、遺跡最南東部及び昨年度調査地域の西側に広がる部分の調査となった。遺跡名称は「大屋敷遺跡Ⅳ」とし、遺跡略称は７Ａ60とした。

なお、初年度、覚書を締結し、発掘調査を実施するはこびとなった経緯については、「大屋敷遺跡Ⅰ」に詳しく述べられているので本書では省略する。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

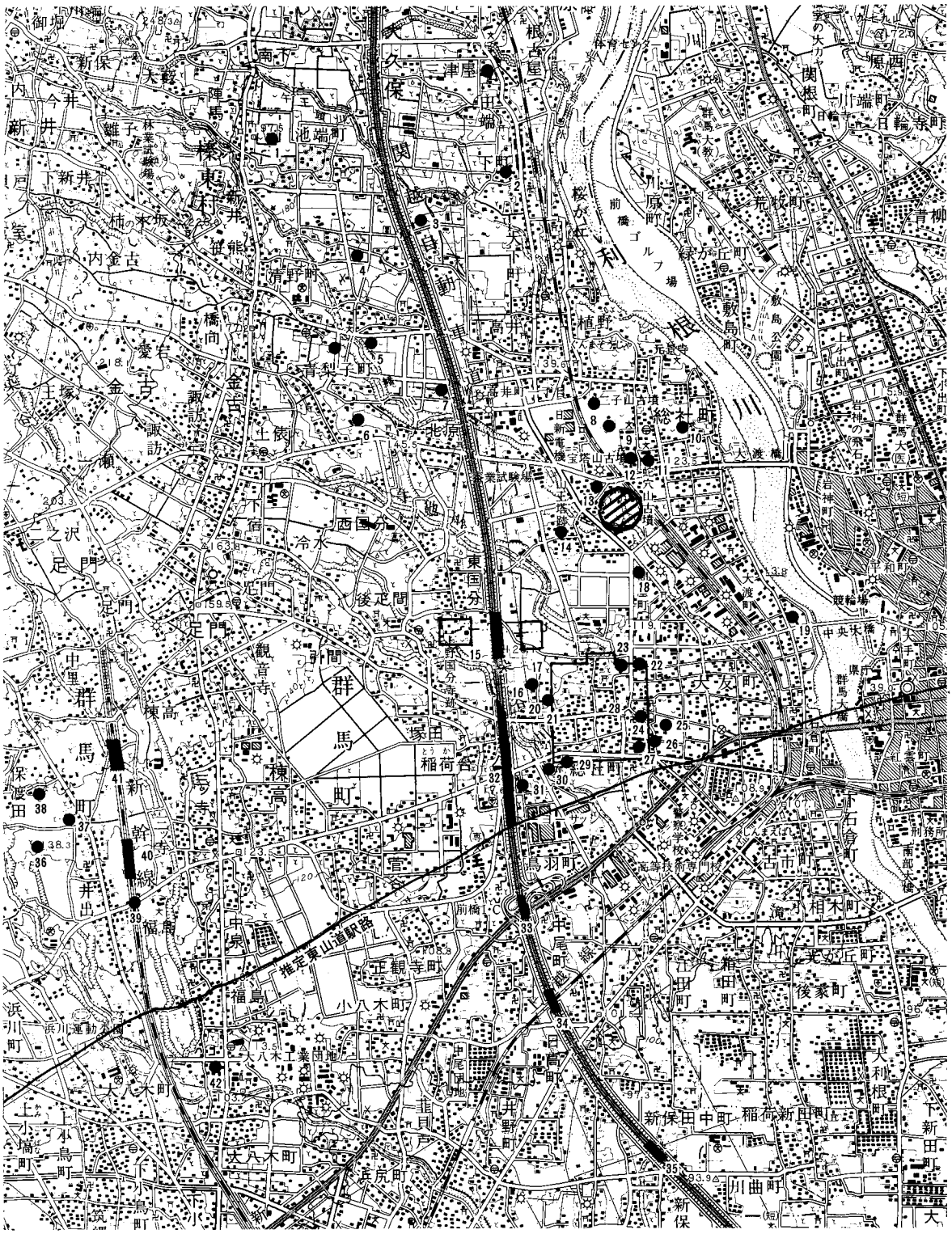
１　遺跡の立地

大屋敷遺跡は前橋市街地（県庁付近）から利根川を隔てて、北西約３kmの地点に所在する。遺跡の所在地は前橋市総社町総社1937番地ほかである。遺跡地の周囲は主要幹線道が縦横に走っている。北側100ｍ付近には前橋・箕郷線が東西に走り、西側は市道大友西通線（通称、産業道路）が、また約300ｍ程東にはＪＲ上越線が南北に走っている。そして、これらの主要幹線に沿って市街化が進み、工場や住宅街が遺跡地を取り囲むように立ち並んでいる。遺跡地の立地は榛名山東南麓に広がる相馬ケ原扇状地の扇頂部より流下する河川群のひとつ、八幡川左岸域の標高123～126ｍの微高地上にある。位置的には、相馬ケ原扇状地面と前橋台地面の境界付近に占地する。

遺跡地の南側には榛東村に源を発する八幡川が南東方向に流れ、東側には江戸時代初期、総社藩主秋元長朝により開削された天狗岩用水が南流し、両者は遺跡地の南東脇で合流し滝川と名前を変えた後、利根川と並行する形でさらに流下してゆく。遺跡地と滝川の接する部分は比高５～６ｍほどの段丘崖を呈し、遺跡地を含む段丘上は高燥化した台地が広がり、桑園・畑作地を主としているが、一部水田として利用されている。

２　歴史的環境

今回の調査によって、検出された主な遺構は古墳時代から中世にかけてであるが、調査区の出土遺物のなかには縄文時代中期、加曽利Ｅ式の土器片も若干検出されているので、ここでは本遺跡地周辺の歴史的環境を縄文時代から順に概観してみたい。



1．清里・陣場遺跡群　2．中島遺跡　3．長久保遺跡　4．清里・庚申塚遺跡　5．清里南部遺跡群　6．熊野谷遺跡　7．下東西遺跡　8．総社二子山古墳　9．愛宕山古墳　10．遠見山古墳　11．蛇穴山古墳　12．宝塔山古墳　13．村東遺跡　14．山王廃寺跡　15．上野国分僧寺跡　16．国分僧寺・尼寺中間地域遺跡　17．上野国分尼寺跡　18．産業道路西遺跡　19．山王古墳　20．小見遺跡　21．草作遺跡　22．閑泉樋遺跡　23．閑泉明神北遺跡　24．寺田遺跡　25．大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡　26．元総社明神遺跡Ⅴ　27．元総社小学校校庭遺跡　28．推定上野国府　29．天神遺跡　30．染谷川遺跡　31．弥勒山遺跡　32．鳥羽遺跡　33．中尾遺跡　34．日高遺跡　35．神保遺跡　36．二子山古墳　37．八幡塚古墳　38．薬師塚古墳　39．三ツ寺Ⅰ遺跡　40．三ツ寺Ⅱ遺跡　41．三ツ寺Ⅲ遺跡　42．雨壺遺跡　43．三津屋古墳

Fig. 2　位置図と周辺遺跡図

縄文時代の代表的な遺跡としては国分僧寺・尼寺中間地域遺跡（16）、産業道路西遺跡（18）があげられ、縄文中期・後期の遺構が集落的な規模で検出され、当該地域の縄文文化を考えるうえで重要な資料となった。また熊野谷遺跡（６）からは中期加曽利Ｅ式土器を伴う住居址群のほか、遺物では早期の押型文土器や沈線文土器が検出され、当地域における初源事例を更新した。そのほかの遺跡としては、下東西遺跡（７）、清里南部遺跡群（５）、清里・陣場遺跡群（１）、中島遺跡（２）、長久保遺跡（３）、雨壺遺跡（42）などがあげられ、時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。

弥生時代の周辺遺跡は、集落・住居主体の遺跡と水田址関係の遺跡とに大別され、前者は八幡川、牛池川、染谷川流域などの高燥化した台地上に立地し、後者は、さらに下った平野部の後背湿地上に集中している。弥生時代中期後半の環濠集落である清里・庚申塚遺跡（４）、後期の住居が検出された国分僧寺・尼寺中間地域遺跡などは前者であり、日高遺跡（34）、新保遺跡（35）に代表されるAs－C軽石（浅間山起源；４世紀中頃）下の水田址などは後者である。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、５世紀末頃と推定される。まず、主軸70ｍを測る遠見山古墳（10）が築かれ、次いで６世紀前半代には、利根川右岸段丘上に、川原石を用いた積石塚である王山古墳（19）が造られる。その後、本遺跡の北約２㎞には、国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳（８）、巨石使用の横穴式石室をもつ愛宕山古墳（９）、さらに県内最終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳（12）と蛇穴山古墳（11）など、総社古墳群を構成する数々の古墳が連綿と築かれていく。宝塔山古墳の南西約500ｍに所在する山王廃寺跡（14）にみる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。共通する技法から時代決定の根拠とされ、白鳳期の建立と考えられる山王廃寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子がうかがえる。

奈良・平安時代になると、推定国府（28）、国分僧寺（15）、国分尼寺（17）等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府周辺遺跡では、閑泉樋遺跡（22）、閑泉明神北遺跡（23）、小見遺跡（20）、草作遺跡（21）、大友屋敷遺跡（25）、寺田遺跡（24）、元総社小学校校庭遺跡（27）、天神遺跡（29）、染谷川遺跡（30）、弥勒山遺跡（31）等がある。また国分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ、各種遺構の基壇、礎石、堀などが確認されてきた。国分僧寺、国分尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められ、道筋にあたる中尾遺跡（33）、鳥羽遺跡（32）、上野国分僧寺・尼寺中間地域（16）等が発見されている。これらの遺跡からは、奈良・平安時代の住居址等が大量に検出されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて、当地では急激に集落の拡大した様子がうかがわれる。

その後、中世には長尾氏により国府の堀割を利用した蒼海城が築かれる。

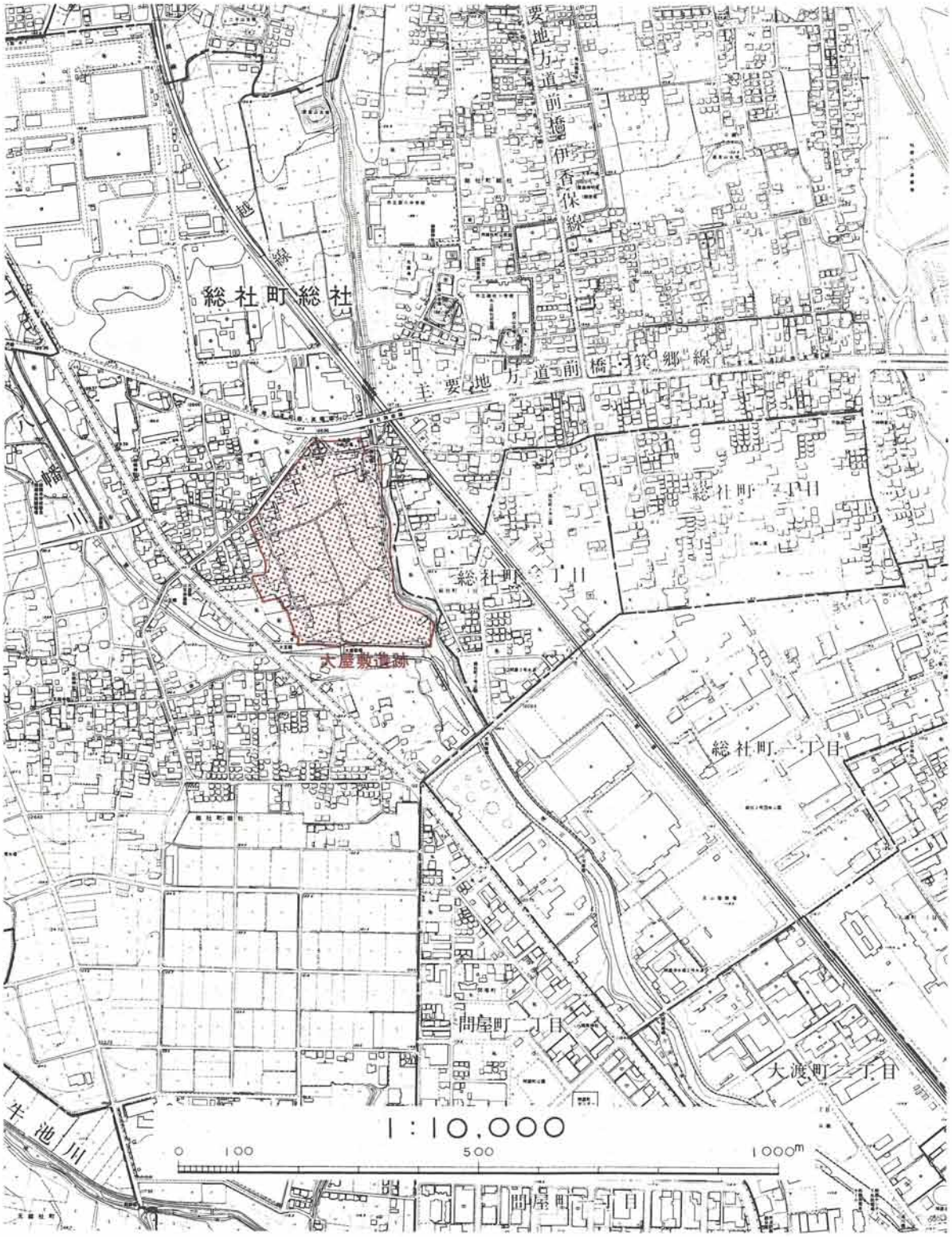


Fig. 3　大屋敷遺跡周辺図

Ⅲ 調査の経過

1 調査方針

委託された調査箇所は幅６ｍの計画道路部分を中心とした2,425㎡である。調査範囲の形状から全体をＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区、Ｅ区の５調査区に区分した。調査実施に際しては、まず５年間の発掘調査範囲の全域をカバーする４ｍグリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。各グリッドの呼称方法は南北方向をＹ軸とし、北から南へＹ１、Ｙ２、Ｙ３…、東西方向をＸ軸とし西から東へＸ１、Ｘ２、Ｘ３…で表し、それぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下のとおりである。

１．土層観察は原則として遺構中央部で交差するセクションベルトを設けて行う。

２．10㎝四方以上の遺物は縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作製し、取り上げに際しては遺物台帳に諸属性を記録する。

３．竈は原則として縮尺1／10で図化し、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて実施する。
なお、今年度の測量の基準点はＸ35、Ｙ45ポイントで公共座標は第Ⅸ系（Ｘ＝＋44,760ｍ、Ｙ＝－71,220ｍ）である。

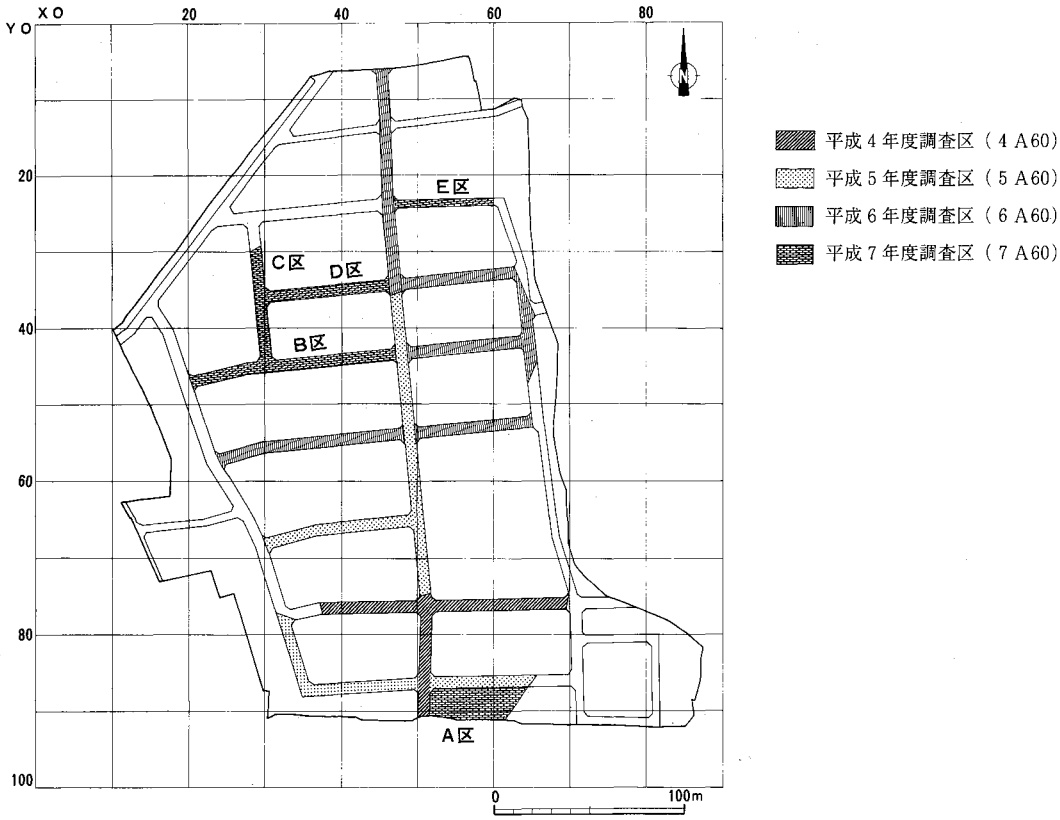


Fig. 4 グリッド設定図

2 調 査 経 過

4年目を迎えた本年度の現地発掘調査は、委託契約の締結後の5月10日より開始した。まず、今年度の調査対象地区の一番南側にあたるA区より着手し、重機（バックフォー0.4m³）による表土掘削、それに追従してのプラン確認に即刻取り掛かった。ここは当初調査区外であったが、北側に接する平成5年度調査の道水路部分と同じ高さにするため、切り土されることから急遽調査区になった所である。昨年度までと同様に粘性の強い黒褐色土層中に古墳時代から平安時代までの住居址が検出された。また、ここでは縄文の埋め甕と初めての縄文住居址が検出され成果を上げた。次いで6月に入り、B区の表土掘削・掘り下げに着手した。その結果、B区一番西側の部分では、調査区両側の現住居の排水管が3方向より集まり天狗岩用水まで延びることが判明した。また、庭木の移動等で大きな攪乱も入っており、調査は困難を極めた。この調査区では須恵器硯が出土しており、文字の使用を考える上での貴重な資料となった。8月に入ると調査の対象はC区に移った。10日にはハイライダーによるA区全景写真撮影を実施した。この夏はまさに梅雨空の合間を見ながらの作業で、室内作業を余儀なくされることも多かった。反面、外はまさに暑さとの戦いでもあり、連日の猛暑により地表面は堅く乾ききって移植ゴテもはねかえすほどであった。ここでも複雑に絡み合った重複住居址群が存在し多くの時間を費やした。この調査区からは昨年度検出の竈構築材採掘坑と同様の凝灰岩質層からなる溝が確認されたが、竈に用いられたと考えられる凝灰岩質層の塊を切り出した様子は見られなかった。さらに調査区北側の住居址からは3点の長頸壺が出土した。やや暑さも一段落した9月下旬からは調査の中心をD区に移した。この調査区では中央より東側が水田として利用されており、西側の畑と1m近い段差が認められることから、水田開墾時にかなりの削平が行われたと思われる。そのため遺構そのものもB区・C区より浅い。E区に関しても同様であり、水田開墾の際に遺構そのものまでが削り取られたと思われ、出土遺物もほとんど見られなかった。また、今年度は10月25日に現地説明会を行い過去4年間の成果を発表する機会を得た。240名からの参観があり、大屋敷遺跡についての理解を深めていただいたと思われる。10月31日にはすべての遺構の精査を終え、遺跡全体測量およびB～E区遺跡全体撮影を実施し、翌月6日には調査区の埋め戻しを行った。すべての作業を終了した11月30日、依託者および近隣の住民へ終了の挨拶をすませ現地発掘調査を完了した。なお、その後の整理作業は12月1日から翌年3月25日まで文化財保護課整理棟で行い、すべての作業を完成させる運びとなった。

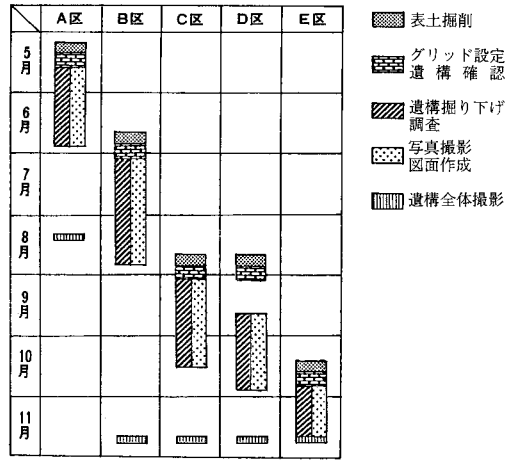


Fig. 5 調 査 経 過 図

Ⅳ　層　　序

本遺跡のほぼ中央に設定した深掘から観察される地層は基本的には、大きく２つに分類できる。上位の厚さ１ｍほどの黒褐色土層と下位に堆積するラミナ（縞目）状の硬くしまった砂とシルトの互層である。この灰褐色系統の砂層は総社、元総社付近を中心に利根川右岸一帯に広がっており、層厚は元総社地内の遺跡地（『元総社明神遺跡Ｘ』1991年）で約２～４ｍを測り、本遺跡のように５ｍを越える（天狗岩用水に接する段丘崖）ところもある。

本報告書はこの砂層を「総社砂層」と呼ぶことにする。この砂層はAs－Sj（浅間－総社軽石；約1.1万年前）を含む前橋泥炭層の上にあることからその堆積は約１万年前以降から始まったと推測されるが、正確な堆積年代は今のところ明らかにされていない。ただ本遺跡地において、縄文中期の加曽利Ｅ式土器が検出されたことや周辺遺跡の縄文土器出土状況（縄文中期に集中）から類推すれば、堆積期間は縄文時代前期（約6000年前）のころまでは続いていたと思われる。また総社砂層の上に乗る黒褐色土層は硬く、極めて粘性が強い。

本年度調査区のうち、Ａ・Ｃ区は下記の標準土層どおりであった。Ｂ区についても西端部は生活排水設備による撹乱がみられたが、概ね標準土層どおりであった。Ｄ区中央より東側及びＥ区は、水田に利用された際にⅠ～Ⅱ層が削られていた。

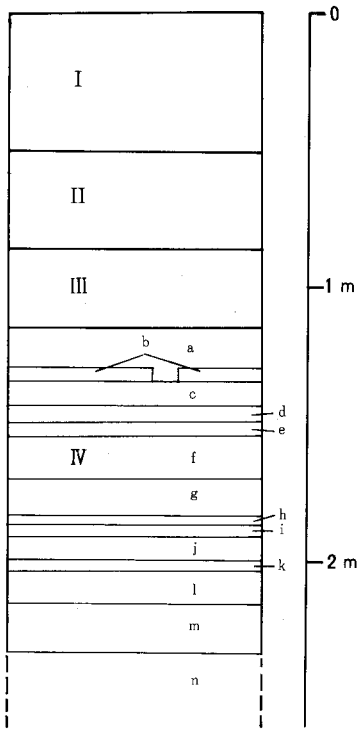


Fig. 6　大屋敷遺跡標準土層図

Ⅰ　層：暗褐色粗砂層　耕作土。As－B（浅間Ｂテフラ；1108年）を若干含む。

Ⅱ　層：極暗褐色粗砂層　二次堆積のAs－C（浅間Ｃ軽石；４世紀中頃）10％、およびHr－FP（榛名二ツ岳軽石；６世紀中葉）を若干含む。

Ⅲ　層：黒褐色細砂層　二次堆積のAs－C（浅間Ｃテフラ；４世紀中頃）20％、およびHr－FP（榛名二ツ岳軽石；６世紀中葉）を10％若干含む。

Ⅳ　層：総社砂層　砂、シルトの互層。

ａ…黄褐色シルト層　ｂ…褐色シルト層
ｃ…浅黄色シルト層　ｄ…にぶい黄褐色微砂層
ｅ…にぶい黄橙色シルト層　ｆ…褐色細砂層
ｇ…灰黄褐色粗砂層　ｈ…にぶい黄色シルト層
ｉ…にぶい黄褐色微砂層　ｊ…灰黄褐色粗砂層
ｋ…にぶい黄褐色微砂　ｌ…灰黄褐色細砂層
ｍ…にぶい黄褐色細砂層　ｎ…灰黄褐色粗砂層

V　遺構と遺物

本年度の調査区から検出された遺構は、竪穴住居址88軒・溝址１条・土坑57基である。古墳時代後半～平安時代の竪穴住居址に加え、縄文時代中期の竪穴住居址１軒が今回の調査により本遺跡で初めて確認されるなど昨年同様に幅広い範囲におよんでいる。

縄文時代の遺物は、大半が加曽利Ｅ式土器を中心とし、縄文時代中期の土器片や石器が古墳時代後半以降の住居址や遺物包含層から出土している。古墳時代中期末葉から平安時代までの遺構は、黒褐色の地山を掘り込む形で構築されているうえに、複雑に重複しあって検出されたため、遺構確認・掘り下げ調査に多くの時間を費やした。その一方で、Ｅ区のように住居址がほとんど検出されなかったり、Ｄ区東側のように床面までが浅い住居址の検出であった場所も見られた。これらの地域は、調査前まで水田として利用されていたところであり、水田開墾時に遺構そのものまでが削り取られたためと考えられる。Ｃ区では、規模・構築時期等から昨年度調査されたＷ－９と接続すると考えられる溝址が検出された。Ｗ－９は約１ｍも凝灰岩質層を掘り込んでおり竈構築材採掘坑が検出されたが、本年度検出された溝址の凝灰岩質層は最厚部でも50㎝弱であり、その採取には適さなかったものと思われる。

本年度も遺構数が多いことから、遺構を図示するとともに一覧表（Tab. ２）にまとめた。なお、遺構番号は昨年度の続き番号を使用している。（Ｈ－189～276、Ｗ－13、Ｄ－110～166、Ｏ－３である。）

１　住　居　址

Ｊ－１号住居址（Ａ区、Fig. 12、ＰＬ. ２・15）

（形状）南西が丸みを帯びた方形。北壁をＨ－212によって削られる。（炉）住居中央で埋め甕を検出。埋め甕内部の土が赤く焼けていることから炉として使用していたものと思われる。（床面）炉付近を中心に堅緻な面が確認された。（重複）Ｈ－212と重複。本住居址が古い。（遺物）遺物総数58点。加曾利Ｅ式土器が中心。（備考）出土遺物から本住居址は縄文中期と思われる。

Ｈ－189号住居址（Ａ区、Fig. 12・46、ＰＬ. 10）

（形状）方形。西端部は調査区外。（床面）堅緻な床面。（竈）東壁南寄り。全長44㎝、焚口部幅44㎝を測る。（貯蔵穴）竈右脇に検出。93×90×29㎝（柱穴）１個主柱穴を検出。P_1（40×39×16㎝）（遺物）総数634点。うち土器２点を図示した。

Ｈ－190号住居址（Ａ区、Fig. 13・46、ＰＬ. ３・10）

（形状）方形。（床面）平坦で堅緻な床面を検出。（竈）東壁南寄り。全長88㎝、焚口部幅70㎝。（貯蔵穴）竈右脇に検出。上面に３つの河原石がおかれていた。長径72㎝、短径64㎝、深さ23㎝を測る。（柱穴）主柱穴を２個検出。P_1（22×16×17㎝）、P_2（36×32×13㎝）である。（遺物）総数147点。うち土器２点を図示した。

Ｈ－191号住居址（Ａ区、Fig. 13）

（形状）方形。（床面）ほぼ平坦。（竈）東壁の南寄りに設置され、全長46cm、焚口部幅48cmを測る。（重複）Ｈ－197と重複。本遺構が新しい。（遺物）総数463点。

Ｈ－192号住居址（Ａ区、Fig. 14・46、ＰＬ. ３）

（形状）方形。（床面）平坦で竈付近を中心に堅緻面が広がる。（竈）東壁南寄りに設置。全長108cm、焚口部幅26cmを測る。竈全体を廻るように凝灰岩を配置。支柱石には河原石を使用。（貯蔵穴）長軸88cm、短軸80cm、深さ31cmを測る。（遺物）総数1,874点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－193号住居址（Ａ区、Fig. 14・46、ＰＬ. 10）

（形状）正方形。（床面）堅緻な面。（竈）東壁に設置され、全長26cm、焚口部26cmを測る。（柱穴）P_1（44×39×26cm）（遺物）総数96点。うち土器１点を図示した。（重複）Ｈ－196と重複しており、本遺構が新しい。

Ｈ－194号住居址（Ａ区、Fig. 15・17・46）

（形状）方形。（床面）堅緻な床面。（竈）検出されず。（周溝）調査範囲で全周。（遺物）総数799点。うち土器１点を図示した。（重複）Ｈ－198と重複。本遺構が新しい。

Ｈ－195号住居址（Ａ区、Fig. 15・46、ＰＬ. ３・10）

（形状）長方形。（床面）平坦で極めて堅緻な面が検出された。（竈）東壁の南側に位置する。竈両袖に凝灰岩の切石を使用。全長72cm、焚口部幅47cm。（貯蔵穴）長軸80cm、短軸62cm、深さ37cmを測る。（遺物）総数873点。竈付近で土師台付甕が出土。うち土器２点を図示した。

Ｈ－196号住居址（Ａ区、Fig. 16・46、ＰＬ. 10）

（形状）方形。Ｈ－193との重複により南壁を削られる。（床面）堅緻な床面。（竈）東壁の南東隅に設置され、全長66cm、焚口部幅53cmを測る。（重複）Ｈ－193と重複しており、本遺構が古い。（遺物）総数433点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－197号住居址（Ａ区、Fig. 13）

（形状）方形。Ｈ－191との重複により北西部を削られる。（床面）堅緻な床面。（竈）全長70cm、焚口部幅44cmを測る。（遺物）総数119点。

Ｈ－198号住居址（Ａ区、Fig. 16・17、ＰＬ. ３）

（形状）長方形。Ｈ－194により南西部を削られる。（床面）堅緻な床面。（竈）東壁南寄りに設置全長88cm、焚口部幅48cmを測る。（重複）Ｈ－194、Ｈ－200、Ｈ－201と重複。構築順は、Ｈ－194→本遺構→Ｈ－201→Ｈ－200である。（遺物）総数417点。

Ｈ－199号住居址（Ａ区、Fig. 17）

（形状）方形。北側は調査区外。（床面）堅緻な床面。（竈）検出されず。（遺物）総数134点。

Ｈ－200号住居址（Ａ区、Fig. 16 ＰＬ. ３）

（形状）方形。他の遺構と重複しているため一部の検出。（床面）平坦で堅緻な床面。（竈）東壁中央部に設置。全長88cm、焚口部幅17cmを測る。（重複）Ｈ－201、Ｈ－198と重複しており、

本遺構が最も古い。（遺物）総数69点。

Ｈ－201号住居址（Ａ区、Fig. 16、ＰＬ．３）

（形状）方形。南側半分は調査区外。（床面）堅緻な床面。（竈）検出されず。（重複）Ｈ－200、Ｈ－198と重複しており、構築順はＨ－198→本遺構→Ｈ－200である。（遺物）総数145点。

Ｈ－202号住居址（Ａ区）

（形状）竈のみ検出。全長70cm、焚口部幅60cm。（遺物）総数４点。

Ｈ－203号住居址（Ａ区、Fig. 18・46・47、ＰＬ．３・10）

（形状）方形。（竈）東壁南寄りに位置し、全長70cm、焚口部幅39cmを測る。（貯蔵穴）竈右脇に検出。長軸60cm、短軸42cm、深さ９cmを測る。（遺物）総数345点。竈袖部より２つ重なった小甕出土。うち土器５点を図示した。

Ｈ－204号住居址（Ａ区、Fig. 18）

（形状）正方形。（床面）堅緻な床面。（竈）東壁中央に設置。全長40cm、焚口部幅56cmを測る。（重複）Ｈ－206と重複。本遺構が先行する。（遺物）総数138点。

Ｈ－205号住居址（Ａ区、Fig. 18）

（形状）竈のみ検出。全長76cm、焚口部幅36cm。（遺物）総数64点。

Ｈ－206号住居址（Ａ区、Fig. 19・47、ＰＬ．10）

（形状）正方形。（床面）堅緻な床面。（竈）東壁やや南寄りに設置。全長14cm、焚口部幅39cmを測る。（貯蔵穴）住居址の南東隅に位置し、長径46cm、短径45cm、深さ11cmを測る。（重複）Ｈ－204と重複。本遺構が古い。（遺物）遺物総数190点。竈中央部より小甕出土。うち土器３点を図示した。

Ｈ－207号住居址（Ａ区、Fig. 19・47、ＰＬ．３）

（形状）方形。（床面）竈付近を中心に白色粘土を使用した極めて堅緻な貼り床面が広がる。（竈）東壁に南寄りに位置し、全長112cm、焚口部幅48cmを測る。凝灰岩質の袖石とともに縁石が竈を一周する。（遺物）総数2,555点。竈右隅より、椀、坏、軒丸瓦等遺物多数出土。うち土器３点を図示した。

Ｈ－208号住居址（Ａ区、Fig. 20）

（形状）方形。（床面）平坦な床面。（竈）東壁中央に設置され、全長84cm、焚口部幅38cmを測る。（貯蔵穴）住居址の南東隅に位置し、長径115cm、短径88cm、深さ108cmを測る。摺鉢状に深く落ち込んでいる。（遺物）総数1,147点。

Ｈ－209号住居址（Ａ区）

（形状）竈のみ検出。全長92cm、焚口部幅48cm。（遺物）総数48点。

Ｈ－210号住居址（Ａ区、Fig. 20・47）

（形状）方形。（床面）堅緻な床面。（竈）東壁南寄りに設置。全長96cm、焚口部幅38cmを測る。（遺物）総数690点。うち土器３点を図示した。

Ｈ－211号住居址（Ａ区）

（形状）竈のみ検出。全長118cm、焚口部幅50cm。（遺物）総数284点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－212号住居址（Ａ区、Fig. 21・47、ＰＬ. 10）

（形状）住居の大部分が調査区外。平成５年度調査のＨ－32号住居址と合致することが判明し、時期は６世紀初頭。（床面）平坦で堅緻な面を検出。（竈）検出されず。（重複）Ｊ－１と重複。本遺構が新しい。（遺物）総数165点。うち土器２点を図示した。

Ｈ－213号住居址（Ａ区、Fig. 21・47、ＰＬ. ４・10・11）

（形状）方形。（床面）堅緻な床面。（竈）東壁の南側に位置し、全長66cm、焚口部幅43cmを測る。（重複）Ｈ－214と重複。本遺構が古い。（遺物）総数1,340点。うち土器３点を図示した。

Ｈ－214号住居址（Ａ区、Fig. 21・47、ＰＬ. ４・10・11）

（形状）方形。Ｈ－213を掘り進めていると、東西ベルトを挟んで袖石を検出し、焼土もでてきたため、住居と分かった。（床面）平坦な床面。（竈）東壁のやや南寄りに位置し、全長80cm、焚口部幅34cmを測る。（重複）Ｈ－214と重複し、本遺構が新しい。（遺物）総数475点。うち土器３点を図示した。

Ｈ－215号住居址（Ａ区、Fig. 48）

（形状）竈のみ検出。Ｈ－210と重複しており、半分以上が削られている。（遺物）総数21点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－216号住居址（Ａ区、Fig. 20）

（形状）竈のみ検出。全長108cm、焚口部幅55cm。（遺物）総数４点。

Ｈ－217号住居址（Ｂ区、Fig. 34）

（形状）北壁は調査区外。方形。下水管、庭木の攪乱のため形状の確認が困難。（床面）平坦な床面。（竈）検出されず。（重複）Ｈ－275と重複。本遺構が新しい。（遺物）土がフカフカであり、遺物は出土せず。

Ｈ－218号住居址（Ｂ区、Fig. 21・22・26・48、ＰＬ. ４）

（形状）方形。（床面）極めて堅緻な床面。（竈）東壁の南側に位置し、良好な状態で検出された。全長71cm、焚口部幅34cmを測る。焼けた粘土が焚口部まで長く伸び、凝灰岩質層の円錐形の支柱石を使用。竈中央部は広範囲に灰の層が広がっていた。（重複）Ｈ－227、Ｈ－219と重複。本遺構が新しい。（遺物）総数1,407点。うち土器４点を図示した。

Ｈ－219号住居址（Ｂ区、Fig. 21・48）

（形状）正方形。（床面）堅緻な床面。（竈）東壁やや北側に設置され、全長80cm、焚口部幅30cmを測る。竈上部に使用した粘土がトンネル状に残る。（重複）Ｈ－218と重複し、本遺構が古い。（遺物）総数577点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－220号住居址（Ｂ区、Fig. 23・48）

（形状）方形。南西部は調査区外。（床面）極めて堅緻な床面。（竈）東壁中央部に設置。全長

84cm、焚口部幅28cmを測る。袖部の粘土が非常によく焼けており残る。（貯蔵穴）住居址南東部で検出。長軸72cm、短軸60cm、深さ36cmを測る。（遺物）遺物総数1,488点。うち土器２点を図示した。

Ｈ－221号住居址（Ｂ区、Fig. 23・48、ＰＬ．４・11）

（形状）方形。北側は調査区外。南西部は重複により削られる。（床面）平坦で堅緻な床面。（竈）東壁南東部に設置され、全長90cm、焚口部幅52cmを測る。竈中央に深さ15cm程の穴があり、灰かき穴と思われる。（重複）Ｈ－220と重複し、本遺構が古い。（貯蔵穴）南東隅に位置し、長軸54cm、短軸42cm、深さ10cmを測る。（遺物）遺物総数2,771点。うち土器５点を図示した。

Ｈ－222号住居址（Ｂ区、Fig. 24・33・49）

（形状）南側半分は調査区外。方形と思われる。（床面）堅緻な面。（竈）検出されず。（重複）Ｈ－223、Ｈ－224、Ｈ－248、と重複。構築順は本遺構→Ｈ－223→Ｈ－224である。（遺物）総数430点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－223号住居址（Ｂ区、Fig. 24・33・49）

（形状）方形。Ｈ－222との重複により南側半分を削られる。（床面）平坦な床面を検出。（竈）検出されず。（重複）Ｈ－222、Ｈ－224、Ｈ－248、と重複。構築順はＨ－222、本遺構→Ｈ－224である。（遺物）総数808点。うち土器８点を図示した。

Ｈ－224号住居址（Ｂ区、Fig. 24・25・35・49、ＰＬ．５・11）

（形状）方形。（床面）平坦で堅緻な床面。（竈）東壁南東部に設置。全長64cm、焚口部幅17cmを測る。竈左袖部より長胴甕と思われる遺物多数出土。袖石のかわりに使用したものか。Ｄ－120により竈煙道部が削られる。（貯蔵穴）住居址の南東隅に位置し、長径48cm、短径40cm、深さ30cmを測る。（重複）Ｈ－222、Ｈ－223、Ｈ－225と重複しており、構築順はＨ－222→Ｈ－223→本遺構→Ｈ－225である。（遺物）総数721点。うち土器２点を図示した。

Ｈ－225号住居址（Ｂ区、Fig. 24・25、ＰＬ．５）

（形状）方形。（床面）堅緻で平坦な床面。南東部に一段高くなった面を有する。（竈）検出されず。（重複）Ｈ－224と重複。本遺構が古い。（遺物）総数720点。

Ｈ－226号住居址（Ｂ区、Fig. 25・49・50、ＰＬ．５・11・15）

（形状）方形。南壁は調査区外。（床面）平坦な床面。（竈）東壁に位置し、全長60cm、焚口部幅11cmを測る。左袖石に凝灰岩質層の切石を使用。竈南半分は調査区外のため壊される。（重複）Ｈ－229と重複。本遺構が新しい。（遺物）総数1,693点。砥石、台付甕の台の部分出土。うち土器７点を図示した。

Ｈ－227号住居址（Ｂ区、Fig. 22・26・50）

（形状）方形。北側半分は調査区外。（床面）平坦な床面。（竈）東竈。煙道部より一気に下がる。垂直に降り立ったところに、深さ10cm程の穴があく。全長84cm、焚口部幅15cmを測る。（重複）Ｈ－218と重複。本遺構が古い。（遺物）総数366点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－228号住居址（Ｂ区、Fig．27・60、ＰＬ．11）

（形状）方形。北側半分は調査区外。（床面）平坦な面を検出。（竈）東壁に位置し、全長60㎝、焚口部幅44㎝を測る。（貯蔵穴）住居南東隅に位置し、長軸60㎝、短軸52㎝、深さ30㎝を測る。（遺物）遺物総数333点。うち土器２点を図示した。

Ｈ－229号住居址（Ｂ区、Fig．26・50、ＰＬ．11）

（形状）方形。南壁は調査区外。（床面）平坦な床面。（竈）東壁やや南寄りに設置される。プラン確認の際には焚口部幅が90㎝近くあり、何かしらの製作竈かとも思われた。調査の結果、出土遺物もほとんどみられず、少々期待外れであった。全長100㎝、焚口部幅88㎝を測る。灰層は竈全体に２㎝ちかくの厚みで散らばる。（重複）Ｈ－226と重複。本遺構が古い。（遺物）総数1,318点。うち土器５点を図示した。

Ｈ－230号住居址（Ｂ区、Fig．27・28）

（形状）方形。南側半分は調査区外。（床面）平坦な堅緻面が検出された。（竈）検出されず。（重複）Ｈ－232と重複。本遺構が先行する。（遺物）総数51点。

Ｈ－231号住居址（Ｂ区、Fig．27・28・50）

（形状）方形。（床面）平坦な床面が検出された。（竈）東壁ほぼ中央に位置し、全長92㎝、焚口部幅68㎝を測る。（重複）Ｈ－232と重複し、本遺構が先行する。（遺物）総数111点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－232号住居址（Ｂ区、Fig．28・50）

（形状）方形。重複のため東壁を削られる。（床面）堅緻な床面。（竈）東壁南側に設置され、全長67㎝、焚口部幅50㎝を測る。（重複）Ｈ－230、Ｈ－231、Ｈ－233と重複。構築順は、Ｈ－231→Ｈ－230→本遺構→Ｈ－233である。（遺物）総数779点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－233号住居址（Ｂ区、Fig．28・50）

（形状）方形。重複により南壁は削られる。（床面）平坦で堅緻な床面。（竈）東壁やや南寄りに設置される。全長70㎝、焚口部幅40㎝を測る。（重複）Ｈ－232と重複。本遺構が古い。（遺物）総数741点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－234号住居址（Ｂ区、Fig．29・50、ＰＬ．５）

（形状）方形。南壁は調査区外。（床面）堅緻な床が検出された。（竈）検出されず。（重複）Ｈ－235、Ｈ－236、Ｈ－238と重複。構築順は、Ｈ－235→Ｈ－238→Ｈ－236→本遺構である。（遺物）総数978点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－235号住居址（Ｂ区、Fig．29・30・50、ＰＬ．５・11）

（形状）方形。西壁は重複により、削られる。（床面）平坦で堅緻な床面。（竈）東壁中央に位置し、全長60㎝、焚口部幅60㎝を測る。（貯蔵穴）南東隅に位置し、長軸42㎝、短軸32㎝、深さ54㎝を測る。（重複）Ｈ－234、Ｈ－236、Ｈ－238と重複。構築順は本遺構→Ｈ－238→Ｈ－236→Ｈ－234である。（遺物）総数1,473点。うち土器２点を図示した。

Ｈ－236号住居址（Ｂ区、Fig. 30・51、ＰＬ. 5・11）

（形状）北側半分は調査区外。方形。（床面）平坦な床面。（竈）東壁に位置し、全長100cm、焚口部幅56cmを測る。（重複）Ｈ－235、Ｈ－238、Ｈ－234と重複。構築順は、Ｈ－235→Ｈ－238→本遺構→Ｈ－234である。（遺物）総数918点。うち土器２点を図示した。

Ｈ－237号住居址（Ｂ区、Fig. 31・51、ＰＬ. 5・6・11・15）

（形状）方形。南壁は調査区外。（床面）平坦で極めて堅緻な床面。（竈）東壁南東隅に設置され、全長106cm、焚口部幅58cmを測る。（重複）Ｈ－241、Ｈ－240と重複。構築順は、Ｈ－240・241→本遺構→である。（遺物）総数1,670点。ここでは須恵器円面硯、高台椀、石製紡錘車、鉄製品が出土した。うち土器５点を図示した。

Ｈ－238号住居址（Ｂ区、Fig. 29・30・51、ＰＬ. 5・6・11・12）

（形状）方形。北壁は調査区外。南壁は重複により削られる。（床面）平坦な床面。（竈）東壁の南寄りに設置され、全長70cm、焚口部幅48cmを測る。円錐形の凝灰岩質の支柱石を使用。（重複）Ｈ－235、Ｈ－236、Ｈ－234と重複する。構築順は、Ｈ－235→本遺構→Ｈ－236→Ｈ－234となっている。（遺物）総数1,661点。うち土器５点を図示した。

Ｈ－239号住居址（Ｂ区、Fig. 32・51、ＰＬ. 6・12）

（形状）方形。北西は攪乱により、削られる。（床面）ほぼ平坦で堅緻な面が広がる。（竈）東壁ほぼ中央に設置され、全長80cm、焚口部幅42cmを測る。動かされたと思われる凝灰岩質の袖石が２つ残る。（遺物）総数236点。うち土器３点を図示した。

Ｈ－240号住居址（Ｂ区、Fig. 31）

（形状）方形。（床面）平坦で堅緻な床面。（竈）東壁に南東部に設置され、全長70cm、焚口部幅55cmを測る。凝灰岩質の直方体の支柱石使用。（重複）Ｈ－237と重複。本遺構が新しい。（遺物）総数355点。

Ｈ－241号住居址（Ｂ区、Fig. 33・52）

（形状）方形。南側は調査区外。東壁は重複によって削られる。（床面）ほぼ平坦な床面。（竈）検出されず。（重複）Ｈ－237と重複。本遺構が古い。（遺物）総数1,028点。うち土器３点を図示した。

Ｈ－242号住居址（Ｂ区、Fig. 32・52、ＰＬ. 12・15）

（形状）方形。南壁は調査区外。北東から南西に攪乱が入る。（床面）平坦な床面。（竈）東壁やや南寄りに設置され、全長96cm、焚口部幅38cmを測る。燃焼部左側の粘土が焼土化して残る。焚口部付近に広範囲に灰が広がる。（柱穴）主柱穴を検出。P_1（46×35×42cm）（重複）Ｈ－239と重複。本遺構が新しい。（遺物）総数2,097点。うち土器３点を図示した。

Ｈ－243号住居址（Ｃ区、Fig. 35・52、ＰＬ. 7・12）

（形状）方形。（床面）平坦な床面。（竈）東壁やや南寄りに設置され、全長112cm、焚口部幅26cmを測る。竈煙道部両側は粘土の壁が残る。かなり細みで長い竈である。（重複）Ｈ－244と重

複。本遺構が新しい。（遺物）総数750点。竈右隅より、２点の長頸壺が出土。住居内からも頸部のみの長頸壺出土。うち土器５点を図示した。

Ｈ－244号住居址（Ｃ区、Fig. 35）

（形状）方形。北側半分は調査区外。（床面）平坦で極めて堅緻な貼り床面。（竈）検出されず。（重複）Ｈ－243と重複し、本遺構が古い。（遺物）総数25点。

Ｈ－245号住居址（Ｃ区、Fig. 35・36・39・52、ＰＬ. ７・12）

（形状）方形。（竈）東壁ほぼ中央に設置され、全長132cm、焚口部幅32cmを測る。（重複）Ｈ－255、Ｈ－252、Ｈ－249と重複。Ｈ－252・255・249→本遺構である。（遺物）総数1,571点。うち土器３点を図示した。

Ｈ－246号住居址（Ｃ区、Fig. 37・52・53、ＰＬ. ７・12）

（形状）方形。東壁は調査区外。（床面）極めて堅緻な貼り床面。（竈）東壁に設置。調査区内で粘土で構築された左袖の一部を検出。全長64cm、焚口部幅44cmを測る。（貯蔵穴）竈右脇に検出。92×74×53cmを測る。（重複）Ｈ－247と重複。本遺構が新しい。（遺物）総数1,669点。うち土器９点を図示した。

Ｈ－247号住居址（Ｃ区、Fig. 37、ＰＬ. ７）

（形状）方形。北西部は調査区外。（床面）平坦で堅緻な床面を検出。（竈）重複により削られる。袖石に使用したと思われる凝灰岩質層のくず石が散乱。推定全長100cm、焚口部幅48cmを測る。（貯蔵穴）竈右脇に検出。Ｌ字型の貯蔵穴。長軸56cm、短軸52cm、深さ35cmを測る。（柱穴）主柱穴を２個検出。P_1（20×19×22cm）、P_2（37×30×19cm）である。（重複）Ｈ－246と重複。本遺構が古い。南壁中央に攪乱が入る。（遺物）総数884点。

Ｈ－248号住居址（Ｂ区、Fig. 33・53、ＰＬ. 12・15）

（形状）方形。（床面）ほぼ平坦。（竈）重複により検出されず。（重複）Ｈ－222、Ｈ－223、Ｏ－１と重複。本遺構が最も古い。（遺物）総数781点。双孔を持つ滑石製の剣形品、古手の小甕、糸切りの坏、石製紡錘車等出土。うち土器７点を図示した。（備考）重複が激しく６世紀後半から９世紀までの遺物が流れ込んでおり、時代を特定できないが８世紀ころと思われる。

Ｈ－249号住居址（Ｃ区、Fig. 35・53）

（形状）方形。北西部は調査区外。（床面）平坦な床面。（竈）検出されず。（重複）Ｈ－245と重複。本遺構が古い。（遺物）総数561点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－250号住居址（Ｃ区、Fig. 38・53、ＰＬ. ８）

（形状）方形。西側大半は調査区外。（床面）堅緻な面。（竈）東壁に中央に設置され、全長116cm、焚口部50cmを測る。焚口部に使用したと思われる凝灰岩質層の切石が垂直に残る。トンネル状に加工。（貯蔵穴）住居南東部に検出。短軸82cm、短軸66cm、深さ35cmを測る。（遺物）総数191点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－251号住居址（Ｃ区、Fig. 36）

（形状）方形。東側半分は調査区外。（床面）堅緻な床面。（竈）検出されず。（遺物）総数168点。

Ｈ－252号住居址（Ｃ区、Fig. 38・53）

（形状）方形。南東部は調査区外。（床面）堅緻な床面。（竈）調査区外。（遺物）総数375点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－253号住居址（Ｃ区、Fig. 39、ＰＬ．８）

（形状）方形。西側半分は調査区外。（床面）堅緻な床面。（竈）東壁のやや南寄りに設置され、全長104cm、焚口部幅33cmを測る。（貯蔵穴）住居南東隅に検出。長軸50cm、短軸44cm、深さ53cmを測る。（重複）Ｈ－254と重複しており、本遺構が古い。（遺物）総数41点。

Ｈ－254号住居址（Ｃ区、Fig. 39、ＰＬ．８）

（形状）方形。調査区内で竈と両肩のみ検出。（床面）堅緻な床面。（竈）焚口部と煙道部接点付近に直方体に加工した凝灰岩質層の切石が残る。トンネル状の穴が開く。全長154cm、焚口部幅50cmを測る。（遺物）総数13点。

Ｈ－255号住居址（Ｃ区、Fig. 39・53・54、ＰＬ．８・12）

（形状）方形。Ｈ－245により南半分を削られる。（床面）堅緻な床面。（竈）北壁に設置、全長160cm、焚口部幅36cmを測る。右袖石の代わりに長胴甕をひっくり返して使用か。さらにその外側に人頭大の２つの河原石を検出。（重複）Ｈ－245と重複。本遺構が古い。（遺物）総数484点。うち土器５点を図示した。

Ｈ－256号住居址（Ｂ区）

（形状）方形。住居床面の確認のみ。（床面）平坦な床面。（竈）東壁に設置。全長70cm、焚口部幅34cmを測る。（重複）Ｈ－217、Ｈ－275と重複。出土遺物もなく時期不明。

Ｈ－257号住居址（Ｄ区、Fig. 40・54、ＰＬ．12）

（形状）方形。北側半分は調査区外。（床面）平坦で堅緻な床面。（竈）検出されず。（遺物）総数115点。うち土器１点を図示した。

Ｈ－258号住居址（Ｄ区、Fig. 40・54）

（形状）方形。南側は調査区外。（床面）ほぼ平坦な床面。（竈）検出されず。（遺物）総数140点。布目瓦出土。うち土器２点を図示した。

Ｈ－259号住居址（Ｄ区、Fig. 40・54、ＰＬ．９・13）

（形状）方形。調査区内で住居南西部のみ検出。（床面）平坦な床面。（竈）検出されず。（遺物）総数149点。調査区北壁より、多数の大甕の破片出土。遺物の破損が激しく復元には至らなかった。

Ｈ－260号住居址（Ｄ区、Fig. 41・54、ＰＬ．９・13）

（形状）方形。北側半分は調査区外。（床面）平坦で堅緻な床面。竈左隅に２個の床下土坑８の

字のように検出。（竈）西壁に設置され、全長154cm、焚口部幅37cmを測る。竈煙道部の長い竈である。（重複）H－261と重複。本遺構が新しい。（遺物）総数72点。うち土器2点を図示した。

H－261号住居址（D区、Fig. 41）

（形状）調査区内で一部のみ確認。方形と思われる。（床面）平坦な床面。（竈）検出されず。（重複）H－260と重複し、本遺構が古い。（遺物）総数8点。

H－262号住居址（D区、Fig. 41・54）

（形状）方形。北側半分は調査区外。（床面）ほぼ平坦な床面。（竈）東壁に設置され、全長70cm、焚口部幅50cmを測る。（遺物）総数222点。うち土器1点を図示した。

H－263号住居址（D区、Fig. 42・55・56、PL. 8・13）

（形状）方形。北東部は重複により削られる。（床面）極めて堅緻な貼り床面。（竈）東壁ほぼ中央に設置。左袖は重複により削られ、粘土で構築された右袖を検出。全長108cm、焚口部幅44cmを測る。（周溝）調査範囲で全周。幅48cm、深さ6cmを測る。（重複）H－264と重複。本遺構が古い。（遺物）総数72点。うち土器1点を図示した。

H－264号住居址（D区、Fig. 42・43・55、PL. 8・13）

（形状）方形。北側半分は調査区外。（床面）平坦で堅緻な床面を検出。（竈）東壁に位置する。調査区内で粘土で構築された袖の一部を検出。推定全長66cm、焚口部幅28cmを測る。（柱穴）主柱穴を1個検出。半分は調査区外。P_1（32×18×21cm）である。（周溝）調査範囲で全周。幅47cm、深さ13cmを測る。（重複）H－263、H－272と重複する。構築順はH－263・272→本遺構である。（遺物）総数299点。うち土器1点を図示した。

H－265号住居址（D区、Fig. 41）

（形状）方形。南側半分は調査区外。（床面）ほぼ平坦。（竈）検出されず。（遺物）総数32点。

H－266号住居址（D区、Fig. 42）

（形状）方形。住居一部検出。（床面）平坦な床面。（竈）検出されず。（重複）H－267と重複。本遺構が新しい。（周溝）調査範囲で全周。幅28cm、深さ9cmを測る。（遺物）総数32点。

H－267号住居址（D区、Fig. 42）

（形状）方形。南側半分は調査区外。（床面）堅緻な面。床面中央に段差有り。馬蹄形状施設か。（竈）東壁に設置され、調査範囲で左袖の一部を検出。全長74cm、焚口部15cmを測る。（遺物）総数33点。

H－268号住居址（D区、Fig. 43・55、PL. 9・13）

（形状）方形。南側半分は重複により削られる。（床面）平坦で堅緻な床面。（竈）検出されず。（周溝）調査範囲で全周。幅35cm、幅18cmを測る。（重複）H－269と重複。本遺構が古い。（遺物）総数219点。脚部に3方向の透かし孔を持つ、高坏出土。うち土器5点を図示した。

H－269号住居址（D区、Fig. 43・44・55、PL. 9・13）

（形状）方形。古墳前期の大型の住居。1辺が8mを越える。南側半分は調査区外。（床面）平

坦で極めて堅緻な床面を検出。住居北東隅が一部台形状に張り出しを持つ。（竈）調査区外。（柱穴）2個の主柱穴を検出。P_1（52×45×28cm）、P_2（52×48×29cm）である。（周溝）調査範囲で全周。幅30cm、深さ10cmを測る。（遺物）総数262点。うち土器3点を図示した。

H－270号住居址（E区、Fig. 43）

（形状）方形。（床面）平坦な床面。（竈）検出されず。（遺物）総数14点。

H－271号住居址（D区、Fig. 44、PL. 9）

（形状）方形。調査区内で住居一部のみ検出。（床面）堅緻な床面。（竈）検出されず。（周溝）調査範囲で全周。幅54cm、深さ10cmを測る。（遺物）総数48点。

H－272号住居址（D区、Fig. 43）

（形状）方形。重複により南壁を削られる。（床面）平坦で堅緻な床面。（竈）検出されず。（貯蔵穴）住居址南東に検出。長軸76cm、短軸30cm、深さ53cmを測る。（重複）H－264と重複。本遺構が古い。（遺物）総数145点。

H－273号住居址（E区、Fig. 45、PL. 9）

（形状）方形。住居床面の確認のみ。（床面）平坦な床面。（竈）検出されず。（重複）H－274と重複。出土遺物もなく新旧関係構築時期等不明。

H－274号住居址（E区、Fig. 45、PL. 9）

（形状）方形。住居床面の確認のみ。（床面）平坦な床面。（竈）検出されず。（重複）H－273と重複。出土遺物もなく新旧関係構築時期等不明。

H－275号住居址（B区、Fig. 34・55、PL. 13）

（形状）方形。（床面）平坦な床面。（竈）東壁に設置。現住居の排水管による攪乱のため焼土のみ確認。推定全長118cm、焚口部幅56cmを測る。（重複）H－217、H－256と重複。H－217・256→本遺構である。（遺物）総数330点。うち土器2点を図示した。

H－276号住居址（B区、Fig. 34・55）

（形状）方形。北側半分は調査区外。（床面）平坦な床面。（竈）東壁に設置。煙道部は排水管による攪乱のため削られる。推定全長計測不能、焚口部幅42cmを測る。（遺物）遺物総数439点。うち土器2点を図示した。

2　溝　　址

W－13号溝址（C区、Fig. 45、PL. 7）

（位置）C区の北部に位置し、調査区を東西に横切る。昨年度調査区のC区を東西に横切る竈構築材採掘坑W－9号と合流すると思われる。（形状）上幅680cm、下幅250cmを測る。断面は楕円形を半分に切った形を呈し、緩やかに窪んでおり、凝灰岩質層が露出している。昨年度の竈構築に使用した石材を切り出した痕跡を示す採掘坑は、階段状に幾重にも重なっており、切り出し可能な凝灰岩質層を溝の侵食を利用して、連続的に効率よく採取されたと考えられた。その層の厚

さは、１ｍを有していた。しかし、今年度の溝址では最深部でも55cmであり、取り残し跡や切れ込み跡も見られなかったことから石材の採取は不可能だったことがうかがえる。（覆土）６層に分けられる。３、４、５層が軽石、灰等のAs－B（1108年降下）の純層である。（遺物）遺物総数231点。（備考）５層目と溝底の間に少量のノロが検出されたことから、わずかな水が流れていたと考えられる。時期を決定する出土遺物もなく、自給自足で竈構築材を賄っていたと考えるならば、竈構築材を使用した大屋敷遺跡の住居址同様、古墳後期から平安時代ということが言えよう。

３　土　　坑

今年度の調査では、土坑が57基（Ａ区…２基、Ｂ区…35基、Ｃ区…16基、Ｄ区…２基、Ｅ区…２基）検出された。Ｅ区一番東から細長い溝とともに２基の土坑が検出された。これらは、水田開墾時に削り取られた住居址の周溝や貯蔵穴、柱穴に当たるピットと考えられる。Ｂ区中央とＢ区、Ｃ区合流点では、住居址に囲まれた形で土坑群が検出された。そのうちいくつかの土坑からは臼玉や石製模造品が出土した。周辺の住居址を含めれば、石製模造品11点、臼玉33点が出土したこととなる。この土坑群が祭祀に係わっていた可能性が指摘できよう。なお、ここでは、特徴的なもののみの記述に留め、全てを一覧表（Tab.　２）で記載した。

Ｄ－111号土坑（Ａ区）

Ａ区中央のＨ－208の北壁で重複する形で検出。形状は円形。断面ではややすり鉢状の平底。遺物総数31点。流れ込みと思われる縄文土器破片が出土。

Ｄ－116号土坑（Ｂ区）

Ｂ区、Ｃ区合流点の土坑群で検出。形状は楕円形。遺物はほとんどが土師器破片のみで、構築時期は不明。

Ｄ－138号土坑（Ｂ区、Fig. 45、ＰＬ．５）

Ｂ区東側の土坑群で検出。形状は不整形。遺物23点と少ないが、石製模造品が６個出土した。構築時期は古墳時代後期と思われる。

Ｄ－147号土坑（Ｃ区）

Ｃ、Ｄ区合流の土坑群で検出。円形を呈す。長径が146cmを測る大型の土坑。但し、深さ18cmと非常に浅い。遺物総数16点。

Ｄ－156号土坑（Ｃ区）

Ｃ、Ｄ区合流の土坑群で検出。円形を呈す。遺物総数20点。長頸壺と思われる頸部が出土した。構築時期は古墳時代後期と思われる。

Ｄ－166号土坑（Ｅ区）

Ｅ区東側で検出。長方形を呈す。遺物総数191点。構築時期は古墳時代後期と思われる。

4 埋 設 土 器

U－1（A区、Fig. 12、PL. 2・15）

（形状）埋設土器。掘り方は、東西156cm×南北95cm×深さ33cmを測る。埋設土器は中央部分より下が意図的に割られており、石棒が納められていた。（遺物）遺物総数107点。加曾利E式土器が中心。（備考）出土遺物から縄文時代中期後半の加曾利E3期と思われる。

5 縄文時代の遺物（Fig. 55～57、PL. 15・16）

今回検出された縄文時代の遺構は2つだが、その他の縄文時代の遺構は、重複する古墳時代以降の住居址等に壊されて検出されなかったものと思われる。今回出土した縄文土器の時期をみると、そのほとんどが縄文時代中期後半の加曾利E式（E3～4）であった。特に加曾利E3式が多く出土していた。検出されたJ－1号住居址も出土遺物から、この時期の住居であると推測される。また、昨年度X39Y81付近でも同時期の土器が大量に出土しており、その北側になると極端に出土数が減少していることから、X39Y81付近より八幡川沿いのA区にかけて加曾利E3期の遺構が存在していたことが予想される。

出土位置についてみると、総数1,071点の内、A区出土が96%を占める。特にJ－1とその西側で検出されたU－1を取り囲む区域での出土が目立っていた。U－1からは、加曾利E期と同時期とされる曽利系統の土器が出土している。埋甕の口縁部がなく、細かな時期の確定はできないが、胴部に綾杉状の沈線が施されていた。底部は意図的に割られており、内部には石棒が逆位におさめられていたことから、祭祀的な遺構と考えられる。さらに、今年度は過去の発掘調査で出土していない縄文時代晩期終末と思われる土器片4点がみつかった。どれも横位平行沈線がほどこされ、隆起状にハケメがみられる。また、厚さ、胎土、焼成等に共通性がみられることから、同一個体と考えられる。石器についても土器と同様にその出土はA区に集中している。石材については、黒色頁岩が中心である。これは、この周辺地域の縄文時代における石材利用と合致している。また、W－13から検出された打製石斧をのぞき石器の形状に共通点がみられる。これらは、土器と同時期のものと思われる。

分類		点数	割合
曽利式		1	0.1
中期後半	加曾利E式	988	92.7
	沈線＋縄文	266	25.2
	微隆起＋縄文	20	2.0
	沈線	134	12.8
	微隆起	24	2.3
	条線	31	3.0
	隆帯	44	4.2
	隆帯＋縄文	45	4.3
	刺突	7	0.1
	円形刺突	8	0.1
	縄文	119	11.2
	無文	288	27.3
	肥手・突起	2	0.1
称名寺		3	0.1
底部		5	0.1
不明		73	7.0
縄文晩期		4	0.1
合計		1071	100%

Tab. 1 縄文土器一覧

6　石製模造品（Fig. 51・52、PL. 14）

今年度の調査では、石製模造品が50点出土した。その内訳は、臼玉33点、管玉４点、剣形品７点、有孔板２点、紡錘車２点、勾玉１点、器種不明１点である。

石製模造品の石材は、滑石（82%）、頁岩（18%）となっている。今年度多く出土した臼玉では、滑石30点（91%）、頁岩３点（９%）となっており、断然滑石が多く見られた。ただ、頁岩は石材の性質上薄く剥がれ易いため１個の製品が数個になった可能性もあり、それぞれの厚さは、当初のものかは断定できない。昨年度（滑石45%、頁岩55%）と比較すると滑石製品の割合が非常に多くなっている。石製模造品の器種と石材について考えると剣形品では、７個のうち６個を滑石が占めている。これは、昨年度までの石製模造品の石材傾向と同様である。

出土位置では、昨年度のように一か所に集中して出土といった傾向は薄れ、Ａ～Ｃ区の各住居址から１～２個の割合で分散している。最も多い出土でもＨ－252の臼玉６点、Ｄ－138の石製模造品（剣形品）６点である。Ｄ－138では確認面で白色の粘土層が見られ未使用の竈かとも思われたが、調査の結果不整形の土坑となった。ここの土坑群での出土はほかになく、一か所の土坑から集中して出土したことから考えれば、祭祀に関連したものである可能性も考えられよう。

なお、ここでは目的の器形に向かう途中のものや、それを生み出す過程で生じた剥片、また製作中にできた失敗片もみられない。このことから、ここが玉類や石製模造品の製作場所ではなく、他から搬入されたものと考えられる。

そしてこれらの生産と流通を管理しているのが、各グループの豪族であろう。各グループ間の関係が商品流通の取引関係とすれば、これらの製品の見返りにどのような代価を、大屋敷遺跡から支払っていたのであろうか、興味深いところである。

Tab. 1　大屋敷遺跡遺構一覧表

住居址一覧表

遺構名(調査区)	位　置	規模(m)東西×南北	面積(m²)	壁高	主軸方向	竈	備　考	時　期	Fig
Ｊ－１(Ａ)	X57～88,	2.56 ×(1.70)	(3.8)	10cm			住居中央に埋め甕、炉として使用か。		12
Ｈ－189(Ａ)	X52　Y89～90	(2.90)× 4.20	10.6	26cm	N-77°-E	東辺南寄	臼玉２点。鉄器１点。	８Ｃ	13
Ｈ－190(Ａ)	X52　Y88～89	3.02 × 4.02	11.3	15cm	N-92°-E	東辺南寄	石製模造品１点。	９～10Ｃ	13
Ｈ－191(Ａ)	X51～53, Y87～88	2.97 ×(3.47)	(8.3)	24cm	N-79°-E	東辺南寄		８Ｃ	13
Ｈ－192(Ａ)	X53～54, Y89～90	4.17 × 4.85	17.0	27cm	N-88°-E	東辺南寄	両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	９後～10前	14
Ｈ－193(Ａ)	X53～54, Y88～89	4.12 × 4.04	15.2	11cm	N-55°-E	東　辺		平安	14
Ｈ－194(Ａ)	X54～55, Y90～91	4.58 ×(4.38)	(15.8)	22cm	N-76°-E	未確認	周溝。	６Ｃ	15
Ｈ－195(Ａ)	X54～55, Y88～90	3.36 × 5.07	15.7	18cm	N-89°-E	東辺南寄	両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	９後～10Ｃ	15
Ｈ－196(Ａ)	X53～54, Y87～89	4.26 × 4.84	18.1	35cm	N-65°-E	東辺南寄	臼玉３点。	６Ｃ	16
Ｈ－197(Ａ)	X52～53, Y87～88	2.35 × 3.22	6.4	34cm	N-70°-E	東辺北寄		６後～７前	13
Ｈ－198(Ａ)	X55～56, Y89～91	4.08 × 6.32	(21.1)	17cm	N-108°-E	東辺南寄		６Ｃ	17
Ｈ－199(Ａ)	X57～58, Y87	2.62 ×(1.52)	(3.5)	28cm	N-87°-E	未確認		８～９Ｃ	17
Ｈ－200(Ａ)	X56～57, Y90～91	(4.30)×(2.08)	(14.0)	14cm	N-65°-E	東辺中央		６Ｃ	16
Ｈ－201(Ａ)	X56～57, Y90～91	(5.04)×(2.10)	(9.3)	12cm	N-91°-E	未確認		８～９Ｃ	16
Ｈ－202(Ａ)	X57　Y89～90		(0.3)		N-170°-W			不明	－
Ｈ－203(Ａ)	X59～61, Y89～91	4.44 ×(4.97)	(19.6)	15cm	N-61°-E	東辺南寄		５末～６前	18

遺構名(調査区)	位　　置	規模(m)東西×南北	面積(m²)	壁高	主軸方向	竈	備　　考	時　期	Fig
H－204(A)	X61～62, Y89～90	3.60 × 3.46	11.2	16cm	N-73°-E	東辺中央		5末～6前	18
H－205(A)	X60　Y91		(0.2)		N-82°-E			不明	18
H－206(A)	X62～63, Y88～89	3.86 × 3.84	(13.9)	12cm	N-81°-E	東辺南寄		6C	19
H－207(A)	X57～58, Y88～90	4.55 × 5.44	21.9	50cm	N-75°-E	東辺南寄	両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	7後～8C	19
H－208(A)	X57～59, Y91	4.85 ×	19.2	32cm	N-86°-E	東辺中央	石製模造品1点。	8C	20
H－209(A)	X59　Y90		(0.5)		N-89°-E			8C	－
H－210(A)	X59～60, Y87～88	3.40 × 3.08	9.7	42cm	N-79°-E	東辺南寄		7後～8C	20
H－211(A)	X60　Y91		(0.7)					8C	－
H－212(A)	X60～61, Y87	(6.97)×(1.46)	(6.7)	36cm	N-80°-E	未確認	H－32の南側	6前	21
H－213(A)	X61～62, Y87～88	4.10 × 4.70	17.4	27cm	N-75°-E	東辺南寄		5末～6前	21
H－214(A)	X61～62, Y87～89	3.52 × 3.00	9.6	37cm	N-75°-E	東辺南寄	両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	平安	21
H－215(A)	X59　Y88		(0.3)		N-87°-E			6前	－
H－216(A)	X60　Y87～88		(0.4)					7後～8前	－
H－217(B)	X47　Y53～54	(1.94)×(3.30)	(4.7)	54cm	N-1°-E	未確認		不明	－
H－218(B)	X25～26, Y45～46	4.63 ×(4.58)	(19.4)	40cm	N-83°-E	東辺南寄	袖に粘土使用の竈。	9C	22
H－219(B)	X26　Y45～46	(2.94)×(3.74)	(8.6)	45cm	N-75°-E	東辺北寄		7後～8C	21
H－220(B)	X26～28, Y45～46	3.62 × 4.40	(13.1)	45cm	N-68°-E	東辺中央	袖に粘土使用の竈。	7後～8C	23
H－221(B)	X27～28, Y44～45	4.50 ×(3.68)	(15.5)	51cm	N-83°-E	東辺南寄		平安	23
H－222(B)	X29～30, Y45	4.12 ×(1.20)	(4.5)	29cm	N-86°-E	未確認		8C	24
H－223(B)	X28～30, Y45	4.12 ×(2.96)	(10.6)	31cm	N-87°-E	未確認		8C	24
H－224(B)	X29～30, Y44～45	(4.18)× 3.95	(13.0)	30cm	N-58°-E	東辺南寄		6後～7前	25
H－225(B)	X30～31, Y44～45	3.33 ×(3.27)	(7.9)	19cm	N-58°-E	未確認		6C	24
H－226(B)	X31～32, Y44～45	4.55 ×(4.05)	(16.0)	40cm	N-88°-E	東　辺	円面硯。袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	9～10C	25
H－227(B)	X25～26, Y44～45	(2.10)×(1.42)	(2.7)	15cm	N-73°-E	東　辺		9C	25
H－228(B)	X32～33, Y44	(2.70)×(1.70)	(3.9)	9cm	N-92°-E	東　辺		平安	27
H－229(B)	X32～34, Y44～45	5.10 ×(3.88)	(18.5)	30cm	N-91°-E	東辺南寄		9～10C	26
H－230(B)	X35～37, Y44～45	5.00 ×(1.58)	(6.6)	11cm	N-89°-E	未確認		不明	27
H－231(B)	X36～37, Y43～44	4.14 ×(3.25)	(12.8)	10cm	N-87°-E	東辺中央		9～10C	27
H－232(B)	X36～37, Y44～45	(2.95)× 3.80	(10.0)	14cm	N-87°-E	東辺南寄		8C	28
H－233(B)	X37～38, Y43～45	3.70 × 4.90	(17.2)	36cm	N-78°-E	東辺南寄		8C	28
H－234(B)	X39～41, Y43～44	4.26 ×(3.86)	(13.0)	37cm	N-76°-E	未確認		7C	29
H－235(B)	X40～41, Y43～44	3.38 ×(4.24)	(13.7)	24cm	N-79°-E	東辺中央	石製模造品1点。	8～9C	29
H－236(B)	X41～42, Y43	4.00 ×(2.30)	(8.9)	39cm	N-84°-E	東　辺	石製模造品1点。	7後～8C	30
H－237(B)	X42～43, Y43～44	4.56 ×(4.60)	(16.7)	40cm	N-73°-E	東辺南寄	円面硯。紡錘車。	8～9C	31
H－238(B)	X39～41, Y43～44	5.30 ×(3.45)	(14.3)	24cm	N-93°-E	東辺南寄		8C	30
H－239(B)	X45～46, Y43～44	4.00 × 3.74	(13.4)	14cm	N-51°-E	東辺中央	両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	6C	32
H－240(B)	X43～44, Y43～44	3.30 ×(4.66)	(14.2)	22cm	N-70°-E	東辺南寄		8～9C	31
H－241(B)	X42～43, Y43～44	(3.50)×(3.14)	(7.3)	40cm	N-55°-E	未確認		8C	33
H－242(B)	X44～45, Y43～45	4.15 ×(3.82)	(12.5)	47cm	N-69°-E	東辺南寄	袖に粘土使用の竈。	9～10C	32
H－243(C)	X28～29, Y31～32	(2.90)× 3.30	(7.8)	38cm	N-82°-E	東辺南寄	長頸壺3点。	7C	35
H－244(C)	X28　Y31～32	(2.68)×(0.86)	(2.6)	17cm	N-78°-E	未確認		不明	35
H－245(C)	X29～30, Y42～44	5.00 × 5.96	25.3	43cm	N-67°-E	東辺中央		6C	36
H－246(C)	X29～30, Y40～41	(4.54)× 4.80	(17.9)	51cm	N-65°-E	東　辺	袖に粘土使用の竈。	6後～7前	37
H－247(C)	X29　Y40～41	(3.58)× 4.78	(12.1)	47cm	N-65°-E			6後	37
H－248(B)	X28～29, Y44～45	4.50 ×(4.44)	(13.3)	44cm	N-83°-E	未確認	石製模造品1点。紡錘車。	8C	33
H－249(C)	X28～29, Y43～44	4.50 ×(4.80)	(13.8)	43cm	N-9°-W	未確認		6C	35
H－250(C)	X28～29, Y38～39	(2.38)×(4.88)	(6.0)	36cm	N-58°-E	東辺中央	両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	7～8C	38
H－251(C)	X29～30, Y38～39	(2.36)× 4.42	(7.3)	44cm	N-20°-W	未確認		6後～7前	36
H－252(C)	X29～30, Y41～42	(3.86)× 4.64	(13.1)	47cm	N-26°-W	未確認	臼玉6点。	6C	38
H－253(C)	X28～29, Y36～38	(1.76)× 4.00	(5.4)	17cm	N-79°-E	東辺南寄		6C	39
H－254(C)	X28～29, Y37～38	(0.62)×(2.10)	(1.2)	26cm	N-76°-E	東　辺	両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	不明	39
H－255(C)	X29～30, Y42	(3.40)×(2.74)	(4.7)	51cm		北　辺	臼玉2点。	6C	39
H－256(B)	X21～22, Y46～47	3.80 ×(3.95)	(13.8)		N-67°-E	東　辺		不明	40
H－257(D)	X30～31, Y35	4.92 ×(2.92)	(8.7)	36cm	N-71°-E	未確認		7C	40

遺構名(調査区)	位　　置	規模(m)東西×南北	面積(㎡)	壁高	主軸方向	竈	備　　考	時　期	Fig
H－258(D)	X30～31, Y36	(3.35)×(1.72)	(3.7)	30cm	N-64°-E	未確認		6後～7前	40
H－259(D)	X33　　Y35	(2.35)×(1.50)	(2.1)	20cm	N-60°-E	未確認		7C	40
H－260(D)	X32～34,	3.06 ×	(5.1)	30cm	N-112°-W	西　辺	床下土坑。	6C	41
H－261(D)	X34　　Y35	(1.06)×(0.68)	(0.5)	22cm	N-90°-E	未確認		不明	41
H－262(D)	X35～36, Y34～35	3.22 ×(2.28)	(5.8)	26cm	N-66°-E	東　辺		7C	41
H－263(D)	X37～38, Y34～35	2.86 × 3.00	(6.3)	20cm	N-68°-E	東辺中央	周溝。袖に粘土使用の竈。	6中～6後	42
H－264(D)	X37～38, Y34～35	3.90 ×(2.38)	(6.5)	33cm	N-69°-E	東　辺	周溝。袖に粘土使用の竈。	6後～7前	42
H－265(D)	X37～38, Y35～36	3.40 × 1.84	(3.3)	22cm	N-59°-E	未確認		6後～7前	41
H－266(D)	X38～39, Y35	3.04 × 1.66	(2.6)	27cm	N-58°-E	未確認	周溝。	7C	42
H－267(D)	X39　　Y35	(2.15)×(1.31)	(1.8)	29cm	N-65°-E	東　辺	馬蹄形状施設	6後～7前	42
H－268(D)	X41～42, Y34～35	3.53 ×(4.00)	(13.9)	18cm	N-38°-W	未確認	周溝。	6C	43
H－269(D)	X41～43, Y34～35	8.12 ×(4.78)	(26.9)	25cm	N-66°-E	未確認	周溝。	5末～6前	44
H－270(E)	X53～54, Y23～24	2.50 ×(2.97)	(6.7)	20cm	N-13°-W	未確認		6C	43
H－271(D)	X42～43, Y34	(2.40)×(1.42)	(1.5)	10cm	N-53°-E	未確認	周溝。	7C	44
H－272(D)	X38～39, Y34	(3.66)×(2.00)	(4.4)	22cm	N-59°-E	未確認		6後～7前	43
H－273(E)	X49　　Y23	(1.15)×(0.95)	(3.7)	37cm	N-80°-E	未確認		不明	45
H－274(E)	X48～49, Y23～24	2.60 ×(4.22)	(9.0)	38cm	N-12°-W	未確認		不明	45
H－275(B)	X20～22, Y46	(4.62)×(2.62)	(11.4)	9cm	N-75°-E	東　辺		7～8C	34
H－276(B)	X22～23, Y45～46	(6.66)×(2.20)	(13.2)	62cm	N-75°-E	東　辺		6後～7前	34

溝址一覧表

遺構名(調査区)	位　　置	方　位	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	長さ(m)	備　　考	時　期	Fig
W－13(C)	X28～29, Y33～35	N-75°-E	6.6～6.8	2.1～2.5	0.55	東西 5.9		古墳時代後期	45

土坑一覧表

遺構名(調査区)	位　　置	形状	規模(cm)長径×短径×深さ	備　　考
D－110(A)	X55～56, Y90	円　形	53 × 52 × 19	H－198　遺物2点
D－111(A)	X58, Y90	円　形	82 × 72 × 23	H－208　遺物2点
D－112(B)	X31, Y45	円　形	46 × 40 × 28	
D－113(B)	X31, Y45	円　形	42 × 36 × 29	
D－114(B)	X31, Y44	円　形	58 × 44 × 26	
D－115(B)	X31, Y45	円　形	36 × 32 × 30	遺物2点
D－116(B)	X31, Y45	楕円形	80 × 28 × 28	遺物31点
D－117(B)	X31, Y45	円　形	37 × 32 ×187	
D－118(B)	X31, Y44	円　形	39 × 30 × 25	
D－119(B)	X31, Y44～45	円　形	44 × 39 × 27	
D－120(B)	X30, Y45	円　形	46 × 44 × 28	H－224　遺物6点
D－121(B)	X27, Y46	不整形	(87)×(16)× 19	H－220
D－122(B)	X27, Y45～46	円　形	56 × 46 × 21	H－220
D－123(B)	X34, Y44	円　形	50 × 47 × 34	
D－124(B)	X34～35, Y44	円　形	65 × 60 × 36	遺物2点
D－125(B)	X30, Y44	円　形	92 × 88 × 75	H－225
D－126(B)	X35, Y44	円　形	50 × 45 × 4	
D－127(B)	X35, Y44	円　形	53 × 50 × 19	
D－128(B)	X35, Y45	円　形	25 × 20 × 19	
D－130(B)	X35, Y44	楕円形	38 × 26 × 19	
D－131(B)	X35, Y44	円　形	48 × 40 × 21	
D－132(B)	X35, Y45	円　形	32 × 30 × 21	
D－133(B)	X35, Y45	円　形	24 × 22 × 20	
D－134(B)	X34, Y44～45	円　形	(60)×(56)× 32	H－229
D－135(B)	X34, Y44	円　形	50 × 44 × 41	
D－136(B)	X34, Y44	円　形	80 × 76 × 35	
D－137(B)	X38, Y44	円　形	57 × 51 × 21	遺物2点
D－138(B)	X38, Y44	不整形	260 × 60 × 30	石製模造品6点

遺構名(調査区)	位　　置	形状	規模(cm)長径×短径×深さ	備　　考
D－139(B)	X37～38, Y45	円　形	(72)×(44)× 42	遺物5点
D－140(B)	X42, Y43	円　形	48 × 42 × 29	
D－141(B)	X42, Y43	円　形	58 × 50 × 37	
D－142(B)	X42, Y43～44	楕円形	(48)×(32)× 32	H－241
D－143(B)	X43～44, Y43	円　形	52 × 45 × 45	遺物1点
D－144(B)	X44, Y43	円　形	40 × 35 × 21	遺物2点
D－145(B)	X44, Y43	円　形	83 × 78 × 34	遺物1点
D－146(B)	X42, Y43	円　形	36 × 30 × 32	遺物9点
D－147(C)	X29, Y36	楕円形	146 ×114 × 18	
D－148(C)	X29, Y37	円　形	48 × 40 × 31	
D－149(C)	X29, Y37	円　形	32 × 22 × 20	D－159
D－150(C)	X29, Y37	円　形	46 × 42 × 32	遺物4点
D－151(C)	X29, Y37	不整形	92 × 48 × 44	
D－152(C)	X29～30, Y39	円　形	48 × 40 × 40	
D－153(C)	X30, Y39	円　形	39 × 32 × 48	
D－154(C)	X29, Y39	円　形	28 × 22 × 21	
D－155(C)	X28～29, Y38	円　形	52 × 45 × 17	
D－156(C)	X29, Y38～39	円　形	98 × 86 × 42	遺物20点
D－157(C)	X29, Y38	楕円形	58 × 38 × 50	
D－158(C)	X29, Y38	楕円形	80 × 48 × 45	
D－159(C)	X29, Y37	円　形	40 × 36 × 26	D－149　遺物6点
D－160(C)	X29～30, Y37	円　形	80 × 70 × 36	
D－161(C)	X29, Y38	円　形	46 × 32 × 45	
D－162(D)	X31, Y36	円　形	68 × 62 × 41	遺物5点
D－163(D)	X31, Y35	円　形	50 × 43 × 32	
D－164(C)	X29, Y42	円　形	60 × 48 × 58	H－255　遺物4点
D－165(E)	X55, Y23	円　形	42 × 36 × 37	
D－166(E)	X56, Y23	楕円形	112 × 85 × 32	

Ⅵ　ま　と　め

本年度で４年目を迎えた大屋敷遺跡の発掘調査では、住居址88軒、土坑57基、溝址１条を検出した。昨年までの調査でも、加曽利Ｅ式土器を中心とする縄文時代中期の土器片や石器が、古墳時代後半以降の住居址や遺物包含層から出土していたが、今回の調査により、初めてこの時代の遺構についても確認された。出土遺物についてみると、昨年までと同様に古墳時代から平安時代までの遺物が多数出土している。

本遺跡からは、これまでに古墳時代の居館址に関連する三ツ寺Ⅰ遺跡及び元総社明神遺跡Ⅴに続き３例目となる大型の高坏(注1)、高崎市綿貫観音山古墳の石室から出土している有蓋台付壺と極めて類似した須恵器台付長頸壺(注2)、一般集落での出土例が極めて稀な須恵器大型器台(注3)といった特筆すべき遺物が一般的な住居から出土している。これらにより、６世紀初頭～後半にかけて本地域あるいは近辺に居館址や有力な豪族の存在が想定される。更に多くの石製模造品や高坏等の祭祀関係遺物(注4)をみても本集落が古墳時代の単なる一般集落ではないことが窺える。このように古墳時代の本遺跡の位置づけはかなり解明されてきたといえる。一方、奈良・平安時代については、複雑に重複する住居址や多様な遺物から当時の一般的な集落としての位置づけはなされてきたが、その内実に迫るという点では資料不足であった。幸い今回の調査により小破片を含め５個体の陶硯が出土したことから、それらの存在を１つの指標として奈良・平安時代、とりわけ律令体制期の大屋敷遺跡について考察してみたい。

先頃、埼玉県寄居町末野遺跡から東日本で初めて獣脚硯(注5)の一部が発見された。獣脚硯は円面硯の一種で、古代役所の高級役人や寺院などで使用されたとみられている。７世紀末のものと思われるこの硯から、律令制度の成立段階ごろには、関東地方でもかなり高度な高温焼成した須恵器の生産技術が伝わっていたことが推測される。大屋敷遺跡出土の硯は、秋間の窯で生産されたものと思われるが、末野遺跡の例から群馬県でも高度な須恵器円面硯の生産が行われていたことが推測される。このように各地の遺跡から次々とさまざまな形態の硯の出土やその背景についての報告がなされ、また、全国的な規模での資料把握が可能となってきた昨今、文房四宝の一つである硯は、ポピュラーな考古的資料としての価値を高めているといえる。

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターによってまとめられた『陶硯関係文献目録』によれば、硯は沖縄・北海道及び東北地方のごく一部を除いてほぼ全国から出土している。平城宮跡、多賀城跡、下野国府跡などをはじめとする宮殿跡や官衙跡からの出土が最も多く、続いて寺院跡・集落跡・窯跡等からの出土が目立つ。群馬県内でも各地で大規模な発掘調査が行われ陶硯資料は増えつつあるが、その分布状況をみると、当然のことながら上野国府推定地を中心とする地域に出土例（Fig. ７参照）が多く、本遺跡も当該地域内に位置している。下東西遺跡、鳥羽遺跡、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡など複数の硯が出土している遺跡はどれも特徴ある遺跡であり、

本遺跡も一般の集落遺跡としての性格以外に別の特徴をもつ遺跡であると考えられる。

古代陶硯は一般的に、その形態から円面硯・風字硯・形象硯等に大別される(注6)。本遺跡周辺の遺跡からは円面硯も風字硯も出土しているが、本遺跡から出土した硯は全て円面硯であるので、円面硯に絞って考察してみたい。円面硯は、脚台部の有無と形態によって無脚円面硯、三脚円面硯、多脚円面硯、圏足円面硯、蹄脚円面硯等に分類される。国府推定域周辺遺跡から出土している円面硯は、様々な硯面の形態をもつものの、ほぼ圏足円面硯としてまとめることができよう。本遺跡出土の圏足円面硯と周辺遺跡出土の圏足円面硯とを比較してみると、形態的に特徴あるものであることが分かる。元来、圏足円面硯の硯面形態は年代や地域性によって変化に富んだものが多いが、国府推定地域周辺の遺跡群として捉えた場合、明らかに大きな特徴があるとすれば、そこには何等かの意味があると考えられる。

大屋敷遺跡H－237号住居址から出土した円面硯(注7)は、上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡(注8)から出土した円面硯と同様に陸部周縁に断面三角形状の内堤を設けて海部を明確にして

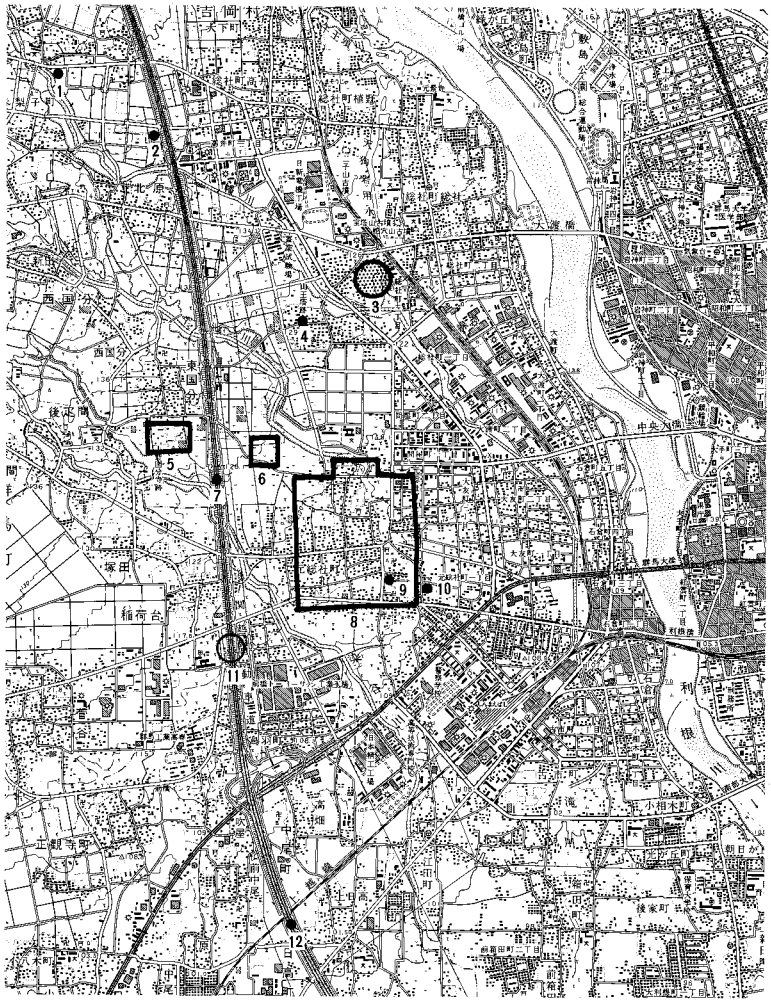


Fig. 7　国府推定地域周辺の陶硯出土遺跡

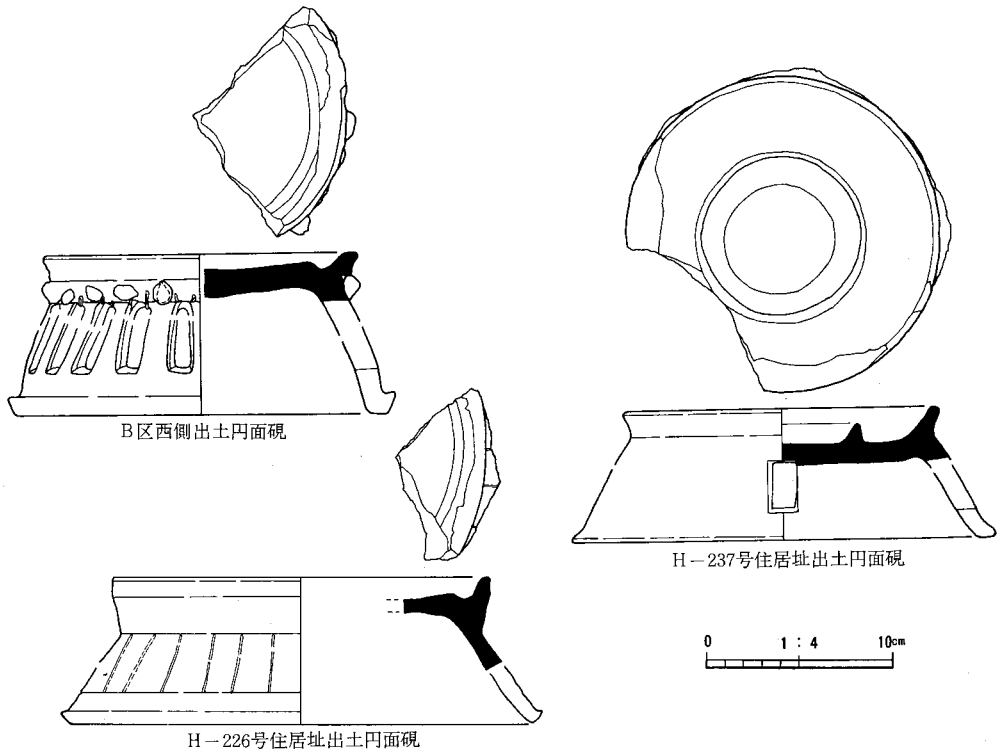


Fig. 8　大屋敷遺跡出土の円面硯

いる硯面をもつ。陸部は小円となり、全体的には実用的というより嗜好的な感じを強く受ける。しかし、陸部の光沢や摩耗度は強く使用度はかなり高い。ちなみに硯面径に対する内堤径の比率(注9)を調べてみると、中間地域出土の円面硯のうち内堤を有する2つの円面硯はそれぞれ0.805と0.759である。下東西遺跡(注10)の円面硯が0.827、鳥羽遺跡(注11)の円面硯にしても0.744と近似値をとるのに対し、大屋敷遺跡のものは0.548と特異な数値であることが分かる。硯の使用目的あるいは使用者に特別な意味があると考えられないだろうか。この硯は、共伴遺物から8世紀後半～9世紀前半のものと思われる。

B区西側から出土した円面硯(注12)は、鳥羽遺跡H－1号掘立柱建物跡を囲む12号溝から出土している円面硯と同様に、内堤をもたず周囲にU字形の溝を巡らせて海部とする硯面形態となっている。割付復元では24個の透かし孔が配され、さらに切取り部の角をおとすという精緻な作りである。また、周辺遺跡のみならず県内出土の円面硯としては珍しく、台脚部上端に半球形の粘土粒を貼り巡らせており風格が感じられる。形態的には圏足円面硯であるが、獣脚円面硯を模したといわれる蹄脚円面硯の系譜を引いているとすれば、その使用者は限られてくるのではないだろうか。脚部のしっかりした作り方や共伴遺跡から8世紀後半のものと思われる。

H－226号住居址出土の硯は、典型的な形態の円面硯であるが、復元すると硯面径が20cmの大

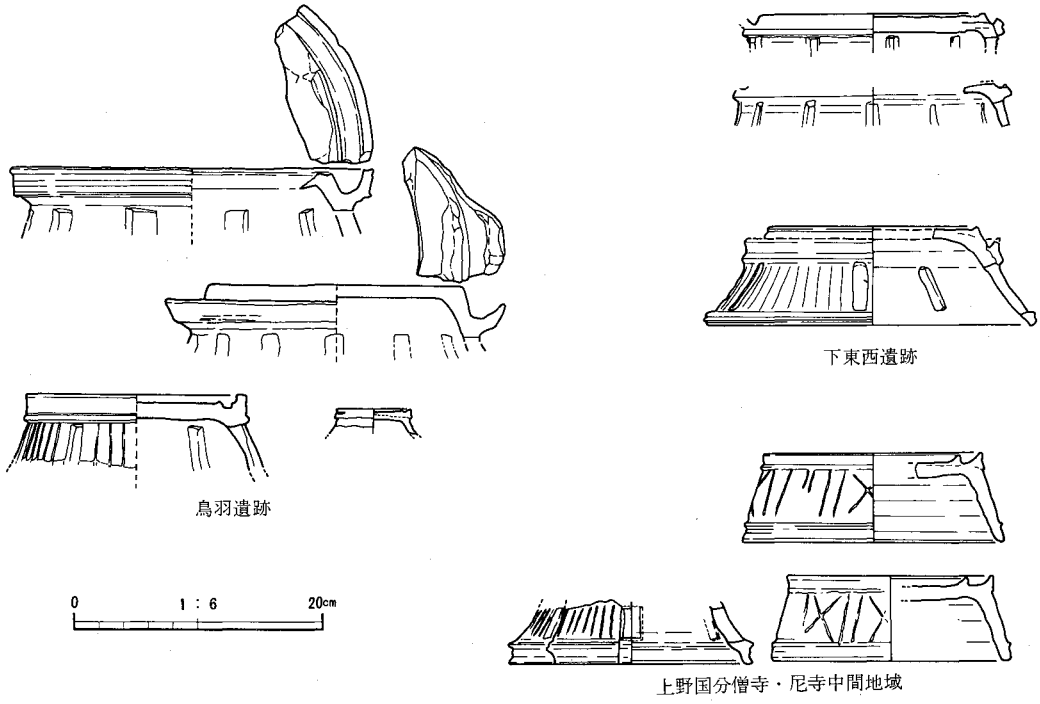


Fig. 9　大屋敷遺跡周辺の遺跡から出土した円面硯

型品となる。さらに脚部に縦線刻を有するH－226号住居址出土の円面硯と同じ形態と思われる硯の脚部が、H－242、248号住居址からそれぞれ1点ずつ出土している。いずれも9世紀代のものであると思われる。

では、このように硯が出土する集落とは、どのような性格をもつ集落と考えたらよいのか。まず、硯をもつ集落ともたない集落では、その背景や機能に何等かの相違を認めざるを得ない。宮殿跡、官衙跡、寺院跡等から多くの出土例をみるということは、やはり硯は一般庶民のものでなく文字を使用できるという特定の人々、つまり官人・僧侶階級といった知識人に供されたものであると思われる。律令制度下の文書行政システムでは、戸籍に限らず命令・連絡など行政上の伝達は文書で行うことが原則であった。律・令の成文法をよりどころとする政治機構が整備される中、文字をその伝達方法の中心として捉えるならば、硯の出土する集落は周辺域での中心的役割を負っていた集落であったと考えてもよいだろう。「蹄脚円面硯の出土は、圏足円面硯に比べ圧倒的に数が少ない事実、宮殿を頂点とする各種官衙遺構や寺院に集中する事実とも絡んで、その生産や使用形態に権力側からの規制があったのではないか」という見方がある(注13)。B区西側から出土した円面硯を蹄脚円面硯の系譜を引くものとして捉えるならば、使用者は官人や僧侶階級の中でも、ある程度地位の高い人々と考えることができ、本遺跡にそのような人々の存在が想

定される。この点に関して、H－221号住居址から出土した金銅製品の腰帯具(注14)も律令期の大屋敷遺跡を性格づける資料として興味ある資料といえる。また、硯資料数から墨書土器等の存在が予想されるが、現在まで本遺跡では、転用硯や墨書土器の出土が確認されていないということを特徴的現象として指摘しておきたい。

一方、硯の出土したH－226・H－237・H－242・H－248号住居址の大きさは、どれも一辺が5m以下で一般的な住居との差異はなく、ある程度、力をもったものが本遺跡に存在したのではないかという想定と整合しない点があることも否めない。しかし、調査範囲が幅6mの道路予定部分に限定されており、住居の大きさとの矛盾だけでは硯資料から想定される大屋敷遺跡の全体像を否定するには至らないと考える。いずれにしろ上野国府推定地域と大屋敷遺跡との位置関係を考えても、本遺跡は、財物や労働等を対象としただけの単なる一般集落ではなく、その直接影響下にあり上野国律令政治を中心となって支えた特徴ある集落の一つであったといえよう。

本地域は、多くの特筆すべき遺物等から古墳時代にかなりの隆盛をほこっていたことは前述のとおりである。また、平成6年度の調査では、中世の大規模な環濠(注15)も検出されている。今回の調査により大屋敷遺跡は、奈良・平安時代も古墳時代に引き続き、量的な面だけでなく、質的な面でも成長し続けた遺跡であることが判明した。しかし、上野国府を中心とする周辺遺跡との時代的、質的な関連性を考えるには資料不足である。本遺跡を含め、周辺地域において今後の調査・研究が進むにつれ律令体制期の本遺跡の位置づけも、より明確になるであろう。

来年度は調査最終年度となるので、縄文時代の大屋敷遺跡の全貌を明らかにすることを含め、総合的な観点から本遺跡の位置づけがなされることを切に望む。

（注1）　H－12号住居址出土。復元値で口径30.6cmを測る大型の高坏。『大屋敷遺跡Ⅰ』参照。

（注2）　H－58号住居址出土。口径11.4cm、復元値で高さ45.2cm、底径20.0cm。『大屋敷遺跡Ⅱ』参照。

（注3）　H－57号住居址出土。脚部4方に円孔及び方形の透かし孔。『大屋敷遺跡Ⅱ』参照。

（注4）　平成5年度、H－97号住居址から石製模造品268点出土。また、同住居址出土土器の60％が土師器高坏。平成6年度、D区東側の土坑群からも臼玉234点出土。『大屋敷遺跡Ⅱ』『大屋敷遺跡Ⅲ』参照。

（注5）　末野遺跡は古代窯跡である末野窯跡群の一部。獣脚硯については、埼玉県埋蔵文化財調査事業団赤熊浩一氏の御教示による。

（注6）　奈良国立文化財研究所の分類方法では、その平面形態によって、円硯・楕円硯・風字硯・形象硯・方形硯・その他に大別しているが、本文は硯の研究史ではないので、基本形態である円面硯・風字硯・形象硯に大別した。

（注7）　復元に際し、脚径・高さは国分寺中間地域・下東西遺跡出土の円面硯を参考とした。但し、高さについては、硯面の形態等を考慮しやや低めの設定とした。

（注８）　内堤径14cm、外堤径17.4cm、器高6.9cm。内堤径12.3cm、外堤径16.2cm、器高6.7cm。

（注９）　内堤を有する硯について硯面の形態の特徴を比較するために、内堤径を硯面径（外堤径）で割り、その数値を１つの目安とした。

（注10）　溝ＳＤ52から出土。内堤径16.7cm、外堤径20.2cm、器高８cm。

（注11）　12号溝から出土。内堤径12.8cm、外堤径17.2cm。

（注12）　Ｂ区西側は撹乱が多く、住居は特定できなかった。復元に際し脚径等については、同じように脚部上端に半球形の粘土粒を貼り付けた愛知県篠岡第81号窯、静岡県御子ケ谷遺跡出土の圏足円面硯を参考に復元した。高さは本遺跡周辺の円面硯のうち、周縁にＵ字形の海部をもつ円面硯の高さを参考に設定した。

（注13）　吉田恵二「日本古代陶硯の特質と系譜」『国学院大学考古学資料館紀要第１輯』1985年参照。

（注14）　縦2.5cm、横3.5cm程の長方形をした腰帯具。銅に金メッキを施した絞具の一部と思われる。整理作業終了間際になり端部に方形の切込みを有する腰帯具の一部であることが判明したため、詳細については次年度にまとめることにしたい。

（注15）　Ｗ－11・12。平成５年度調査のＷ－７に接続する。『大屋敷遺跡Ⅲ』1995年参照。

主要参考文献

前橋市『前橋市史　第１巻』前橋市史編さん委員会　1971

石井則孝「陶硯」『考古学ライブラリー42』ニューサイエンス社　1985

吉田恵二「日本古代陶硯の特質と系譜」『国学院大学考古学資料館紀要第１輯』　1985

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団『下東西遺跡』　1986

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団『鳥羽遺跡』　1986

群馬県『群馬県史　資料編１　原始古代１』群馬県史編さん室　1988

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
「陶硯について」『書上下吉祥寺・書上上原之城遺跡・上植木壱町田遺跡』　1988

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団「群馬県出土の腰帯具」『群馬の考古学』　1988

前橋市埋蔵文化財発掘調査団『大屋敷遺跡Ⅰ』　1993

前橋市埋蔵文化財発掘調査団『大屋敷遺跡Ⅱ』　1994

前橋市埋蔵文化財発掘調査団『大屋敷遺跡Ⅲ』　1995

斎宮歴史博物館『企画展　古代の硯』　1996

Ⅶ　付　　編

群馬県出土陶硯の集成及び若干の分類

綿　貫　邦　男

はじめに　我が国における陶硯の生産は6世紀末ごろに早くも開始され、7世紀の前半には、圏足円面硯・獣脚円面硯・無脚円面硯・杯皿形円面硯・横瓶形円面硯など様々な形態の陶硯がすでに存在していたようである。文書を中心とする行政機構とそれを駆使する官僚で形成される律令体制は政治機構の整備と確立期である7世紀後半から8世紀にかけては、日本各地でも陶硯の生産が行われている。東日本においても各地で進む国府・国分寺や奈良・平安時代の須恵器窯跡群・大集落遺跡などの調査によって多くの陶硯が知られている。最近、東日本では初めての出土と新聞紙上で報じられた埼玉県の寄居・末野古窯跡群発見の獣脚硯（月刊文化財発掘出土情報1996・3）など、量的な面はさておき国内に知られる各種陶硯の主たる器種揃えは整いつつある。1988年、『書上上之城遺跡』群埋文の報告文中で管見陶硯資料の集成を試みたが、資料数55点、出土遺跡は20数遺跡であった。今日では資料数・種類も増加しており、ここで再度、集成及び陶硯種を概観するのもあながち無意味ではなかろうと思われる。器種分類や陶硯の用語については研究論考も多く、混乱を避けるため基本的には、「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』41奈良国立文化財研究所1983に準拠する。

県内出土の陶硯　平面形態から現在のところ、円面硯・風字硯・方形硯・その他（ここでは「陶硯関係文献目録」に沿って、転用硯を意味しない。また猿面硯や兎図硯などを積極的に示してもいない。）の4群に大別されよう。

（1）円面硯（図1、2）　県内の陶硯の中では量・種類とももっとも多く、総数60点を数え、圏足硯・低圏足硯・無脚硯・坏皿形硯の5種に分類される。

1）蹄脚硯　群馬県ではいまだ見られない形態である。東国での出土は極めて少なく、上記「陶硯関係文献目録」では長野県に2点知られるのみである。

2）圏足硯（1～34）　古代における硯としては風字硯と並んで最もポピュラーな硯種である。事実、県内出土の陶硯の約半数を占めている。圏足硯の大まかな変遷は硯面の径に対し器高の低いものから高い形態へ。また、脚部に施される意匠は多数の長方形透かしや円形・楕円などの種々の形の透かしから、透かし数の減少や篦描き文様などへと変化するとされる。本類には陸の周囲に堤を有する有堤式と無堤式が分類されている。ここでは硯本来の機能を示す硯面に視点を当て、若干の分類と変遷を試みたい。

【AⅠ類】（1～10）硯面に内堤をもたない無堤式である。硯面径20cmを前後して2分される大型の硯（1～3）は径29cmを最大にいずれも20cmを上回り、県内に出土する硯では群を抜く大きさである。陸と海は明確に区別され、陸よりかなり低い位置から強く張った外堤が立ち上が

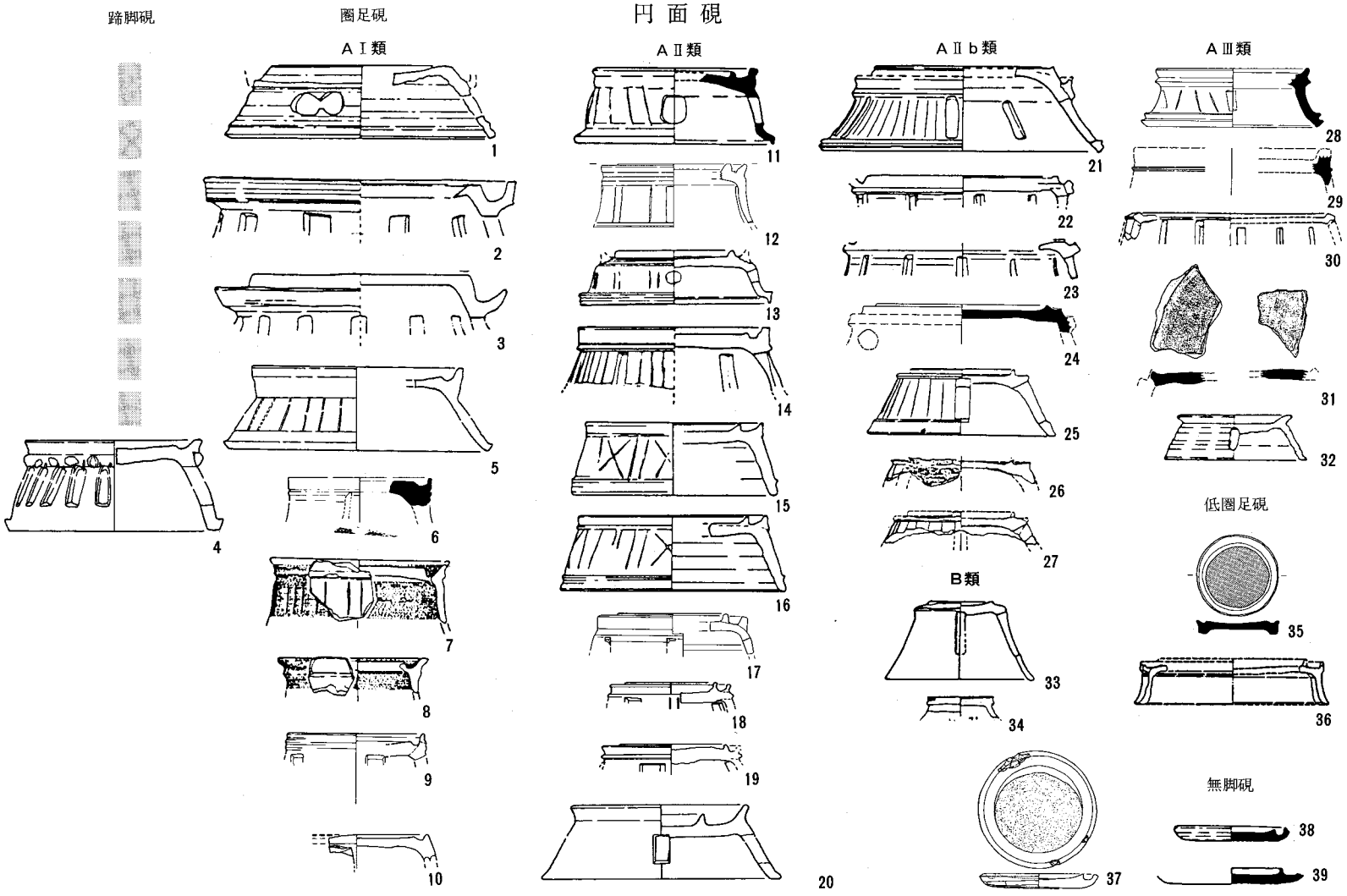

蹄脚硯
圏足硯
円面硯
AⅠ類
AⅡ類
AⅡb類
AⅢ類
B類
低圏足硯
無脚硯
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39

図 1

り深い海を作る。脚部には円形を連ねたメガネ状の透かしと、10個前後の長方形透かしを施すものがある。小型硯（４～10）は硯面径が20cm以下のものである。（６～８）はやや深い海をもつが、総じて外堤の作りが弱く狭く、浅い海となっている。また、未発達な内堤を思わせるかのように陸の端部がわずかに高まる（10）がある。なお、（４）は24個の長方形の透かしが配されるが多面的に篦削りが施され、三角柱状にはならないが獣脚を意識していると思える。さらに各脚の上端には半球状の珠を貼付し蹄脚硯の意匠が窺われる。当資料が蹄脚硯の範疇に入るとすれば、県内で初見となるが脚の作り、貼付される珠の粗雑さなどから後出的あるいは地方的な硯と言えよう。

【ＡⅡ類】（11～20）硯面に内堤と外堤を施す有堤式である。硯面の径が20cmをしたまわるものがほとんどである。（11）は陸の中央部が高く、ゆるやかに下り内堤に至る。外堤は高く直立気味に立つが、外堤の作りは内堤と同じ高さか低くなるものが目立つ。（20）は内堤径が極めて小さく、硯面の大きさの割りには陸が狭い。内・外堤の作りは９世紀代に見られる坏類の高台に類似している。

【ＡⅡｂ類】（21～27）硯面の外縁に低い堤が巡り。陸・海の区別が不明瞭な一群である。外堤と思われる部分は痕跡程度か、脚部上端を飾る凸帯となる。

【ＡⅢ類】（28～32）硯面の外縁には一条の堤が作られのみである。脚の上端を巡る凸帯は微弱になり、（32）などはまったく存在しない。ＡⅠ類の無堤式とすべきかもしれないが海の欠如によって区別した。

【Ｂ類】（33・34）圏足硯の中でも硯面の小さな一群である。堤は極めて低く痕跡程度である。（33）は堤の内縁が僅かに沈線状に窪み、浅い海を作っているかのようである。Ａ類が権威的なものとすれば、この類は愛玩的硯のようにも思われる。

３）低圏足硯　（35・36）

【Ａ類】（35）無堤式である。陸面より低く海が巡り、外縁が小さく立つ。

【Ｂ類】（36）有堤式である。内堤より低い外堤が巡る。

４）無 脚 硯（37～39）

全て有堤式である。陸はゆるく窪み、断面三角形の内堤を巡らす。

５）坏皿形硯（40～46）

【Ａ類】（45～46）中空の硯である。（46）は陸面に３個の孔がある。

【Ｂ類】（40～44）坏皿形硯に把手の付く一群である。「埋蔵文化財ニュース」によれば、提瓶形硯とする把手付円面硯の分類があるが、県内資料は把手の有無を除けば硯の形状は坏皿形硯に類似しており、これに含めた。把手はいずれも空洞化しており、硯の中空部と通じている。（44）は陸面に孔が穿たれ、把手に直接通じている。（40）は把手の先端部に小さな孔が穿たれ、鳥・獣の頭部を表していると考えられる。（41）は同類の先端部である。本類は把手という機能に着目すれば、墨を磨るという行為以後、持ち歩く硯、あるいは持って使用する硯とし

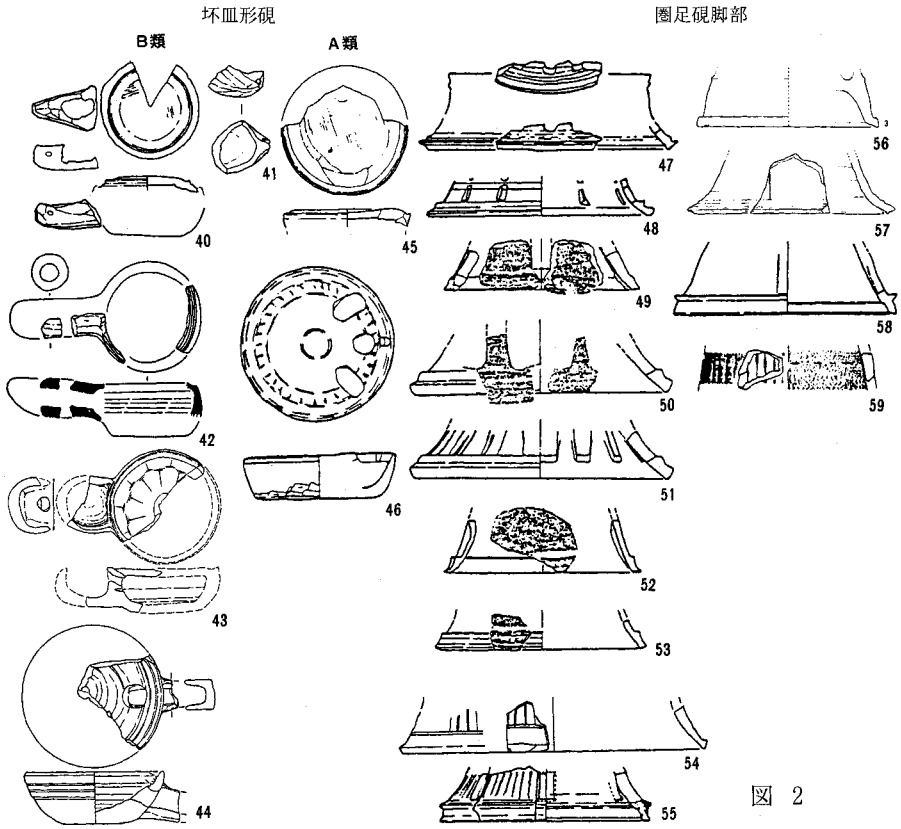


図 2

てみることもできよう。

（2）風 字 硯（図3） 円面硯に次いで多く見られる硯である。県内の風字硯はほとんどが円頭風字硯として分類されよう。

【A類】（60～70）無堤式である。硯尻には縁がなく、開放するものが多いが、（70）は硯尻まで縁が施される。裏面につけられる脚は3ないしは2個のものがほとんどで、硯頭部脚の高さや、これを省くことによって傾斜をつけ陸・海を分ける。（69）は裏面の硯尻を除く縁に凸帯を巡らせて脚とする。なお、（68）は陸中央を反らせ側縁が池溝状になり硯頭部を凹めて海を作っているかのようである。

【B類】（71）硯頭部に弧状に堤を設ける有堤式である。裏面硯尻に帯状の脚をつける。

【C類】（72～79）いわゆる二面円頭風字硯である。二面硯は縦堤二面円頭硯が最も一般的とされるが、本県の資料ではそれがみられず硯面を前後に分ける横堤二面円頭硯と言うべき形態が特徴である。硯面を巡る縁は硯尻を開放するもの（72～77）と全体に巡らすもの（78～79）がある。また、堤には筆置き用と考えられる抉りを持つものが多い。脚は3脚・2脚・無脚がある。本類は吉井町を中心とした地域に多く見られる。

（3）方 形 硯（図3） 県内では資料数の少ない形態である。（81）は硯面三辺に縁が巡り、硯尻に近くに剥落痕が観察されるところから堤をもつ二面硯であろう。無脚である。（80）は裏面の縁辺中央に脚を有するところから、硯頭部になろう。形状から長方硯になる可能性が高い。

（4）その他の硯（図4）　かつて私は転用硯として考えていた硯である。いずれも須恵器甕類の大形破片を転用しているものである。一般に転用硯は坏・高台付椀底部・蓋・瓶底部など破損品と思われる部位を利用しているのが通例であり、その点では同類として扱うべきものであろう。しかし本資料は縁辺全体を丁寧に磨り整えることによって、明らかに目指すべき形状（楕円形・隅丸方形など）を意識していると考えられる。このことから、いわゆる転用硯とは別に分類できるのではないであろうか。類似する硯には猿面硯が知られるが論議が別れている現状では、その可能性に留める。(82) は硯面に昆虫が転写され、転用に際して意図的な趣向があったのではないだろうか。硯に対する時代の要請が反映されているようで興味深い硯類の一群である。

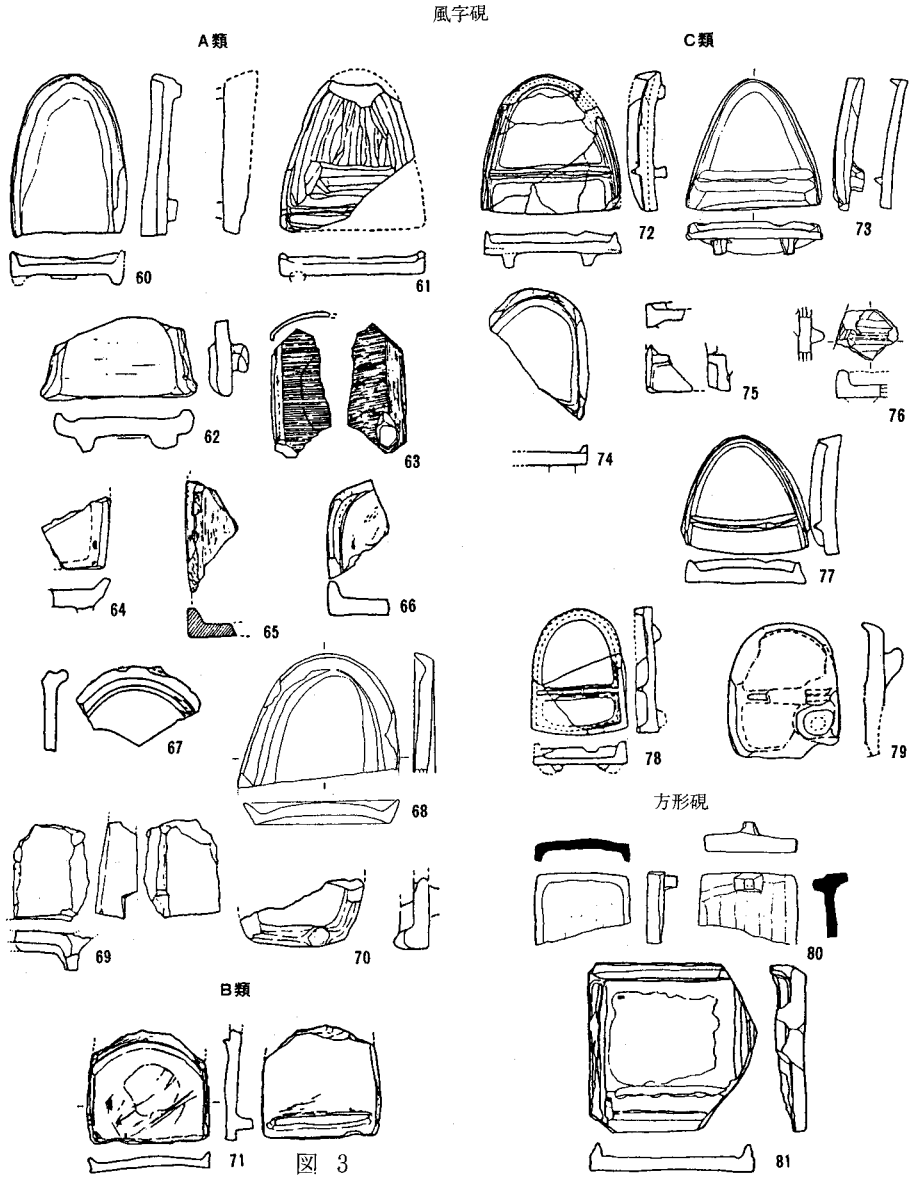


図 3

その他の硯

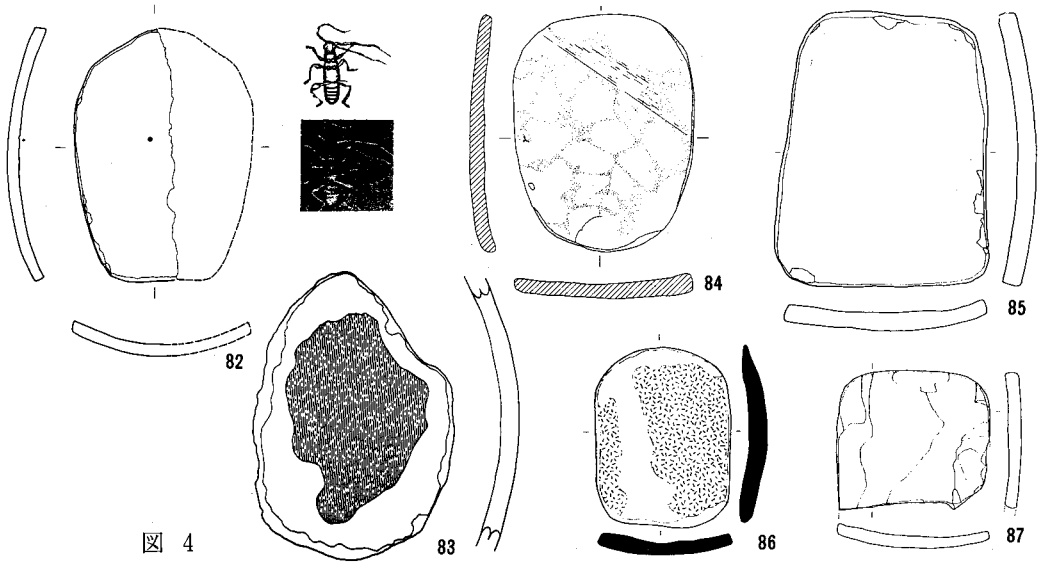


図 4

群馬県陶硯出土遺跡一覧

No.	陶　硯	備　考
70	風字硯	利根郡月夜野町『洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』　財団法人　群埋文　1986
32	円面硯	利根郡月夜野町『洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』　財団法人　群埋文　1986
13	円面硯	沼田市『大釜遺跡・金山古墳群』　財団法人　群埋文　1983
25・27・36・49～53	円面硯	利根郡月夜野町『後田遺跡』　財団法人　群埋文　1988
75	風字硯	渋川市『有馬条里遺跡－沖田地区－』　渋川市教委　1983
44	円面硯・風字硯	渋川市『半田中原・南原遺跡』　渋川市教委　1994
68	風字硯	榛東村『別分八幡下遺跡・申府神田遺跡』　榛東村教委　1987
1・40・45	円面硯	群馬町『保渡田東遺跡』　群馬町教委　1986
42・86	円面硯	群馬町『堤上遺跡』　群馬町教委　1994
35	円面硯	群馬町『西三社面遺跡』　群馬町教委　1990
80	方形硯	群馬町『西国分Ⅱ遺跡』　群馬町教委　1990
65・84	風字硯・その他	吉岡町（村）『大久保Ｂ遺跡』　吉岡村教委　1986
32・62・63	円面硯・風字硯	前橋市『中島遺跡発掘調査概報』　前橋市教委　1981
6	円面硯	前橋市『元総社明神遺跡Ⅴ』　前橋市教委　1986
21・22・23・48・61	円面硯・風字硯	前橋市『下東西遺跡』　財団法人　群埋文　1986
	円面硯	前橋市・群馬町『史跡上野国分寺跡発掘調査概要２』　群馬県教委　1981
15・16・43・55	円面硯	前橋市・群馬町『上野国分僧寺・尼寺中間地域』　財団法人　群埋文　1991・1992
7・8・59	円面硯	前橋市・群馬町　推定上野国府周辺
66・67	風字硯	前橋市『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』　前橋市教委　1980
2・3・14・34・56・57・60・64・69・74・85・87	円面硯・風字硯・その他	前橋市『鳥羽遺跡』　財団法人　群埋文　1986・1988・1990・1992
82	その他	高崎市『中尾遺跡』　財団法人　群埋文　1984
58	円面硯	高崎市『日高遺跡』　財団法人　群埋文　1982
46	円面硯	高崎市『熊野堂遺跡』　財団法人　群埋文　1984
81	方形硯	前橋市『荒砥上川久保遺跡』　財団法人　群埋文　1982
189	円面硯	前橋市『芳賀東部団地遺跡Ⅱ』　前橋市教委　1988
71	風字硯	伊勢崎市『上植木光仙坊遺跡』　財団法人　群埋文　1988
24・29・31	円面硯	伊勢崎市『書上上之城遺跡』　財団法人　群埋文　1988
38	円面硯	境町『明神遺跡発掘調査報告書』　境町教委　1975
39	円面硯	富岡市『本宿・郷本遺跡』　富岡市教委　1981
11	円面硯	富岡市『上田篠古墳群・原田篠遺跡発掘調査報告書』　富岡市教委　1984
79	風字硯	吉井町『川内遺跡』　吉井町教委　1982
72・77・98	風字硯	吉井町『下五反田窯跡』　国士館大学考古学研究室　1986
29	円面硯	吉井町『長根羽田倉遺跡』　財団法人　群埋文　1990
10	円面硯	吉井町『多胡蛇黒遺跡』　財団法人　群埋文　1993
83	その他	吉井町『黒熊中西遺跡』　財団法人　群埋文　1994
73	風字硯	吉井町『黒能八幡遺跡』　平成六年度事業概要　財団法人　群埋文
47	円面硯	藤岡市『株木遺跡』　藤岡市教委　1984
12	円面硯	尾島町『小角田下遺跡』　尾島町教委　1988
4・5・20・54	円面硯	前橋市　本報告掲載資料

参 考 文 献

『日本の陶硯』五島美術館　1978

楢崎彰一「日本古代の陶硯　— とくに分類について —」
『考古学論考小林行雄博士古稀記念・論文集』　1981

「陶硯関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース41』奈良国立文化財研究所　1983

石井則孝「陶硯」『考古学ライブラリー42』ニューサイエンス社　1985

Tab. 3　土器観察表（古墳時代～中世）

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	Fig
1	H－189	土師坏	12.4	4.0	①細粒②良好③にぶい橙④完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	口縁～胴部にかけてわずかにススが付着部分有り。	46
2	H－189	須恵坏	13.4	4.2	①細粒②良好③明オリーブ灰④3/4	外傾。轆轤。	完形回転糸切り未調整。		46
3	H－190	カワラケ	10.6	3.6	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	外傾。轆轤。	完形回転糸切り未調整。	口縁～胴部にかけてススが付着部分有り。	46
4	H－190	須恵高台椀	12.8	5.7	①中粒②良好③にぶい黄橙④完形	外傾。轆轤。	完形回転篦調整。	高台後付け。底部肥厚。	46
5	H－192	須恵坏	14.7	4.8	①細粒②良好③灰白④1/2	端部外反。轆轤。	完形回転糸切り後篦調整。		46
6	H－193	土師坏	(14.4)	7.2	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	内斜口縁。横撫で。篦削り。	篦削り。	内面に放射状暗文。	46
7	H－194	土師甕	21.6	(9.5)	①中粒②良好③浅黄橙④1/6	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部に最大径。輪積み痕。金雲母。	46
8	H－195	須恵高台椀	14.0	6.8	①中粒②良好③灰オリーブ④1/2	外傾。轆轤。	完形回転糸切り後篦調整。		46
9	H－195	土師台付甕	14.0	(19.5)	①細粒②良好③にぶい橙④4/5	外反。横撫で。篦削り。	脚部撫で調整。	口縁部指頭痕有り。	46
10	H－196	土師小甕	12.6	14.4	①中粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。	底部肥厚。	46
11	H－203	土師小甕	13.2	10.2	①細粒②良好③にぶい黄橙④3/4	外傾。横撫で。篦削り。	偏平な高台残る。	口縁部最大径。	46
12	H－203	土師甕	(14.2)	24.0	①細粒②良好③にぶい黄橙④2/3	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。	胴部最大径。	46
13	H－203	土師甕	16.4	30.5	①中粒②良好③にぶい黄橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	胴部最大径。	46
14	H－203	土師甕	14.4	(13.0)	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。	胴部に輪積み痕。	47
15	H－203	土師坏	13.6	(6.5)	①細粒②良好③橙④2/3	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。	内面に放射状暗文。	47
16	H－206	土師坏	13.6	(4.5)	①細粒②良好③橙④2/3	内斜口縁。横撫で。篦削り。	篦削り。	内面に放射状暗文。	47
17	H－206	土師小甕	11.0	10.5	①細粒②良好③にぶい橙④完形	端部外反。不定方向篦磨き。	篦磨き。	底部肥厚。	47
18	H－206	土師甕	24.0	(24.0)	①中粒②不良③にぶい橙④1/4	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部最大径。	47
19	H－207	土師坏	13.2	3.6	①細粒②良好③橙④4/5	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		47
20	H－207	土師坏	12.6	3.6	①細粒②良好③橙④2/3	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。	外面胴部から底部にかけてわずかに段差有り。	47
21	H－207	土師坏	13.2	5.2	①細粒②極良③橙④ほぼ完形	内斜口縁。横撫で。篦削り。	篦削り。内面に放射状暗文。	口唇部角頭状。	47
22	H－210	土師坏	(11.2)	3.0	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		47
23	H－210	土師坏	12.6	5.3	①粗粒②良好③橙④3/4	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。	するどい稜。	47
24	H－210	須恵高台椀	16.4	6.0	①細粒②良好③青灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。		47
25	H－211	土師甕	(18.6)	(18.5)	①細粒②良好③橙④1/8	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部に最大径。	47
26	H－212	土師坏	12.8	4.9	①細粒②良好③橙④3/4	内斜口縁。横撫で。篦削り。	篦削り。	放射状暗文。	47
27	H－212	土師坏	12.2	5.4	①細粒②良好③橙④2/3	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。	外稜。	47
28	H－213	土師坏	12.2	5.5	①細粒②良好③にぶい橙④完形	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。	内面に放射状暗文。	47
29	H－213	土師坏	13.6	5.1	①細粒②良好③明赤褐④ほぼ完形	内斜口縁。横撫で。篦削り。	篦削り。	内面に放射状暗文。	47
30	H－213	土師高坏	14.0	9.5	①細粒②極良③橙④ほぼ完形	内斜口縁。横撫で。篦削り。	横撫で。	脚部に暗紋。	47
31	H－214	須恵耳皿	(9.8)	2.6	①細粒②良好③明青灰④1/2	両側が極度に湾曲。	回転糸切り未調整。湾曲部先端に指頭痕。		47
32	H－214	須恵高台椀	12.0	5.0	①細粒②良好③明緑灰④完形	外傾。轆轤	糸切り後撫で調整。高台後付け。		48
33	H－214	須恵羽釜	(19.8)	24.5	①細粒②良好③浅黄④1/3	内傾。轆轤。	欠損。	水平の鍔。鍔部に最大径。	47
34	H－215	土師甕	(15.8)	(17.5)	①中粒②良好③にぶい赤褐④1/4	外反。横撫で。篦削り。	欠損。	胴部に最大径。	48
35	H－218	須恵高台椀	(14.8)	5.5	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。	高台後付け。	48
36	H－218	須恵坏	13.0	3.9	①細粒②良好③灰④1/3	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		48
37	H－218	須恵坏	(13.8)	3.4	①細粒②良好③明オリーブ灰④2/3	端部外反。轆轤。	回転糸切り未調整。		48
38	H－218	須恵高台椀	(20.2)	4.1	①細粒②良好③明緑灰④1/3	外傾。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。	高台後付け。内面釉薬ハケ塗り。	48
39	H－219	須恵坏	(12.4)	3.9	①細粒②良好③緑灰④1/4	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		48
40	H－220	須恵坏	(13.0)	3.1	①細粒②良好③オリーブ灰④1/4	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		48
41	H－220	須恵甕	－	(2.1)	①細粒②良好③明オリーブ灰④底部のみ	欠損。	欠損。	底部に文字「鉋」か。	48
42	H－221	須恵高台皿	13.8	2.7	①細粒②極良③橙④1/2	外傾。轆轤。	回転篦削り。高台後付け。内面黒色処理。		48
43	H－221	須恵坏	(12.4)	3.8	①粗粒②不良③明青灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		48
44	H－221	土師坏	12.4	3.2	①細粒②良好③橙④3/4	湾曲。横撫で。篦削り。	篦削り。	外面胴部に指頭痕。	48
45	H－221	土師坏	11.6	3.7	①細粒②良好③橙④2/3	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	口縁部にススが付着。	48
46	H－221	土師坏	12.4	3.7	①細粒②良好③明赤褐④完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	底部に偏平な台付き。	48
47	H－222	土師坏	12.6	3.4	①細粒②良好③にぶい橙④3/4	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。	口縁部にススが付着部分有り。	49
48	H－222	須恵坏	13.2	2.9	①細粒②良好③灰白④3/4	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。底部に歪み。		49
49	H－223	土師坏	13.0	3.5	①細粒②良好③橙④2/3	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		49
50	H－223	土師坏	13.0	3.6	①中粒②良好③にぶい橙④3/4	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		49
51	H－223	土師坏	13.0	3.3	①細粒②良好③橙④2/3	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		49
52	H－223	土師坏	12.6	3.6	①細粒②良好③にぶい橙④3/4	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		49
53	H－223	土師坏	14.4	4.6	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。内面に墨付着部分有り。		49
54	H－223	土師坏	(13.6)	4.1	①細粒②良好③浅黄④2/3	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		49
55	H－223	土師坏	15.0	4.7	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	大型の坏。	49
56	H－224	土師坏	11.4	(3.5)	①細粒②良好③橙④3/4	内傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		49

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	Fig
57	H－224	土師甕	22.0	(9.5)	①粗粒②不良③にぶい黄橙④1/3	外傾。撫で。篦削り。	欠損。	口縁部に最大径。	49
58	H－226	須恵高台椀	14.8	5.1	①細粒②良好③緑灰④2/3	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。		49
59	H－226	土師甕	14.0	12.5	①細粒②極良③にぶい赤褐④1/2	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。底部に輪積み痕。		49
60	H－226	須恵高台椀	(15.6)	(6.1)	①細粒②良好③緑灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。		49
61	H－226	灰釉高台椀	(19.6)	5.8	①細粒②極良③明オリーブ灰④1/3	外反。轆轤。	回転糸切り後篦調整。高台後付け。釉薬浸し付け。		49
62	H－226	須恵円面硯	(20.0)	(4.5)	①細粒②良好③青灰④1/8	硯面がわずかに残存。	復元すると硯面径が20cmの大型品。		49
63	H－226	須恵高台椀	13.2	3.2	①細粒②良好③明オリーブ④3/4	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。		50
64	H－226	須恵高台皿	(14.4)	2.7	①細粒②良好③灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り後篦調整。高台後付け		50
65	H－227	土師壺	(13.8)	(14.0)	①細粒②良好③橙④1/3	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。	胴部に最大径。口縁部指頭痕。	50
66	H－228	須恵高台椀	13.8	5.1	①細粒②良好③赤橙④ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。		50
67	H－228	灰釉高台椀	(16.0)	5.0	①細粒②極良③明オリーブ灰④1/3	内湾。轆轤。	回転篦調整。	高台後付け。釉薬浸し付け。	50
68	H－229	土師坏	11.8	3.1	①細粒②良好③橙④2/3	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。		50
69	H－229	土師坏	12.0	3.2	①細粒②良好③橙④2/3	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。	口縁部にスス付着部分。	50
70	H－229	土師坏	11.6	3.4	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		50
71	H－229	須恵坏	13.6	3.3	①細粒②極良③青灰④2/3	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		50
72	H－229	須恵坏	13.2	3.6	①細粒②良好③灰④ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		50
73	H－231	須恵高台椀	13.6	6.1	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/2	外反。轆轤。	回転糸切り後篦調整。高台後付け。		50
74	H－232	須恵坏	(14.0)	5.1	①粗粒②不良③にぶい黄橙④1/2	外反。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。		50
75	H－233	須恵盤	(27.6)	3.3	①細粒②良好③灰白④1/5	直立。轆轤	欠損。		50
76	H－234	土師坏	(10.6)	3.9	①中粒②良好③橙④1/4	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		50
77	H－235	須恵高台椀	15.5	6.3	①細粒②極良③明オリーブ④4/5	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。		50
78	H－235	須恵高台椀	17.3	5.6	①細粒②極良③灰④5/6	外傾。轆轤。	回転篦調整。		50
79	H－236	土師坏	10.4	3.6	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		51
80	H－236	土師甕	23.0	(30.5)	①中粒②良好③橙④2/3	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。	胴部に輪積み痕。口縁部最大径。	51
81	H－237	須恵坏	(12.4)	3.6	①細粒②良好③青灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	内面底部に十字の線刻。	51
82	H－237	須恵坏	13.0	3.7	①細粒②良好③にぶい黄褐④ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り撫で調整		51
83	H－237	須恵円面硯	16.8	(2.9)	①細粒②極良③灰白④1/2	陸部周辺に断面三角形の内堤。陸部は摩滅度が高い。脚部４方向に透かし。			51
84	H－237	須恵蓋	12.0	(3.3)	①細粒②良好③明青灰④ほぼ完形	轆轤。回転篦調整。宝珠つまみ欠損。口唇部に返し。			51
85	H－237	須恵坏	12.6	3.3	①細粒②極良③明オリーブ灰④完形	外反。轆轤。	回転糸切り未調整。		51
86	H－238	須恵蓋	15.5	3.1	①細粒②極良③緑灰④完形	轆轤。回転篦調整。偏平な円形つまみ。口唇部に返し。			51
87	H－238	須恵蓋	15.6	3.6	①細粒②良好③明緑灰④2/3	轆轤。回転篦調整。偏平な円形つまみ。口唇部に返し。			51
88	H－238	須恵坏	13.8	4.1	①細粒②良好③オリーブ灰④1/2	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		51
89	H－238	土師坏	13.2	3.7	①細粒②良好③橙④3/4	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		51
90	H－239	土師坏	12.4	5.7	①細粒②良好③灰黄④ほぼ完形	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。	緩やかな外稜を持つ。底部肥厚。	51
91	H－239	土師小鉢	7.8	4.9	①細粒②良好③淡黄④1/2	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。	ゆるやかな稜。	51
92	H－239	土師甕	(18.0)	15.4	①粗粒②不良③淡黄④1/4	外反。横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部に最大径。	51
93	H－241	土師坏	15.4	4.0	①細粒②良好③橙④3/4	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		52
94	H－241	須恵坏	11.4	3.4	①細粒②極良③青灰④ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り後篦調整。		52
95	H－241	須恵坏	(13.6)	3.2	①細粒②良好③明青灰④1/3	外傾。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。		52
96	H－242	須恵坏	12.8	3.1	①細粒②良好③明オリーブ灰④2/3	外反。轆轤。	回転糸切り未調整。		52
97	H－242	須恵円面硯	－	－	①細粒②良好③にぶい褐④不明	台脚部の一部のみ残存。	縦線刻あり。		52
98	H－242	土師台付甕	(11.8)	16.3	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	端部外反。横撫で。篦削り。	篦削り。	胴部に最大径。	52
99	H－243	土師坏	13.4	4.3	①細粒②良好③橙④2/3	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		52
100	H－243	土師坏	13.5	4.1	①細粒②良好③橙④1/2	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。		52
101	H－243	土師坏	18.4	3.9	①細粒②良好③橙④完形	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。	大型の坏。	52
102	H－243	須恵長頸壺	－	(12.3)	①細粒②極良③明オリーブ④2/3	轆轤。頸部欠損。	回転篦調整。胴部に最大径。高台後付け。内面に青海波状文。		52
103	H－243	須恵長頸壺	－	(21.0)	①細粒②良好③灰白④4/5	直立。轆轤	肩部分に３本の沈線。胴部に最大径。		52
104	H－245	手捏ね	10.0	6.4	①細粒②良好③にぶい黄橙④2/3	内傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	底部肥厚。	52
105	H－245	土師壺	10.6	(8.0)	①中粒②良好③黄橙④1/2	直立。横撫で。篦削り。	欠損。		52
106	H－246	土師坏	11.6	3.9	①細粒②良好③橙④2/3	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。		52
107	H－246	土師坏	12.0	4.7	①中粒②良好③淡黄④完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	ゆるやかな稜。	52
108	H－246	須恵脚部	－	(7.0)	①細粒②良好③緑灰④1/8	欠損。脚部一部のみ残存。二段にわたって大小三角の透かし孔。			52
109	H－246	須恵脚部	－	(8.8)	①細粒②良好③明緑灰④1/4	欠損。	脚部の一部のみ残存		52
110	H－246	土師坏	14.6	5.7	①細粒②良好③橙④1/2	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		52
111	H－246	須恵坏	9.4	2.7	①細粒②良好③青灰④4/5	外傾。轆轤。	回転篦調整。		53
112	H－246	土師坏	12.0	3.5	①細粒②良好③橙④完形	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		53
113	H－246	土師甕	17.8	(28.0)	①中粒②良好③にぶい褐④2/3	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部に最大径。	53
114	H－246	土師甕	22.0	36.0	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	口縁部に最大径。	53

番号	出土位置	器形	大きさ 口径	大きさ 器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形方法 口縁・胴部	成・整形方法 底部	備考	Fig
115	H－248	土師坏	12.0	3.9	①細粒②良好③橙④3/4	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		53
116	H－248	土師坏	13.3	3.7	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		53
117	H－248	土師坏	13.8	4.2	①細粒②良好③浅黄橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。		53
118	H－248	土師坏	14.0	4.4	①細粒②良好③橙④完形	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。		53
119	H－248	土師壺	(15.0)	15.3	①細粒②良好③橙④1/2	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	胴部に最大径。	53
120	H－248	須恵円面硯	－	(3.6)	①細粒②良好③オリーブ黒④不明	台脚部の一部のみ残存。	縦線刻あり。		53
121	H－248	須恵坏	12.2	4.2	①細粒②良好③緑灰④完形	端部外反。轆轤。	回転糸切り未調整。		53
122	H－249	土師坏	(13.8)	(4.6)	①中粒②良好③浅黄橙④1/3	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。	ゆるやかな稜。	53
123	H－250	土師甕	13.8	(16.7)	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	外傾。横撫で。篦削り。	欠損。	胴部に最大径。	53
124	H－252	土師坏	11.8	5.0	①細粒②良好③橙④1/2	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。	外稜。	53
125	H－255	土師坏	12.1	4.3	①中粒②良好③浅黄橙④3/4	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	ゆるやかな稜。	53
126	H－255	土師坏	(13.2)	4.1	①細粒②良好③橙④1/3	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。	外稜。	53
127	H－255	土師甕	－	(35.0)	①粗粒②不良③明赤褐④1/2	欠損。撫で。篦削り。	篦削り。	口縁部に最大径。	54
128	H－255	土師小壺	11.0	7.9	①細粒②良好③淡黄④5/6	内傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	底部肥厚。内面篦磨き黒色処理。	54
129	H－245	須恵提瓶	－	(13.0)	①細粒②良好③オリーブ灰④1/4	欠損。	渦巻き状の櫛描文。		54
130	H－255	土師甕	(20.8)	(35.0)	①中粒②良好③にぶい橙④2/3	外反。横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部に最大径。	54
131	H－257	土師坏	11.0	3.6	①細粒②良好③黄橙④ほぼ完形	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		54
132	H－258	土師坏	10.4	3.6	①細粒②良好③黄橙④完形	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		54
133	H－258	土師坏	13.2	4.0	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		54
134	H－259	須恵大甕	45.0	(43.3)	①細粒②良好③灰④1/3	外反。轆轤	欠損。	内面に青海波文。	54
135	H－260	須恵蓋	14.8	(4.1)	①細粒②良好③灰赤④4/5	轆轤。回転撫で調整。つまみ部欠損。口縁部に返し。			54
136	H－260	土師小甕	13.8	14.5	①細粒②良好③浅黄橙④1/2	外反。横撫で。篦削り。	篦削り。		54
137	H－262	須恵皿	(26.8)	2.7	①中粒②良好③明オリーブ灰④1/5	外傾。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。		54
138	H－263	須恵高坏	(16.2)	(18.0)	①細粒②極良③緑灰④1/3	直立。轆轤。	脚部3方向に透かし孔。		56
139	H－264	須恵長頸壺	－	(11.2)	①細粒②良好③灰白④1/2	轆轤。頸部欠損。	回転篦調整。	内面青海波状文。	55
140	H－268	土師坏	12.6	4.6	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	緩やかな外稜。	55
141	H－268	土師坏	12.0	4.3	①細粒②極良③橙④2/3	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	するどい外稜。	55
142	H－268	土師高坏	11.6	10.6	①細粒②良好③橙④完形	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。脚部3方向に方形の透かし口。脚部外側に暗文。外稜。		55
143	H－268	土師小甕	11.2	(9.7)	①中粒②良好③にぶい黄橙④2/3		欠損。		55
144	H－268	土師小甕	11.4	10.7	①中粒②良好③明赤褐④ほぼ完形	端部外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	底部肥厚。内面に暗文。	55
145	H－269	土師坏	13.0	5.0	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		55
146	H－269	土師坏	12.8	5.4	①細粒②極良③橙④完形	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。	内面放射状暗文。	55
147	H－269	土師小壺	10.8	7.1	①細粒②良好③橙④完形	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。	胴部に最大径。	55
148	H－275	土師坏	12.0	3.6	①細粒②良好③橙④1/2	外傾。横撫で。篦削り。	篦削り。	ゆるやかな稜	55
149	H－275	土師坏	13.4	4.3	①細粒②良好③橙④2/3	内湾。横撫で。篦削り。	篦削り。		55
150	H－276	須恵坏	9.6	3.9	①細粒②良好③明緑灰④3/5	外傾。轆轤。	回転篦調整。		55
151	H－276	須恵高台椀	9.8	4.2	①細粒②良好③灰黄④2/3	外傾。轆轤。	回転篦調整。		55
152	A区表採	須恵坏	11.0	3.3	①細粒②良好③灰白④2/3	外傾。轆轤。	回転篦削り。		55
153	X57Y89	須恵坏	13.4	3.8	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/2	端部外反。轆轤。	回転糸切り未調整。		55
154	X57Y89	須恵高台椀	14.8	5.5	①中粒②不良③灰黄④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り後篦調整。高台後付け。		55
155	X57Y89	須恵高台椀	14.2	5.0	①細粒②良好③緑灰④ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。高台後付け。		55
156	X58Y89	須恵坏	14.4	4.3	①細粒②良好③ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。内面にわずかにスス付着。		55
157	B区表採	須恵蓋	13.1	2.8	①細粒②極良③明緑灰④1/2	轆轤。回転篦削り。偏平化した宝珠つまみ。		口縁部に返し。	56
158	B区表採	須恵坏	12.6	3.8	①細粒②極良③オリーブ灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		56
159	B区表採	須恵小壺	(8.6)	5.8	①細粒②極良③灰白④1/2	直立。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。		56
160	B区表採	須恵坏	(12.4)	4.5	①細粒②良好③灰黄④1/2	外反。轆轤。	回転糸切り未調整。		56
161	B区表採	土師坏	12.8	2.8	①細粒②良好③橙④3/4	直立。横撫で。篦削り。	篦削り。		56
162	B区表採	須恵坏	13.8	4.1	①細粒②良好③明緑灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り後篦調整。		56
163	B区表採	須恵高台椀	(13.8)	7.0	①粗粒②不良③暗緑灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。高台後付け。内外面とも黒色処理。		56
164	B区表採	須恵短頸壺	－	(13.8)	①細粒②良好③明緑灰④1/2	欠損。轆轤。	回転篦削り。	底部肥厚。胴部に最大径。	56
165	B区表採	須恵高台椀	(13.0)	5.4	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。高台後付け。		56
166	B区表採	須恵円面硯	(16.8)	(3.7)	①細粒②良好③灰④1/4	内堤なし。周囲にU字形の溝。割付復元では24個の透かし孔か。			56
167	D－156	須恵長頸壺	－	(5.5)	①細粒②極良③青灰④不明	直立。轆轤。頸部に2段の櫛描斜行文。欠損。			56
168	D－159	須恵坏	(18.8)	12.2	①中粒②良好③明緑灰④1/2	外反。轆轤。	回転糸切り後撫で調整。		56

注）表の記載は以下の基準で行った。

①胎土は、細粒（0.9㎜以下）、中粒（1.0～1.9㎜以下）、粗粒（2.0㎜以上）とした。

②焼成は、極良、良好、不良の三段階。

③色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖（小山・竹原1976)によった。

④大きさの単位はcmであり、現存値を［　］、復元値を（　）で示した。

Tab. 4 臼 玉 観 察 表

番号	出土位置	幅	厚さ	重さ	石材
1	H－196	0.5	0.3	0.1	滑石
2	H－196	0.5	0.3	0.1	滑石
3	H－255	(1.2)	0.4	1.4	滑石
4	H－242	0.6	0.5	0.2	滑石
5	H－224	1.2	0.4	1.2	滑石
6	H－252	0.7	0.4	0.4	滑石
7	H－238	1.0	0.4	0.7	滑石
8	H－249	1.5	0.5	1.8	滑石
9	H－250	1.2	(0.8)	1.4	滑石
10	H－252	0.7	0.5	0.4	滑石
11	H－247	1.0	0.9	1.9	滑石
12	H－236	0.7	0.3	0.2	滑石
13	H－252	0.7	0.2	0.2	滑石
14	H－252	0.7	0.5	0.4	滑石
15	H－252	0.7	0.5	0.5	滑石
16	H－208	0.6	0.3	0.2	滑石
17	H－255	1.2	0.2	0.6	頁岩
18	H－252	0.6	0.4	0.4	滑石
19	H－207	0.5	0.4	0.2	滑石
20	H－196	0.5	0.2	0.1	滑石
21	H－196	0.5	(0.1)	0.05	滑石
22	H－212	(1.2)	0.4	0.6	頁岩
23	H－213	1.4	0.3	0.8	頁岩
24	H－237	0.5	0.5	0.2	滑石
25	H－239	0.5	0.4	0.2	滑石
26	B区表採	(1.1)	(0.3)	0.6	滑石
27	H－246	(1.0)	(0.3)	0.3	滑石
28	H－276	1.2	0.7	1.8	滑石
29	H－276	0.6	0.3	0.2	滑石
30	X56Y89	0.5	0.3	0.1	滑石
31	X56Y89	0.5	0.3	0.1	滑石
32	A区表採	1.4	1.0	3.3	滑石
33	B区表採	1.0	0.3	0.3	滑石

注）表の記載で、幅と厚さの単位はcm、重さはgであり、複元値は（　）示した。

Tab. 5 石製模造品観察表

番号	出土位置	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	備考
1	H－208	有孔板	3.9	2.8	0.6	10.0	滑石	双孔。表面に弱い磨き。
2	H－235	勾玉	2.7	1.7	0.5	4.5	滑石	穿孔あり。表裏両面に斜方向の磨き。下端部欠損。
3	H－236	有孔板	4.5	3.5	0.6	13.5	滑石	双孔。表裏両面に弱い磨き。剣形品か。
4	H－248	剣形品	5.3	2.5	0.4	9.0	滑石	双孔。表裏両面に斜方向の磨き。
5	A区表採	勾玉	1.1	1.6	0.3	0.5	頁岩	穿孔あり。小型の勾玉と思われる。上端・下端部欠損。
6	D－138	剣形品	2.6	2.1	0.4	3.5	滑石	双孔。表面に斜方向の磨き。
7	D－138	剣形品	3.1	2.6	0.4	6.0	滑石	双孔。表裏両面に斜方向の磨き。
8	D－138	剣形品	3.8	2.7	0.4	9.0	滑石	双孔。表裏両面に斜方向の磨き。
9	D－138	剣形品	3.2	2.1	0.3	4.0	滑石	双孔。表裏両面に弱い磨き。
10	D－138	剣形品	3.6	2.6	0.3	7.5	滑石	双孔。表裏両面に斜方向の磨き。
11	D－138	剣形品	3.5	2.5	0.4	6.0	滑石	双孔。表裏両面に斜方向の磨き。下端部欠損。

注）表の記載で、大きさと重さについての単位はcmとgである。

Tab. 6 鉄 器 観 察 表

番号	出土位置	器形	長さ	幅	厚さ	残存	備考
1	H－191	釘	12.0	0.8	0.5	完形	先端部欠損。やや偏平化した角釘。
2	H－192	刀子	[8.1]	[1.2]	0.5	2／3	断面逆三角形。先端部欠損。
3	H－192	留金具	4.6	0.4	0.4	完形	フック状の曲がり。
4	H－207	釘	10.5	0.9	0.6	完形	頭部欠損。角釘。
5	H－229	釘	7.3	0.8	0.6	完形	やや偏平化した角釘。
6	H－229	刀子	[5.7]	1.1	0.4	1／2	先端部欠損。断面逆三角形。茎部が細くなる。
7	H－229	釘	[10.9]	1.4	0.8	4／5	先端部、頭部欠損。角釘。
8	H－235	刀子	19.8	1.1	0.4	完形	断面逆三角形。茎部はやや細くなる。
9	H－237	鎌	20.4	4.2	3.5	2／3	柄の装着部に折り返しを有する。木質部付着。
10	H－241	釘	[11.2]	0.9	1.0	完形	頭部欠損。角釘。
11	H－247	刀子	[9.4]	1.3	0.4	2／3	先端部欠損。柄部に木質部付着。
12	H－276	刀子	[7.9]	1.2	0.3	2／3	茎部が細くなる。

注）表の記載で、大きさについての単位はcmであり、現存値は［　］で示した。

Tab. 7　石器・石製品観察表

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	備考
1	H－191	石鏃	[2.3]	1.8	0.4	[1.3]	チャート	凹基無茎鏃。先端部欠損。
2	H－192	石鏃	2.3	[1.6]	0.4	[0.7]	チャート	凹基無茎鏃。基部先端部欠損。
3	H－207	石鏃	2.1	1.7	0.5	1.2	チャート	凹基無茎鏃。
4	H－246	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.9	チャート	凹基無茎鏃。
5	X60Y88	石鏃	2.1	1.8	0.4	1.2	黒色安山岩	凹基無茎鏃。
6	H－207	打製石斧	[6.3]	3.9	2.2	[67]	黒色頁岩	表面に自然面を残す。刃部欠損。両側縁に細かい調整。
7	W－13	打製石斧	[14.4]	8.5	2.5	[300]	輝緑岩	表面に自然面を残す。分銅形か。両側縁から刃部にかけて細かい調整。
8	X57Y88	打製石斧	7.3	4.1	1.2	44	頁岩	表裏面に自然面を残す。
9	H－208	打製石斧	[6.2]	3.6	1.5	[62]	頁岩	両側縁から刃部にかけて細かい調整。
10	H－201	打製石斧	6.4	7.9	1.0	64	頁岩	上端に両側から丁寧な加工がみられる。
11	H－246	打製石斧	9.1	3.8	1.6	61	黒色頁岩	両側縁から刃部にかけて細かい調整。
12	A区表採	打製石斧	10.2	4.2	1.8	85	黒色頁岩	表面に自然面を残す。両側縁に細かい調整。
13	X57Y87	打製石斧	[6.4]	3.9	1.9	[63]	頁岩	刃部欠損。両側縁に細かい調整。
14	X61Y90	打製石斧	11.0	3.9	1.6	76	黒色頁岩	表面上部にに自然面を残す。両側縁に細かい調整。
15	H－248	紡錘車	3.9	4.1	1.6	35	緑色変岩	側面に磨き痕。
16	H－237	紡錘車	4.5	4.5	1.6	51	滑石	表面に意図的な線刻を有する。裏面円孔周囲に3個の錐痕が認められる。
17	H－207	砥石	[8.9]	5.7	4.3	[300]	砥沢石	上部欠損。表面は中央になだらかに傾斜し、著しい使用痕が認められる。
18	X68Y88	砥石	[3.7]	2.5	1.7	[20]	砥沢石	小型で上部に円孔を有する。携帯用として使用か？全ての側面に使用痕が認められる。
19	H－214	砥石	[8.6]	2.7	2.5	[72]	砥沢石	下部側面は著しい使用痕が認められ湾曲する。
20	H－238	砥石	6.6	4.2	2.5	60	角閃石安山岩	二ツ岳軽石を使用。全ての側面に使用痕が認められる。
21	H－226	砥石	[6.3]	4.8	3.1	[95]	砥沢石	上部に円孔を有する。表裏両面に著しい使用痕が認められる。
22	H－198	砥石	9.6	4.1	1.9	115	砂岩	表面に著しい使用痕が認められる。
23	H－207	砥石	[2.2]	2.4	1.9	[10]	砥沢石	下部欠損。円孔を有する。小型な砥石。
24	H－232	砥石	7.0	4.0	3.1	75	角閃石安山岩	二ツ岳軽石を使用。円孔を有する。全ての側面に使用痕が認められる。
25	C区表採	石皿	[19.5]	[16.7]	6.1	[2500]	粗粒輝石安山岩	蜂の巣石。側面上端に加工痕。表面凹部に使用痕。
26	U－1	石棒	[26.0]	13.3	10.8	5000	緑色変岩	有頭石棒。下端欠損。全体にわたり敲打によって丁寧に仕上げられている。

注）表の記載で、大きさと重さについての単位はcm、gであり、現存値は［　］で示した。

Tab. 8　縄文土器観察表

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考
1	A区表採	①中粒②良好③橙④口縁	沈線。縄文RL。	加曽利E3
2	J・－1	①中粒②良好③淡黄④口縁～胴部	沈線。渦巻き状の隆帯。縄文RL。	加曽利E3
3	H－189	①中粒②良好③にぶい橙④口縁	横位沈線と渦巻沈線。縄文RL。	加曽利E3
4	A区表採	①細粒②良好③橙④口縁	口唇部肥厚。沈線。縄文RL。	加曽利E4
5	A区表採	①中粒②良好③橙④胴部	渦巻き状の隆帯。沈線。縄文。	加曽利E3
6	H－207	①中粒②良好③橙④胴部	微隆起。櫛歯条工具による条線文。	加曽利E3～4
7	X58Y89	①中粒②良好③にぶい橙④口縁	隆帯と沈線。縄文。	加曽利E3
8	H－207	①中粒②良好③橙褐④口縁	隆帯と沈線。縄文RL。	加曽利E3
9	H－189	①中粒②良好③にぶい橙④口縁～胴部	曲線隆帯と隆帯。縄文Lの側面圧痕。	加曽利E3
10	A区表採	①細粒②良好③橙④胴部	渦巻状の隆帯。沈線。縄文RL。	加曽利E3
11	A区表採	①中粒②良好③橙④胴部	隆帯。縄文RL。	加曽利E3
12	A区表採	①中粒②良好③橙④口縁	口縁部無文帯。円形刺突痕。	加曽利E4
13	H－189	①中粒②不良③浅黄橙④口縁	幅広の沈線。縄文RL。	加曽利E3
14	A区表採	①中粒②良好③橙④胴部	縦に櫛歯条工具による条線文。	加曽利E3～4
15	X58Y88	①中粒②良好③橙④胴部	縦位沈線。一部に隆帯を認める。	加曽利E3
16	H－199	①中粒②良好③にぶい褐色④胴部	縦位沈線と矢羽状の沈線。	加曽利E3
17	H－194	①中粒②良好③橙④胴部	沈線。	称名寺
18	A区表採	①中粒②良好③明褐④口縁	無文。	称名寺
19	A区表採	①中粒②良好③にぶい橙④胴部	沈線。	加曽利E
20	X58Y87	①中粒②不良③黄橙④口縁～胴部	隆帯と幅広の沈線。上に0段多条縄文RL。	加曽利E3
21	H－189	①中粒②良好③灰褐④胴部	縦位沈線。0段多条縄文LR。	加曽利E3
22	H－200	①中粒②良好③明褐④胴部	沈線。縄文R。	加曽利E3
23	A区表採	①中粒②良好③橙④胴部	縦位沈線。縄文（RL）。	加曽利E3
24	B区表採	①細粒②良好③褐④口縁	沈線。口唇部まで縄文RLで充填。	加曽利E3

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考
25	H－189	①中粒②良好③橙④胴部	沈線。縄文RL。	加曽利E3
26	H－207	①中粒②良好③にぶい橙④胴部	沈線。縄文RL。	加曽利E3
27	H－204	①中粒②不良③橙④胴部	沈線。縄文LR。	称名寺
28	H－198	①中粒②良好③褐④胴部	沈線。円形刺突痕。	加曽利E3～4
29	A区表採	①中粒②良好③黄橙④胴部	沈線。縄文RL。	加曽利E3
30	H－192	①細粒②極良③橙④胴部	縦位平行沈線。0段多条縄文RL。	加曽利E3
31	A区表採	①中粒②良好③明褐④胴部	沈線。縄文LR。	加曽利E3
32	H－213	①細粒②極良③極暗褐④口縁	横位平行沈線。一カ所に突起。隆起上にハケメ。	晩期終末
33	H－213	①細粒②極良③極暗褐④口縁	横位平行沈線。隆起上にハケメ。	晩期終末
34	H－232	①中粒②良好③明赤褐④胴部	縄文RL。半截竹管による沈線。	加曽利E3
35	H－213	①細粒②極良③極暗褐④胴部	横位平行沈線。隆起上にハケメ。	晩期終末
36	H－197	①細粒②良好③にぶい褐④胴部	沈線。縄文LR。	加曽利E4
37	U－1	①中粒②良好③④胴部	沈線。	曽利系

注）表の記載は以下の基準で行った。
①胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒(1.0～1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。
②焼成は、極良・良好・不良の三段階。
③色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳（小山・竹原1976)によった。

Tab. 9 瓦観察表

No.	出土地	瓦の種別	厚さ(cm)	胎土		焼成		成形技法							整形技法					摘要
				素地	夾雑物	焼き上り	色調	粘土版剥取 凹面	粘土版剥取 凸面	作り	桶寄木痕	粘土板合せ目	布の合せ目	叩目	轆轤痕	凹整形	布の擦消 凹面	布の擦消 凸面	側部面取	
1	H－208	玉男	1.8	並	少	硬	灰白	－	－	半截	－	－	－	－	○	－	－	－	－	秋間
2	H－219	女瓦	2.3	並	少	硬	灰	－	－	桶巻	－	－	－	－	○	－	－	－	－	秋間
3	H－221	男瓦	1.2	並	少	硬	暗灰	－	－	半截	－	－	－	－	○	縦撫	－	－	－	秋間
4	H－221	女瓦	1.5	密	少	締	暗灰	－	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	端1	秋間
5	H－226	女瓦	2.2	並	少	硬	灰	○	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	端4	秋間
6	H－235	女瓦	1.7	並	少	並	橙	－	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	端3	秋間
7	H－235	女瓦	1.4	並	少	硬	暗灰	－	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	－	秋間
8	H－275	女瓦	1.9	並	少	軟	白灰	－	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	－	秋間
9	B区表採	女瓦	1.7	並	少	硬	白灰	－	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	端3	秋間
10	B区表採	女瓦	1.7	並	微	並	灰	－	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	2	秋間
11	W－13	女瓦	2.0	並	少	並	灰白	○	－	桶巻	○	Z	－	－	○	－	－	－	1	秋間
12	W－13	女瓦	2.2	粗	少	軟	黄橙	－	－	桶か	○	－	－	－	－	縦撫	－	－	5	秋間
13	C区表採	女瓦	2.1	並	少	硬	灰白	－	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	3	秋間
14	H－245	男瓦	1.3	並	微	締	灰	－	－	半截	－	－	－	－	○	－	－	－	3	乗附秋間
15	H－249	男瓦	1.4	並	微	締	灰	－	－	半截	－	S	－	－	○	－	－	－	端1	乗附秋間
16	H－249	男瓦	1.5	並	少	軟	黄橙	－	－	半か	－	－	－	－	－	－	－	－	－	秋間
17	H－249	男瓦	1.4	並	微	締	灰	－	－	半截	－	S	－	－	○	－	－	－	－	乗附秋間
18	B区表採	女瓦	1.5	並	多	硬	灰	－	－	桶巻	○	－	－	縄単	－	－	－	－	－	秋間
19	W－13	女瓦	2.1	並	多	硬	灰	－	－	桶巻	○	Z	－	－	○	－	－	－	－	秋間
20	C区表採	女瓦	1.5	並	微	硬	灰	－	－	桶巻	－	－	－	－	○	－	－	－	端2	秋間
21	C区表採	女瓦	1.9	並	少	硬	灰	－	－	桶巻	－	－	－	－	○	縦篦撫	－	－	端3	秋間
22	C区表採	男瓦	1.5	並	多	硬	灰	－	－	半截	－	Z	－	－	○	－	－	－	1	秋間
23	W－13	男瓦	1.7	並	少	硬	灰	－	－	半截	－	－	－	－	○	縦撫	－	－	－	秋間
24	W－13	女瓦	1.8	並	少	軟	灰黄	○	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	4	秋間
25	C区表採	女瓦	1.6	並	多	締	灰	○	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	－	秋間
26	H－259	女瓦	2.3	並	微	硬	灰黄	○	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	端3	秋間
27	W－13	女瓦	1.5	並	多	硬	灰	－	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	－	－	－	秋間
28	W－13	男瓦	1.4	密	少	締	灰	○	－	半截	－	Z？	－	－	○	－	－	－	2	秋間
29	W－13	女瓦	2.3	並	微	硬	灰	－	－	桶巻	○	－	－	－	○	－	○	－	4	秋間
30	H－207	玉男	1.3	粗	多	軟	黒灰	○	－	半截	－	Z	○	－	○	縦撫	－	－	2	笠懸
31	B区表採	女瓦	1.9	粗	多	並	灰	－	－	桶巻	○	S	－	－	○	斜撫	－	－	端1	秋間
32	H－258	女瓦	1.9	並	少	硬	灰	－	－	桶巻	○	－	－	－	－	縦撫	○	－	2	秋間

※玉男＝玉縁付男瓦　半截＝半截作りか　縄単＝縄目叩き
※14，15，17は同一個体

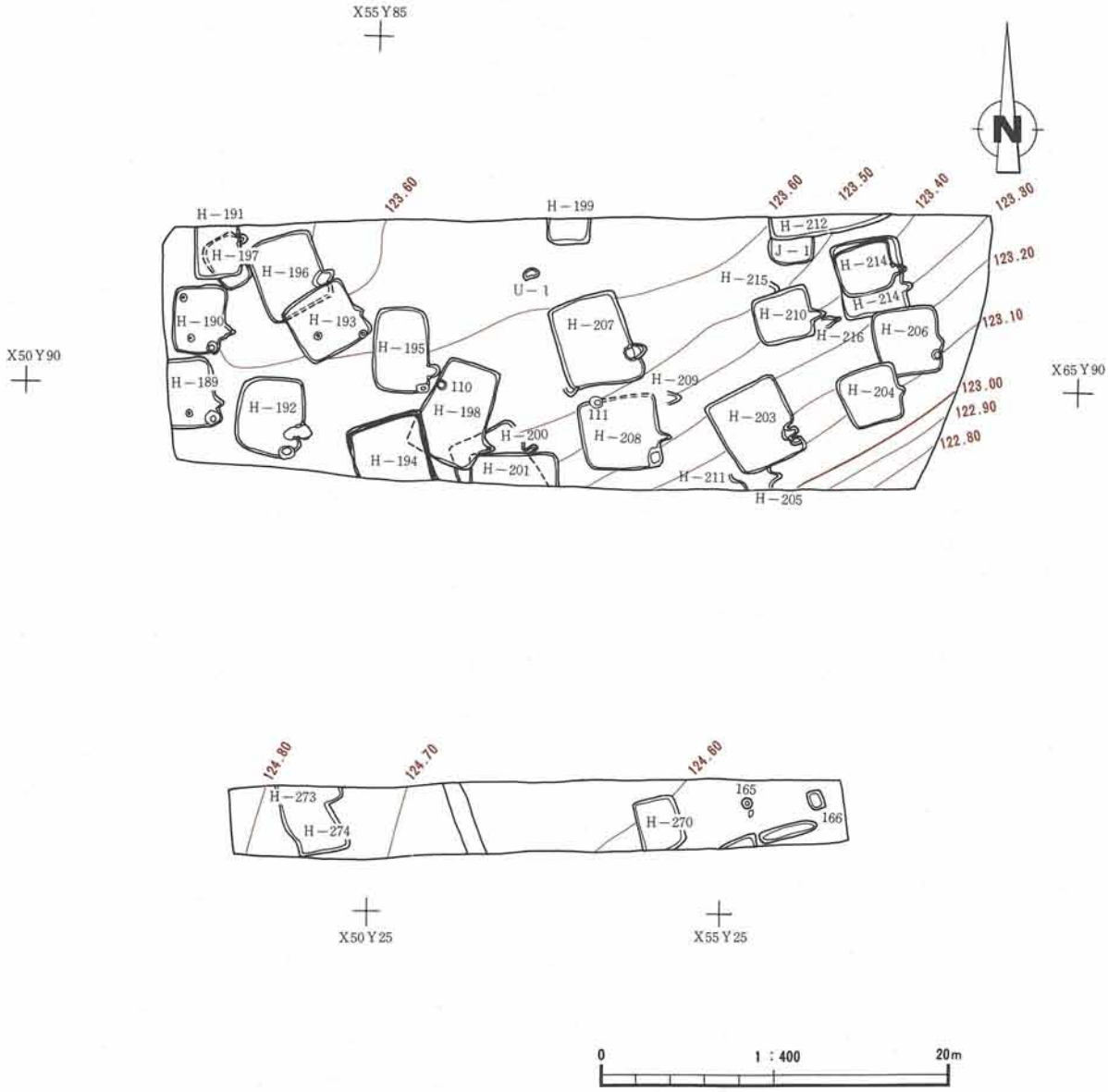


Fig. 10　遺跡・遺構全体図（A・E区）

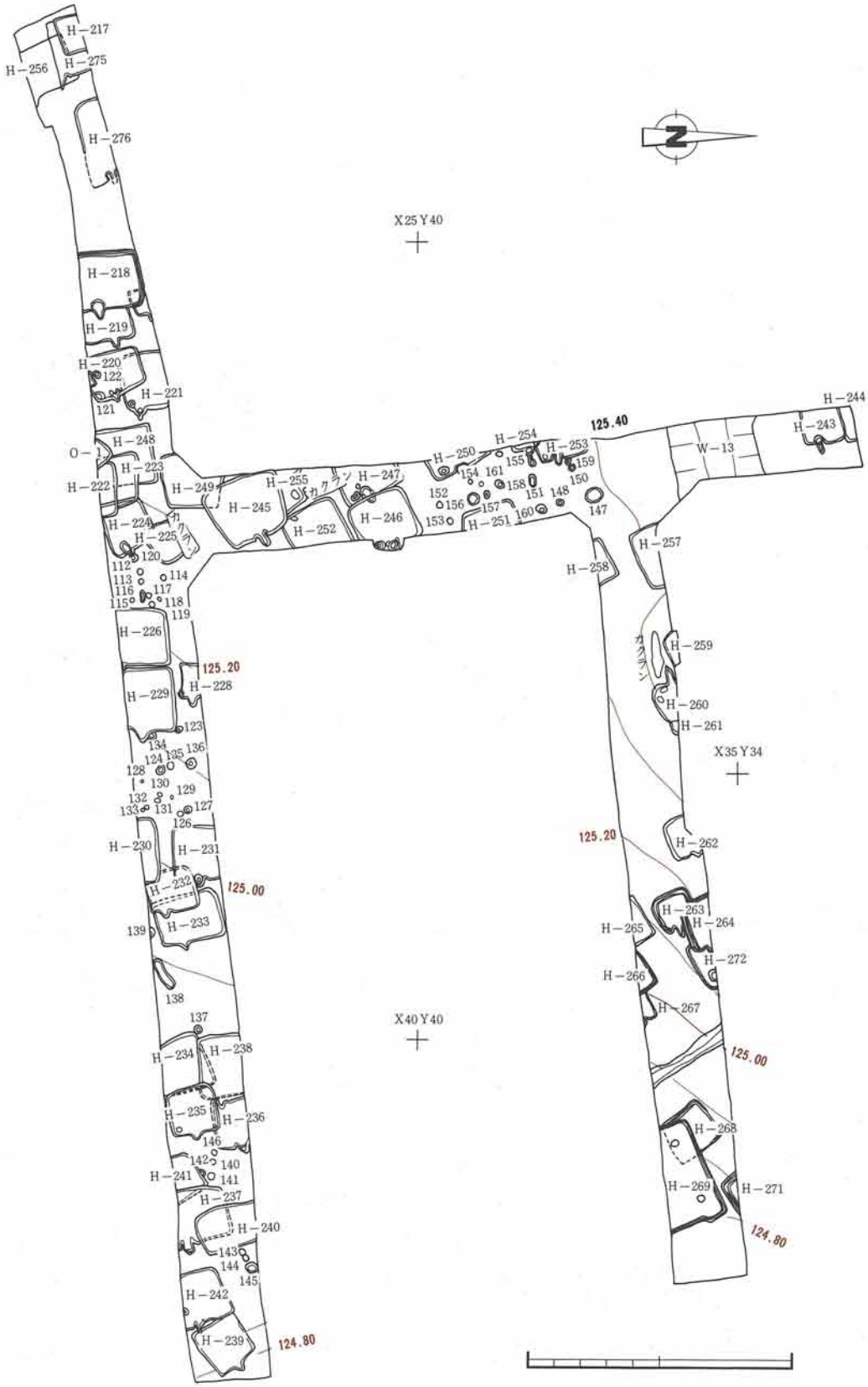
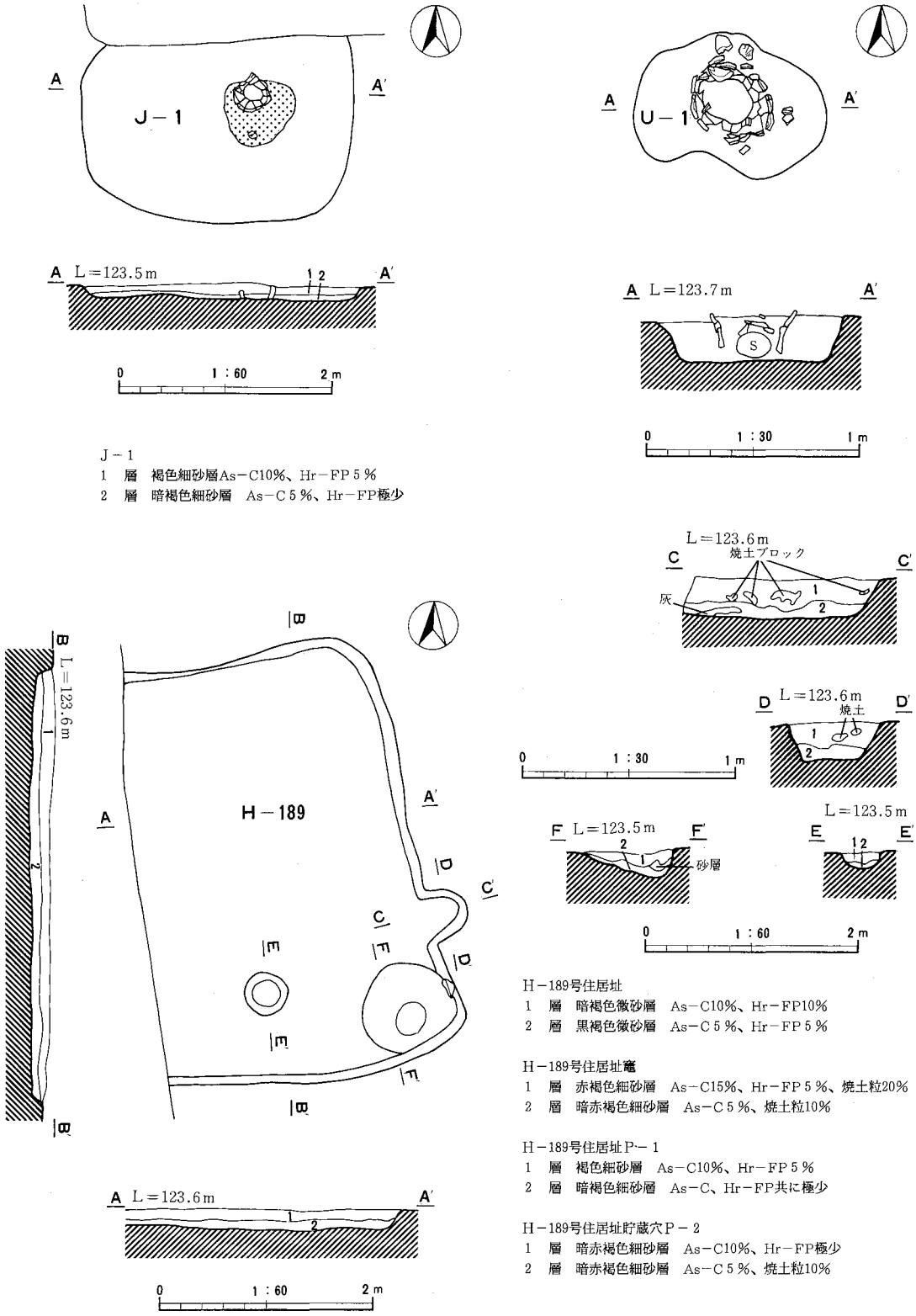


Fig. 11　遺跡・遺構全体図（B・C・D区）



J－1
1　層　褐色細砂層As－C10%、Hr－FP５%
2　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少

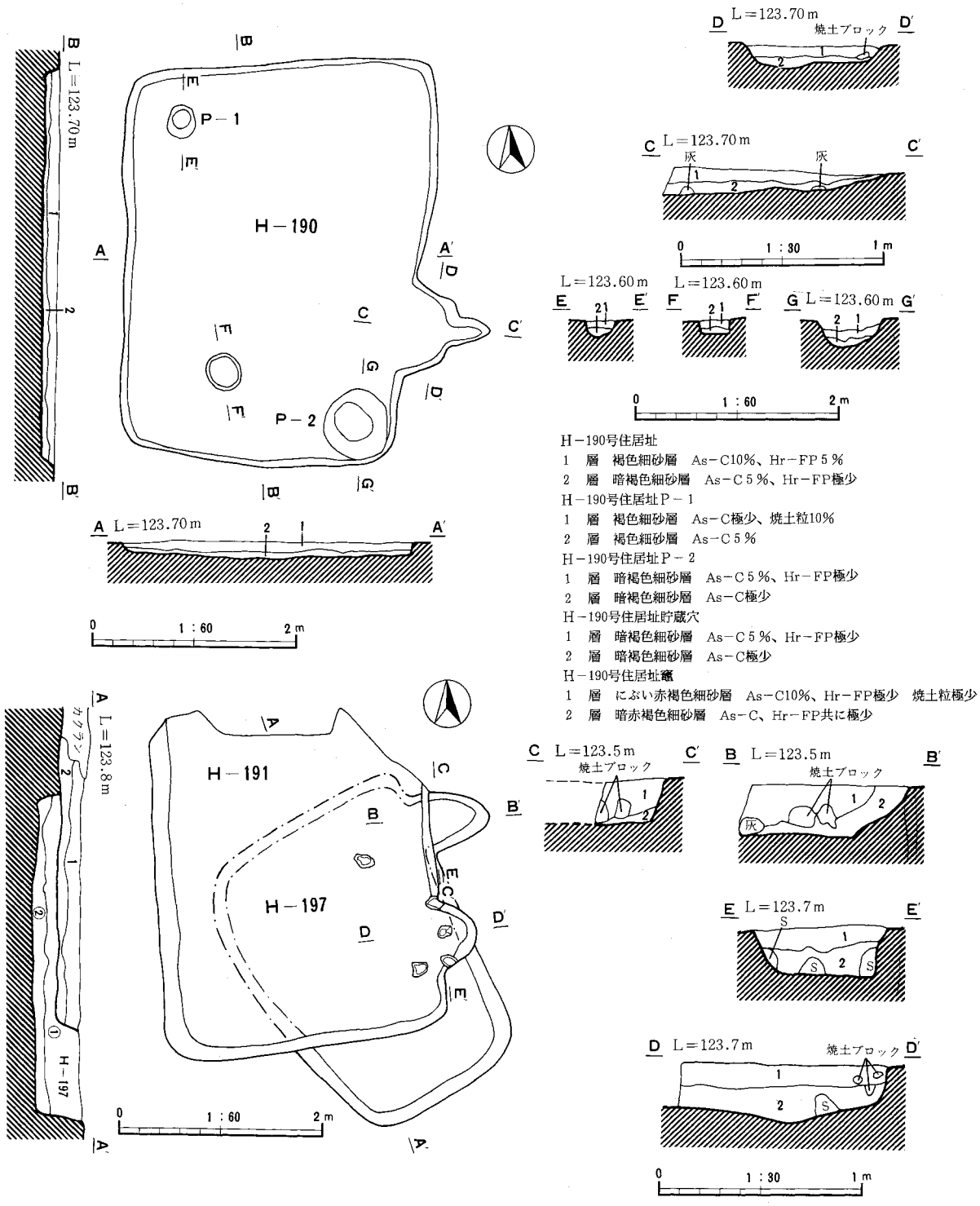
H－189号住居址
1　層　暗褐色微砂層　As－C10%、Hr－FP10%
2　層　黒褐色微砂層　As－C５%、Hr－FP５%

H－189号住居址竈
1　層　赤褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP５%、焼土粒20%
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C５%、焼土粒10%

H－189号住居址P－１
1　層　褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP５%
2　層　暗褐色細砂層　As－C、Hr－FP共に極少

H－189号住居址貯蔵穴P－２
1　層　暗赤褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP極少
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C５%、焼土粒10%

Fig. 12　J－1，U－1，H－189号住居址



H－190号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP５％
2　層　暗褐色細砂層　As－C５％、Hr－FP極少

H－190号住居址Ｐ－１
1　層　褐色細砂層　As－C極少、焼土粒10%
2　層　褐色細砂層　As－C５％

H－190号住居址Ｐ－２
1　層　暗褐色細砂層　As－C５％、Hr－FP極少
2　層　暗褐色細砂層　As－C極少

H－190号住居址貯蔵穴
1　層　暗褐色細砂層　As－C５％、Hr－FP極少
2　層　暗褐色細砂層　As－C極少

H－190号住居址竈
1　層　にぶい赤褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP極少　焼土粒極少
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C、Hr－FP共に極少

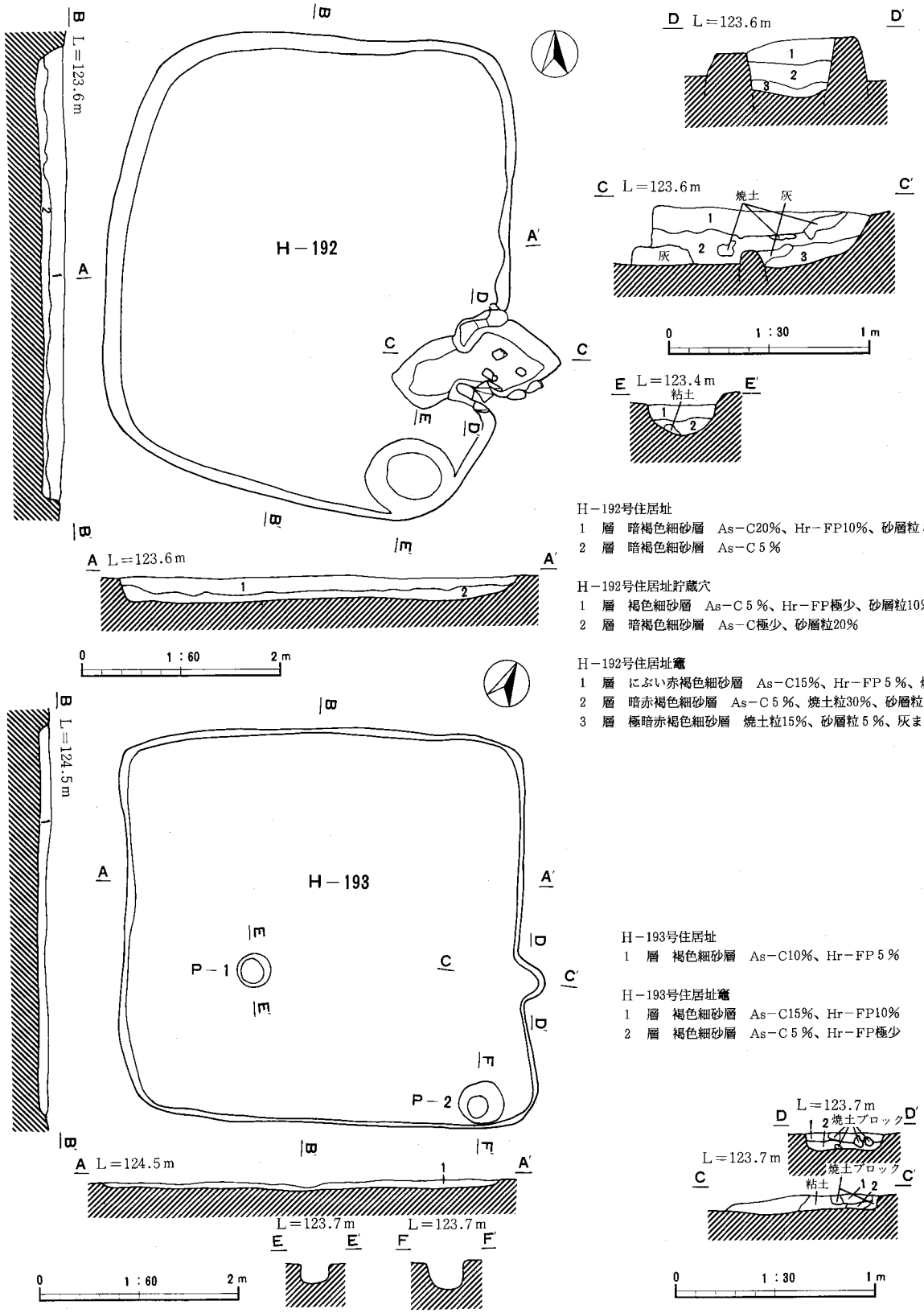
H－191号住居址
1　層　暗褐色細砂層　As－C20%、Hr－FP５％
2　層　暗褐色細砂層　As－C５％、Hr－FP極少

H－197号住居址
1　層　暗褐色細砂層　As－C20%、Hr－FP10%
2　層　暗褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP５％

H－191号住居址竈
1　層　暗褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP15%、焼土粒極少
2　層　黒褐色細砂層　As－C７％、Hr－FP７％

H－197号住居址竈
1　層　赤褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP10%
2　層　明赤褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP５％

Fig. 13　H－190, H－191・197号住居址



H－192号住居址
1 層 暗褐色細砂層 As－C20%、Hr－FP10%、砂層粒５％
2 層 暗褐色細砂層 As－C５％

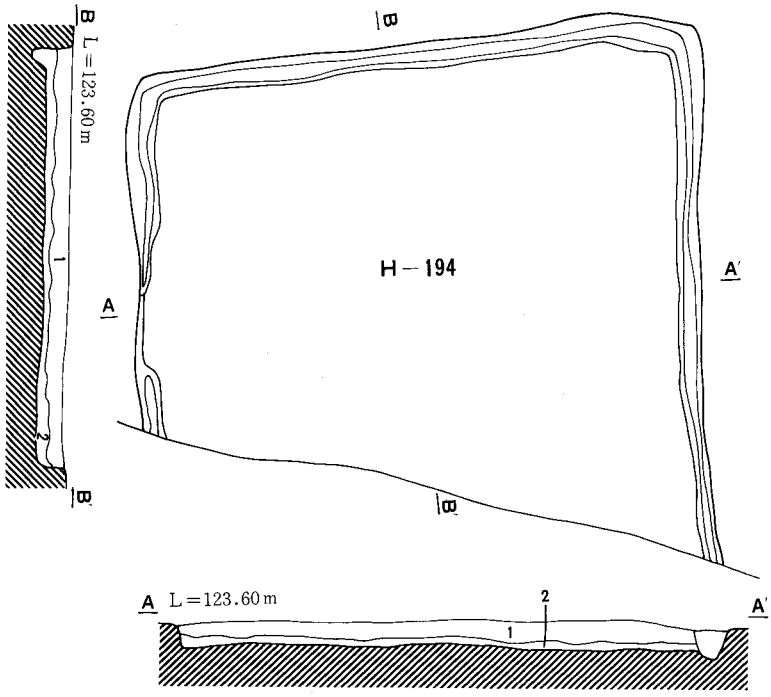
H－192号住居址貯蔵穴
1 層 褐色細砂層 As－C５％、Hr－FP極少、砂層粒10%
2 層 暗褐色細砂層 As－C極少、砂層粒20%

H－192号住居址竈
1 層 にぶい赤褐色細砂層 As－C15%、Hr－FP５％、焼土粒５％
2 層 暗赤褐色細砂層 As－C５％、焼土粒30%、砂層粒10%
3 層 極暗赤褐色細砂層 焼土粒15%、砂層粒５％、灰まじり

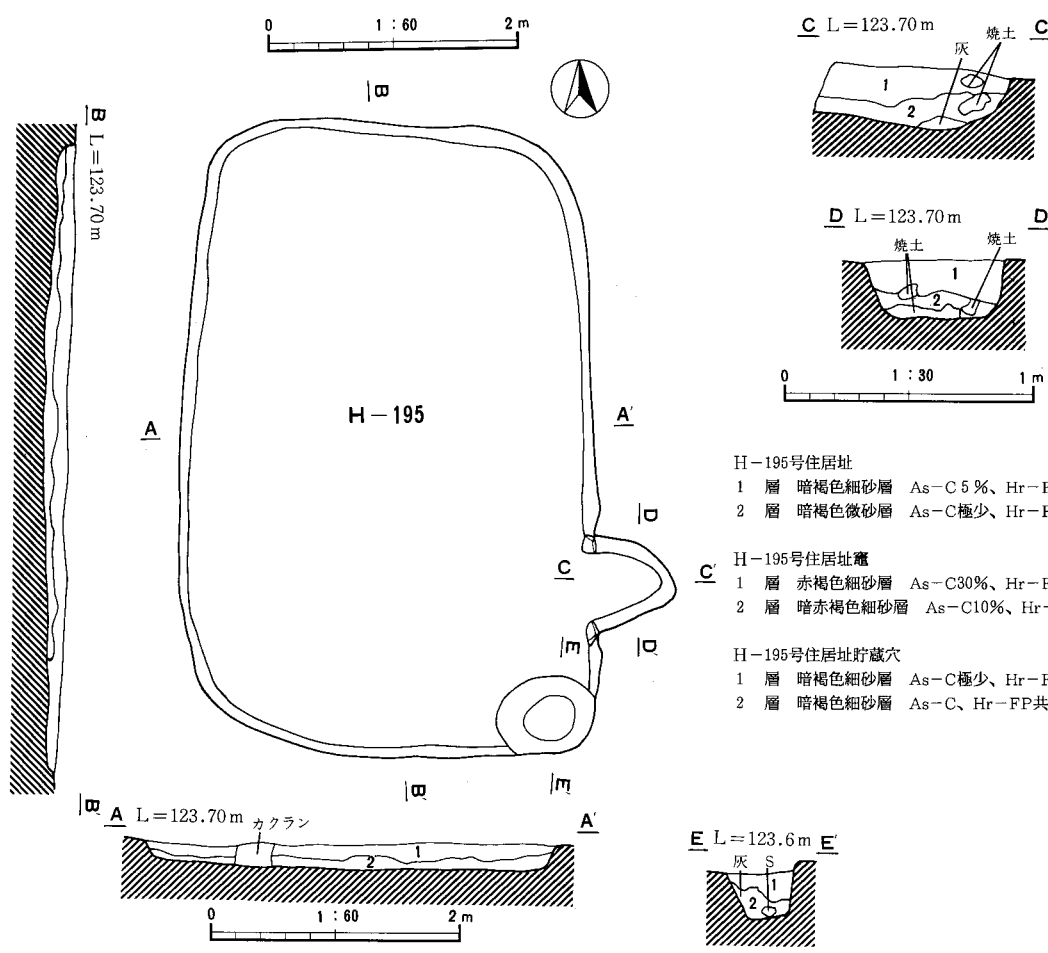
H－193号住居址
1 層 褐色細砂層 As－C10%、Hr－FP５％

H－193号住居址竈
1 層 褐色細砂層 As－C15%、Hr－FP10%
2 層 褐色細砂層 As－C５％、Hr－FP極少

Fig. 14 H－192, H－193号住居址



H－194号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C30%、Hr－FP15%
2　層　暗褐色細砂層　As－C20%、Hr－FP 5 %

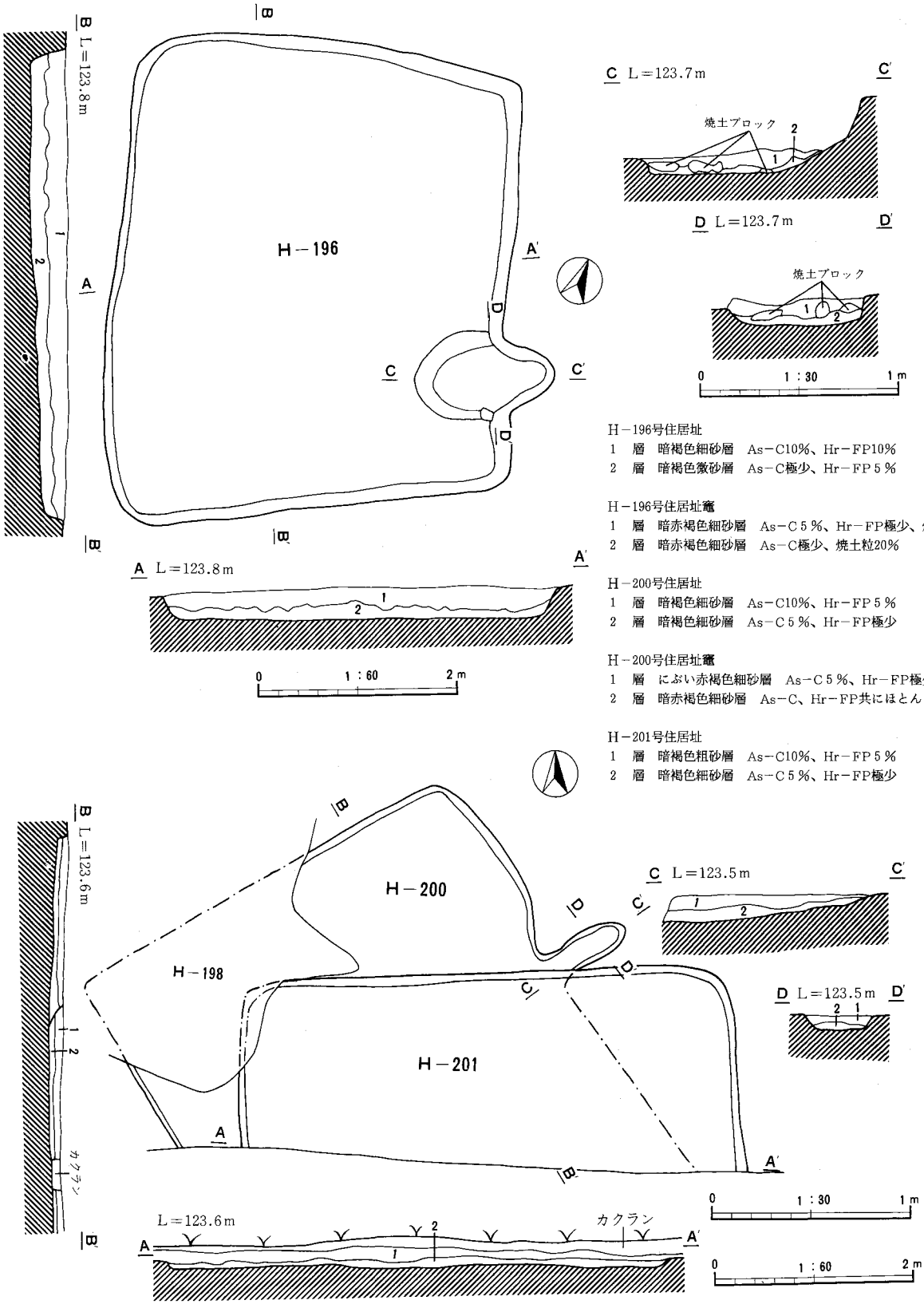


H－195号住居址
1　層　暗褐色細砂層　As－C 5 %、Hr－FP10%
2　層　暗褐色微砂層　As－C極少、Hr－FP 5 %

H－195号住居址竈
1　層　赤褐色細砂層　As－C30%、Hr－FP10%、焼土粒 5 %
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP極少

H－195号住居址貯蔵穴
1　層　暗褐色細砂層　As－C極少、Hr－FP 5 %
2　層　暗褐色細砂層　As－C、Hr－FP共に極少

Fig. 15　H－194, H－195号住居址



H－196号住居址
1 層 暗褐色細砂層 As－C10%、Hr－FP10%
2 層 暗褐色微砂層 As－C極少、Hr－FP 5 %

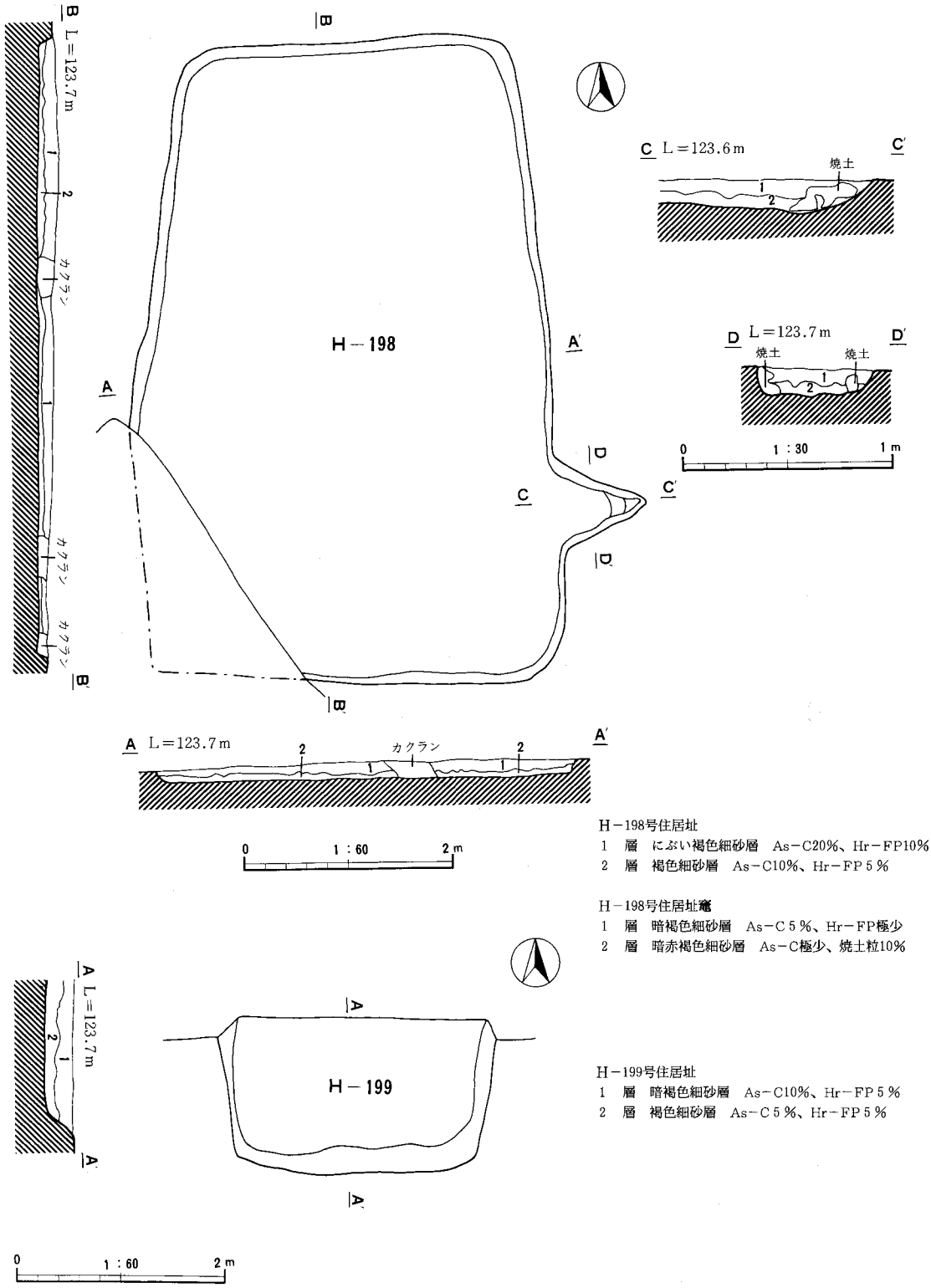
H－196号住居址竈
1 層 暗赤褐色細砂層 As－C 5 %、Hr－FP極少、焼土粒10%
2 層 暗赤褐色細砂層 As－C極少、焼土粒20%

H－200号住居址
1 層 暗褐色細砂層 As－C10%、Hr－FP 5 %
2 層 暗褐色細砂層 As－C 5 %、Hr－FP極少

H－200号住居址竈
1 層 にぶい赤褐色細砂層 As－C 5 %、Hr－FP極少
2 層 暗赤褐色細砂層 As－C、Hr－FP共にほとんど見られず

H－201号住居址
1 層 暗褐色粗砂層 As－C10%、Hr－FP 5 %
2 層 暗褐色細砂層 As－C 5 %、Hr－FP極少

Fig. 16 H－196, H－200・201号住居址

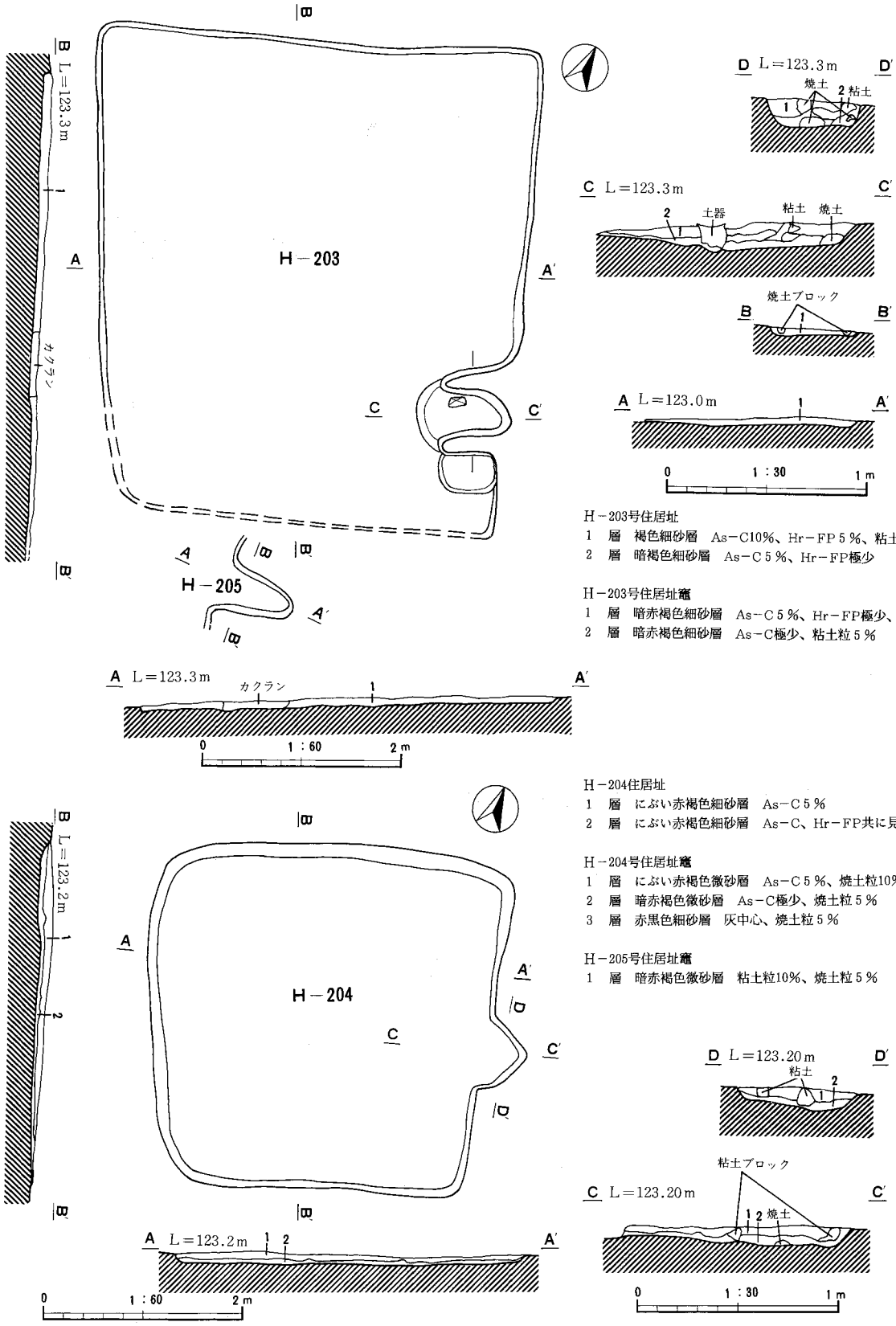


H－198号住居址
1 層 にぶい褐色細砂層 As－C20%、Hr－FP10%
2 層 褐色細砂層 As－C10%、Hr－FP 5 %

H－198号住居址竈
1 層 暗褐色細砂層 As－C 5 %、Hr－FP極少
2 層 暗赤褐色細砂層 As－C極少、焼土粒10%

H－199号住居址
1 層 暗褐色細砂層 As－C10%、Hr－FP 5 %
2 層 褐色細砂層 As－C 5 %、Hr－FP 5 %

Fig. 17 H－198, H－199号住居址



H－203号住居址

1　層　褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP 5 %、粘土粒 5 %

2　層　暗褐色細砂層　As－C 5 %、Hr－FP極少

H－203号住居址竈

1　層　暗赤褐色細砂層　As－C 5 %、Hr－FP極少、焼土粒 5 %

2　層　暗赤褐色細砂層　As－C極少、粘土粒 5 %

H－204住居址

1　層　にぶい赤褐色細砂層　As－C 5 %

2　層　にぶい赤褐色細砂層　As－C、Hr－FP共に見られず

H－204号住居址竈

1　層　にぶい赤褐色微砂層　As－C 5 %、焼土粒10%

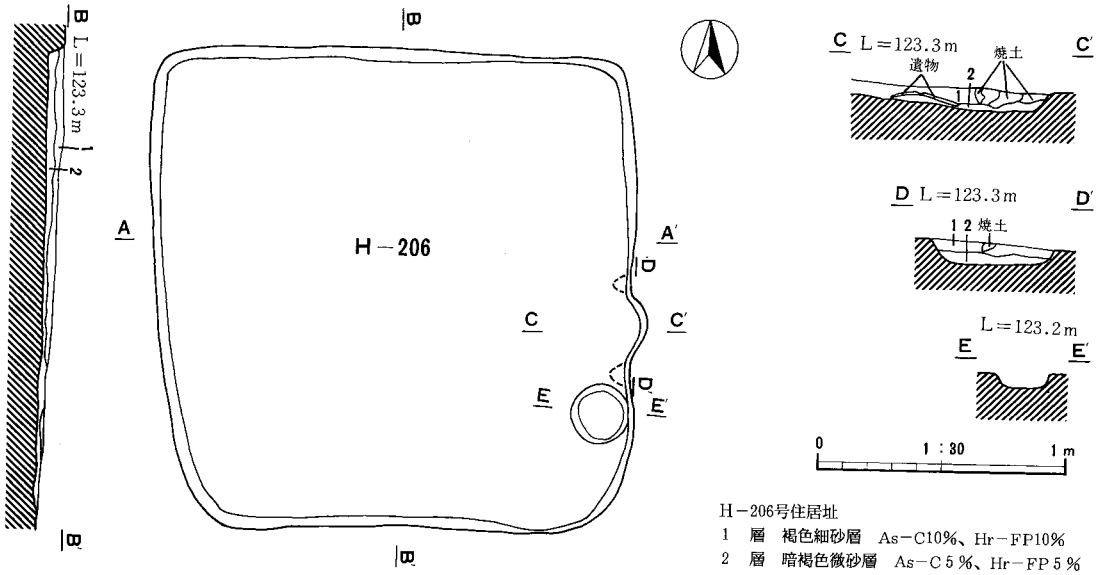
2　層　暗赤褐色微砂層　As－C極少、焼土粒 5 %

3　層　赤黒色細砂層　灰中心、焼土粒 5 %

H－205号住居址竈

1　層　暗赤褐色微砂層　粘土粒10%、焼土粒 5 %

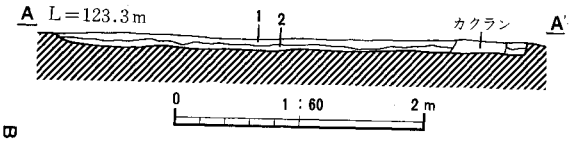
Fig. 18　H－203, H－204, H－205号住居址



H－206号住居址

1　層　褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP10%

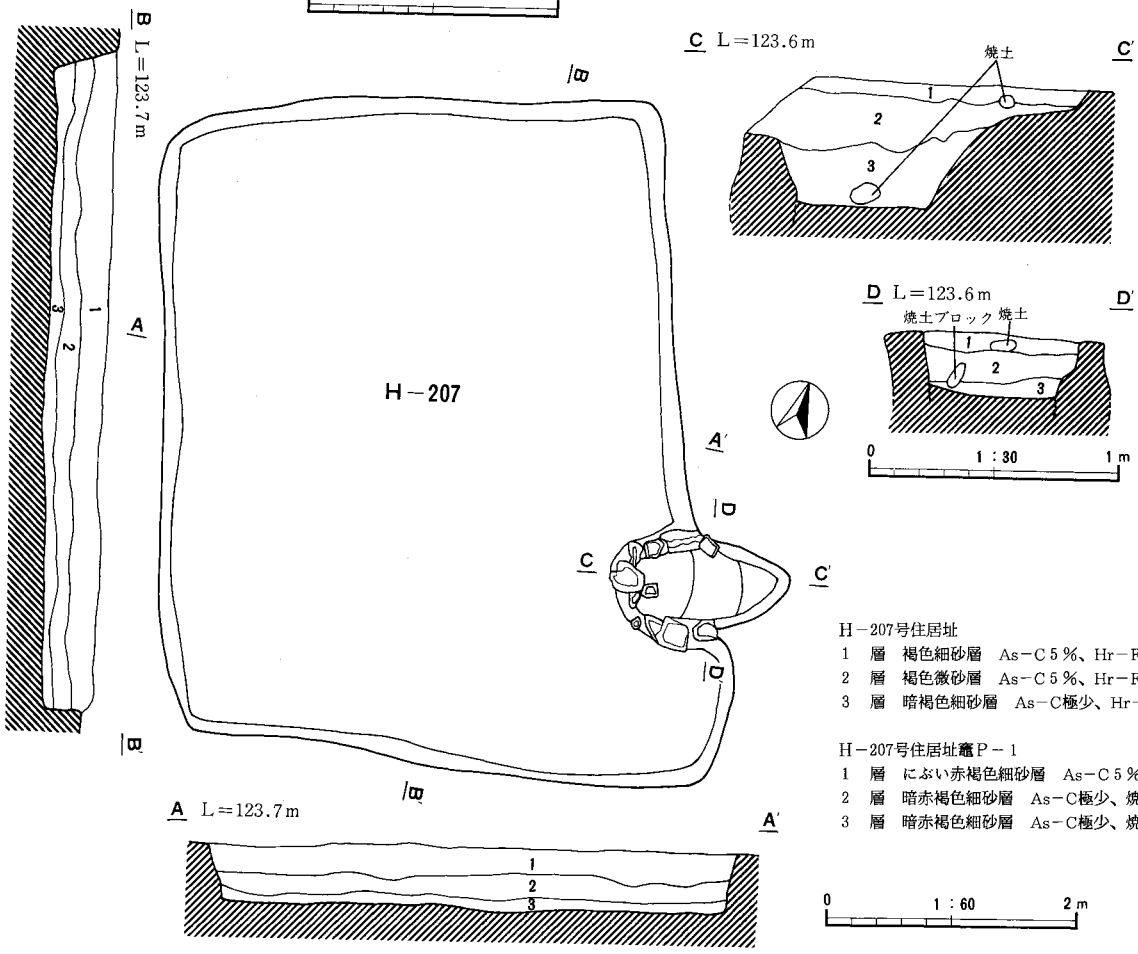
2　層　暗褐色微砂層　As－C 5 %、Hr－FP 5 %



H－206号住居址竈

1　層　暗褐色細砂層　As－C 5 %、Hr－FP極少、焼土粒 5 %

2　層　暗赤褐色細砂層　As－C極少、焼土粒10%



H－207号住居址

1　層　褐色細砂層　As－C 5 %、Hr－FP10%

2　層　褐色微砂層　As－C 5 %、Hr－FP 5 %

3　層　暗褐色細砂層　As－C極少、Hr－FP極少

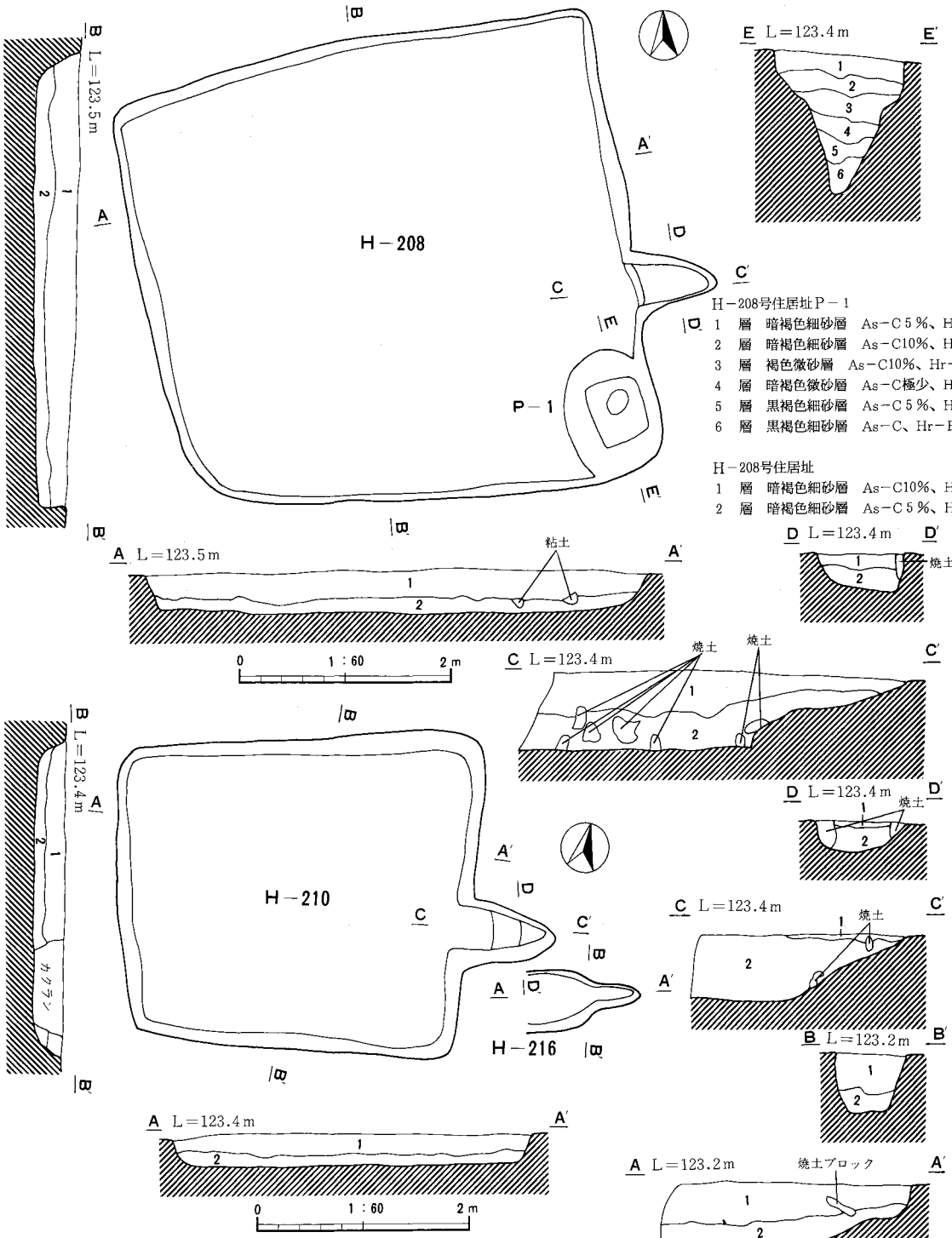
H－207号住居址竈P－1

1　層　にぶい赤褐色細砂層　As－C 5 %、焼土粒極少

2　層　暗赤褐色細砂層　As－C極少、焼土粒極少

3　層　暗赤褐色細砂層　As－C極少、焼土粒10%

Fig. 19　H－206, H－207号住居址



H－208号住居址P－1

1 層 暗褐色細砂層 As－C５％、Hr－FP５％
2 層 暗褐色細砂層 As－C10％、Hr－FP５％
3 層 褐色微砂層 As－C10％、Hr－FP極少
4 層 暗褐色微砂層 As－C極少、Hr－FP極少
5 層 黒褐色細砂層 As－C５％、Hr－FP５％
6 層 黒褐色細砂層 As－C、Hr－FP共に見られず

H－208号住居址

1 層 暗褐色細砂層 As－C10％、Hr－FP極少、粘土粒極少
2 層 暗褐色細砂層 As－C５％、Hr－FP極少

H－210号住居址

1 層 暗褐色細砂層 As－C15％、Hr－FP５％
2 層 暗褐色細砂層 As－C５％、Hr－FP極少

H－210号住居址竈

1 層 暗赤褐色細砂層 As－C５％、粘土粒10％
2 層 暗赤褐色細砂層 As－C極少、焼土粒極少

H－208号住居址竈

1 層 赤褐色細砂層 As－C20％、Hr－FP10％、焼土粒10％、粘土粒10％
2 層 にぶい赤褐色細砂層 As－C10％、Hr－FP５％、焼土粒５％、粘土粒５％

H－216号住居址竈

1 層 暗赤褐色細砂層 As－C５％、Hr－FP極少、焼土粒５％
2 層 暗赤褐色細砂層 As－C極少、焼土粒極少

Fig. 20 H－208, H－210・216号住居址

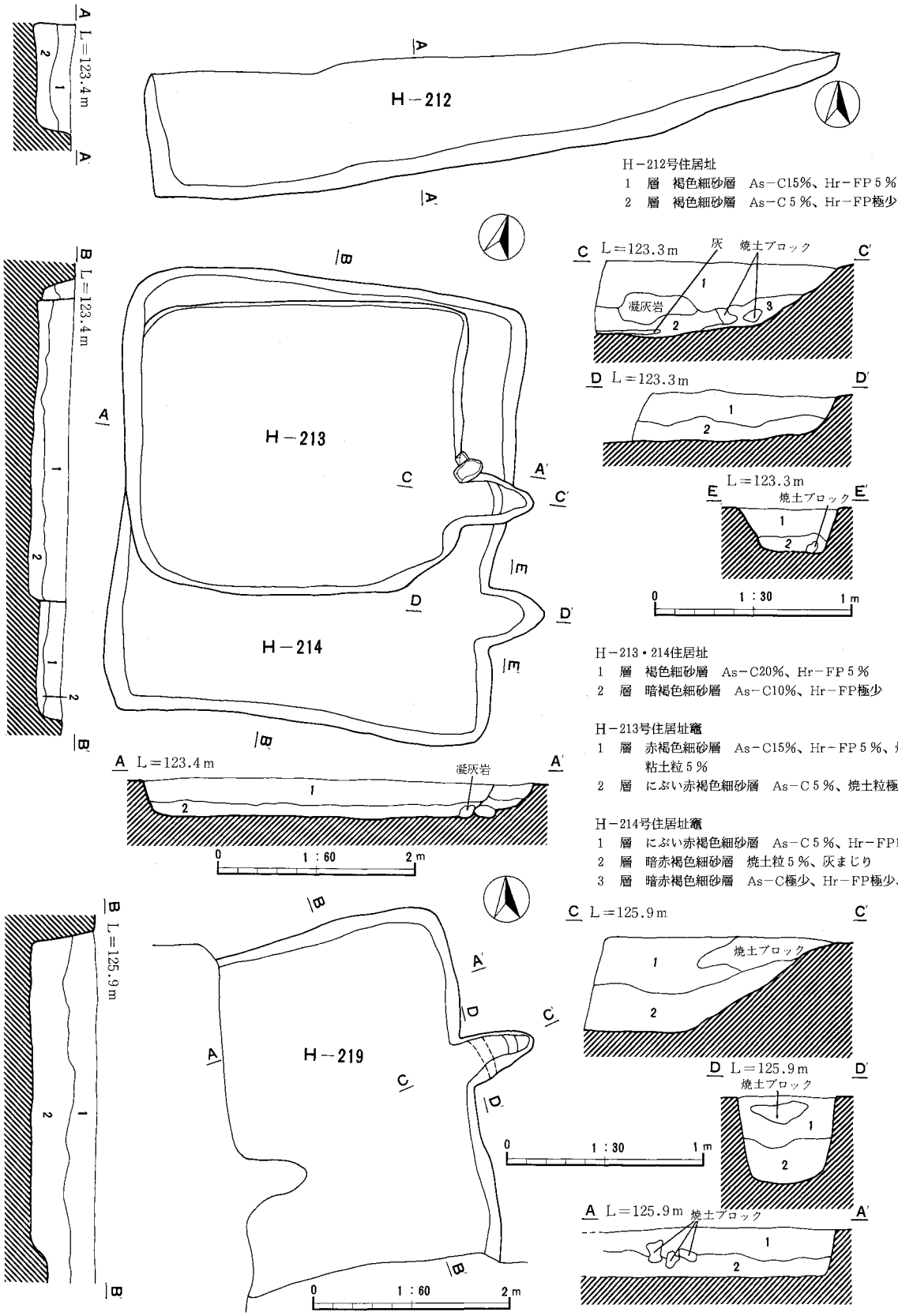
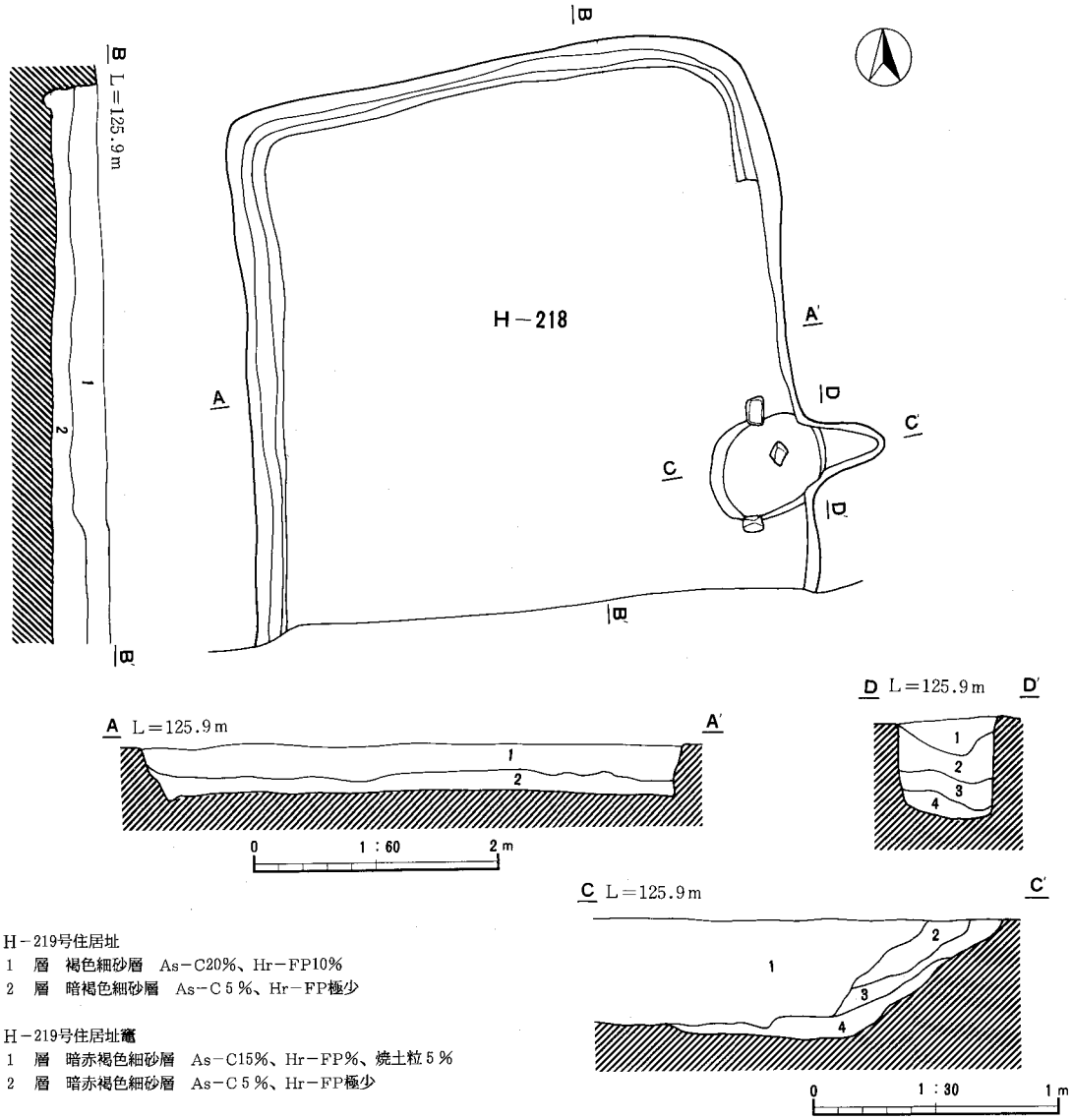


Fig. 21　H－212, H－213・214, H－219号住居址



H－219号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C20%、Hr－FP10%
2　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少

H－219号住居址竈
1　層　暗赤褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP%、焼土粒５%
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少

H－218号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP５%、粘土粒10%
2　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少

H－218号住居址竈
1　層　極暗赤褐色粗砂層　As－C10%、焼土粒５%
2　層　暗赤褐色粗砂層　焼土中心
3　層　褐色細砂層　焼土中心
4　層　赤黒褐色細砂層　灰中心

H－221号住居址
1　層　暗褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP10%
2　層　黒褐色微砂層　As－C極少、Hr－FP５%

H－221号住居址竈
1　層　にぶい赤褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP５%、焼土粒15%
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C極少、Hr－FP極少、灰まじり

H－220号住居址
1　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP10%
2　層　暗褐色微砂層　As－C極少、Hr－FP５%

H－220号住居址竈
1　層　暗赤褐色粗砂層　焼土粒20%
2　層　黒褐色粗砂層　As－C５%、Hr－FP極少
3　層　極暗赤褐色細砂層　焼土粒10%

H－220号住居址P－1
1　層　褐色微砂層　As－C極少、Hr－FP５%
2　層　暗褐色微砂層　As－C、Hr－FP共にほとんど見られず

Fig. 22　H－218号住居址

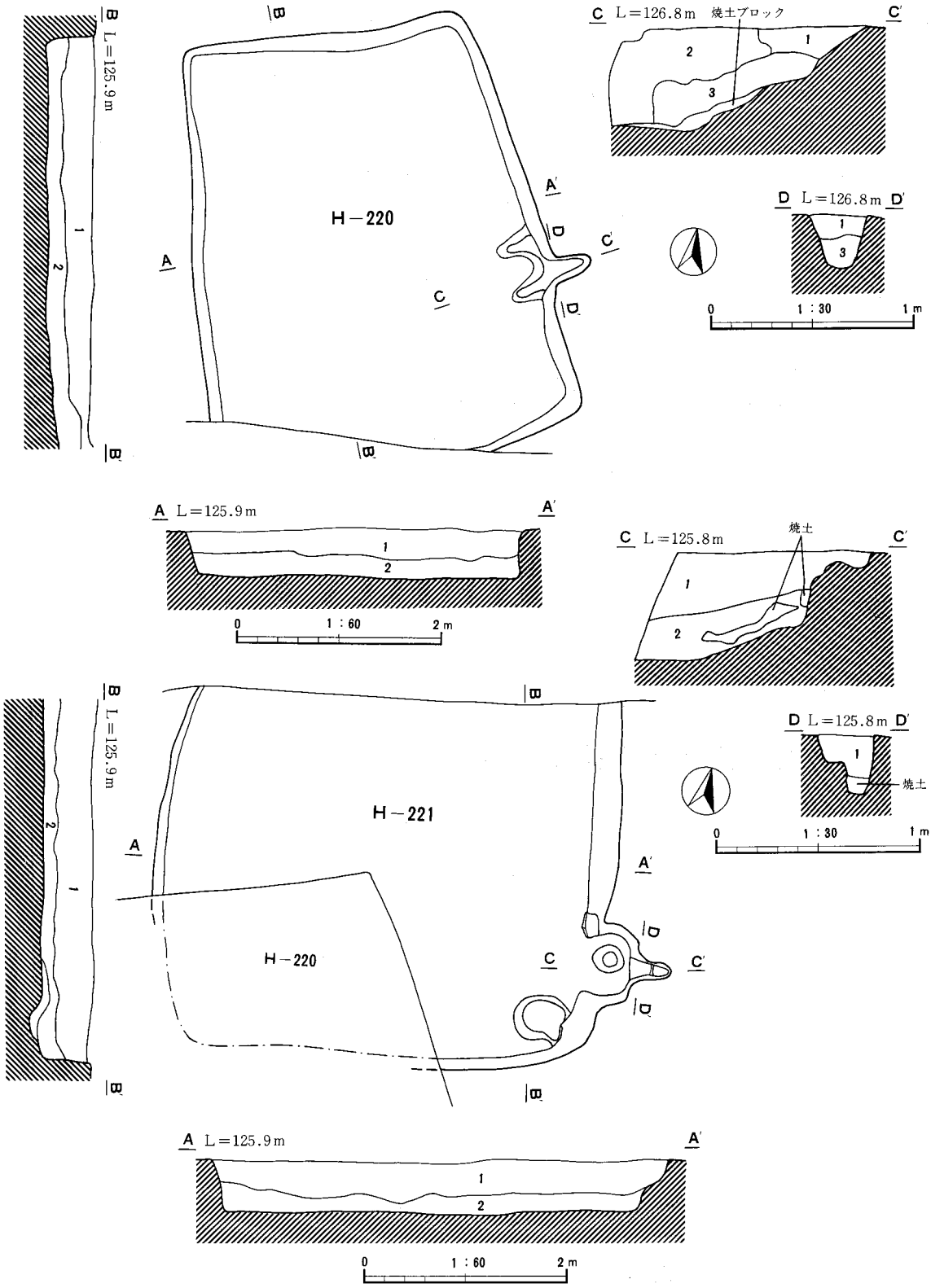
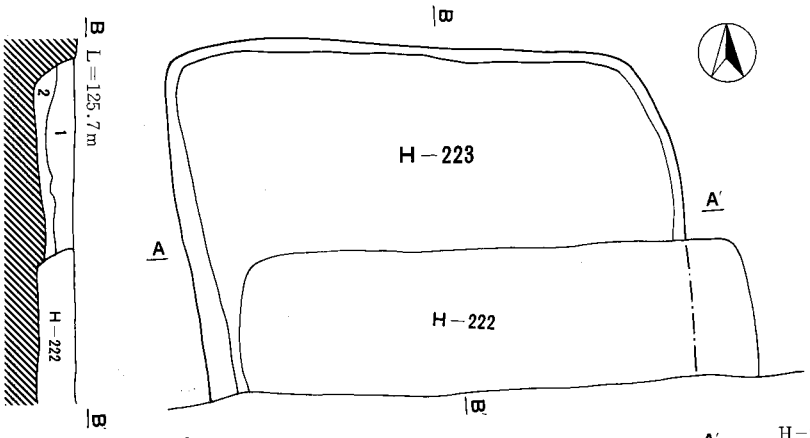
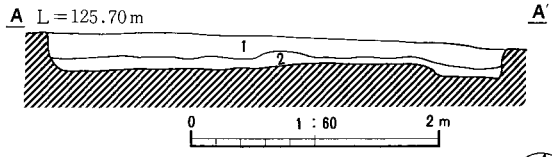
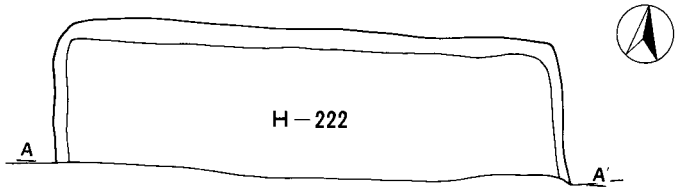


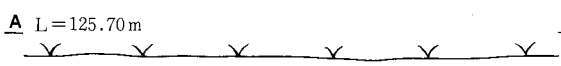
Fig. 23　H－220, H－221号住居址

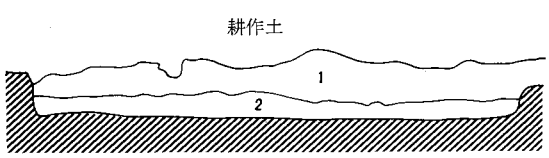


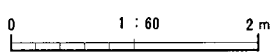


H－223号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP10%
2　層　暗褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP 5 %

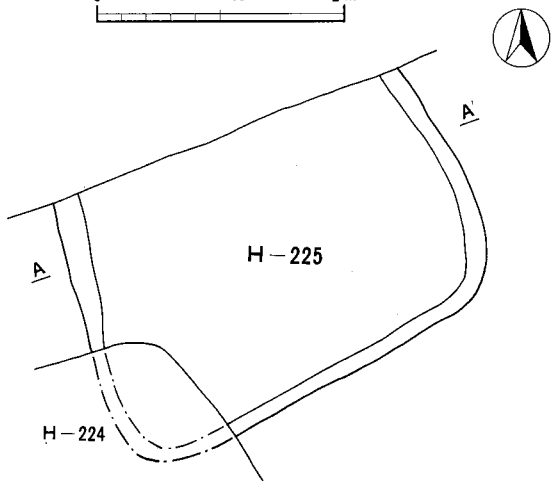




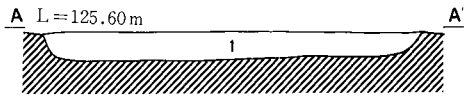




H－222号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP10%
2　層　褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP 5 %



H－225号住居址
1　層　暗褐色細砂層　As－C20%、Hr－FP10%
2　層　褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP極少、粘土粒10%



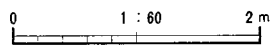
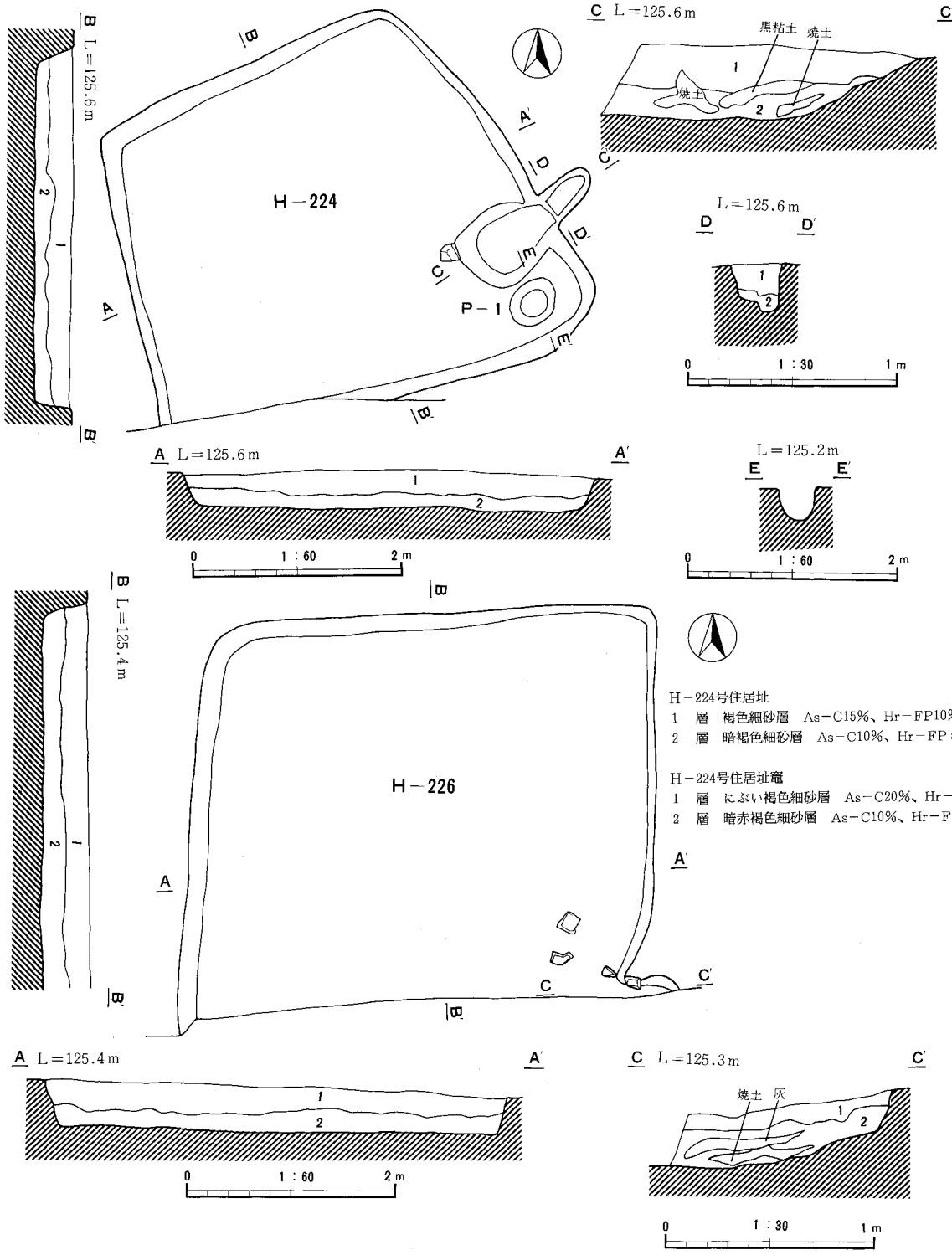


Fig. 24　H－222, H－223, H－225号住居址



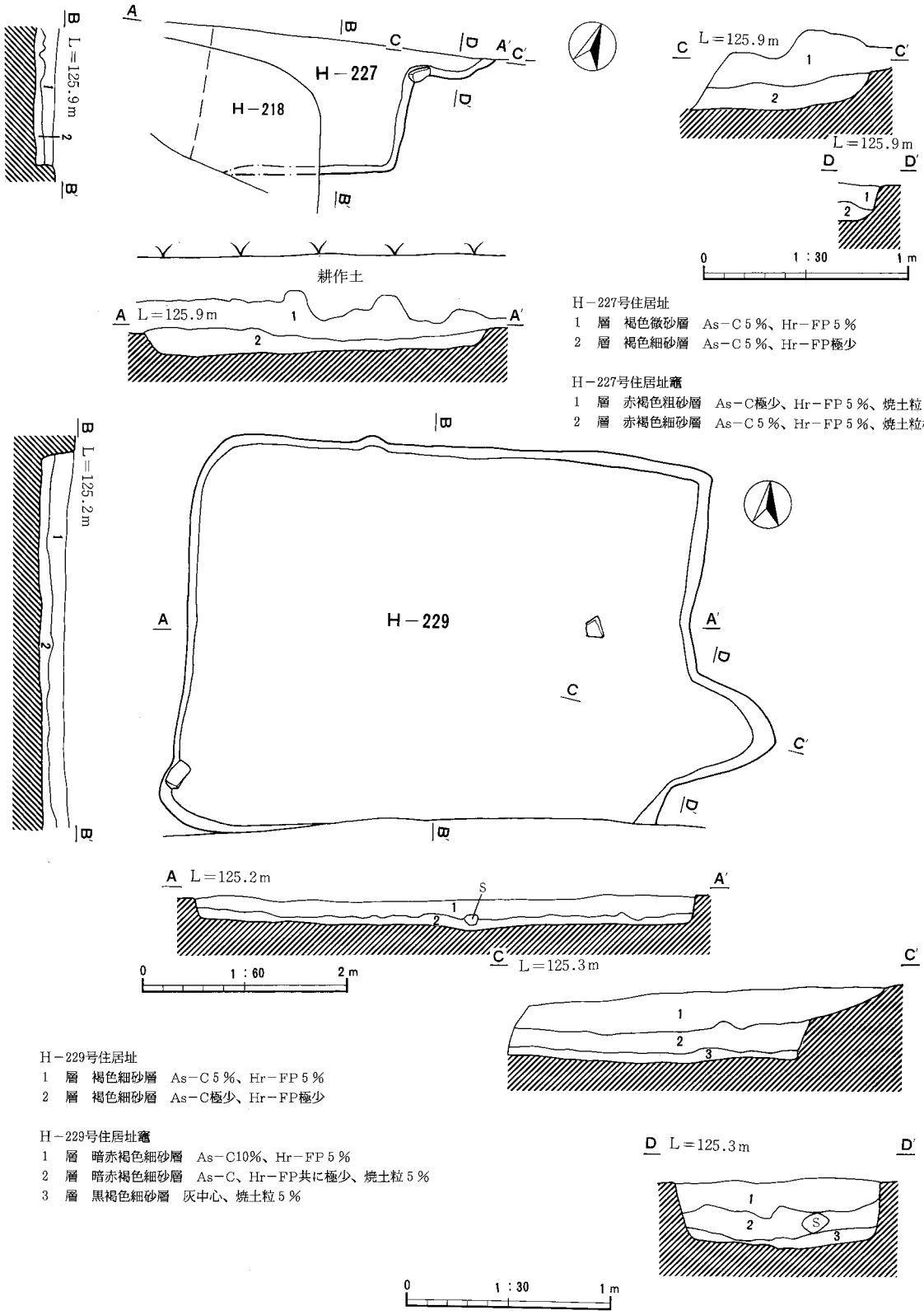
H－224号住居址
1 層 褐色細砂層 As－C15%、Hr－FP10%、粘土粒5%
2 層 暗褐色細砂層 As－C10%、Hr－FP5%

H－224号住居址竈
1 層 にぶい褐色細砂層 As－C20%、Hr－FP10%、焼土粒5
2 層 暗赤褐色細砂層 As－C10%、Hr－FP極少、焼土粒極少

H－226号住居址
1 層 褐色細砂層 As－C15%、Hr－FP5%、粘土粒5%
2 層 暗褐色細砂層 As－C5%、Hr－FP極少

H－226号住居址竈
1 層 暗赤褐色細砂層 As－C15%、Hr－FP5%、焼土粒20%、粘土粒10%
2 層 暗赤褐色細砂層 As－C5%、焼土粒5%、粘土粒10%

Fig. 25 H－224, H－226号住居址



H－227号住居址
1 層 褐色微砂層 As－C 5％、Hr－FP 5％
2 層 褐色細砂層 As－C 5％、Hr－FP極少

H－227号住居址竈
1 層 赤褐色粗砂層 As－C極少、Hr－FP 5％、焼土粒 5％
2 層 赤褐色細砂層 As－C 5％、Hr－FP 5％、焼土粒極少

H－229号住居址
1 層 褐色細砂層 As－C 5％、Hr－FP 5％
2 層 褐色細砂層 As－C極少、Hr－FP極少

H－229号住居址竈
1 層 暗赤褐色細砂層 As－C10％、Hr－FP 5％
2 層 暗赤褐色細砂層 As－C、Hr－FP共に極少、焼土粒 5％
3 層 黒褐色細砂層 灰中心、焼土粒 5％

Fig. 26 H－227, H－229号住居址

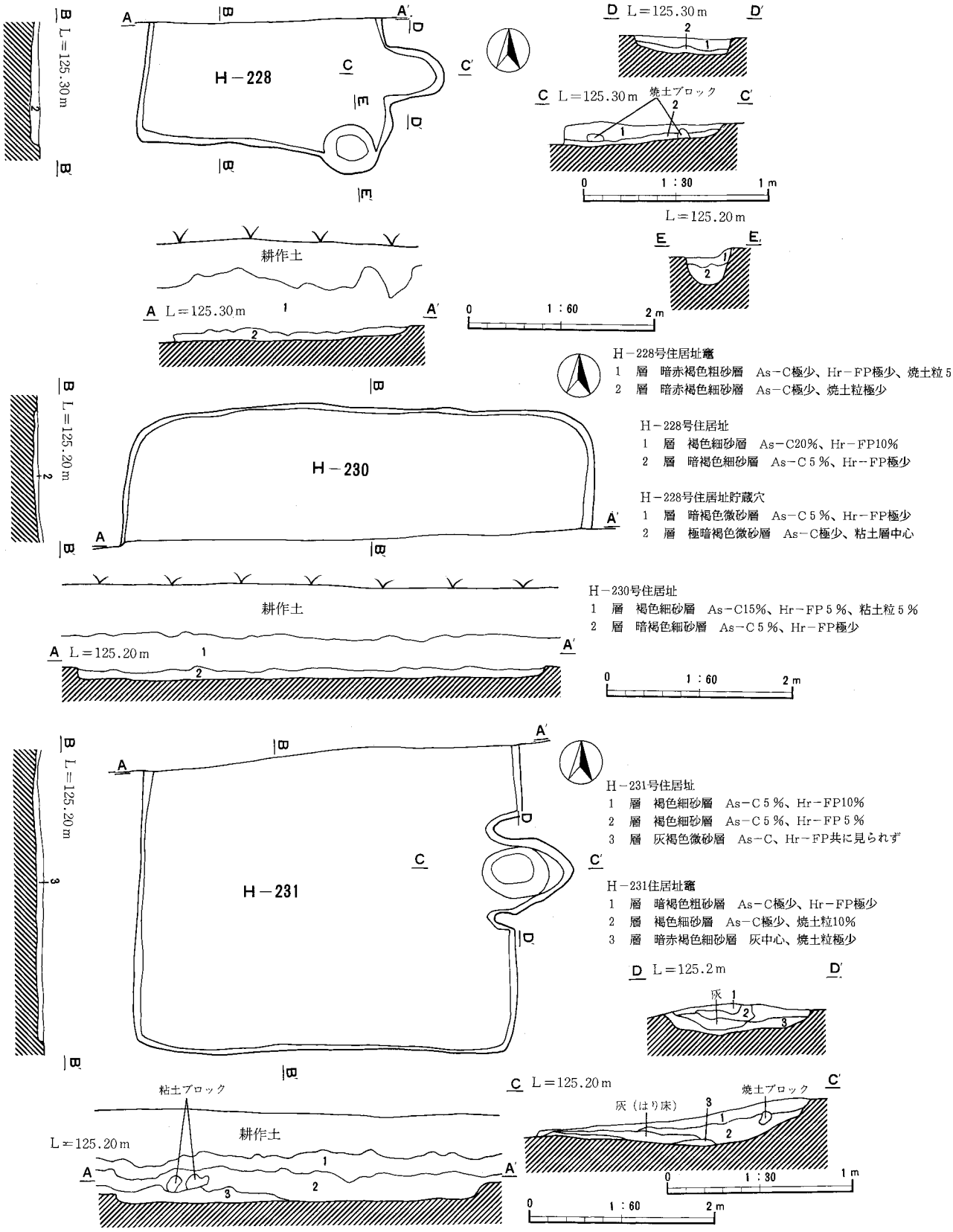


Fig. 27 H－228, H－230, H－231号住居址

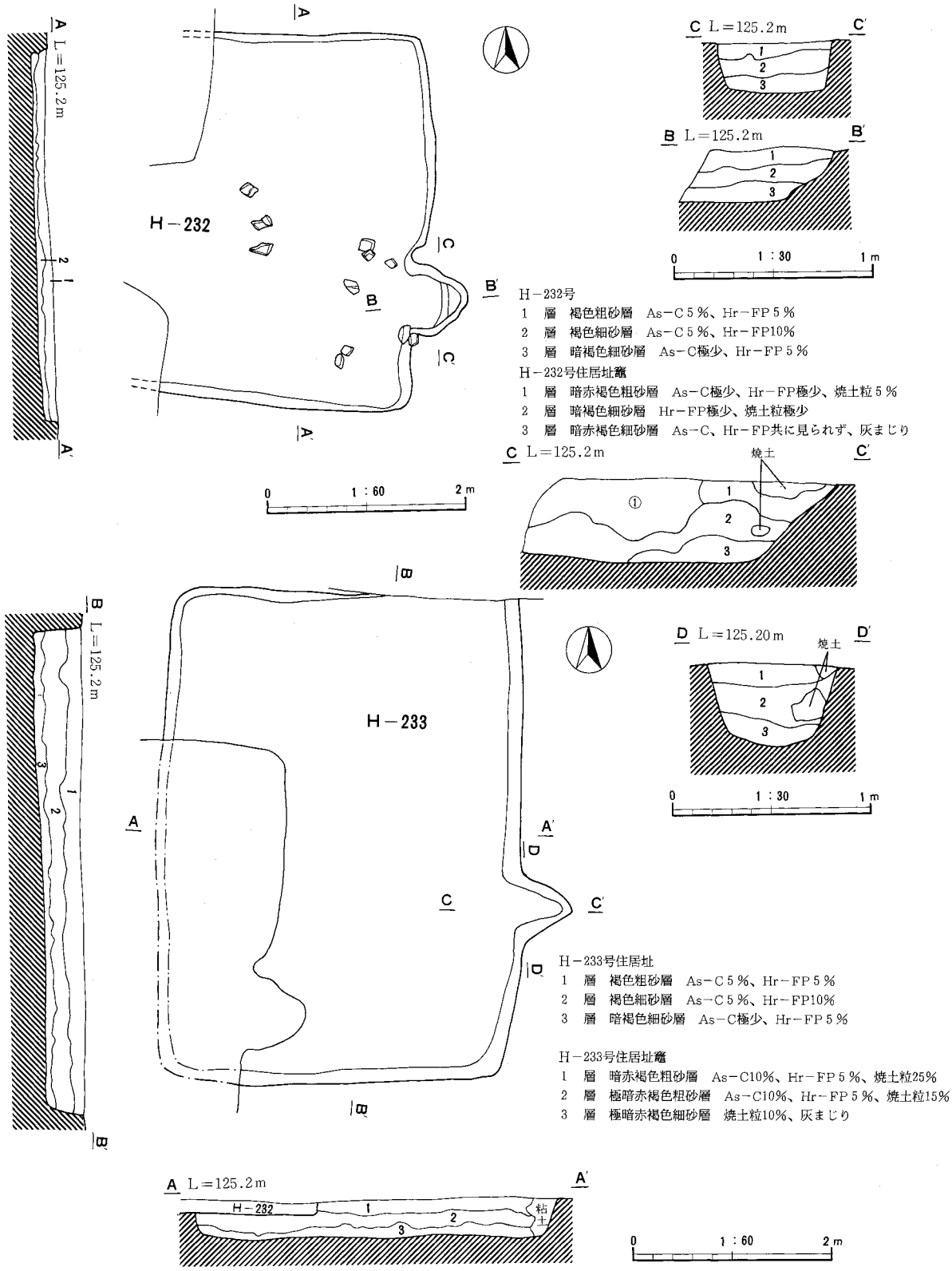
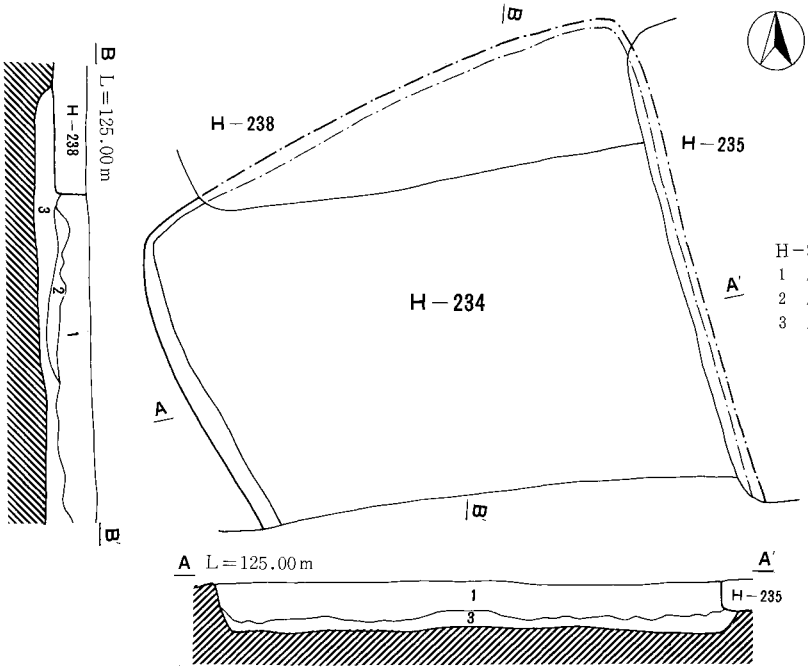
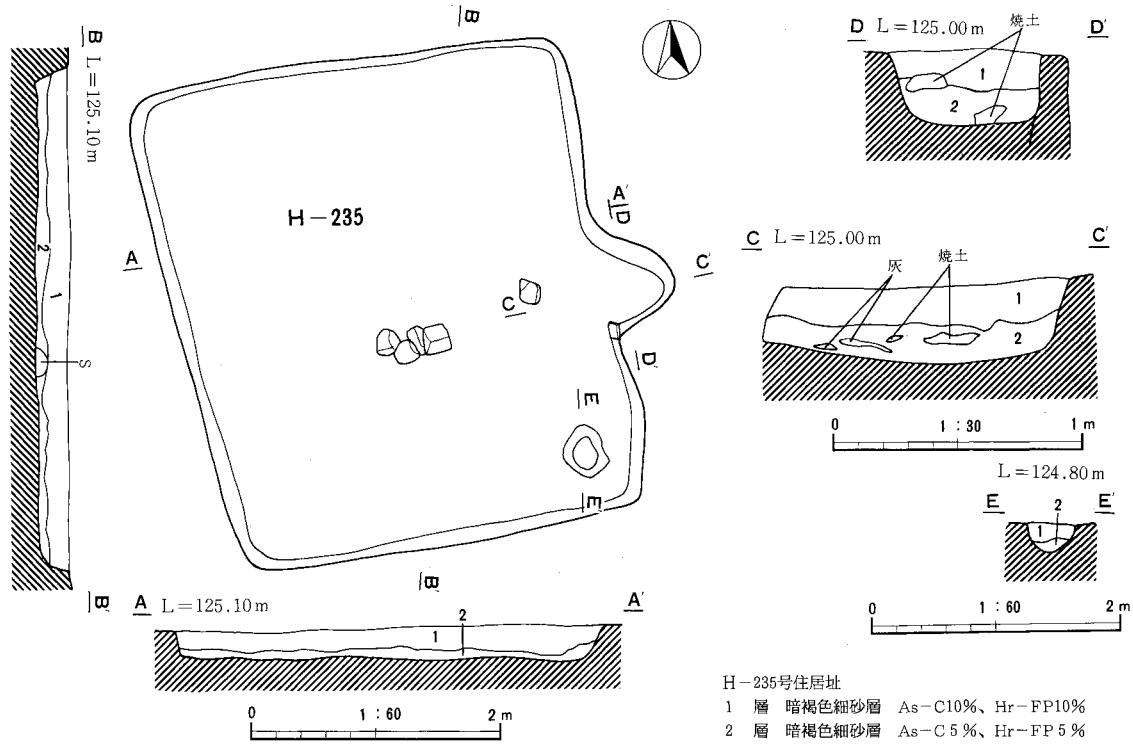


Fig. 28 H－232, H－233号住居址



H－234号住居址
1　層　黒褐色粗砂層　As－C15%、Hr－FP５%
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP極少、焼土粒20%
3　層　極暗褐色細砂層　As－C10%

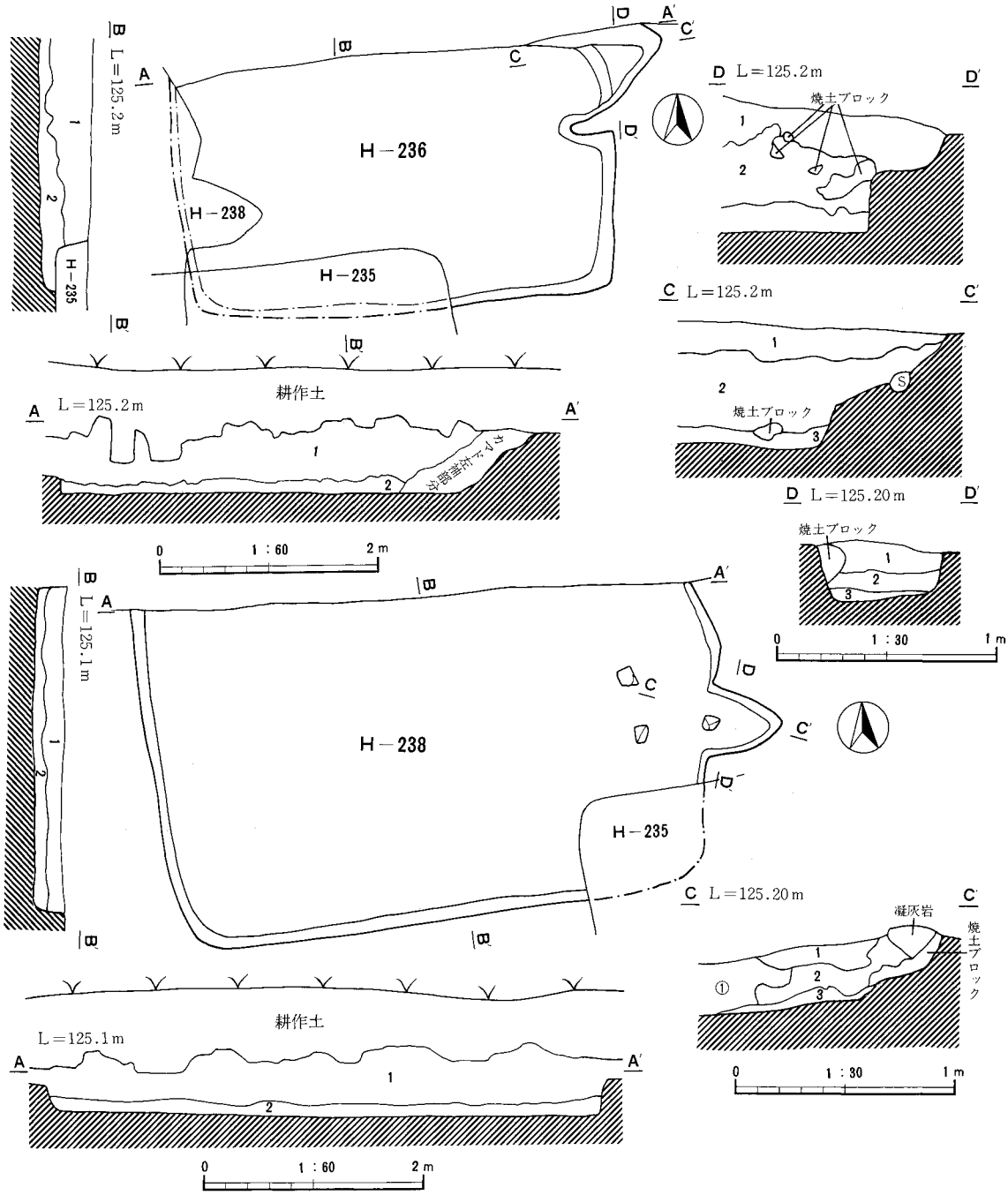


H－235号住居址
1　層　暗褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP10%
2　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP５%

H－235号住居址竈
1　層　暗赤褐色粗砂層　As－C５%、Hr－FP10%、焼土粒５%
2　層　黒褐色微砂層　As－C極少、Hr－FP５%、焼土粒５%

H－235号住居址貯蔵穴
1　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP５%
2　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少、粘土粒10%
3　層　暗褐色粗砂層　砂利質

Fig. 29　H－234，H－235号住居址



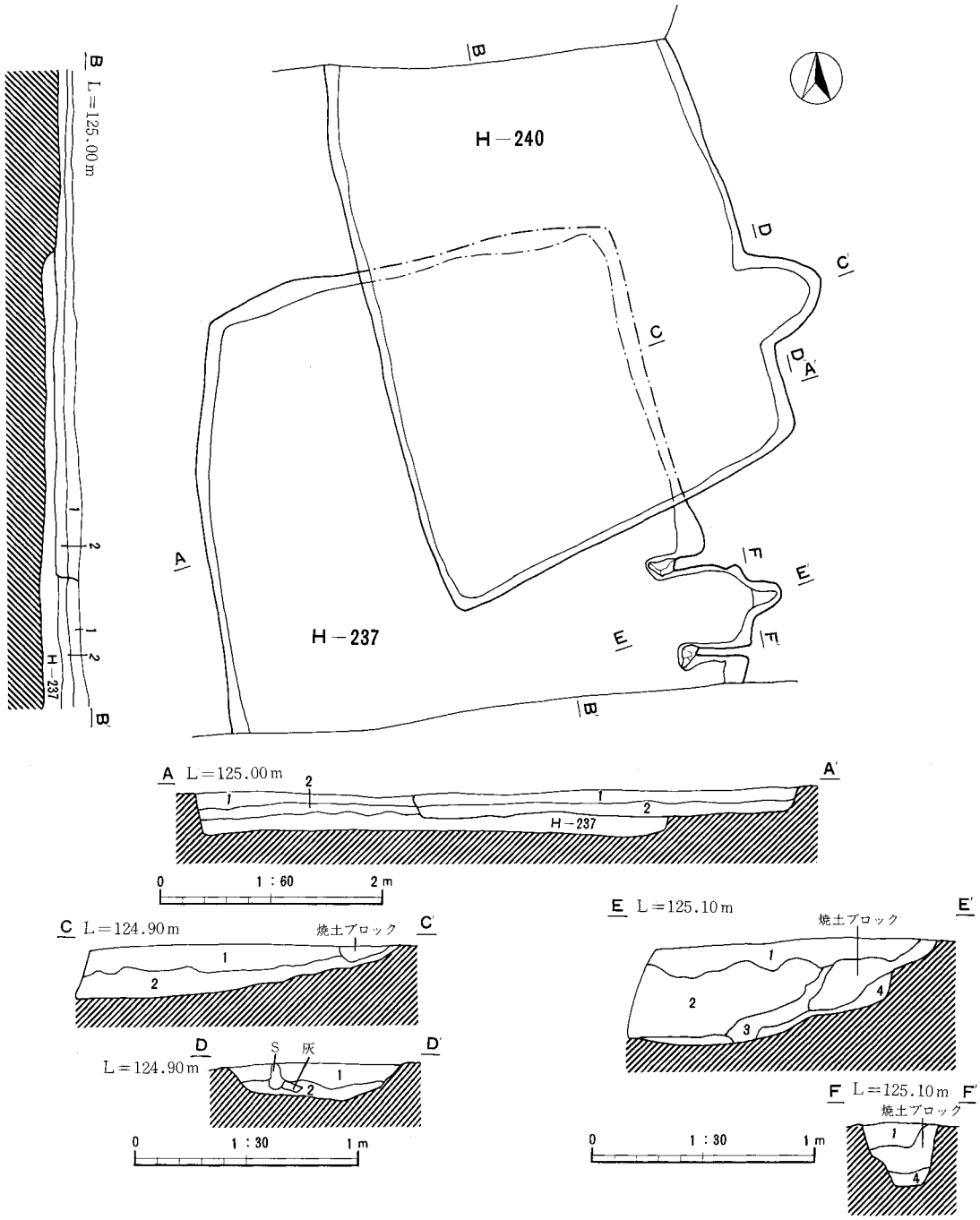
H－236号住居址
1　層　暗褐色粗砂層　As－C10%、Hr－FP５%
2　層　極暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP５%

H－236号住居址竈
1　層　暗赤褐色粗砂層　As－C10%、Hr－FP10%
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C極少、Hr－FP５%
3　層　極暗赤褐色細砂層　As－C、Hr－FP共に極少、焼土粒５%

H－238号住居址
1　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP10%
2　層　暗褐色細砂層　As－C極少、Hr－FP５%

H－238号住居址竈
1　層　極暗赤褐色粗砂層　As－C10%、焼土粒10%
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C５%、焼土粒30%
3　層　極暗赤褐色細砂層　焼土粒10%、灰まじり

Fig. 30　H－236, H－238号住居址



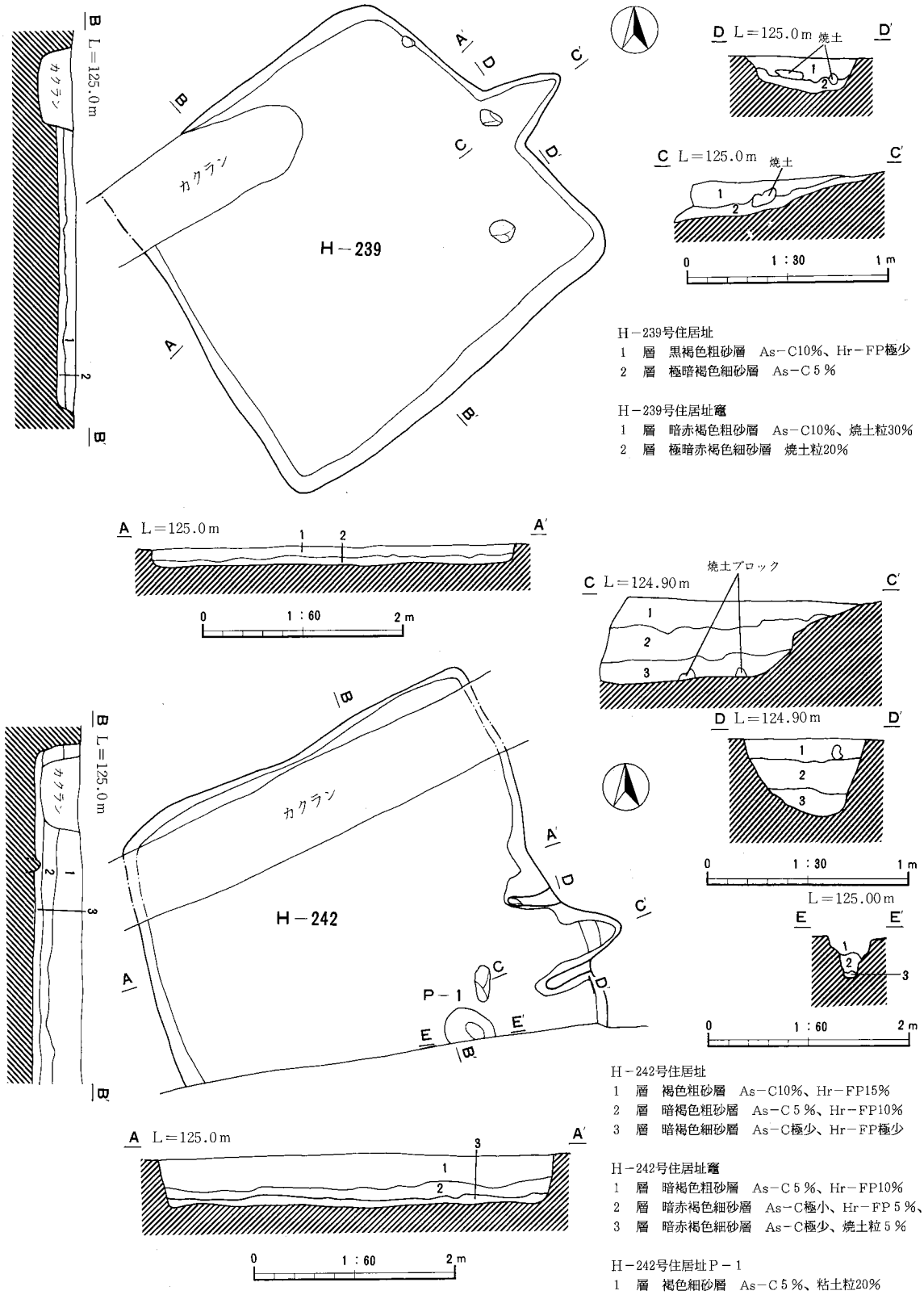
H－237号住居址
1 層 暗褐色細砂層 As－C15%、Hr－FP 5 %
2 層 暗褐色細砂層 As－C10%、Hr－FP極少

H－237号住居址竈
1 層 極暗赤褐色粗砂層 焼土粒20%
2 層 極暗褐色粗砂層 As－C10%、Hr－FP極少
3 層 暗赤褐色細砂層 焼土粒40%
4 層 赤黒褐色細砂層 灰中心

H－240号住居址
1 層 褐色細砂層 As－C15%、Hr－FP10%
2 層 暗褐色細砂層 As－C10%、Hr－FP 5 %

H－240号住居址竈
1 層 にぶい赤褐色細砂層 As－C 5 %、焼土粒10%
2 層 暗赤褐色細砂層 As－C極少、焼土粒 5 %

Fig. 31 H－237, H－240号住居址



H－239号住居址
1　層　黒褐色粗砂層　As－C10%、Hr－FP極少
2　層　極暗褐色細砂層　As－C５%

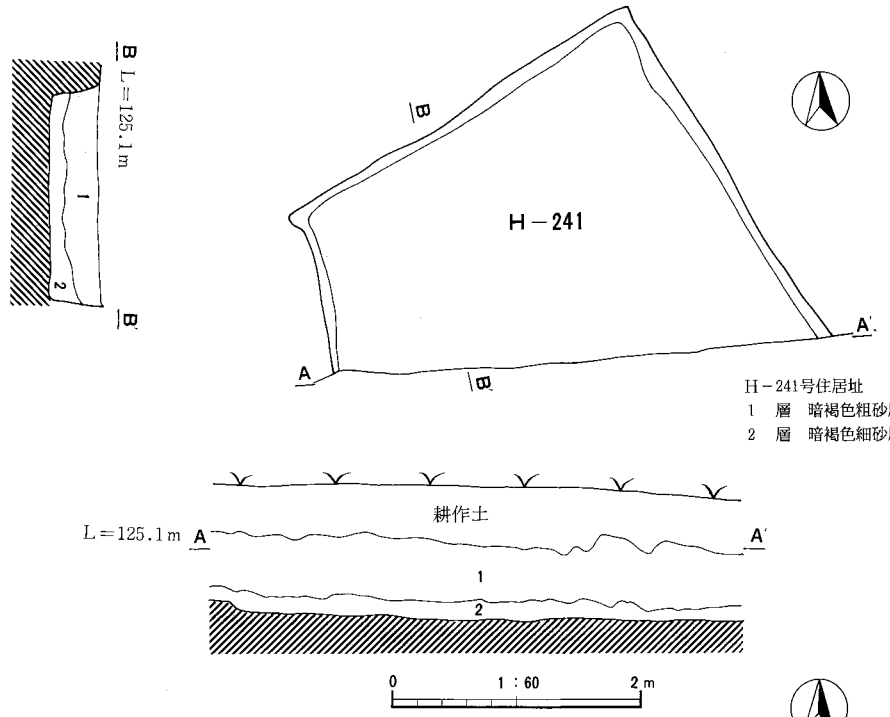
H－239号住居址竈
1　層　暗赤褐色粗砂層　As－C10%、焼土粒30%
2　層　極暗赤褐色細砂層　焼土粒20%

H－242号住居址
1　層　褐色粗砂層　As－C10%、Hr－FP15%
2　層　暗褐色粗砂層　As－C５%、Hr－FP10%
3　層　暗褐色細砂層　As－C極少、Hr－FP極少

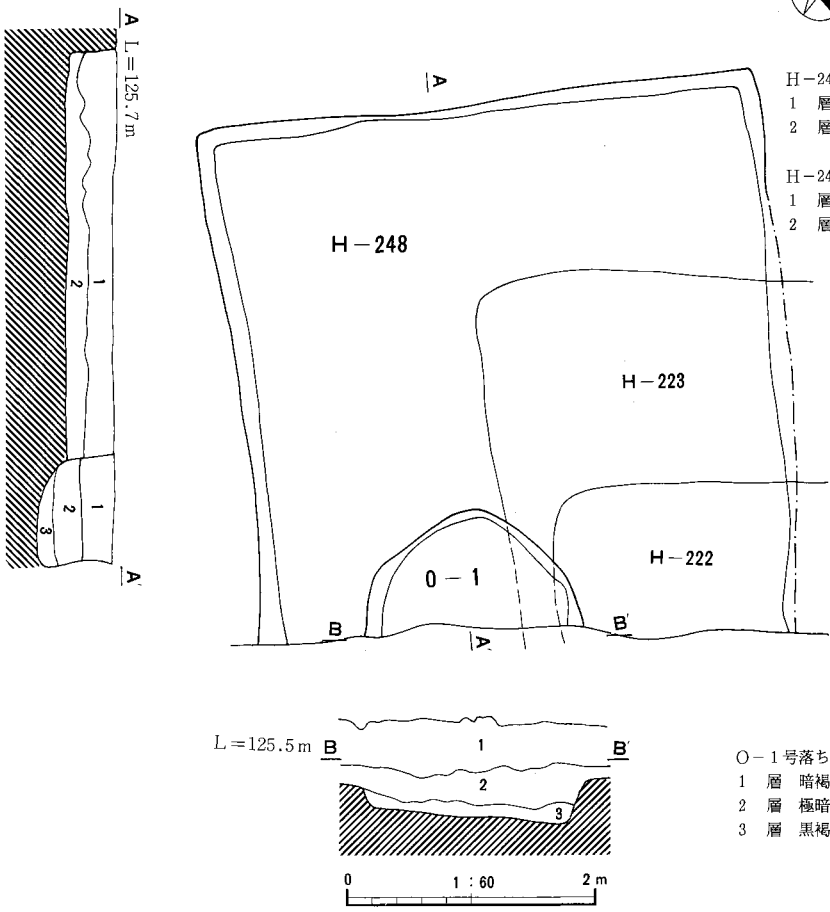
H－242号住居址竈
1　層　暗褐色粗砂層　As－C５%、Hr－FP10%
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C極小、Hr－FP５%、焼土粒５%
3　層　暗赤褐色細砂層　As－C極少、焼土粒５%

H－242号住居址P－1
1　層　褐色細砂層　As－C５%、粘土粒20%
2　層　暗褐色細砂層　As－C極少、粘土粒10%
3　層　明褐色粗砂層　凝灰岩

Fig. 32　H－239, H－242号住居址



H－241号住居址
1　層　暗褐色粗砂層　As－C極少、Hr－FP10%
2　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP５%

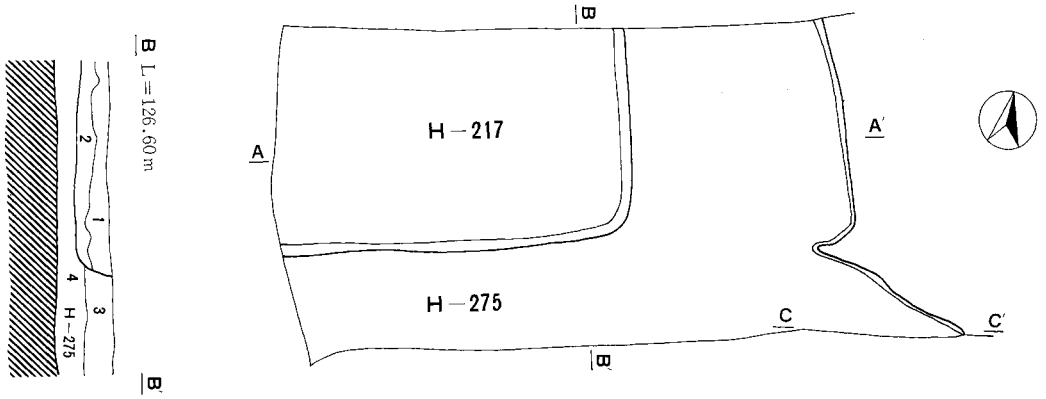


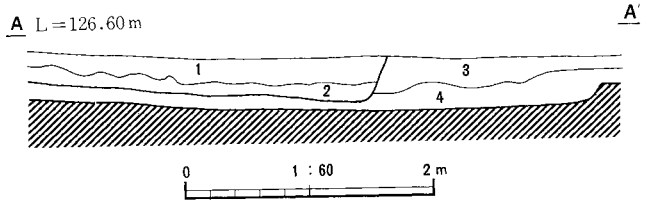
H－248号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C15%　Hr－FP５%
2　層　暗褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP極少

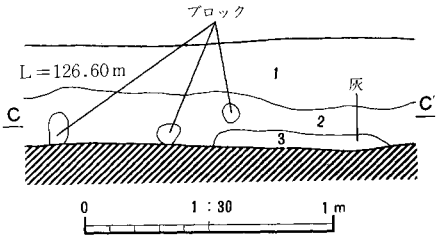
H－248号住居址竈
1　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP５%、焼土粒極少
2　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少

O－１号落ち込み址
1　層　暗褐色粗砂層　As－C５%、Hr－FP10%
2　層　極暗褐色細砂層　As－C極少、Hr－FP５%
3　層　黒褐色細砂層　Hr－FP極少

Fig. 33　H－241，H－248号住居址



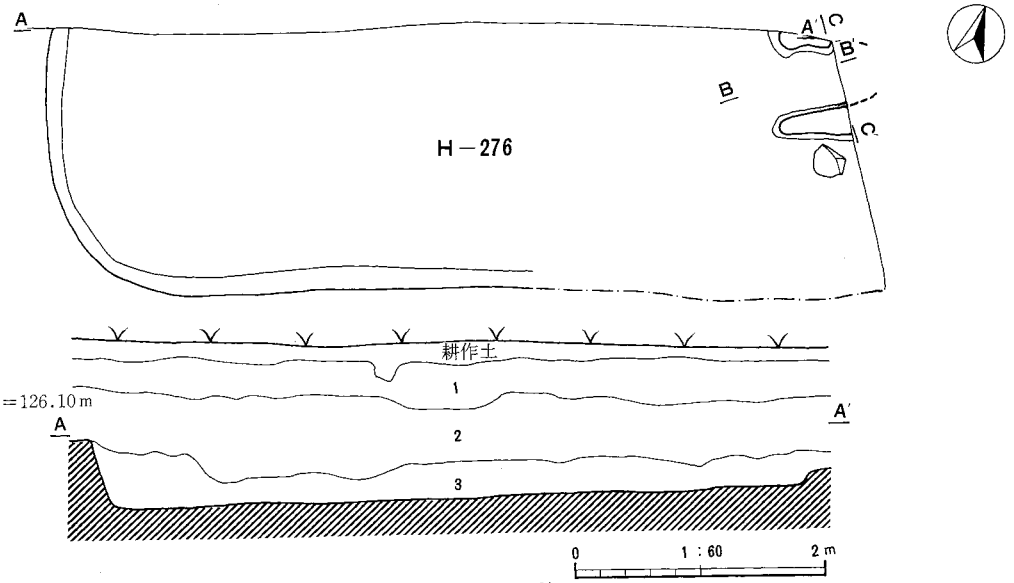


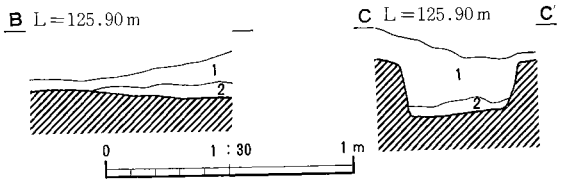


H−217号住居址
1　層　明褐色微砂層　As−C、Hr−FP共に見られず
2　層　暗褐色細砂層　As−C、Hr−FP共に見られず

H−275号住居址
1　層　にぶい黄褐色粗砂層　As−C10%、Hr−FP 5 %（撹乱）
2　層　褐色粗砂層　As−C15%、Hr−FP極少（撹乱）
3　層　黒色細砂層（撹乱）
4　層　黄褐色細砂層（撹乱）

H−275号住居址竈
1　層　にぶい赤褐色細砂層　As−C 5 %、Hr−FP 5 %
2　層　暗赤褐色細砂層　As−C 5 %、焼土粒 5 %
3　層　暗赤褐色　焼土粒30%、灰まじり





H−276号住居址
1　層　にぶい褐色粗砂層　As−C 5 %、砂利40%
2　層　褐色細砂層　As−C 5 %、焼土粒 5 %
3　層　褐色細砂層　As−C 5 %

H−276号住居址竈
1　層　にぶい赤褐色　焼土粒10%、粘土粒10%
2　層　暗赤褐色細砂層　焼土粒15%、灰まじり

Fig. 34　H−217・275, H−276号住居址

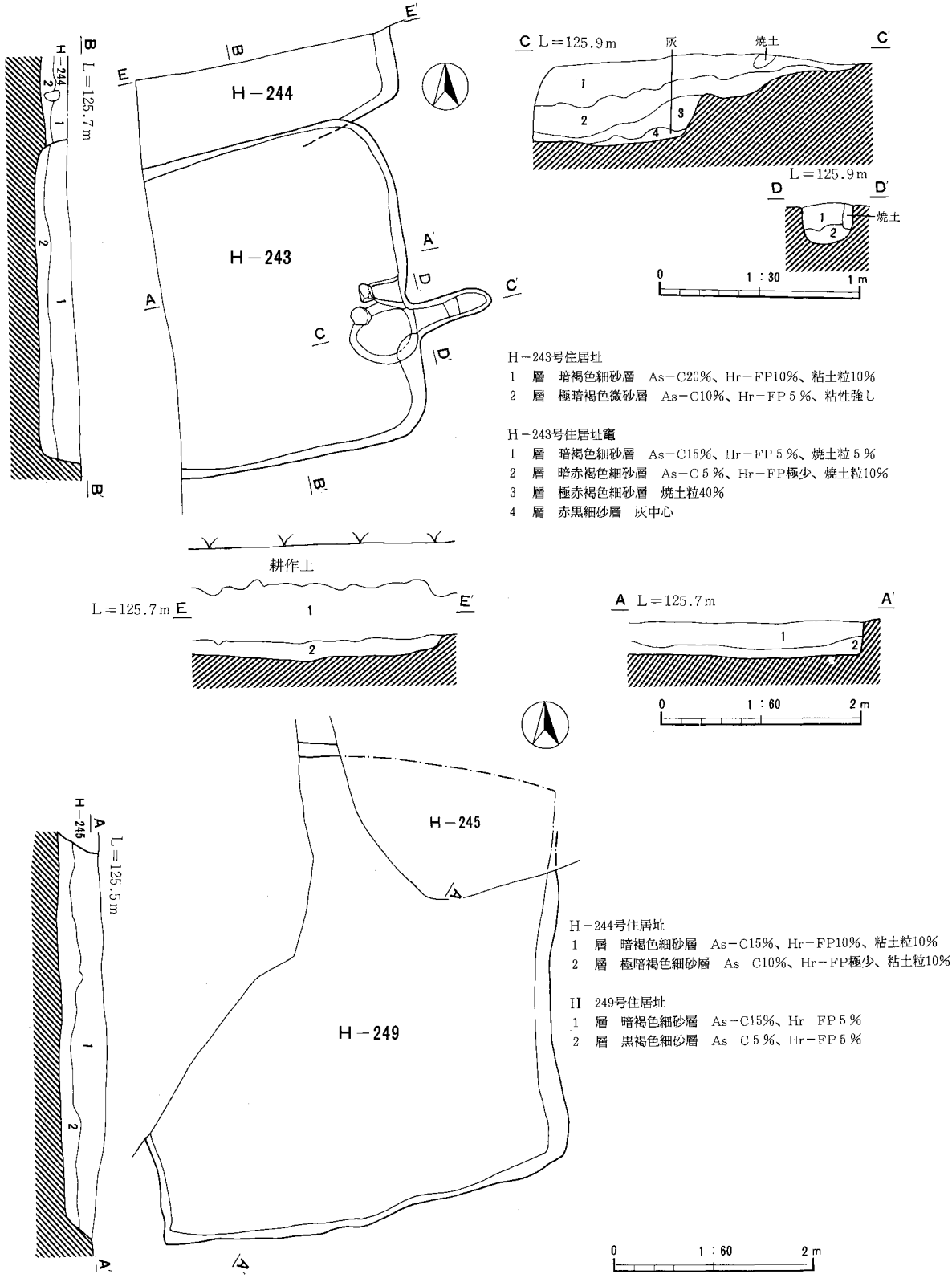
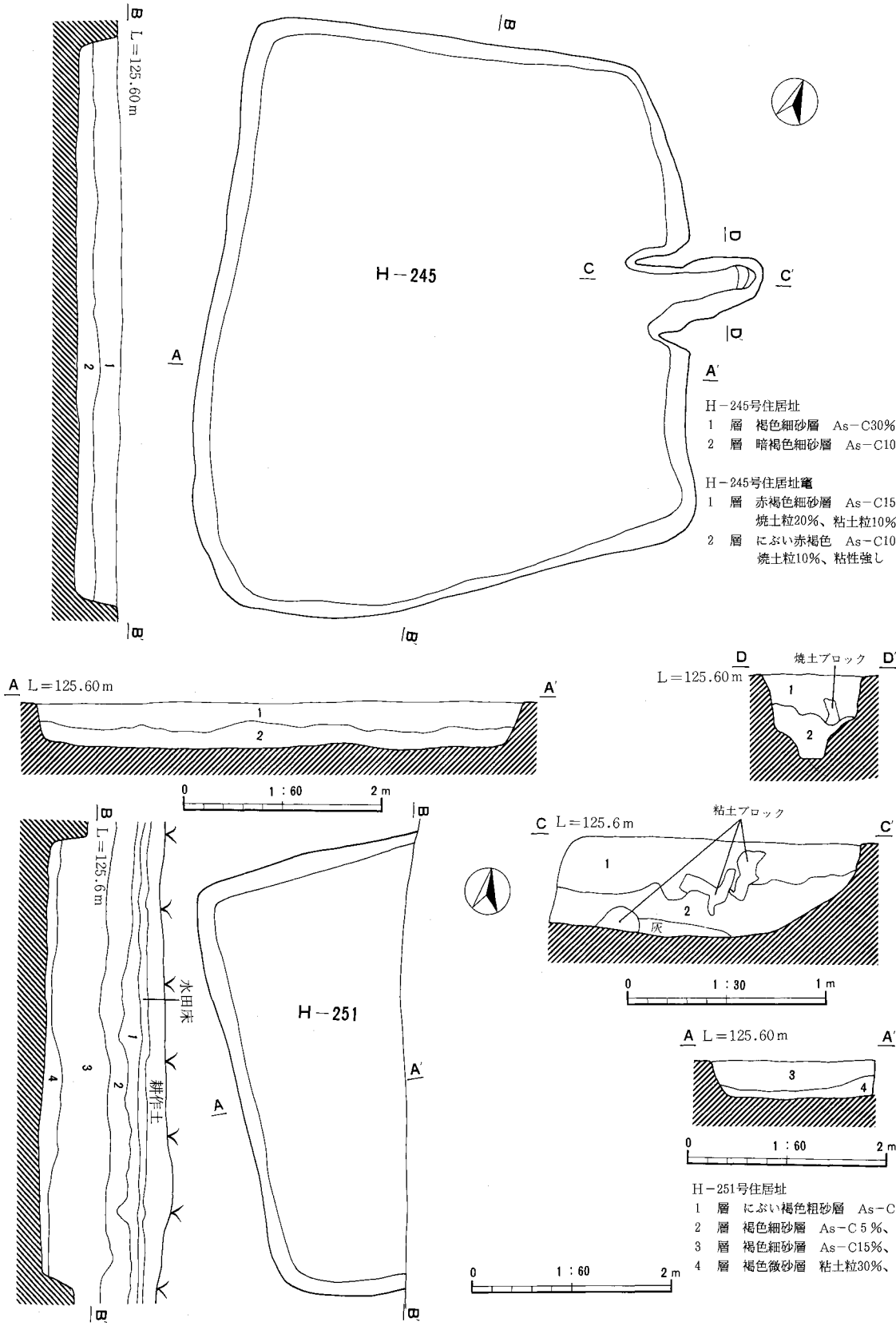


Fig. 35 H－243・244, H－249号住居址



H－245号住居址

1　層　褐色細砂層　As－C30%、Hr－FP10%

2　層　暗褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP 5 %

H－245号住居址竈

1　層　赤褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP 5 %、焼土粒20%、粘土粒10%

2　層　にぶい赤褐色　As－C10%、粘土粒30%、焼土粒10%、粘性強し

H－251号住居址

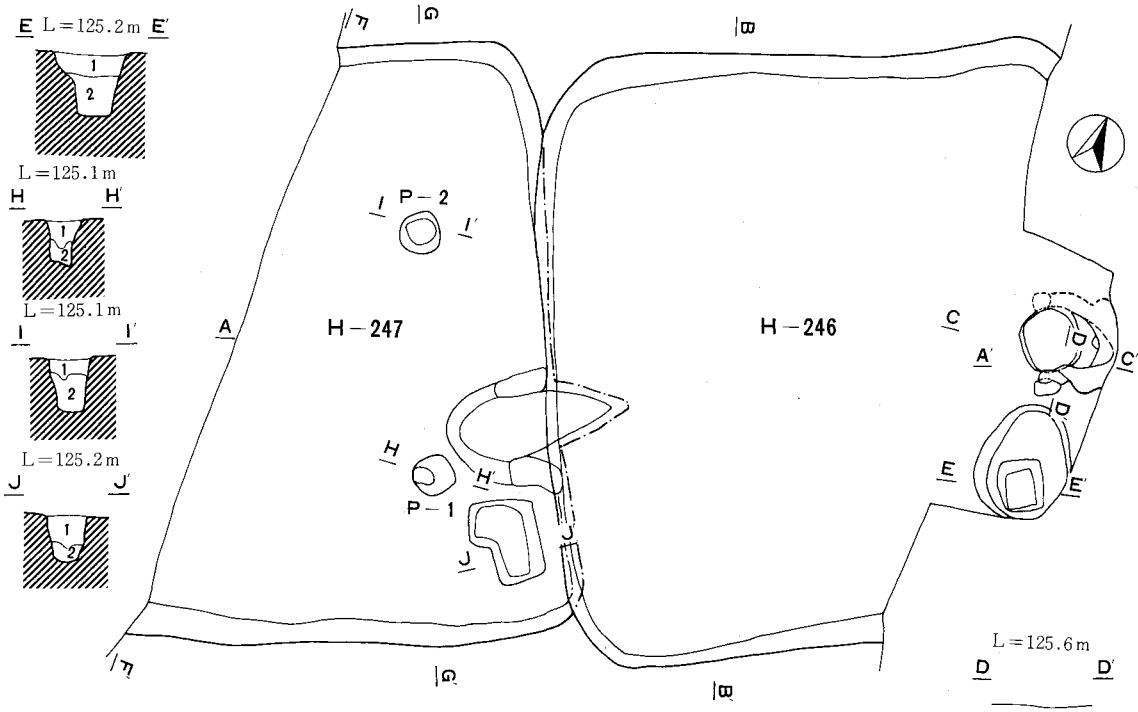
1　層　にぶい褐色粗砂層　As－C、Hr－FP共に見られず

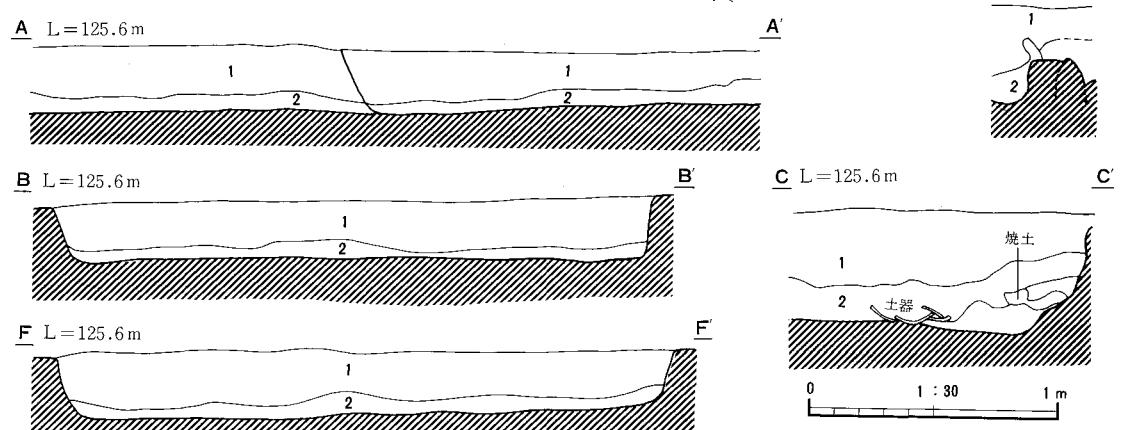
2　層　褐色細砂層　As－C 5 %、Hr－FP極少

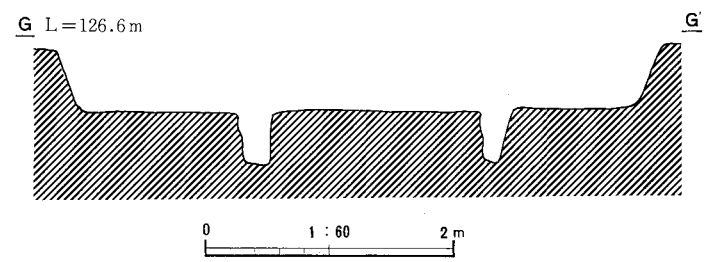
3　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP10%

4　層　褐色微砂層　粘土粒30%、粘性極めて強し

Fig. 36　H－245, H－251号住居址







H－247号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP10%
2　層　褐色細砂層　As－CHr－FP共に極少H－165号住居址

H－247号住居址貯蔵穴
1　層　褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少、粘土粒20%
2　層　暗褐色細砂層　As－C、Hr－FP共に極少、粘土粒５%

H－247号住居址P－１，P－２
1　層　明褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP５%、粘土粒20%
2　層　褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少、粘土粒10%

H－246号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP10%
2　層　褐色細砂層　As－CHr－FP共に極少

H－246号住居址竈
1　層　暗赤褐色細砂層　As－C20%、Hr－FP10%
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C５%、焼土粒10%、粘土粒10%

H－246号住居址貯蔵穴
1　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少
2　層　極暗褐色微砂層　黒褐色粘土粒20%、明褐色粘土粒10%

Fig. 37　H－246・247号住居址

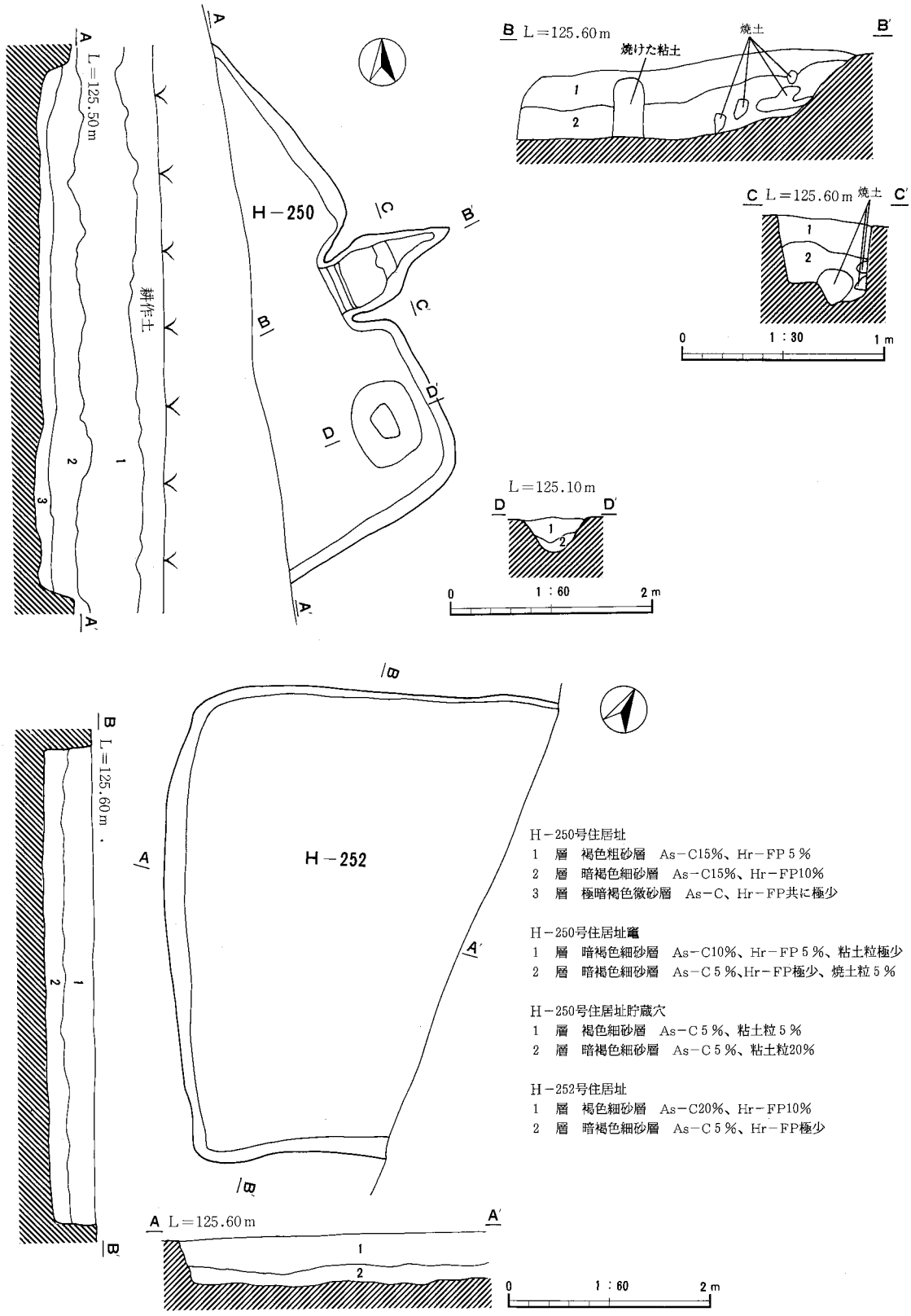
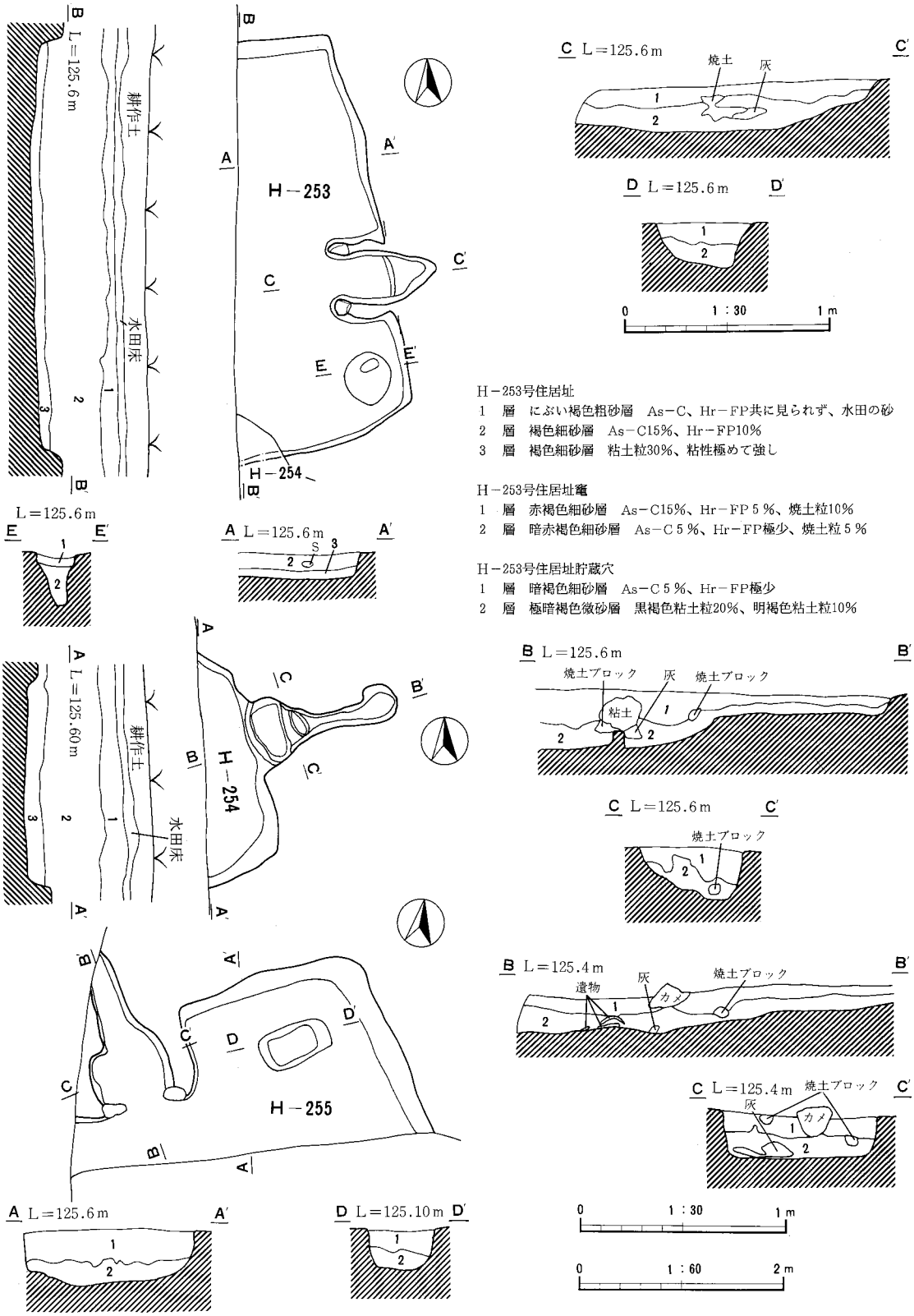


Fig. 38 H－250, H－252号住居址



H－253号住居址

1　層　にぶい褐色粗砂層　As－C、Hr－FP共に見られず、水田の砂

2　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP10%

3　層　褐色細砂層　粘土粒30%、粘性極めて強し

H－253号住居址竈

1　層　赤褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP５%、焼土粒10%

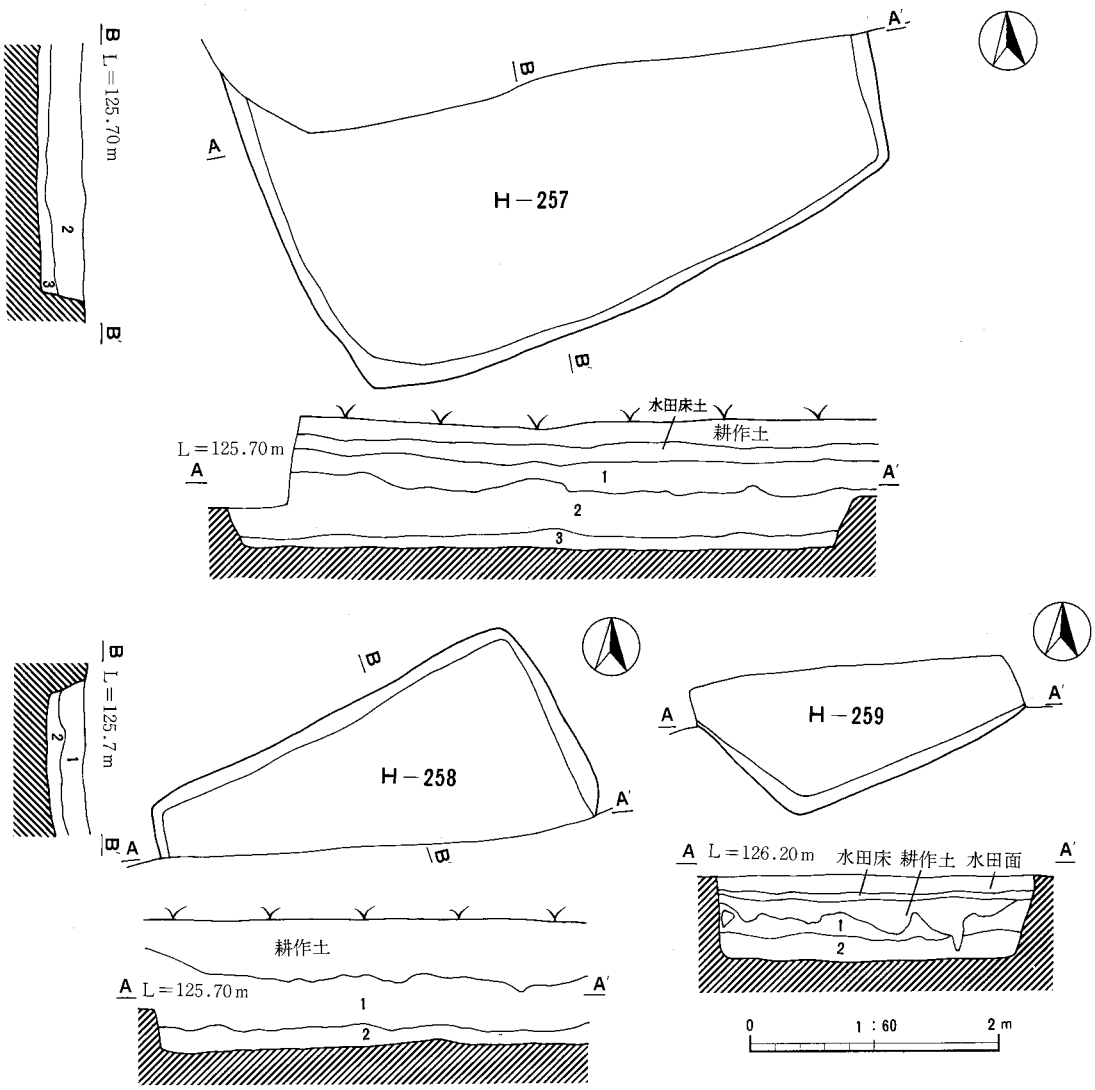
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少、焼土粒５%

H－253号住居址貯蔵穴

1　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少

2　層　極暗褐色微砂層　黒褐色粘土粒20%、明褐色粘土粒10%

Fig. 39　H－253, H－254, H－255号住居址



H－254号住居址
1　層　にぶい褐色粗砂層　As－C、Hr－FP共に見られず、水田の砂
2　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP10%
3　層　褐色細砂層　粘土粒30%、粘性極めて強しH－169号住居址

H－254号住居址竈
1　層　赤褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP５%
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C、Hr－FP、焼土粒10%

H－255号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP10%
2　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少

H－255号住居址竈
1　層　灰褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少、灰交じり
2　層　赤褐色細砂層　As－C、Hr－FP極少、焼土粒20%

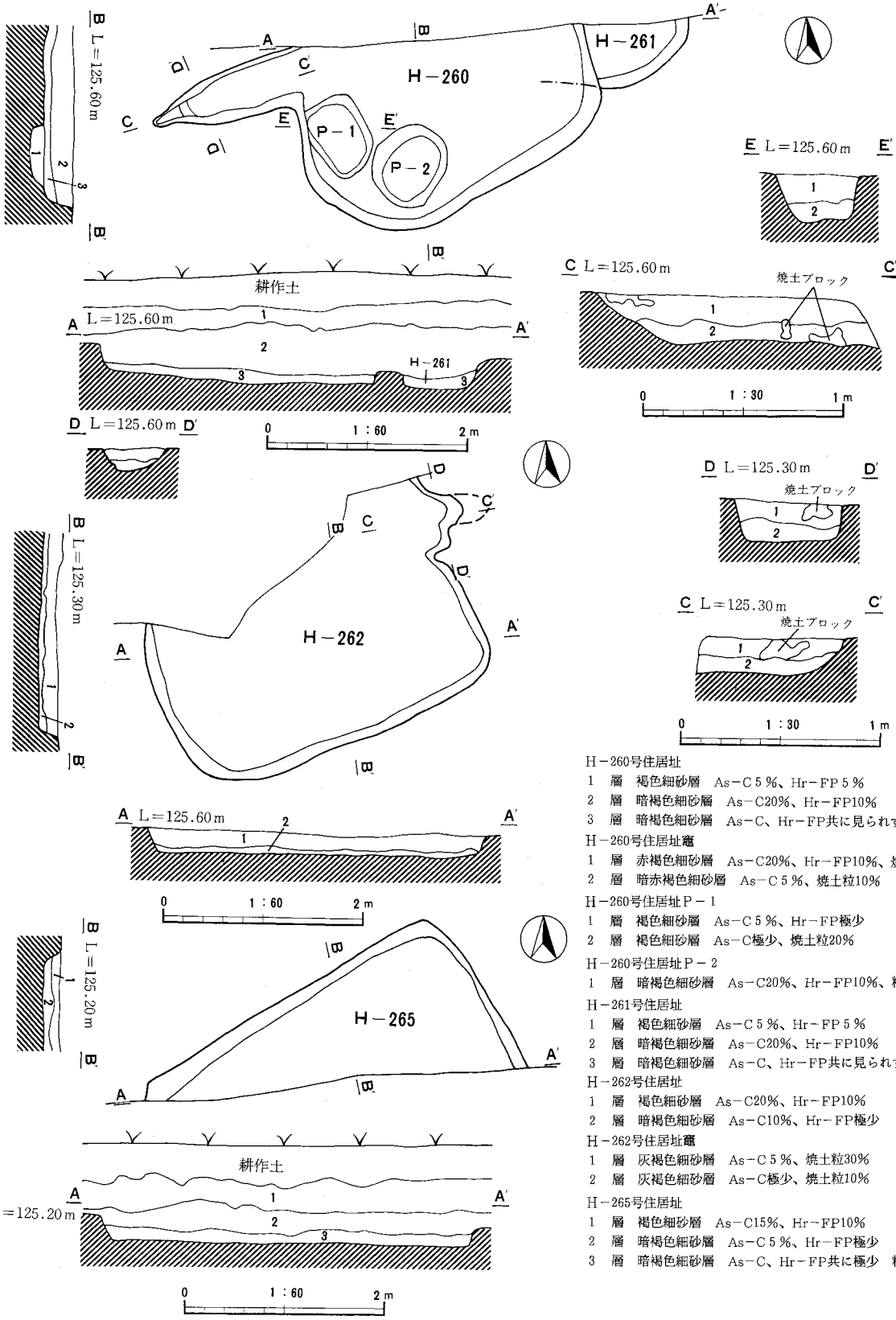
H－255号住居址Ｐ－1
1　層　褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少
2　層　褐色細砂層　As－C10%、すみ５%

H－257号住居址
1　層　褐色微砂層　As－C10%、Hr－FP５%
2　層　褐色細砂層　As－C20%、Hr－FP10%
3　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少

H－258号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP５%
2　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少

H－259号住居
1　層　褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP５%
2　層　暗褐色細砂層　As－C５%、Hr－FP極少

Fig. 40　H－257, H－258, H－259号住居址



H－260号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C５％、Hr－FP５％
2　層　暗褐色細砂層　As－C20％、Hr－FP10％
3　層　暗褐色細砂層　As－C、Hr－FP共に見られず

H－260号住居址竈
1　層　赤褐色細砂層　As－C20％、Hr－FP10％、焼土粒15％
2　層　暗赤褐色細砂層　As－C５％、焼土粒10％

H－260号住居址Ｐ－１
1　層　褐色細砂層　As－C５％、Hr－FP極少
2　層　褐色細砂層　As－C極少、焼土粒20％

H－260号住居址Ｐ－２
1　層　暗褐色細砂層　As－C20％、Hr－FP10％、粘土粒10％

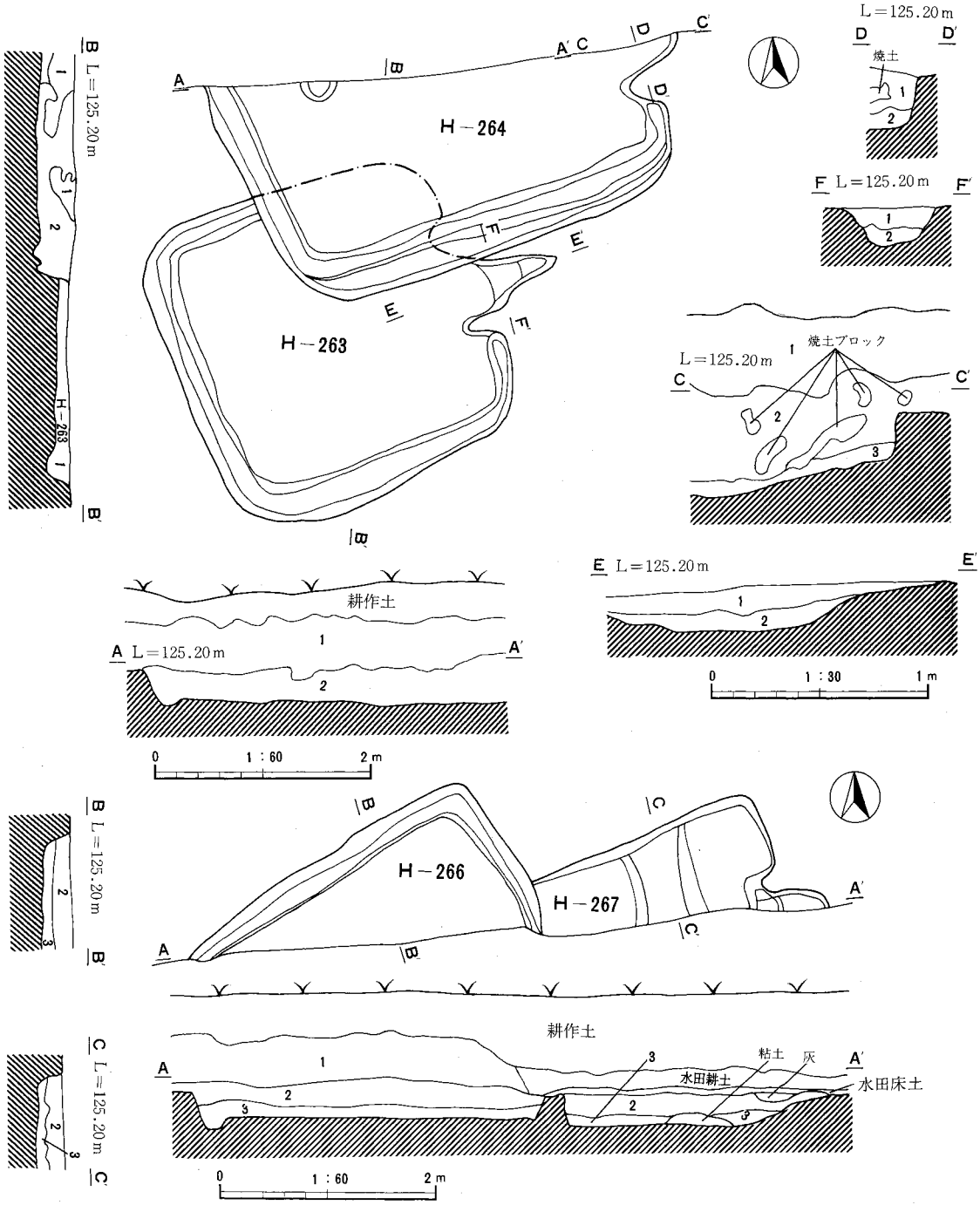
H－261号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C５％、Hr－FP５％
2　層　暗褐色細砂層　As－C20％、Hr－FP10％
3　層　暗褐色細砂層　As－C、Hr－FP共に見られず

H－262号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C20％、Hr－FP10％
2　層　暗褐色細砂層　As－C10％、Hr－FP極少

H－262号住居址竈
1　層　灰褐色細砂層　As－C５％、焼土粒30％
2　層　灰褐色細砂層　As－C極少、焼土粒10％

H－265号住居址
1　層　褐色細砂層　As－C15％、Hr－FP10％
2　層　暗褐色細砂層　As－C５％、Hr－FP極少
3　層　暗褐色細砂層　As－C、Hr－FP共に極少　粘性強し

Fig. 41　H－260・261，H－262，H－265号住居址



H－263号住居址

1　層　暗褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP 5 %

H－263号住居址竈

1　層　暗赤褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP 5 %、焼土粒20%

2　層　暗赤褐色細砂層　As－C 5 %、焼土粒15%

H－264号住居址

1　層　褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP 5 %

2　層　褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP 5 %、焼土粒15%、粘土粒10%

3　層　暗褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP極少、焼土粒 5 %

H－264号住居址竈

1　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP 5 %

2　層　暗赤褐色細砂層　As－C 5 %、Hr－FP極少、焼土粒10%

3　層　極赤褐色細砂層　As－C、Hr－FP共に極少、焼土粒40%、灰まじり

H－266・267号住居址

1　層　褐色細砂層　As－C20%、Hr－FP10%、粘土粒 5 %

2　層　暗褐色細砂層　As－C10%、Hr－FP 5 %、粘土粒 5 %

3　層　暗褐色細砂層　As－C 5 %、Hr－FP極少

Fig. 42　H－263・264, H－266・267号住居址

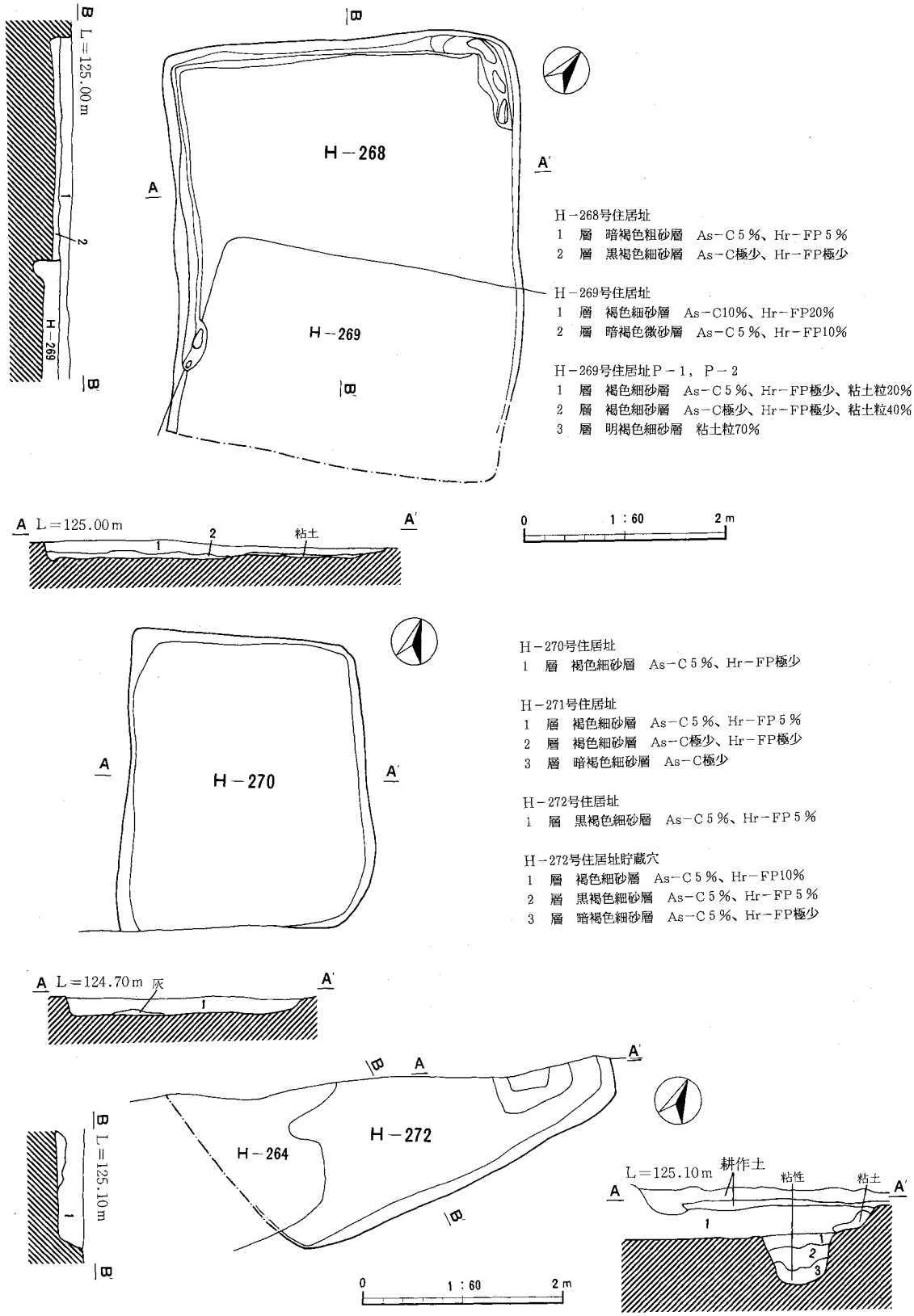
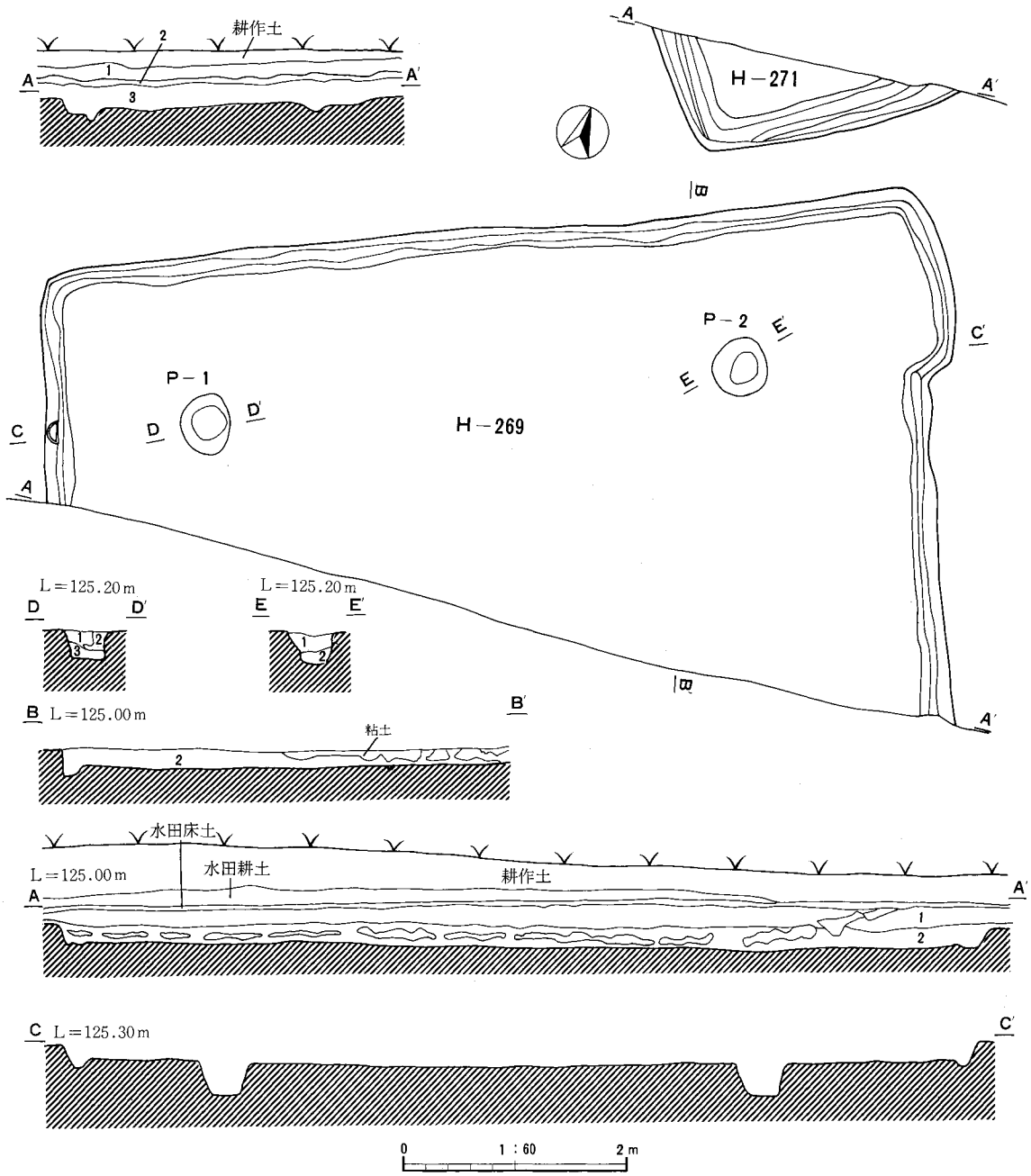


Fig. 43　H－268, H－270, H－272号住居址



H－273・274号住居址
1　層　暗褐色細砂層　As－C20%、Hr－FP 5 %
2　層　暗褐色細砂層　As－C 5 %、Hr－FP極少

D－138
1　層　極暗褐色粗砂層　As－C20%、Hr－FP極少
2　層　黒褐色細砂層　As－C10%

W－13
1　層　にぶい褐色粗砂層　As－C 5 %、Hr－FP極少、水田の砂
2　層　褐色細砂層　As－C15%、Hr－FP 5 %
3　層　黒褐色粗砂層　As－B純層
4　層　浅黄橙微砂層　As－B火山灰
5　層　灰黄褐色粗砂層　As－B軽石、極めて粗い砂利層
6　層　褐色微砂層層　粘土粒30%、粘性極めて強し

Fig. 44　H－269, H－271号住居址

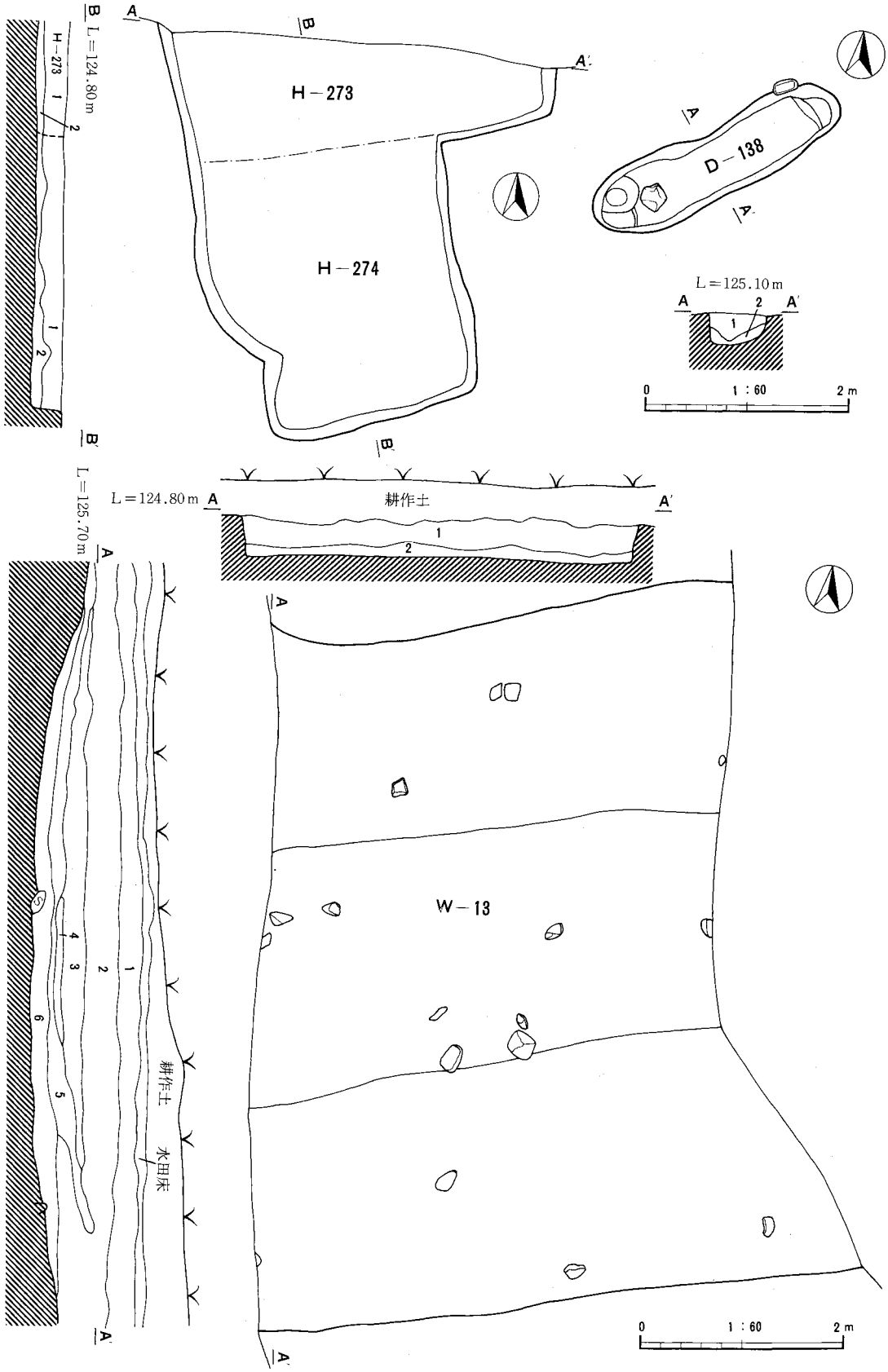


Fig. 45　H－273・274号住居址、D－138号土坑、W－13号溝址

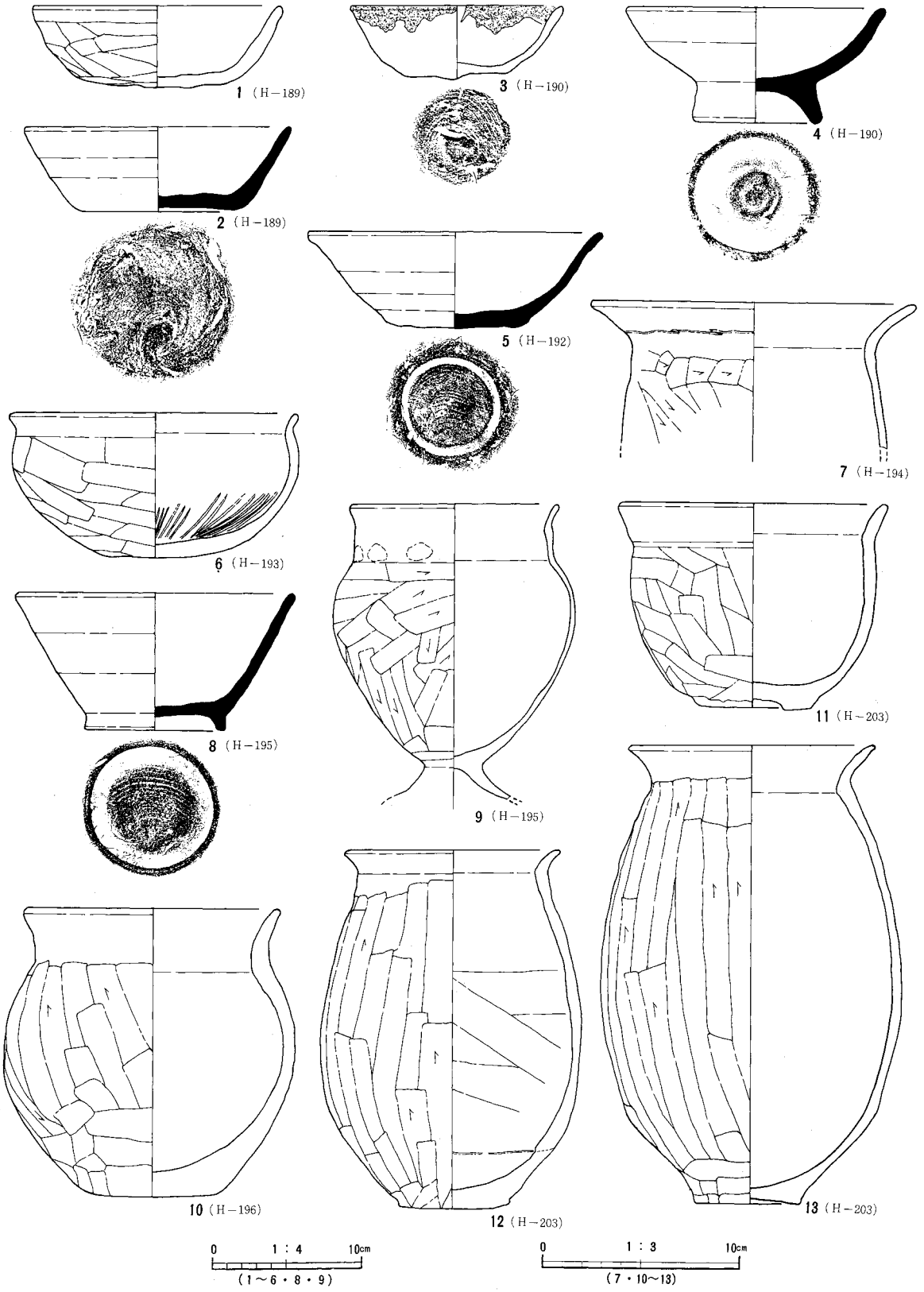


Fig. 46　H−189〜190・H−192〜196・H−203号住居址出土の土器

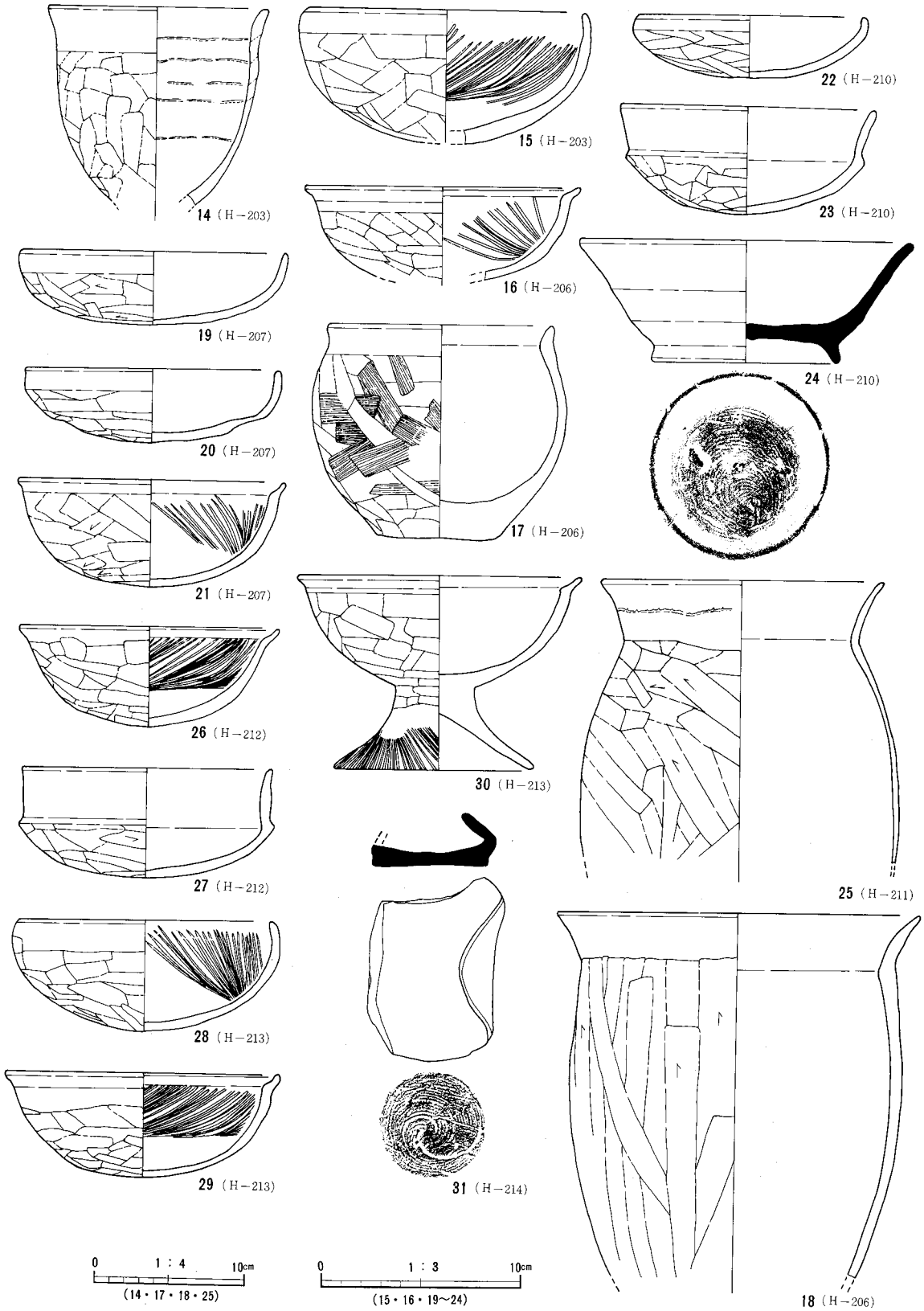


Fig. 47　H－203・206・207・210～214号住居址出土の土器

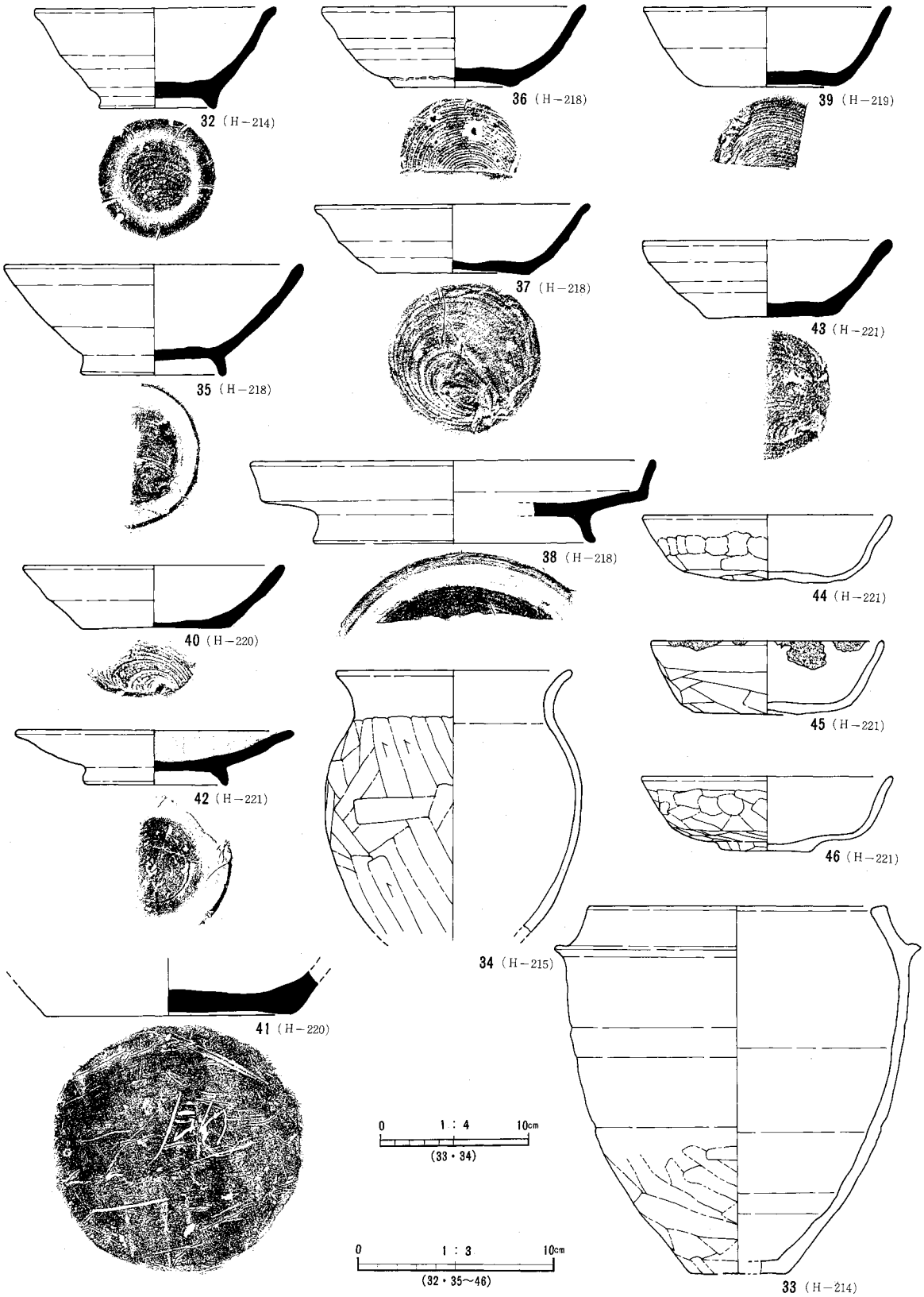


Fig. 48　H－214・215・H－218～221号住居址出土の土器

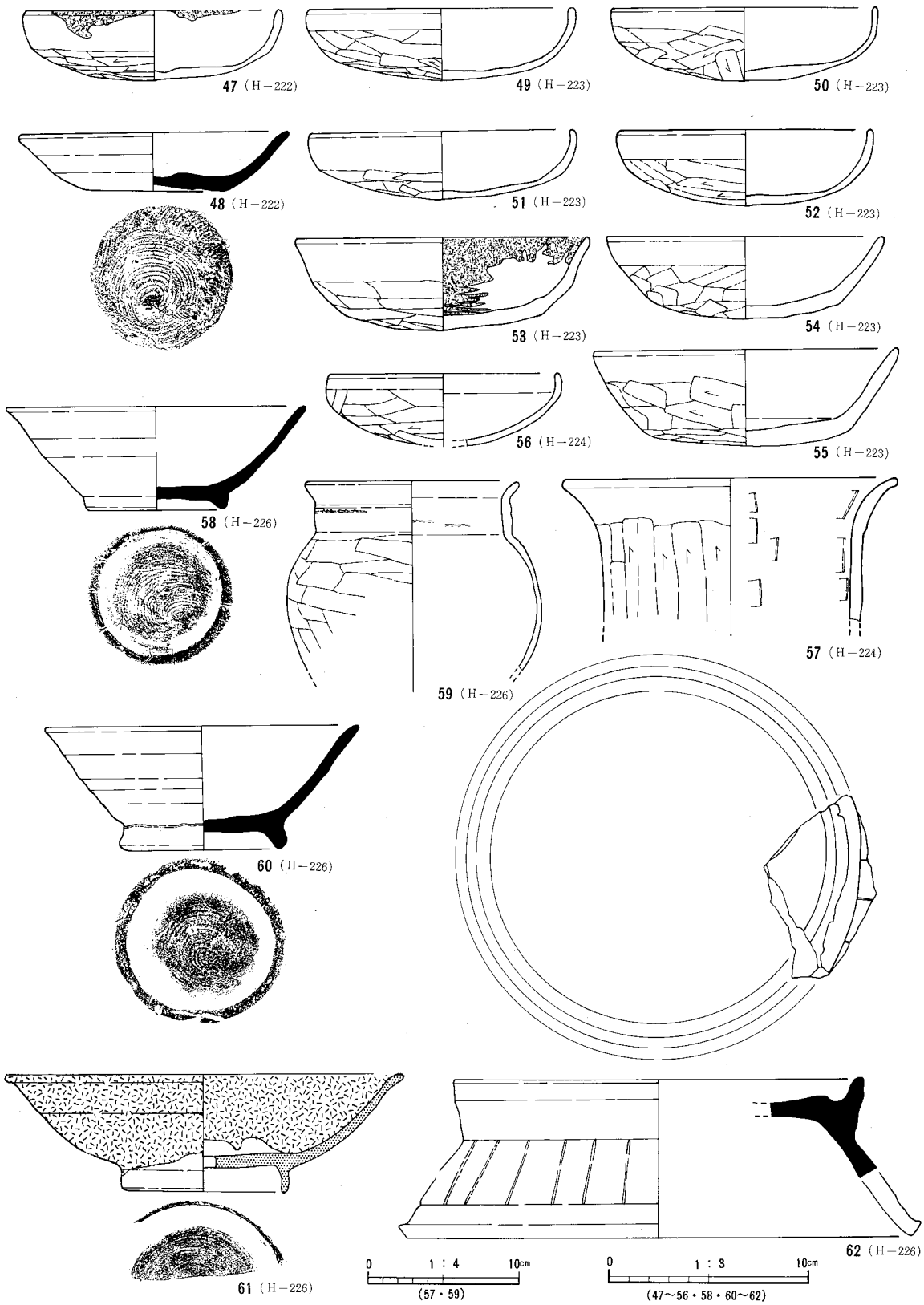


Fig. 49　H−222〜224・226号住居址出土の土器

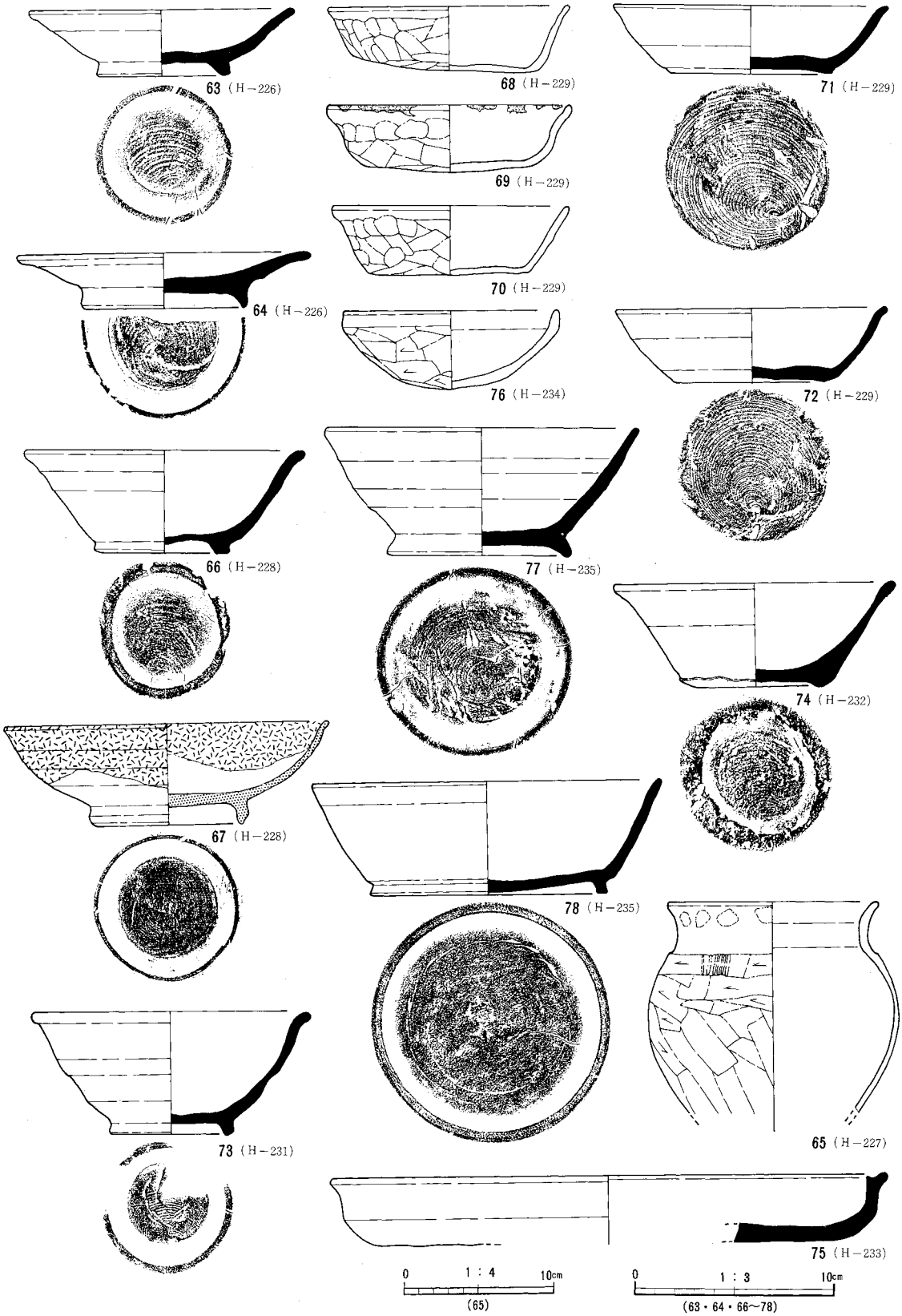


Fig. 50　H－226～229・231～235号住居址出土の土器

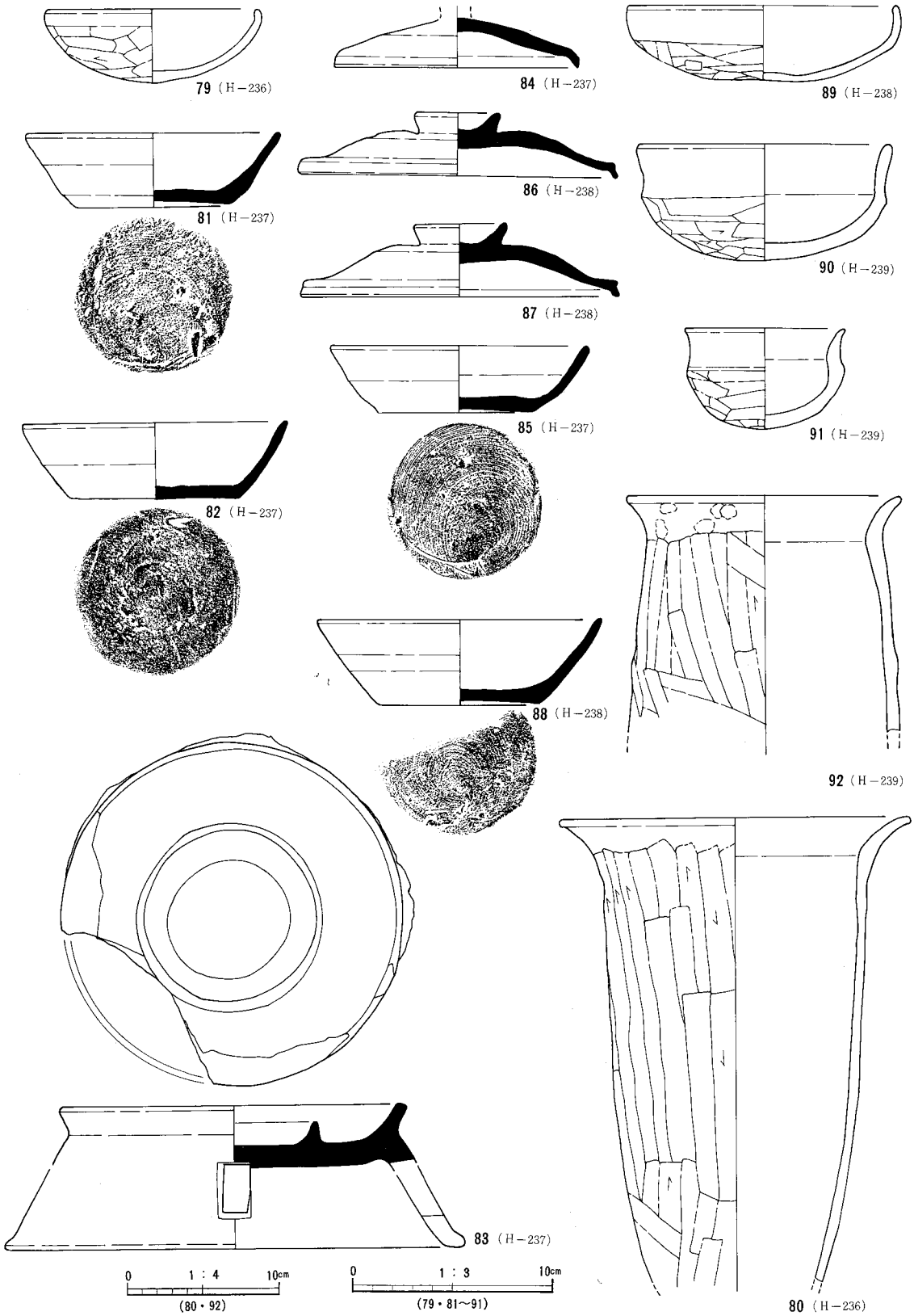


Fig. 51　H－236～239号住居址出土の土器

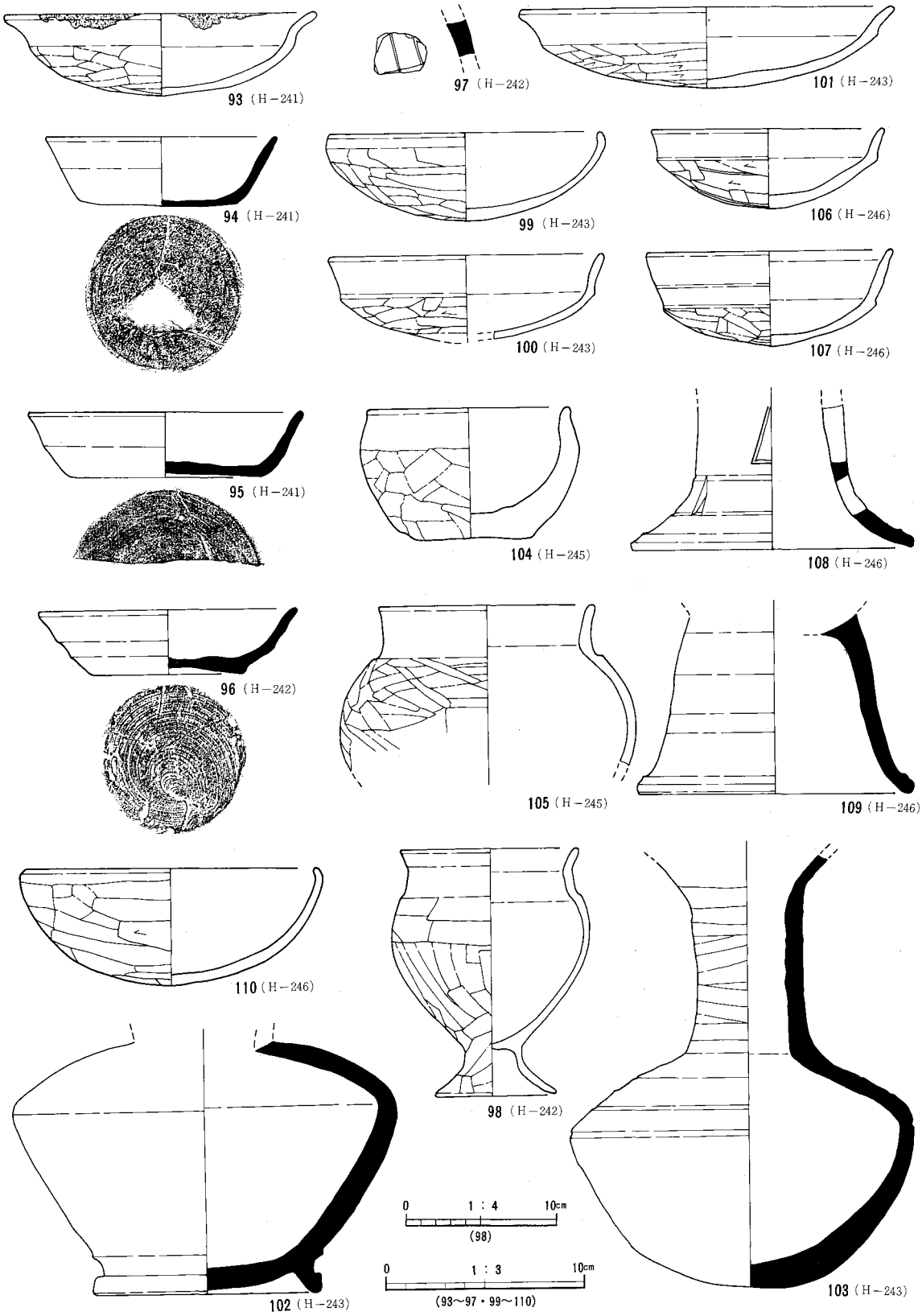


Fig. 52　H－241・242・243, H－245・246号住居址出土の土器

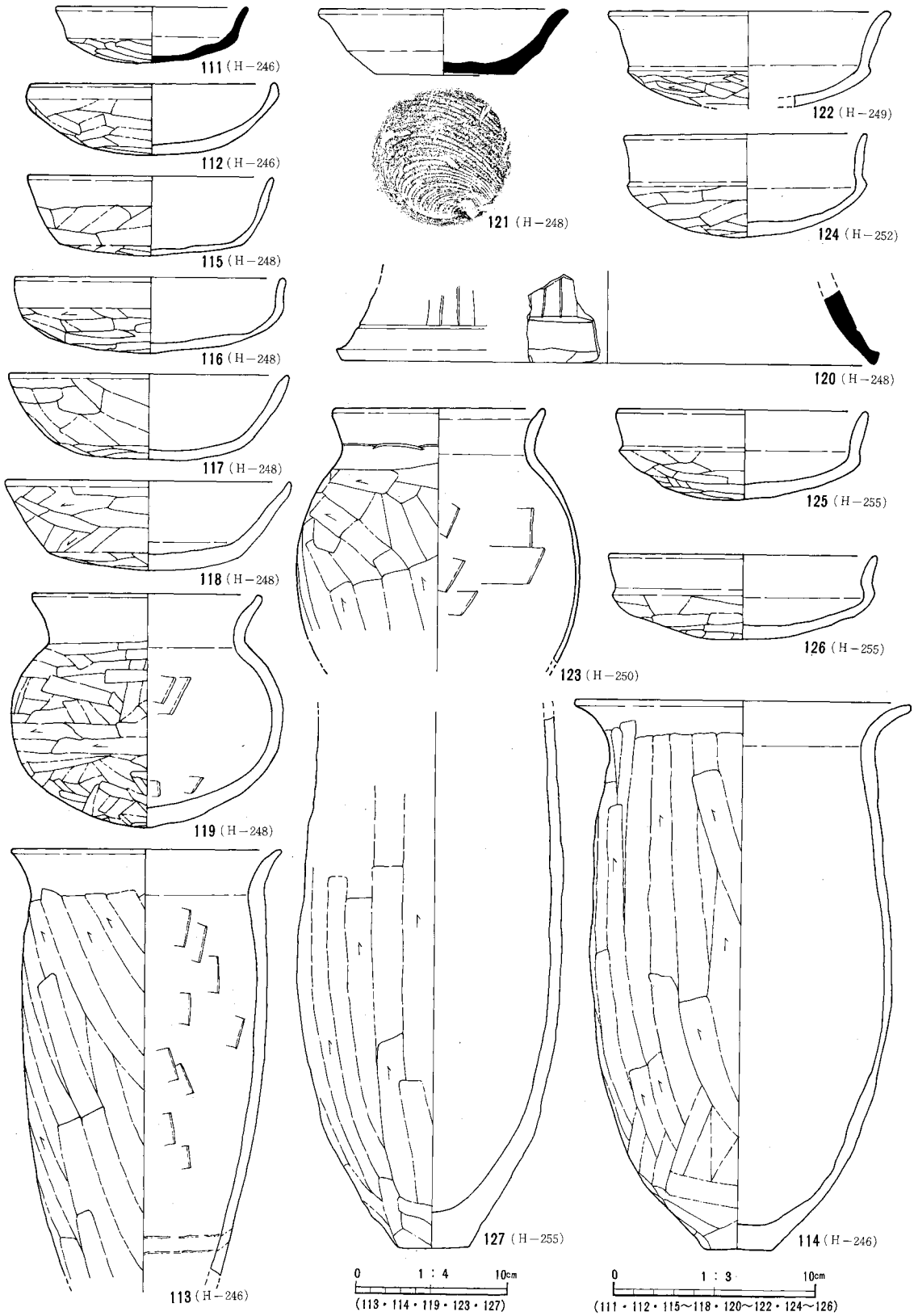


Fig. 53　H－246・248・249・250・255号住居址出土の土器

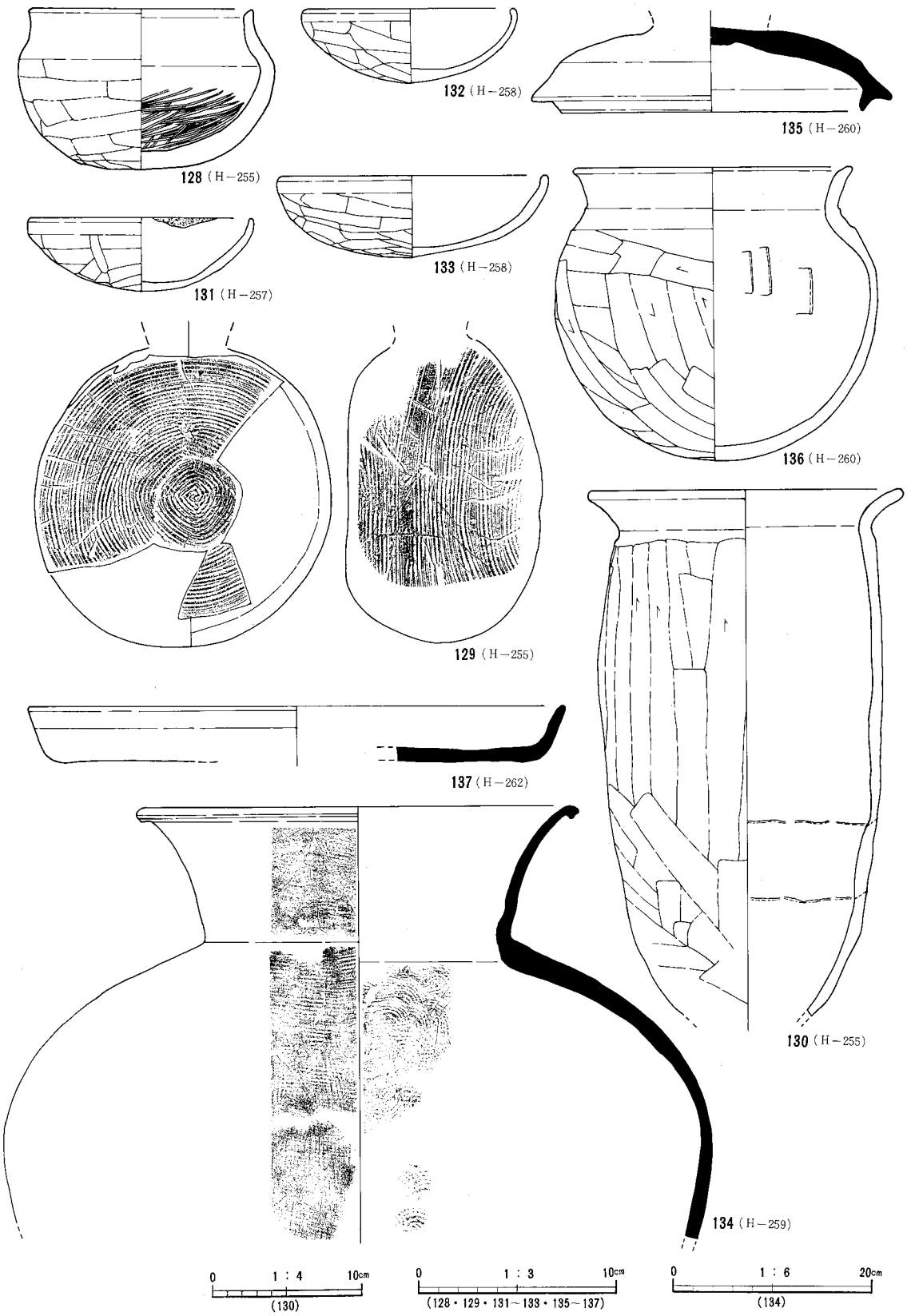


Fig. 54　H－255・257・258・259・260・262号住居址出土の土器

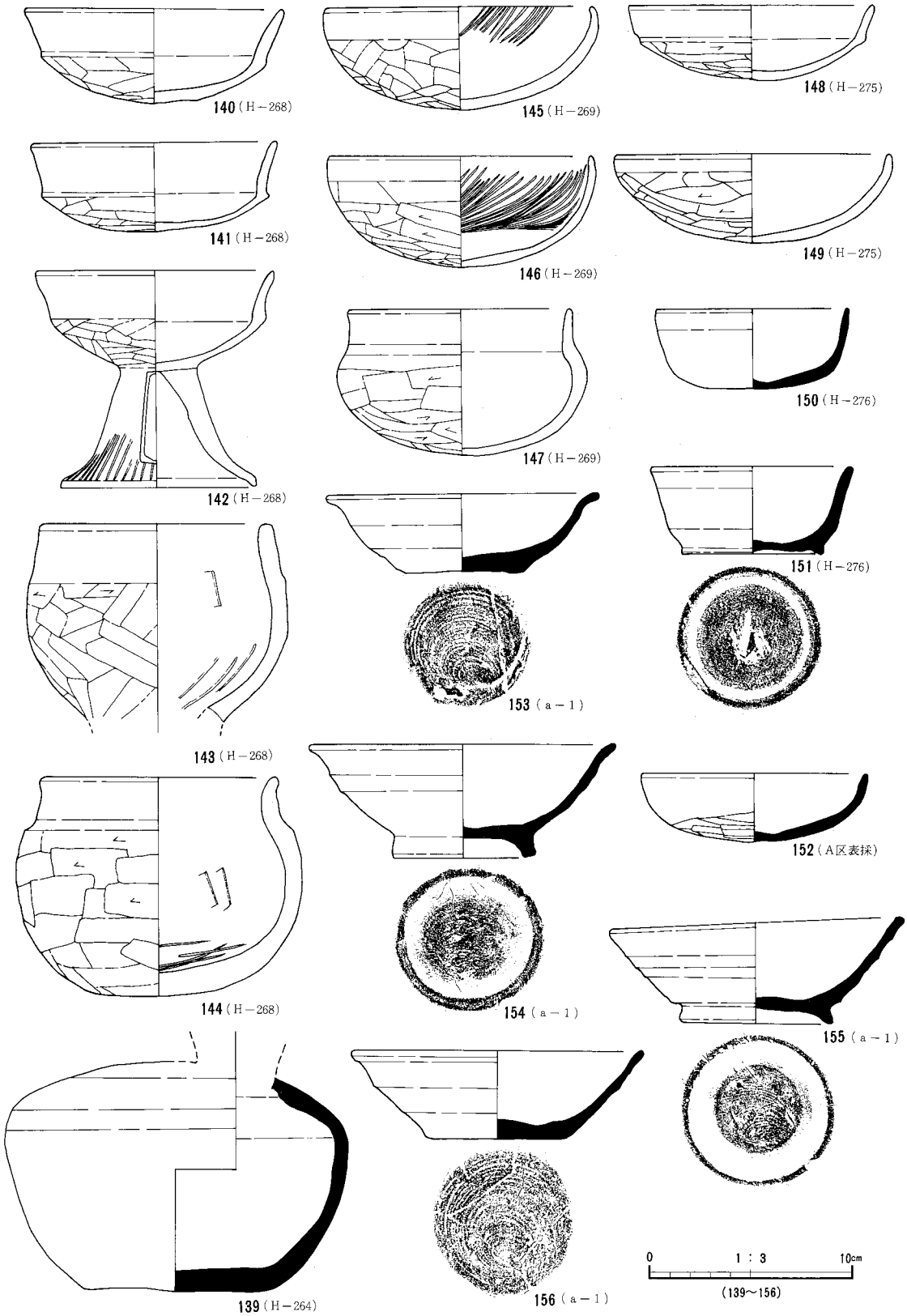


Fig. 55　H－263・268・269・275・276号住居址・A区表採・a－1出土の土器

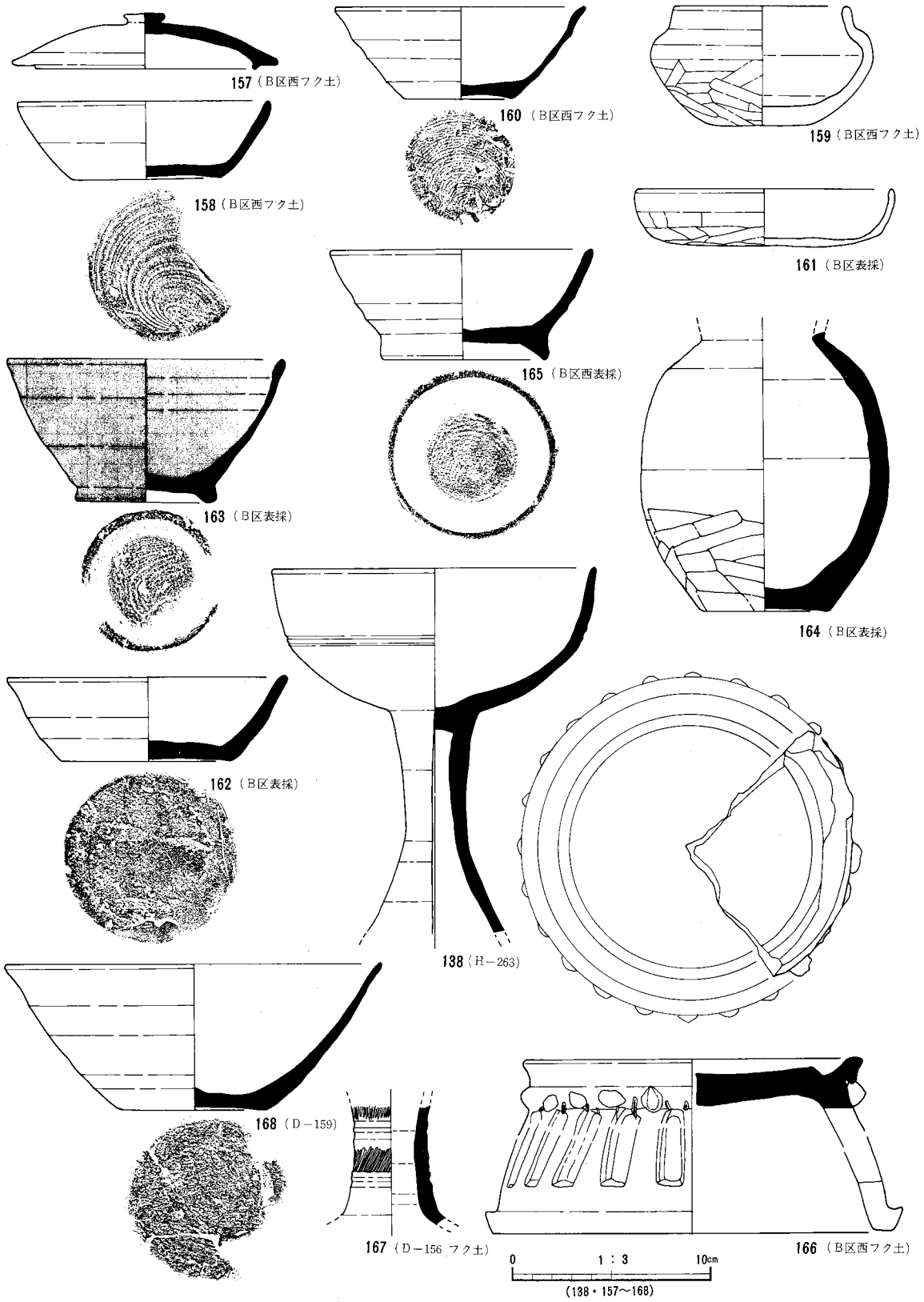


Fig. 56　H－263・B区西フク土と表採・出土の土器

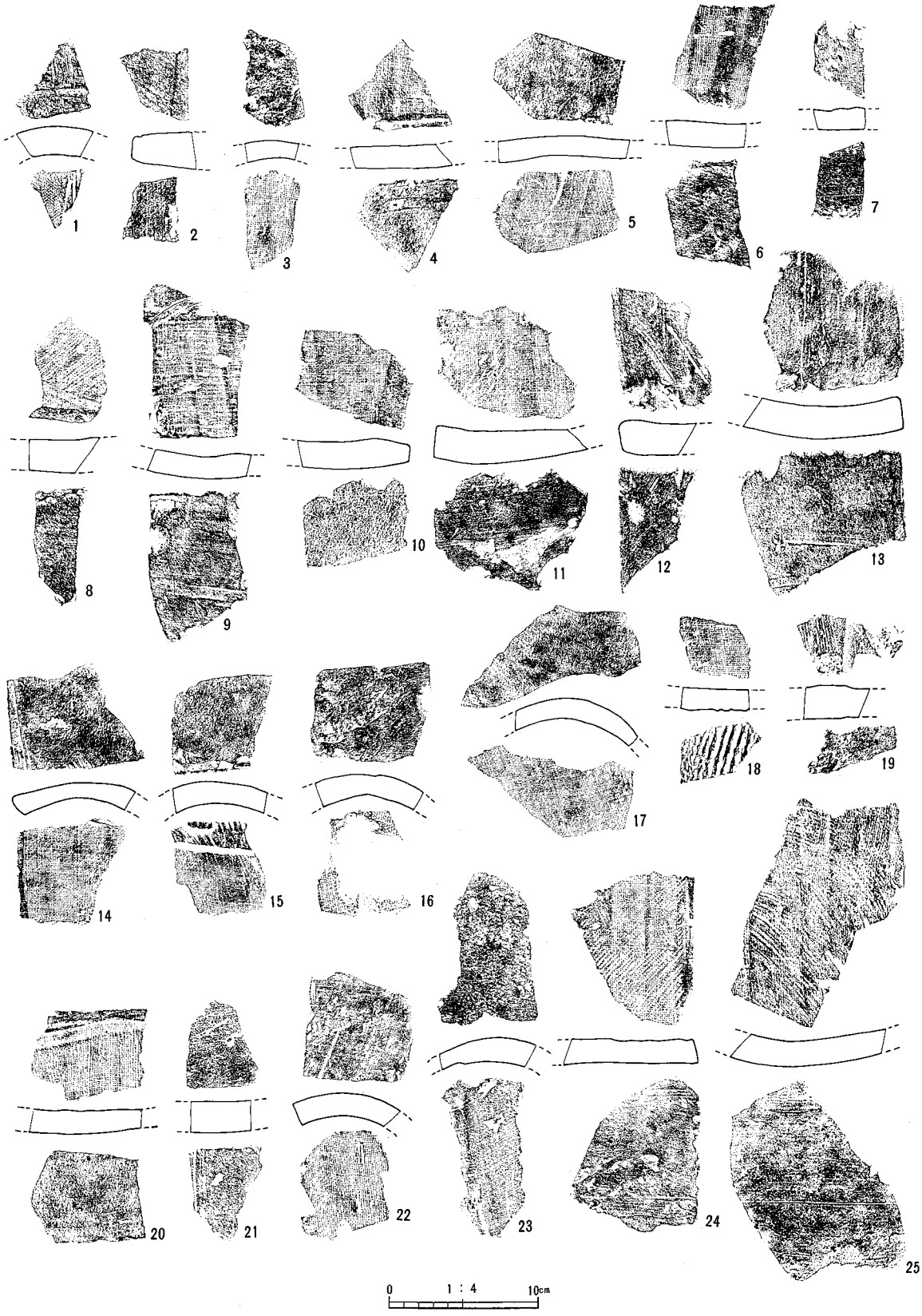


Fig. 57　　瓦　　(1)

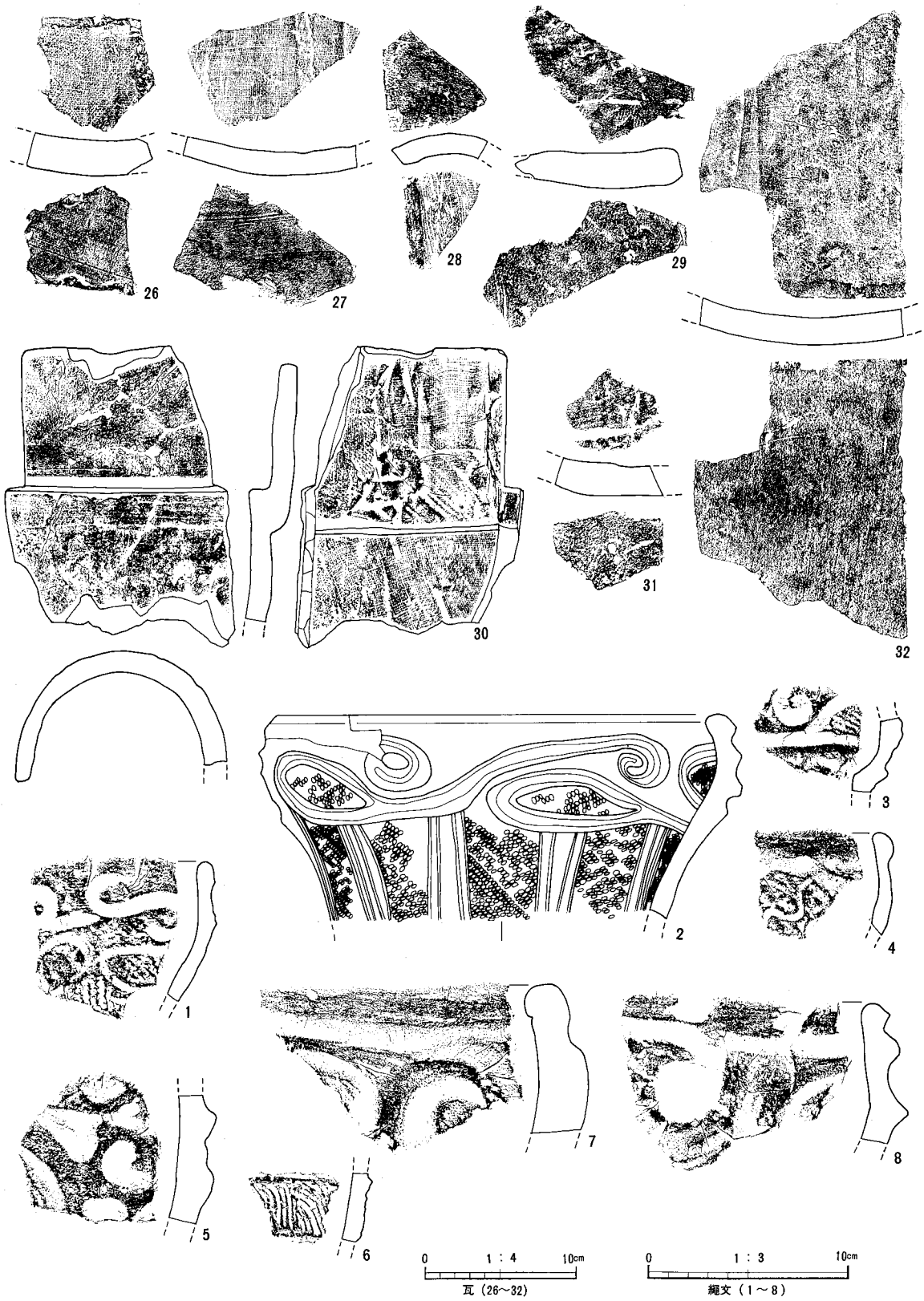


Fig. 58　瓦(2)、縄文土器(1)

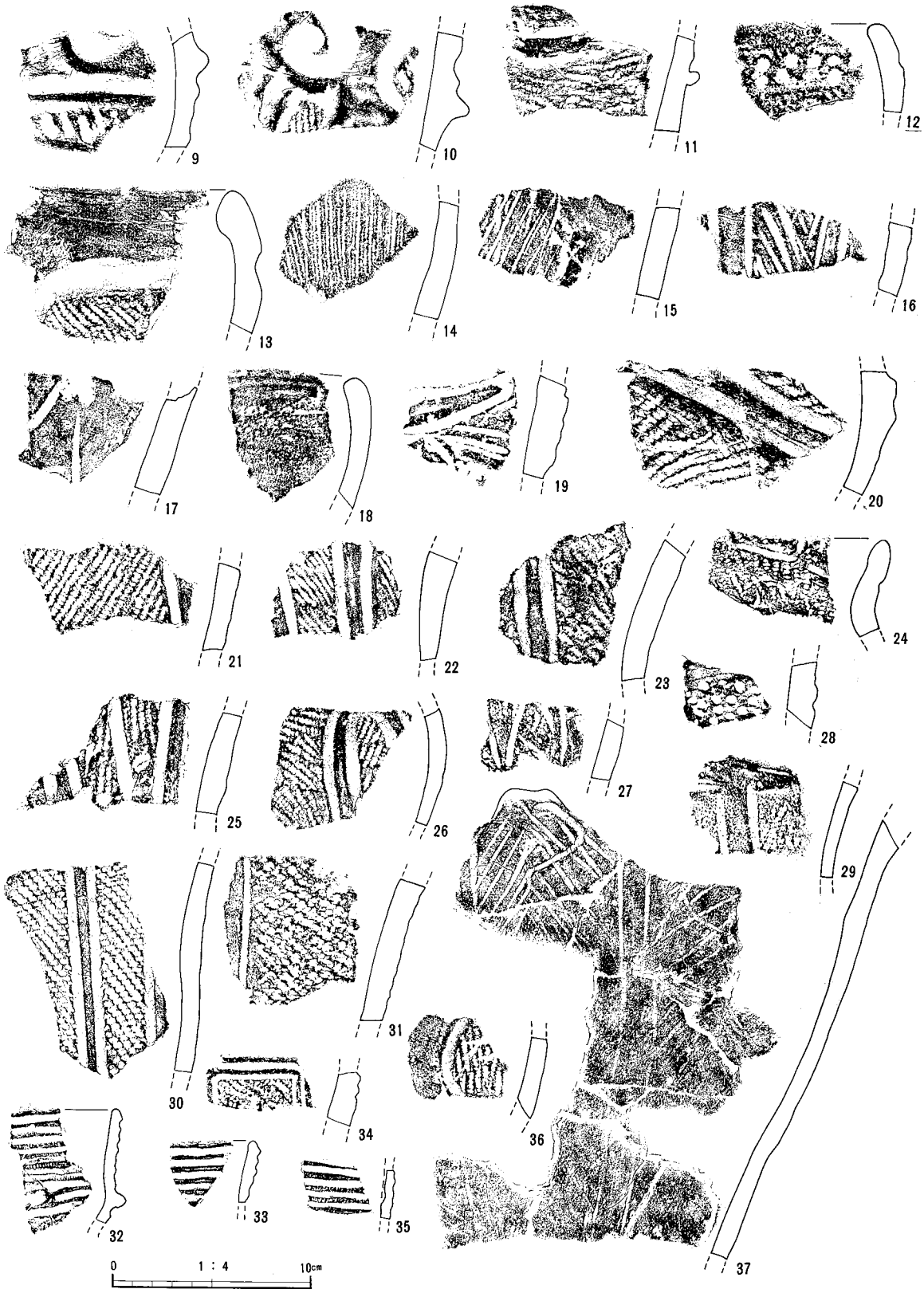

9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
0
1 : 4
10cm

Fig. 59　縄 文 土 器 (2)

1
(H−191)
2
(H−192)
3
(H−207)
4
(H−246)
5
(X60 Y88)
6
(H−207)
7
(W−13)
8
(X57 Y88)
9
(H−208)
10
(H−201)
11
(H−246)
12
(A区表採)
13
(X57 Y87)
14
(X61 Y90)
15
(H−248)
16
(H−237)
17
(H−207)
18
(X68 Y88)
19
(H−214)
20
(H−238)
21
(H−226)
0 2 : 3 5cm
(1〜5)
0 1 : 3 10cm
(6〜21)

Fig. 60 石 器，石製品

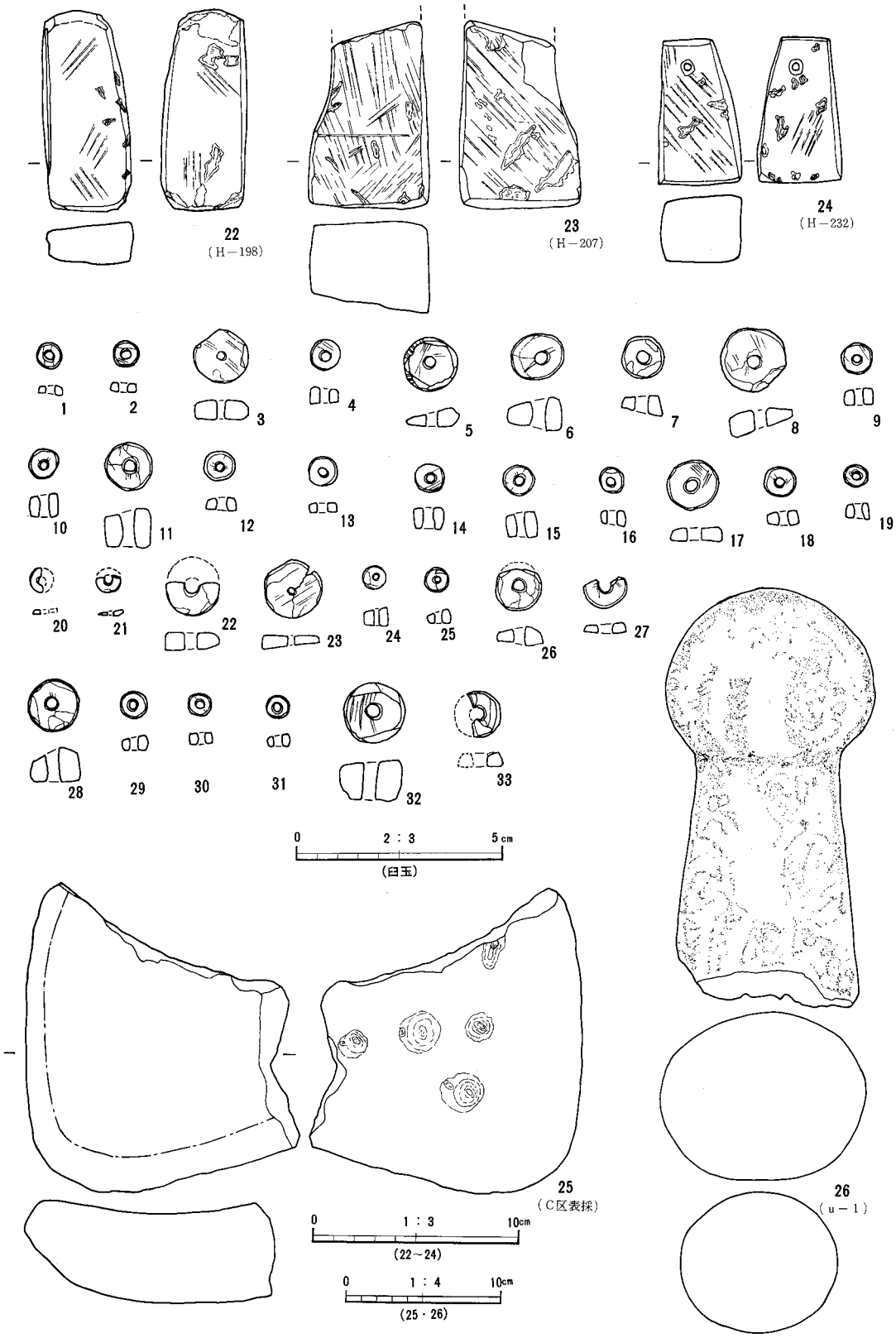

22
(H－198)
23
(H－207)
24
(H－232)
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0
2：3
5cm
(臼玉)
25
(C区表採)
0
1：3
10cm
(22～24)
0
1：4
10cm
(25・26)
26
(u－1)

Fig. 61　石製品・臼　玉

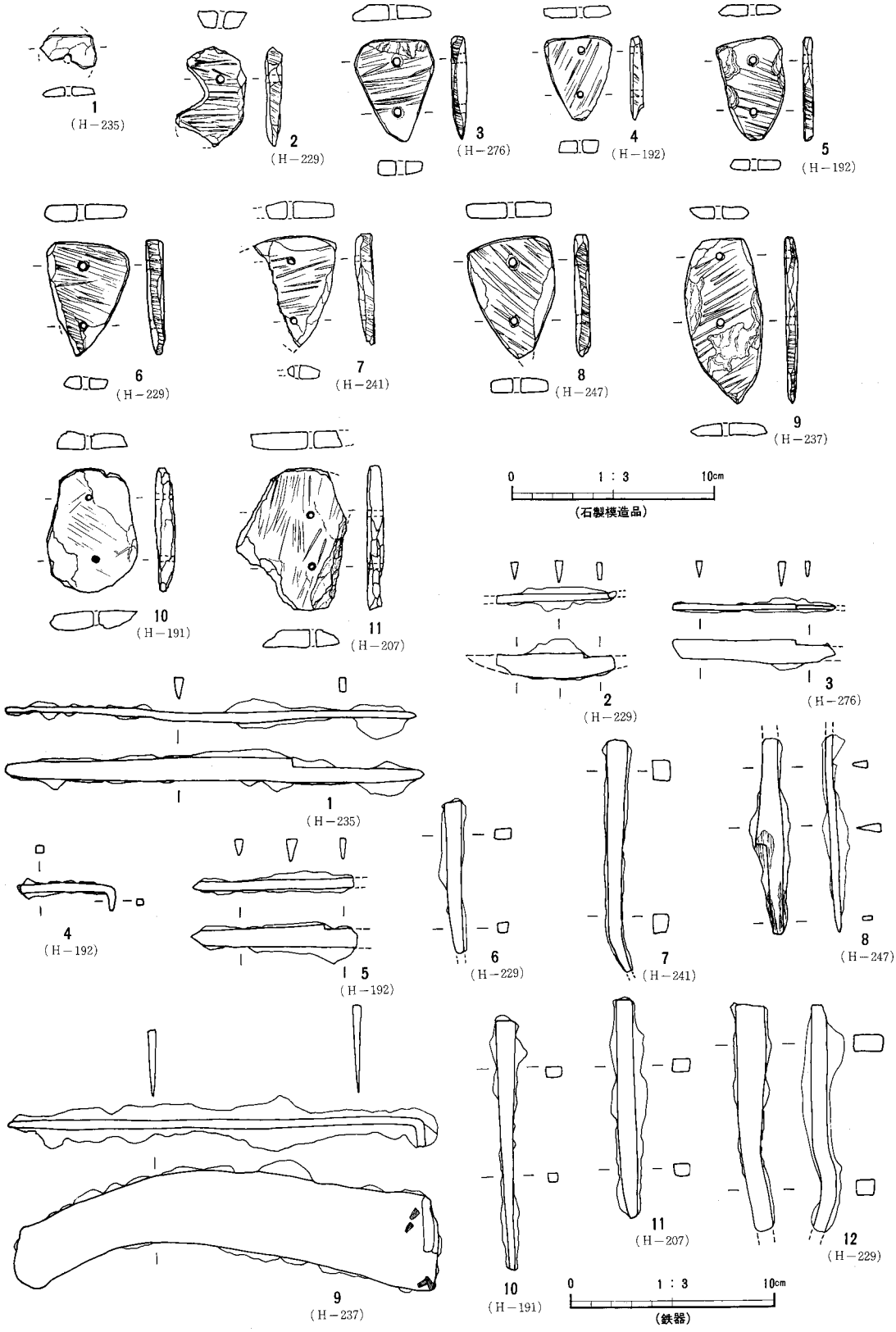
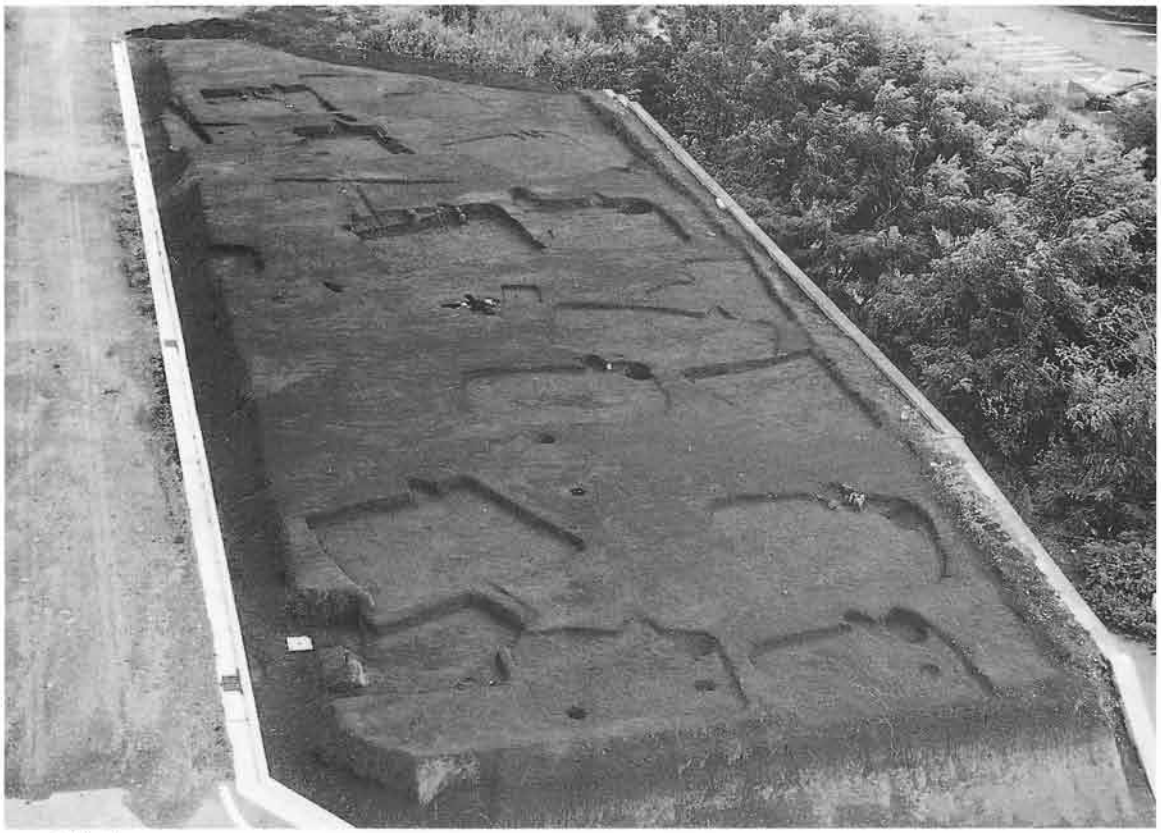
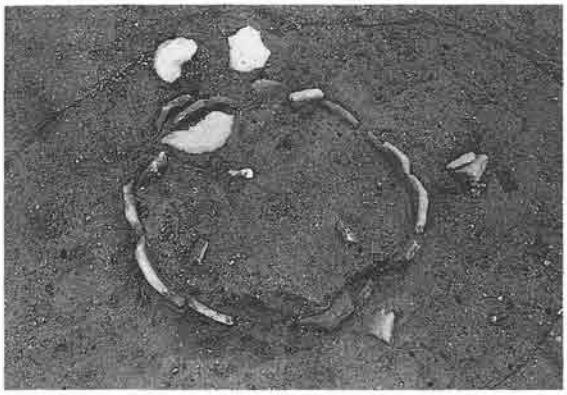


Fig. 62　石製模造品・鉄器



1．A区全景

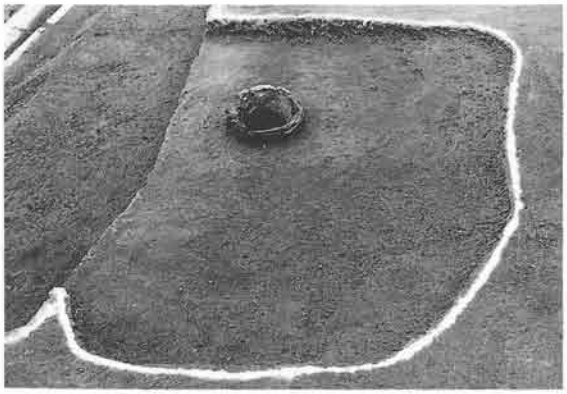
2．B区・C区交差点（南西）



1．A区U－1（南）

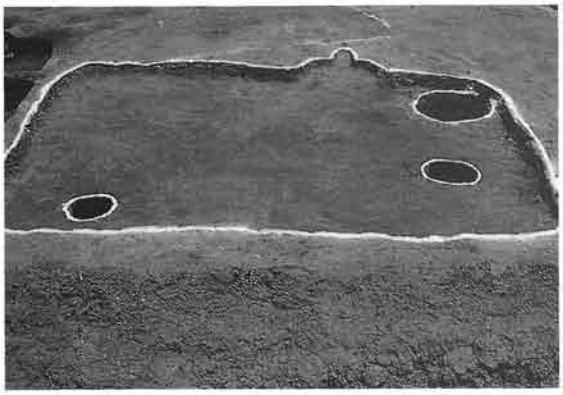
2．U－1遺物出土状態（南）

3．U－1遺物出土状態（南）

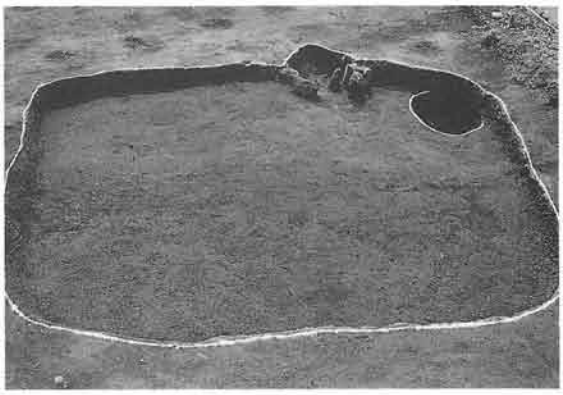


4．J－1（西）

5．J－1遺物出土状態（北東）



1．H－190号住居址（西）



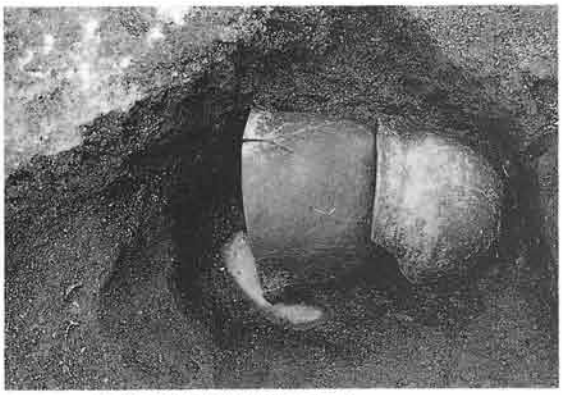
2．H－192号住居址（西）

3．H－195号住居址遺物出土状態（西）

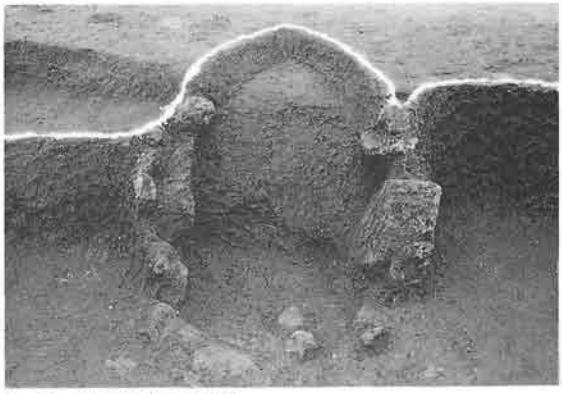
4．H－198号住居址（西）

5．H－200・201号住居址（西）

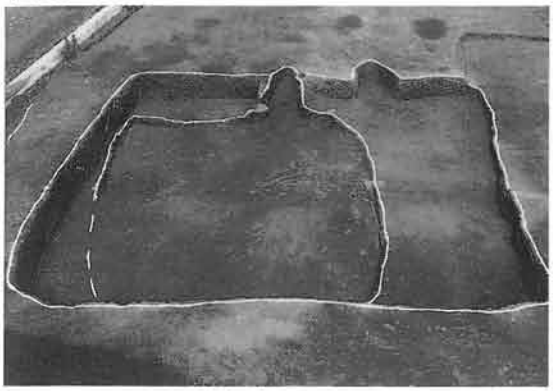
6．H－203号住居址遺物出土状態



7．H－203号住居址遺物出土状態（南西）



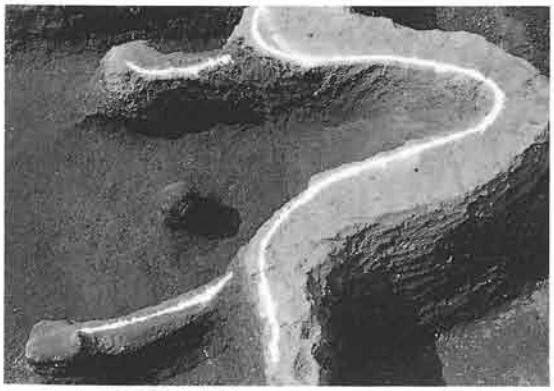
8．H－207号住居址竈（西）



1．H－213・214号住居址（西）

2．H－213号住居址遺物出土状態（北東）

3．B区全景（東）

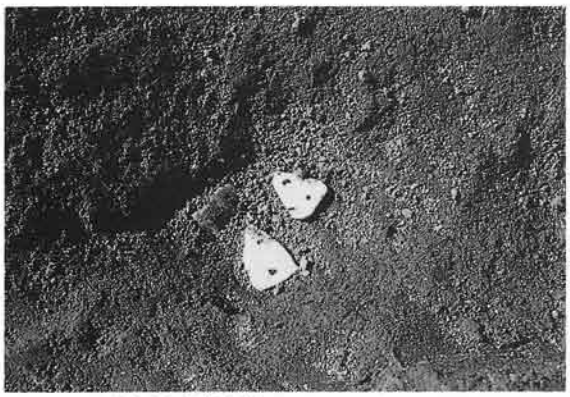


4．H－218号住居址竈（南）

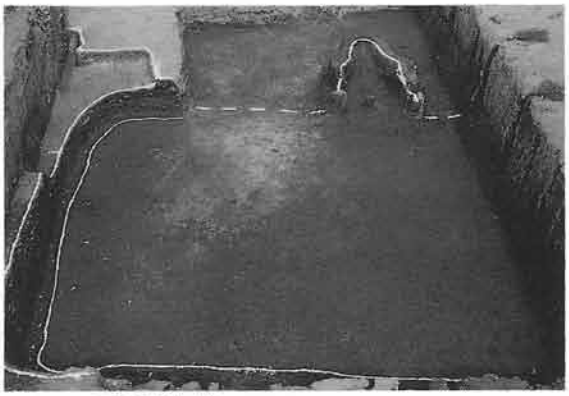
5．H－221号住居址（西）

1．H－224・225号住居址全景（西）

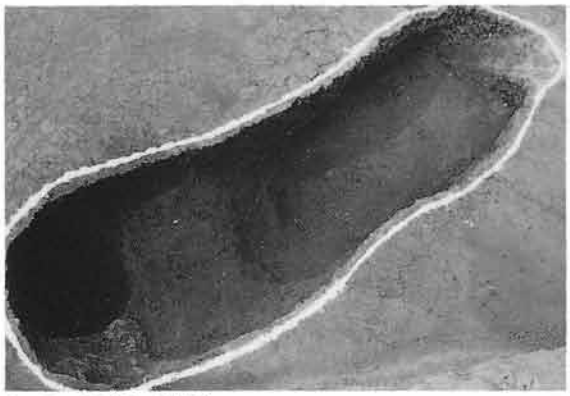
2．H－226号住居址遺物出土状態（西）



3．D－138遺物出土状態（南）



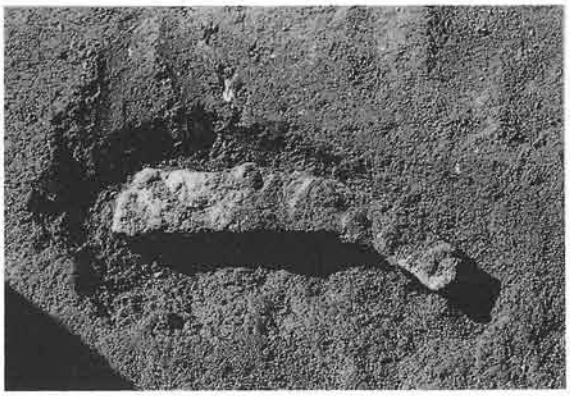
4．H－226号住居址（北）



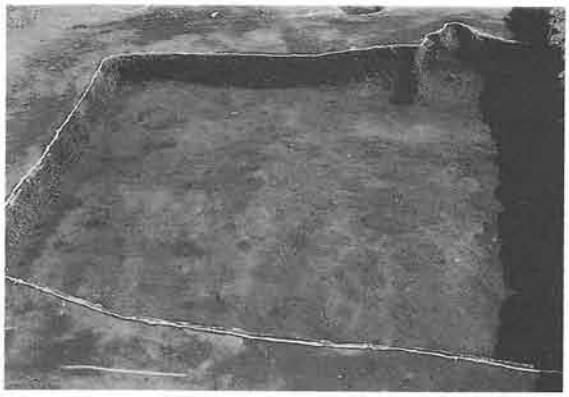
5．D－138全景（南西）

6．H－234，238号住居址全景

7．H－235・236号住居址（西）



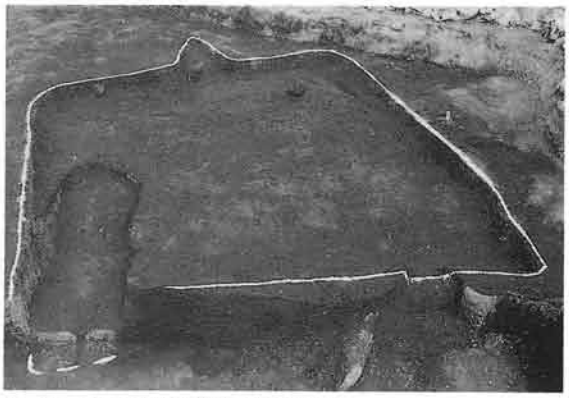
8．H－237号住居址遺物出土状態（南東）



1．H－237号住居址（西）

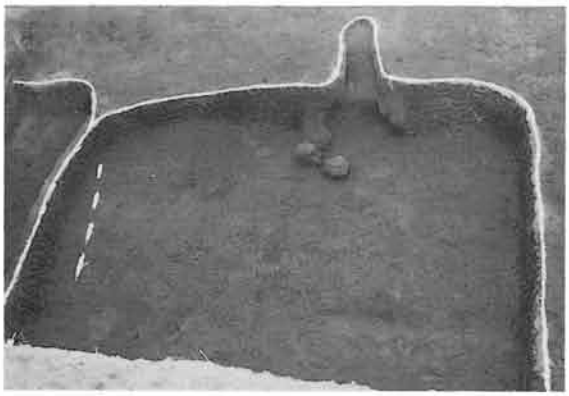
2．H－237号住居址遺物出土状態（南）

3．H－238号住居址遺物出土状態（東）



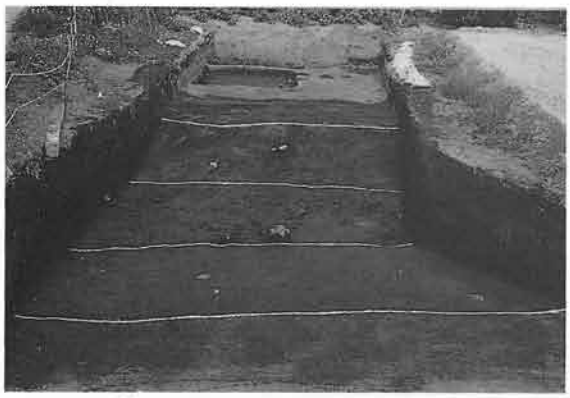
4．H－239号住居址遺物出土状態（西）

5．C区全景（東）



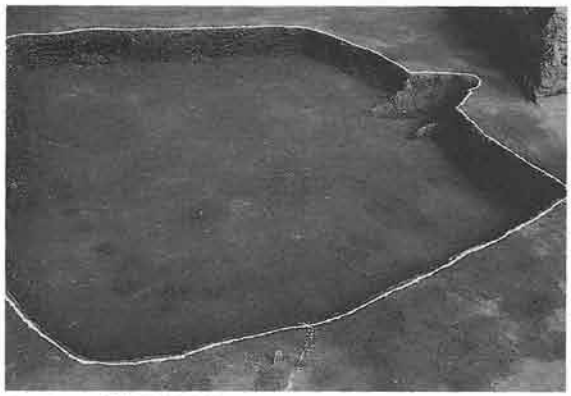
1．H－243号住居址（西）

2．H－243号住居址遺物出土状態（南東）

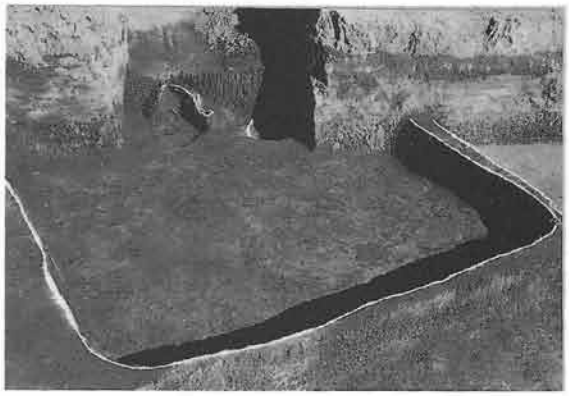


3．W－13（南）

4．W－13遺物出土状態（南北）

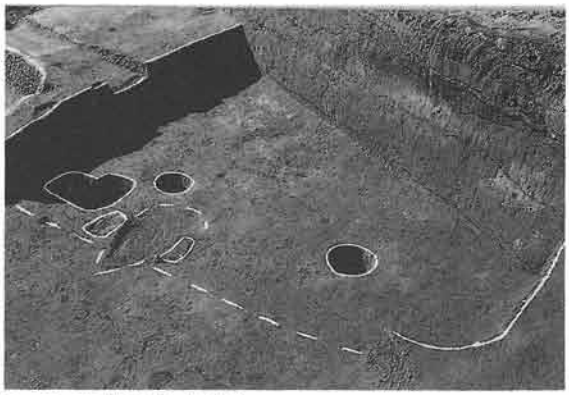


5．H－245号住居址（南）



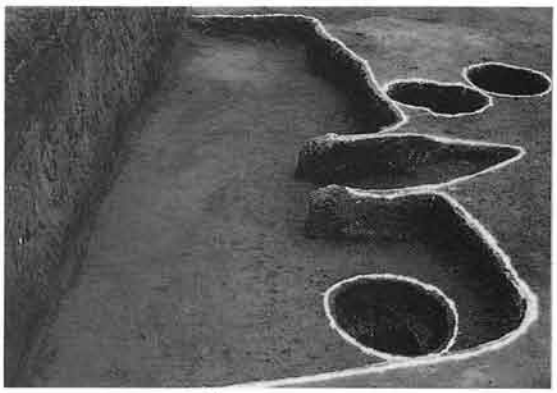
6．H－246号住居址（西）

7．H－246号住居址遺物出土状態（北）

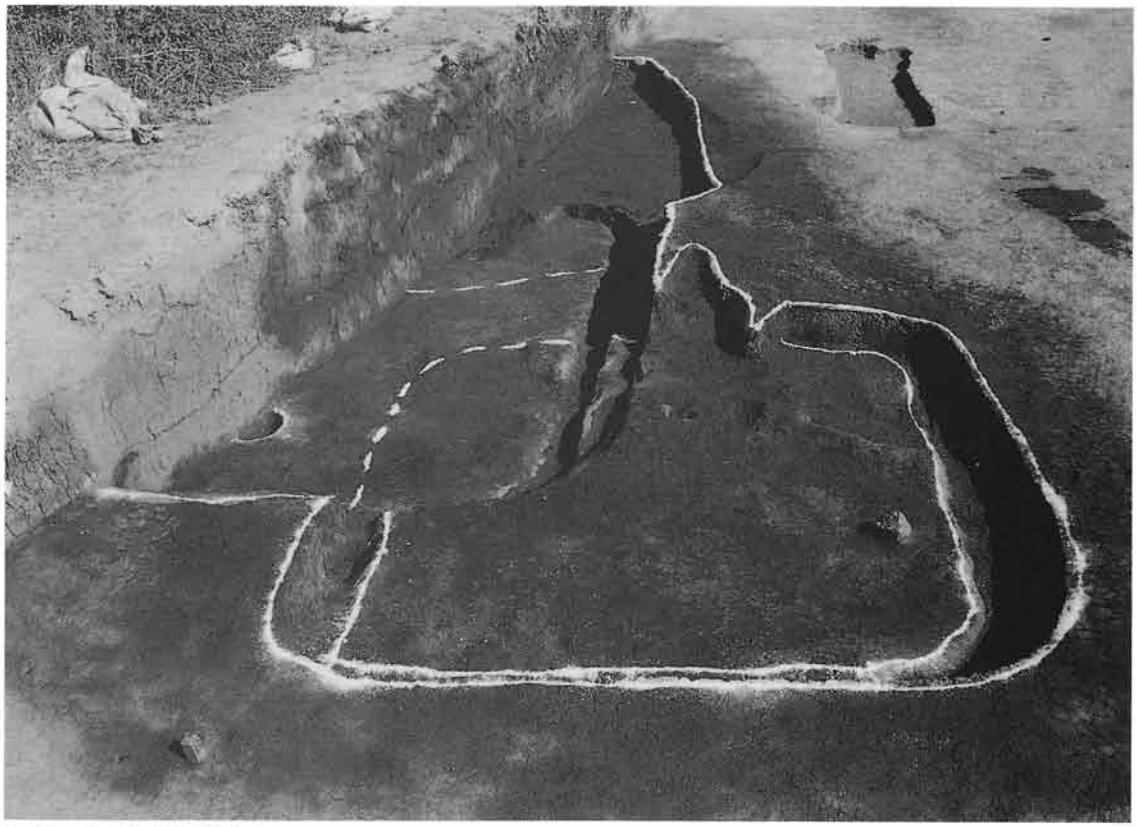


8．H－247号住居址（北東）

1．H－250号住居址（南）

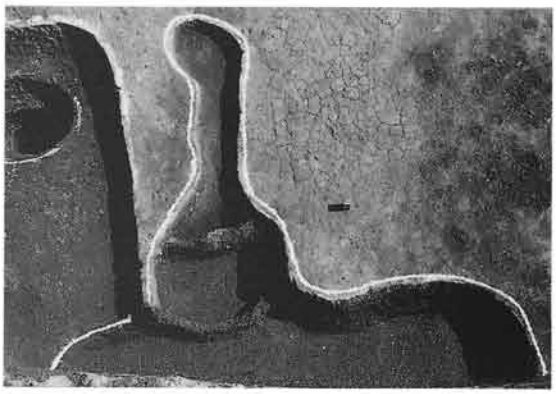


2．H－253号住居址（南）

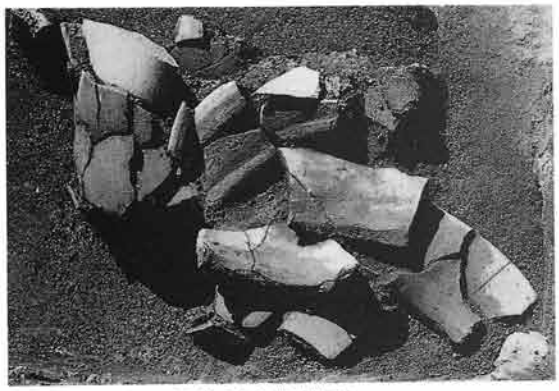


3．H－263・264号住居址（西）

4．H－255号住居址遺物出土状態（北）

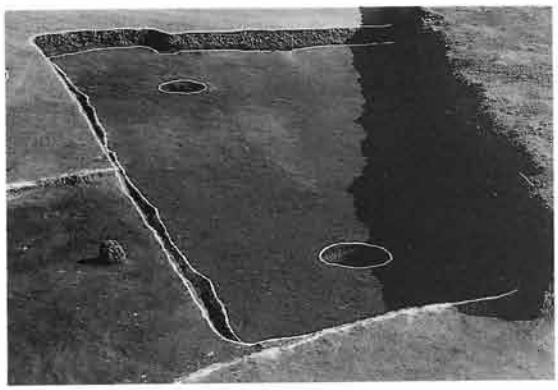


5．H－254号住居址全景（東）



1．H－259号住居址遺物出土状態（北西）

2．H－260号住居址（東）



3．H－269，271号住居址（西）

4．H－268号住居址遺物出土状態（東）

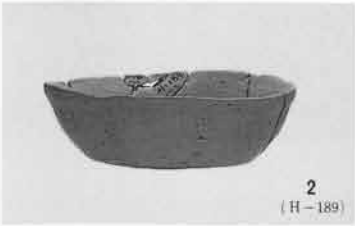
5．H－268号住居址遺物出土状態（北）

6．E区全景（南）

7．H－273・274号住居址（西）

8．発掘を終えて　作業員一同

1
(H－189)


2
(H－189)

4
(H－190)

6
(H－193)

8
(H－195)

9
(H－195)

10
(H－196)

15
(H－203)

11
(H－203)

14
(H－203)

17
(H－206)

12
(H－203)

13
(H－203)

21
(H－207)

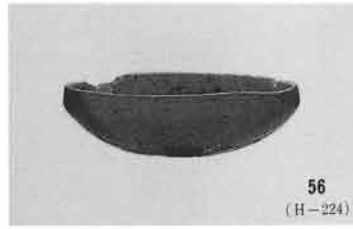
26
(H－212)

28
(H－213)

31
(H－214)

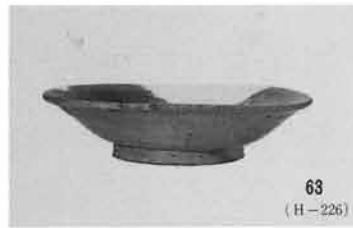
156
(a－1)

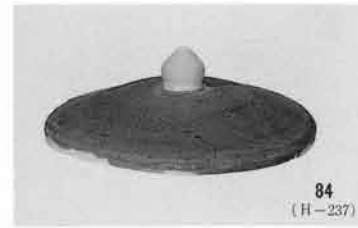
30
(H−213)


56
(H−224)

79
(H−236)

32
(H−214)


63
(H−226)


84
(H−237)

152
(A区表採)

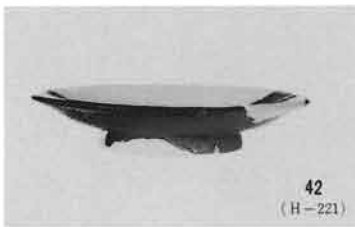
59
(H−226)

85
(H−237)

46
(H−221)

66
(H−228)

82
(H−237)


42
(H−221)

72
(H−229)

86
(H−238)

33
(H−214)

77
(H−235)

78
(H−235)

80
(H−236)

87
(H−238)

90
(H−239)

97
(H−242)

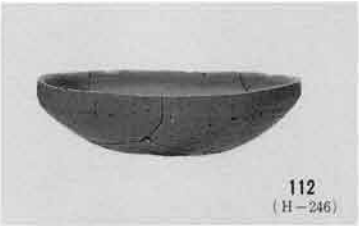
98
(H−242)

101
(H−243)

102
(H−243)

103
(H−243)

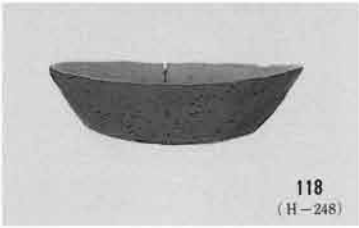
104
(H−245)


112
(H−246)

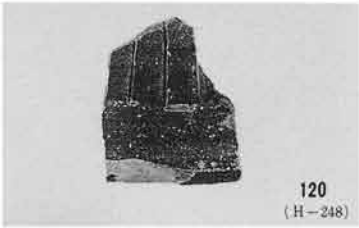
121
(H−248)

114
(H−246)

113
(H−246)


118
(H−248)

117
(H−248)


120
(H−248)

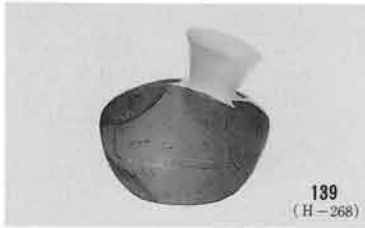
128
(H−255)

119
(H−248)

130
(H−255)

144
(H−268)

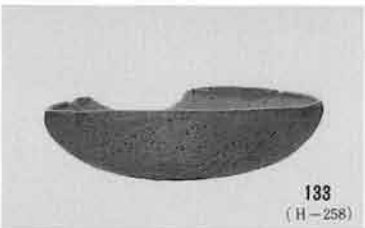
141
(H−268)


139
(H−268)

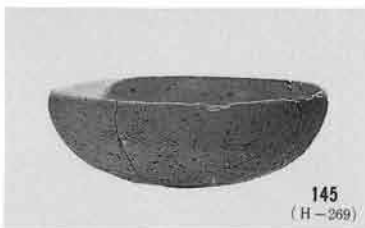
138
(H−263)

131
(H−257)

140
(H−268)


133
(H−258)

143
(H−268)


145
(H−269)

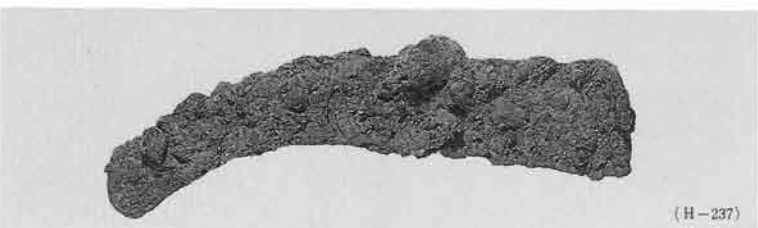
136
(H−260)

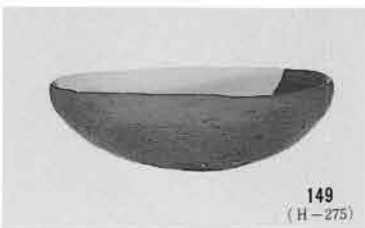
142
(H−268)

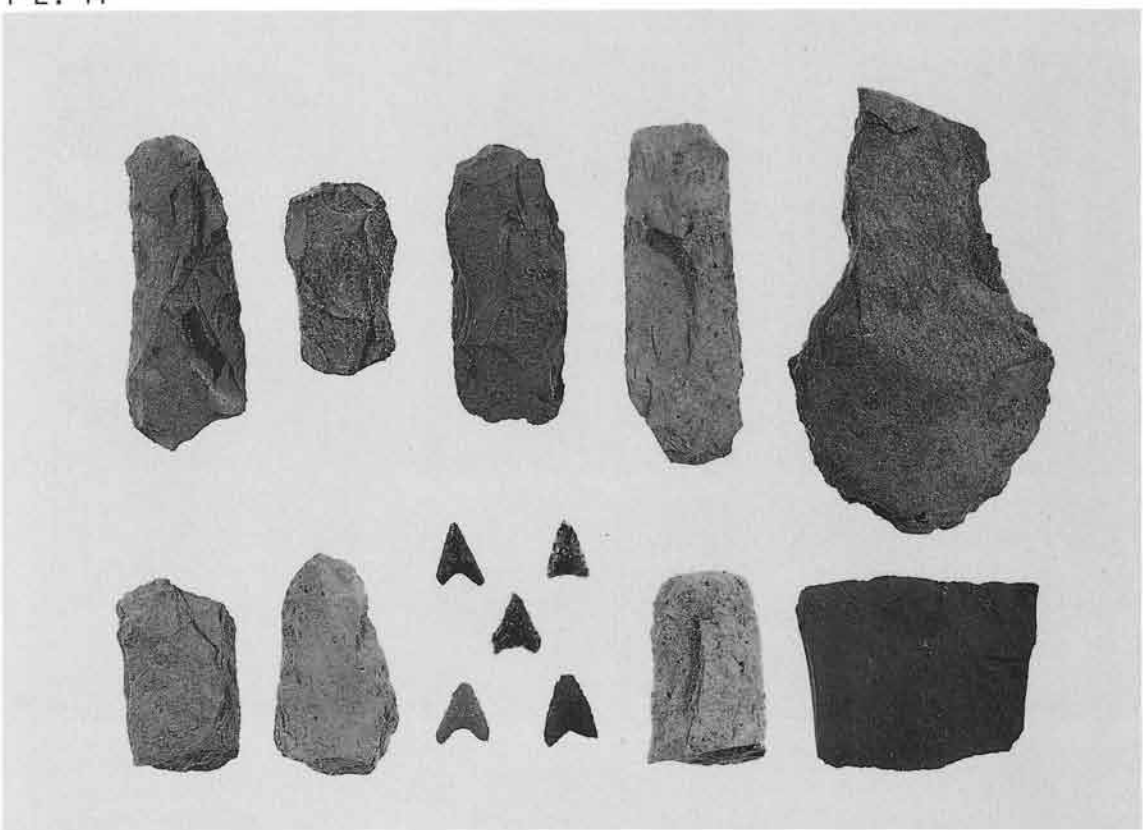
147
(H−269)

135
(H−260)

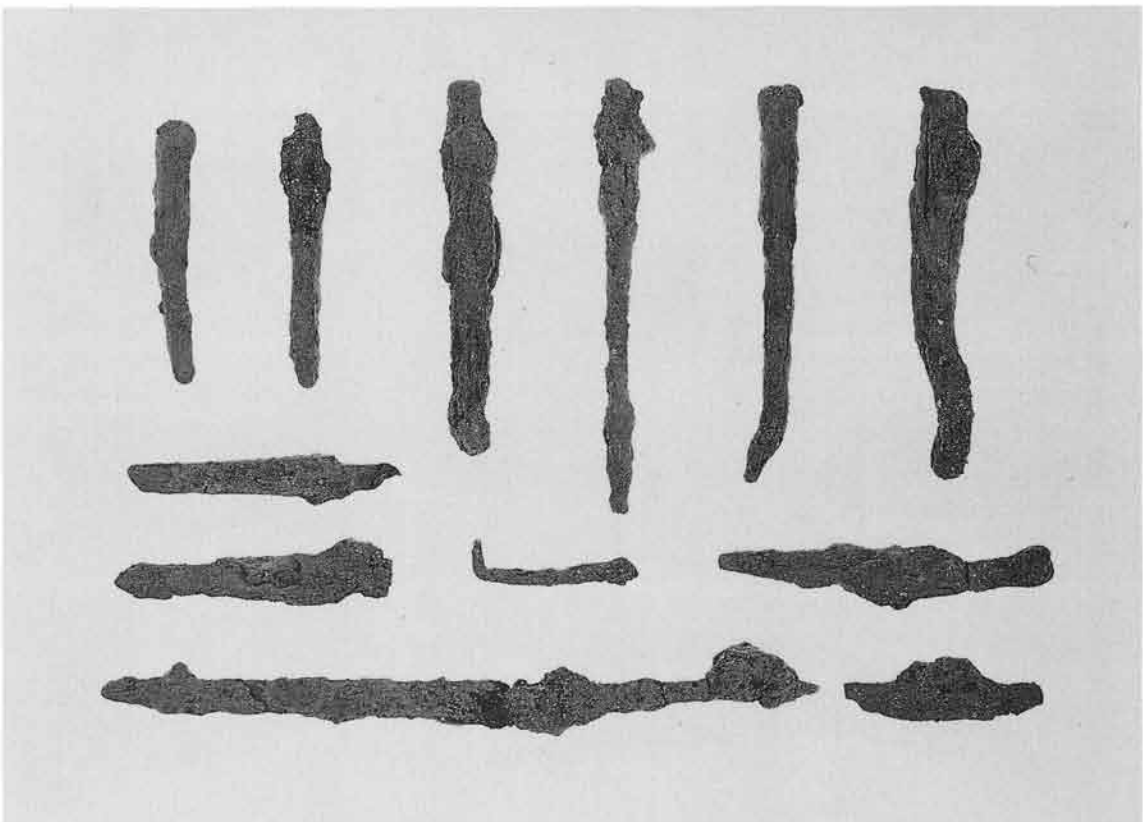
146
(H−269)


(H−237)

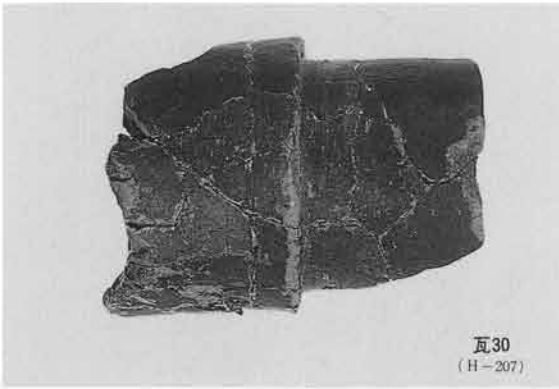

149
(H−275)



1. 石器



2. 鉄器



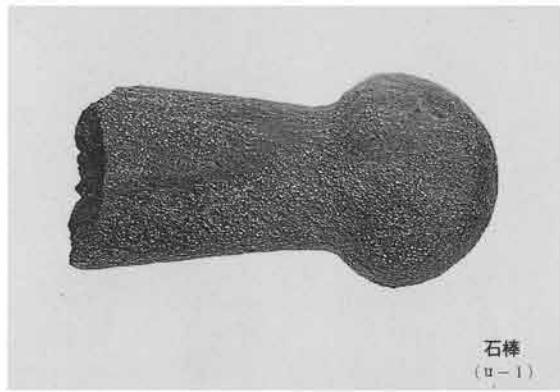
瓦30
（H－207）

硯166
（B区表採）

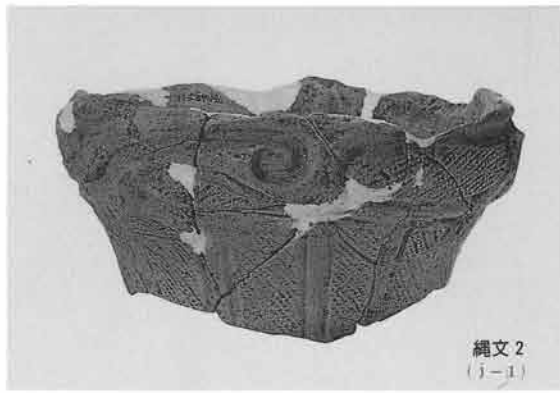
硯83
（H－237）

硯62
（H－226）

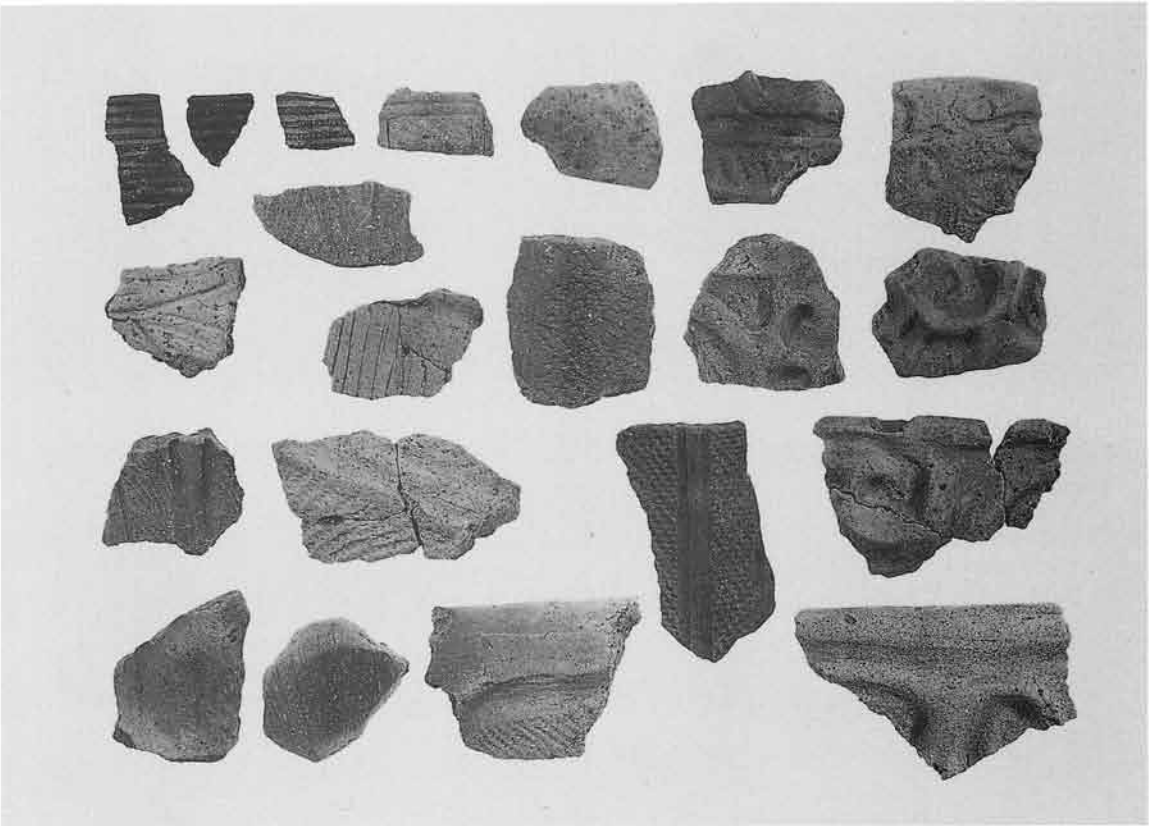
縄文37
（u－1）



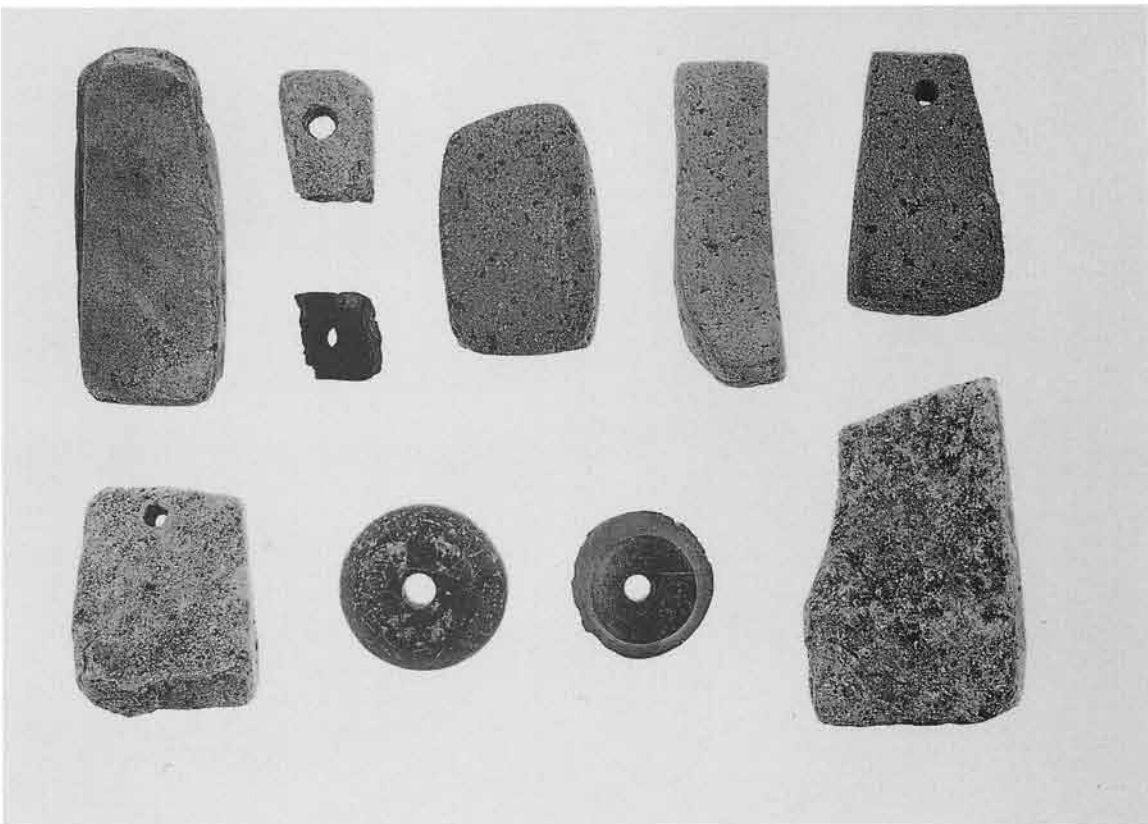
石棒
（u－1）



縄文2
（j－1）



1．縄文土器



2．石製品

抄　　録

フリガナ	オオヤシキイセキヨン
書名	大屋敷遺跡 Ⅳ
副書名	
巻次	
シリーズ名	オオヤシキイセキ
シリーズ番号	4
編著者名	齊藤　仁志　　坂口　好孝
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371　群馬県前橋市上泉町664－4
発行年月日	西暦1996年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	位置 北緯	 東経	調査期間	調査面積	調査原因
オオヤシキ 大屋敷遺跡Ⅳ	ﾏｴﾊﾞｼｼｿｳｼﾞｬﾏﾁ 前橋市総社町	10201	7A60	36°24′02″	139°02′21″	19950510 19951130	2,425㎡	土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
大屋敷遺跡Ⅳ	集落跡	縄文時代 ～平安	竪穴住居址88軒、 溝址1条、土坑57基外	縄文土器、須恵器、土師器 石製模造品、臼玉、鉄器等
特記事項	円面硯（H－226・237・242・248・B区表採より出土） 石製模造品・臼玉等多数出土の土坑群 須恵器大甕（H－259号住居址より出土）			

大屋敷遺跡 Ⅳ

平成8年3月18日　印刷
平成8年3月25日　発行
編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　0272－31－9531
印刷　株式会社　開文社印刷所